

淡路市

# 田井 A 遺跡

－ (二) 志筑川床上浸水対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－



平成 27 (2015) 年 3 月

兵庫県教育委員会

田井 A 遺跡

兵庫県文化財調査報告 第474冊

兵庫県教育委員会

淡路市

# 田井 A 遺跡

－（二）志筑川床上浸水対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成 27（2015）年 3 月

兵庫県教育委員会





遺跡周辺の景観(南東から 2012 年度撮影)



遺跡周辺の景観(北西から 2012 年度撮影)



遺跡周辺の景観(南から 2012 年度撮影)



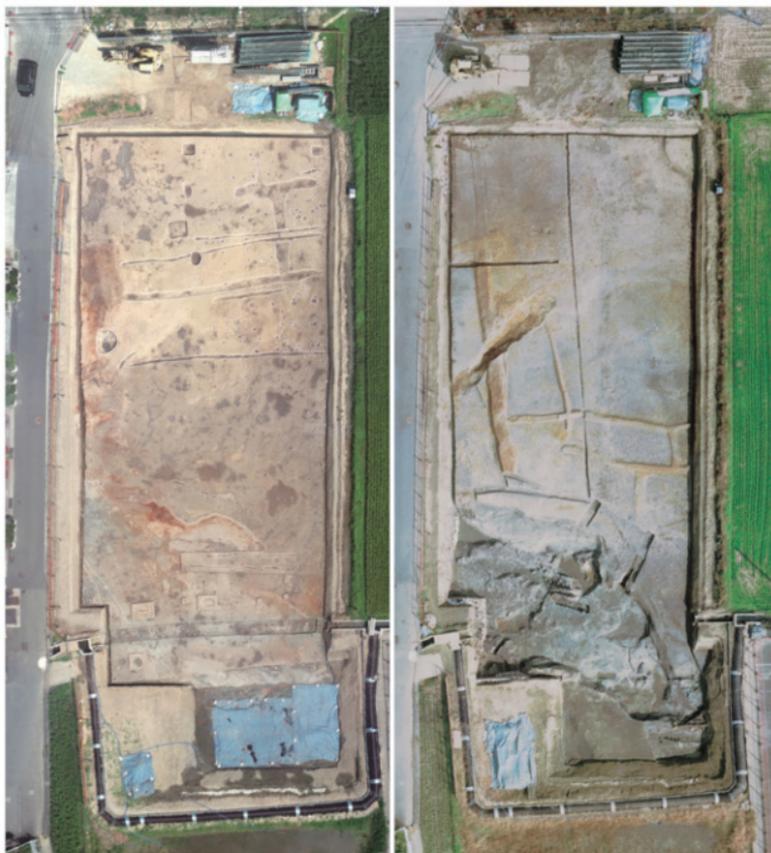
遺跡周辺の景観(北から 2012 年度撮影)



2009 年度調査区



2011 年度調査区



2012 年度調査区(平安時代遺構面)

2012 年度調査区(旧河道・飛鳥時代遺構面)



2009年度調査区(奈良・平安時代遺構面 南東から)



2009年度調査区(奈良・平安時代遺構面 北東から)



2011 年度調査区(飛鳥時代遺構面 南東から)



2011 年度調査区(飛鳥時代遺構面 北東から)



2012 年度調査区(平安時代遺構面 南東から)



2012 年度調査区(平安時代遺構面 北東から)



2012 年度調査区(飛鳥時代遺構面 南東から)



2012 年度調査区(飛鳥時代遺構面 北東から)



旧河道出土の土師器・須恵器



旧河道出土須恵器甕



銅鏡（洪水砂層出土）



旧河道出土の人形



旧河道出土の木製祭祀遺物



旧河道出土の木簡

## 例 言

- 1 本書は、兵庫県淡路市志筑に所在する、田井A遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、(二)志筑川床上浸水対策特別緊急事業に伴うもので、兵庫県淡路県民局洲本土木事務所の依頼に基づき、兵庫県教育委員会を調査主体とし、兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部および公益財団法人兵庫県まちづくり技術センターを調査機関として、平成18～24(2006～2012)年度に実施した。また整理事業は、同事務所の委託により、平成22～26(2010～2014)年度に、兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部 公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部において実施した。

### 3 調査の推移

#### (発掘調査)

分布調査 平成19年3月22日

実施機関：兵庫県教育委員会

確認調査 平成20年2月25日・2月27日～2月29日

実施機関：兵庫県立考古博物館

平成20年11月25日～12月15日

実施機関：兵庫県立考古博物館

本発掘調査 平成21年11月24日～平成22年2月26日

実施機関：兵庫県立考古博物館

工事請負：津名土木株式会社

平成23年10月26日～平成24年3月19日

実施機関：兵庫県立考古博物館

工事請負：北淡路産業株式会社

平成24年7月20日～平成24年11月16日

実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

工事請負：株式会社尾田建設

#### (出土品整理)

平成22年10月12日～平成23年3月31日

平成23年4月1日～平成24年3月31日

平成24年4月1日～平成25年3月31日

平成25年4月1日～平成26年3月31日

平成26年4月1日～平成27年3月25日

実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

- 4 本書の執筆は、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部西口圭介・久保弘幸・織美記が担当し、久保が編集をおこなった。
- 5 本調査において出土した遺物および作成した写真・図面類は、兵庫県教育委員会（兵庫県立考古博物館）で保管している。
- 6 遺物写真撮影は委託によって実施し、委託先については本文第2章に記載した。
- 7 本書中の図で示した方位は、調査地点における座標北による。また、標高は東京湾平均海水準を基準とした。
- 8 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、下記の方々よりご指導を頂戴した。記して謝意を表したい（順不同・敬称略）。工業普通（大阪府立狭山池博物館館長）・山本崇（奈良文化財研究所）・大平茂（播磨町郷土資料館）・青木哲哉（立命館大学）・伊藤宏幸（淡路市教育委員会）・浦上雅史
- 9 自然科学的分析については、下記のとおり委託して実施し、その成果は本書に収録している。
- |           |               |
|-----------|---------------|
| 放射性炭素年代測定 | (株) 加速器分析研究所  |
| 木製品樹種同定   | バリノ・サーヴェイ (株) |
|           | (株) 古環境研究所    |
| 花粉分析      | (株) バレオ・ラボ    |
| 種実同定      | (株) 古環境研究所    |
| 昆虫遺体同定    | (株) 古環境研究所    |
| 動物遺存体同定   | (株) 古環境研究所    |
- 10 本書中で用いた地層および土器の色調の記号番号は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」によっている。
- 11 挿図中で用いた遺構の略称は、下記のとおりである。
- P: 柱穴 SK: 土坑 SD: 溝 SX: 不明遺構

# 本文目次

第1章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第2章 調査の概要	
第1節 調査に至る経緯	4
第2節 発掘調査の概要	4
第3節 整理事業の概要	6
第3章 遺構と遺物	
第1節 層序と遺構面の位置	7
第2節 飛鳥時代の遺構と遺物	9
第3節 奈良時代の遺構と遺物	11
第4節 平安時代の遺構と遺物	24
第5節 包含層出土の遺物	29
第4章 自然科学的分析	
第1節 田井A遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）（株）加速器分析研究所	30
第2節 横入遺跡と田井A遺跡の地形環境（青木哲哉）	34
第3節 田井A遺跡の花粉およびプラント・オパール分析（株）パレオ・ラボ	48
第4節 田井A遺跡出土木製品等の樹種同定（パリオ・サーヴェイ（株）・（株）古環境研究所）	51
第5節 田井A遺跡における種実同定（株）古環境研究所	57
第6節 田井A遺跡における昆虫遺体同定（株）古環境研究所	62
第7節 田井A遺跡から出土した動物遺存体（株）古環境研究所	64
第5章 結語	66
報告書抄録	

## 巻頭図版目次

巻頭図版1	上	遺跡周辺の景観（南東から 2012年度撮影）
	下	遺跡周辺の景観（北西から 2012年度撮影）
巻頭図版2	上	遺跡周辺の景観（南から 2012年度撮影）

	下	遺跡周辺の景観（北から 2012年度撮影）
巻頭図版3	左	2009年度調査区
	右	2011年度調査区
巻頭図版4	左	2012年度調査区（平安時代遺構面）
	右	2012年度調査区（旧河道・飛鳥時代遺構面）
巻頭図版5	上	2009年度調査区（奈良・平安時代遺構面 南東から）
	下	2009年度調査区（奈良・平安時代遺構面 南東から）
巻頭図版6	上	2011年度調査区（飛鳥時代遺構面 北東から）
	下	2011年度調査区（飛鳥時代遺構面 北東から）
巻頭図版7	上	2012年度調査区（平安時代遺構面 南東から）
	下	2012年度調査区（平安時代遺構面 北東から）
巻頭図版8	上	2012年度調査区（飛鳥時代遺構面 南東から）
	下	2012年度調査区（飛鳥時代遺構面 北東から）
巻頭図版9	上	旧河道出土の土師器・須恵器
	下左	旧河道出土須恵器壺
	下右	銅鏡（洪水砂層出土）
巻頭図版10		旧河道出土の人形
巻頭図版11		旧河道出土の木製祭祀遺物
巻頭図版12		旧河道出土の木簡

## 挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡	2
第2図	人形の分類	20
第3図	調査区周辺の地形分類図	35
第4図	調査区付近における微地形の分布	36
第5図	横入遺跡2区における南西—北東方向の地質断面図	39
第6図	横入遺跡2区における南東—北西方向の地質断面図	40
第7図	横入遺跡3区における南東—北西方向のトレンチ断面図	40
第8図	横入遺跡3区における南西—北東方向の地質断面図	41
第9図	横入遺跡4区の地質断面図	42
第10図	田井A遺跡調査区西半部の地質断面図	43
第11図	田井A遺跡調査区東半部の地質断面図	44
第12図	田井A遺跡における植物珪酸体分布図	49
第13図	木製品の器種と樹種の相関図	56
第14図	田井A遺跡の種実	61
第15図	田井A遺跡の昆虫	63
第16図	田井A遺跡の動物遺存体	65

## 表 目 次

第1表	田井A遺跡調査一覧	4
第2表	収録遺物一覧	71～95
第3表	放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$ 補正值)	32
第4表	放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 $^{14}\text{C}$ 年代、較正年代)	33
第5表	産出花粉胞子一覧	48
第6表	試料1g当りのプラント・オパール個数	49
第7表	田井A遺跡出土木製品の器種別種類構成	51
第8表	田井A遺跡の樹種同定結果 (2011年度調査)	53
第9表	田井A遺跡における樹種同定結果 (2012年度調査)	55
第10表	種実同定試料一覧	57
第11表	田井A遺跡における馬歯一覧	65
第12表	田井A遺跡における馬歯計測値	65

## 図 版 目 次

図版1	調査区位置図	図版20	杭列E・G断面図
図版2	各年度の調査区	図版21	杭列H・杭群・須恵器埋設遺構平面・断面図
図版3	調査区断面図 (1)	図版22	平安時代遺構面全体図
図版4	調査区断面図 (2)	図版23	平安時代遺構面溝平面・断面図
図版5	下層水田面平面図・畦畔断面図	図版24	SB01・02平面・断面図
図版6	下層水田面足跡検出状況	図版25	SB02・P86 SB03～SB05平面・断面図
図版7	上層水田面全体図	図版26	SB06平面・断面図
図版8	上層水田面平面・断面図	図版27	SB07・08平面・断面図
図版9	上層水田面遺構平面・断面図	図版28	溝SD・土坑SK平面・断面図
図版10	上層水田面遺構編遷図	図版29	土坑SK平面・断面図
図版11	上層水田面遺構編遷図	図版30	出土遺物 1 (土器 1・瓦)
図版12	下層水田面全体図	図版31	出土遺物 2 (土器 2)
図版13	旧河道断面図	図版32	出土遺物 3 (土器 3)
図版14	旧河道内杭列位置図	図版33	出土遺物 4 (土器 4)
図版15	杭列A・B平面・断面図	図版34	出土遺物 5 (土器 5・瓦)
図版16	杭列B・C平面図	図版35	出土遺物 6 (土器 6)
図版17	杭列C断面図	図版36	出土遺物 7 (土器 7)
図版18	杭列D・F平面・断面図	図版37	出土遺物 8 (土器 8)
図版19	杭列E・G平面図		

図版38 出土遺物9 (土器9)	図版49 出土遺物20 (木製品4)
図版39 出土遺物10 (土器10)	図版50 出土遺物21 (木製品5)
図版40 出土遺物11 (土器11)	図版51 出土遺物22 (木製品6)
図版41 出土遺物12 (土器12)	図版52 出土遺物23 (木製品7)
図版42 出土遺物13 (土器13・瓦)	図版53 出土遺物24 (木製品8)
図版43 出土遺物14 (土器14・土製品)	図版54 出土遺物25 (木製品9)
図版44 出土遺物15 (土器15・土製品)	図版55 出土遺物26 (木製品10)
図版45 出土遺物16 (石器・金属製品)	図版56 出土遺物27 (木製品11)
図版46 出土遺物17 (木製品1)	図版57 出土遺物28 (木製品12)
図版47 出土遺物18 (木製品2)	図版58 出土遺物29 (木製品13)
図版48 出土遺物19 (木製品3)	

## 写真図版目次

写真図版1 上 上層水田面 (奈良時代遺構面) 全景 (南から)	写真図版6 上 奈良時代遺構面旧河道の重複 状況 (西から)
下 上層水田面 (南東から)	中 旧河道全景 (北東から)
写真図版2 上 上層水田面 (南東から)	下 旧河道と下層水田面の重複状 況 (北から)
下 上層水田面 (北東から)	写真図版7 上 飛鳥時代遺構面全景 (西から)
写真図版3 上 上層水田面 土器出土状況 (東から)	下 飛鳥時代遺構面全景 (東から)
下 上層水田面 土器出土状況 (北から)	写真図版8 上 飛鳥時代遺構面 (南東から)
写真図版4 左上 旧河道部上面 (北西から)	中 飛鳥時代遺構面 (南から)
右上 旧河道部上面 (南東から)	下 飛鳥時代遺構面 (北西から)
中左 上層水田畦畔断面 (北東から)	写真図版9 上 平安時代遺構面 (南東から)
中右 旧河道部噴砂断面 (南東から)	中 飛鳥時代遺構面 (北から)
下左 溝SD01断面 (南から)	下 飛鳥時代遺構面 (南東から)
下右 溝SD04断面 (南から)	写真図版10 上 溝SR04断面 (東から)
写真図版5 左上 溝SD05断面 (西から)	中 溝SD05断面 (西から)
右上 溝SD06断面 (西から)	下 溝SD06断面 (西から)
中左 溝SD08断面 (南から)	写真図版11 上 溝SD05下層断面 (西から)
中右 溝SD09断面 (南から)	中 溝SD05下層断面 (西から)
下左 溝SD10断面 (南から)	下 飛鳥時代遺構面大畦畔断面 (南東から)
下右 溝SD11断面 (南から)	写真図版12 上 小畦畔断面 (南から)
	中 大・小畦畔とりつき部断面 (西から)

	下 大・小畦畔とりつき部断面 (部分 西から)	中左 水田面足跡3検出状況 (南から)
写真図版13	上 奈良時代遺構面旧河道2・3杭列 B・C検出状況(西から)	中右 水田面足跡3掘削後(南から)
	中 旧河道2・3杭列B・C検出状況 (北から)	下左 水田面足跡4(上)・5(下) 検出状況(南から)
写真図版14	上 旧河道2・3杭列C検出状況 (南から)	下右 水田面足跡4(上)・5(下) 掘削後(南から)
	中 旧河道2・3杭列C検出状況 (西から)	写真図版20 上 調査区北壁断面東部 (南西から)
	下 旧河道2・3杭列C検出状況細部 (北西から)	中 調査区北壁断面中央 (南東から)
写真図版15	上 旧河道2・3杭列B検出状況 (西から)	下 調査区北壁断面西部 (南西から)
	下 旧河道2・3杭列B検出状況 (北西から)	写真図版21 上 調査区北壁断面東部(東から)
写真図版16	上 旧河道2・3杭列B検出状況細部 (南西から)	中 調査区北壁断面東部 (南東から)
	中 旧河道2・3杭列B検出状況細部 (北西から)	下 調査区北壁断面中央 (南東から)
	下 旧河道2・3杭列B検出状況細部 (北から)	写真図版22 上 調査区西壁断面(北から)
写真図版17	上左 洪水砂中の青銅鏡出土状況	中 調査区南壁断面西部 (北西から)
	上右 青銅鏡出土状況	下 調査区南壁断面東部 (北西から)
	中左 旧河道内槽出土状況 (南から)	写真図版23 上 調査区南壁断面東部 (北西から)
	中右 旧河道内槽出土状況 (南から)	中 調査区南壁断面東部 (北西から)
	下左 旧河道内舟形出土状況 (南から)	下 下層遺構面下位暗緑灰色粘土 層中の土器出土状況
	下右 洪水砂中の馬歯出土状況	写真図版24 上 上層遺構面(平安時代遺構面) 全景(南西から)
写真図版18	上 下層水田面(飛鳥時代遺構面) 足跡(西から)	下 上層遺構面全景(北東から)
	下 下層水田面足跡(西から)	写真図版25 上 上層遺構面(平安時代遺構面) 全景(北東から)
写真図版19	上左 水田面足跡1検出状況 (南から)	下 上層遺構面東部(西から)
	上右 水田面足跡1掘削後(南から)	写真図版26 上 平安時代遺構面掘立柱建物跡 群(北西から)

	下 掘立柱建物跡群 (西から)		下右 SB05 P32遺物出土状況
写真図版27	上 掘立柱建物跡群 (北から)		(北西から)
	中 掘立柱建物跡SB01 (南西から)	写真図版34	上左 SB06 P117根石出土状況
	下 掘立柱建物跡SB01 (北西から)		(南東から)
写真図版28	上 掘立柱建物跡SB02 (南西から)		上右 SB06 P179根石出土状況
	中 掘立柱建物跡SB02 (北西から)		(北西から)
	下 掘立柱建物跡SB03 (南西から)		中左 SB08 P144遺物出土状況
写真図版29	上 掘立柱建物跡SB03 (北西から)		(北東から)
	中 掘立柱建物跡SB04 (北西から)		中右 SB08 P144断面 (北東から)
	下 掘立柱建物跡SB05 (北西から)		下左 P40断面 (南西から)
写真図版30	上 掘立柱建物跡SB06 (南西から)		下右 P40遺物出土状況 (南西から)
	中 掘立柱建物跡SB06 (北西から)	写真図版35	上 SB06床面 鉄床石110 (左)・土坑SK109 (右) (北東から)
	下 掘立柱建物跡SB07 (南西から)		中 鉄床石110 (北東から)
写真図版31	上 掘立柱建物跡SB07 (北西から)		下 土坑SK109検出状況 (南西から)
	中 掘立柱建物跡SB08 (北西から)		上 SB06床面 土坑SK109 (左)・鉄床石110 (右) (南西から)
写真図版32	上左 SB01 P34遺物出土状況	写真図版36	中 鉄床石110 (南西から)
	(南東から)		下 土坑SK109 (南西から)
	上右 SB02 P68遺物出土状況		上 SB06床面 土坑SK109 (左)・鉄床石110 (右) (南西から)
	(南西から)		中 鉄床石110 (南西から)
	中左 SB02 P86根石出土状況	写真図版37	下 土坑SK109 (南西から)
	(北東から)		上 SB06床面 土坑SK109 (左)・鉄床石110 (右) (南西から)
	中右 SB02 P89遺物出土状況		中 土坑SK109 (南西から)
	(北東から)		下 土坑SK109 (左)・鉄床石110 (右) 断面 (南西から)
	下左 SB02 P89遺物出土状況	写真図版38	上 SB06床面 鉄床石110断面
	(北東から)		(南西から)
	下右 SB02 P89・SB03 P90遺物出土状況 (南東から)		中 土坑SK109断面 (南西から)
写真図版33	上左 SB05 P31遺物出土状況		下 土坑SK109断面 (南西から)
	(南西から)	写真図版39	上 SB06床面 土坑SK109底面
	上右 SB05 P31遺物出土状況		(北東から)
	(北西から)		中 土坑SK109底面 (北東から)
	中左 SB05 P31遺物出土状況		下 土坑SK109底面 (南東から)
	(北西から)	写真図版40	上左 土坑SK01検出状況
	中右 SB05 P31遺物出土状況		(南東から)
	(北西から)		上右 土坑SK01断面 (南東から)
	下左 SB05 P31遺物出土状況		中左 土坑SK01完掘状況
	(北西から)		(南東から)

	中右 土坑SK02断面 (南から)	写真図版46 上左 旧河道1 人形出土状況
	下左 土坑SK78断面 (南西から)	(南東から)
	下右 土坑SK78遺物等出土状況	上右 旧河道1 人形出土状況
	(南東から)	(南から)
写真図版41	上左 土坑SK105検出状況	中左 旧河道1 人形出土状況
	(南東から)	(南南東から)
	上右 土坑SK105断面 (南西から)	中右 旧河道1北半 人形出土状況
	中左 土坑SK148断面 (南西から)	(南西から)
	中右 土坑SK148完掘状況	下左 旧河道1北半 人形出土状況
	(南西から)	(南東から)
	下右 土坑SK147断面 (南西から)	下右 旧河道1北半 人形出土状況
		(北東から)
写真図版42	上左 溝SD19断面 (南東から)	写真図版47 上左 旧河道1北半 人形出土状況
	上右 溝SD20断面 (南東から)	(北東から)
	中左 溝SD21断面 (南東から)	上右 旧河道1北半 人形冠帽出土状況
	中右 溝SD22断面 (南東から)	(北東から)
	下左 溝SD23断面 (南東から)	中左 旧河道1北半 木製品出土状況
	下右 溝SD24断面 (南東から)	(南から)
写真図版43	上左 溝SD26北断面 (南東から)	中右 旧河道1 木皿出土状況
	上右 溝SD26南断面 (南東から)	(北東から)
	中左 溝SD101断面 (南東から)	下左 旧河道2南1区 木製品出土状況
	中右 溝SD102南断面 (南東から)	(南東から)
	下左 溝SD102北断面 (南東から)	下右 旧河道2南2区 杭列B東側 人形出土状況
	下右 溝SD114 (左)・SD135 (右)断面 (南東から)	(北東から)
写真図版44	上 溝SD183・SD184・SR185全景	写真図版48 上左 旧河道2南2区 木製品出土状況
	(北東から)	(北東から)
	中左 溝SD183・SD184全景	上右 旧河道2南3区 木筒出土状況
	(北西から)	(北東から)
	中右 溝SD183断面 (南東から)	中左 旧河道2南3区 竈申出土状況
	下左 溝SD184断面 (南東から)	(南東から)
	下右 溝SD115土師器皿出土状況	中右 旧河道2南3区 木製品出土状況
	(南東から)	(北東から)
写真図版45	上 奈良時代旧河道全景 (南から)	下左 旧河道2南3区 木製品出土状況
	中 飛鳥時代遺構面全景	(北東から)
	(北東から)	下右 旧河道2南2区 木製品出土状況
	下 飛鳥時代遺構面全景	(南東から)
	(南西から)	写真図版49 上左 旧河道2あぜ15層 土器出土状況

	況 (南東から)	写真図版55	上	旧河道2南1区杭列A検出状況 (南西から)		
	上右 旧河道2南2区 土器出土状況 (南西から)		下	旧河道2杭列A (北から)		
	中左 旧河道2北半 土器出土状況 (北東から)	写真図版56	上	旧河道2杭列B・C (北東から)		
	中右 旧河道2北半 土器出土状況 (北から)		中	旧河道2杭列B・C周辺の状況 (北から)		
	下左 旧河道2北半 土器出土状況 (南東から)	写真図版57	上	旧河道2・3杭列C (南東から)		
	下右 旧河道2北半 土器出土状況 (南東から)	写真図版58	上	旧河道2・3杭列C 横木1枝痕 (北から)		
写真図版50	上左 旧河道3杭列E付近 木製品出土状況		下	旧河道2・3杭列C 横木1伐採痕 (北から)		
	上右 旧河道3南3区 木製品出土状況 (北西から)	写真図版59	上	旧河道2・3杭列C (南西から)		
	中左 旧河道3南3区 杭列C内 木製品出土状況 (北東から)		下	旧河道2・3杭列C断ち割り (北東から)		
	中右 旧河道3 須恵器出土状況 (南西から)	写真図版60	上	旧河道2・3杭列C断ち割り (北東から)		
	下左 旧河道3南1区東側下底 馬歯出土状況 (北西から)		下	旧河道2・3杭列C横断面 (北西から)		
	下右 旧河道3南1区東側 馬歯出土状況 (南西から)	写真図版61	上	旧河道2・3杭列C東側 (北東から)		
写真図版51	上 旧河道1 北壁断面 (南東から)		下	旧河道2・3杭列C最下部 (北東から)		
	中 旧河道1・2北壁断面 (南東から)	写真図版62	上	旧河道2・3杭列D (北東から)		
	下 旧河道1・2あぜ断面 (南から)		中	旧河道2・3杭列D (南から)		
	写真図版52	上	旧河道1あぜ断面 検出面-50 ~-80cm (南東から)	下	旧河道2・3杭列D 横木2直下草 本遺体 (北東から)	
	中 旧河道2あぜ断面 (南から)	写真図版63	上	旧河道3杭列E (北西から)		
	下 旧河道2南区あぜ断面 (南東から)		下	旧河道3 杭列E (北西から)		
	写真図版53	上	旧河道2南1区根株検出状況 (南東から)	写真図版64	上	旧河道3杭列E (南西から)
	中 旧河道SR185全景 (北から)		中	旧河道3杭列E (北西から)		
	下 旧河道SR185断面 (南東から)		下	旧河道3杭列E (南東から)		
	写真図版54	上	旧河道2全景 (北から)	写真図版65	上	旧河道3杭列E・G (南から)
	下 旧河道2全景 (北から)		下	旧河道3杭列E (南西から)		
		写真図版66	上	旧河道2・3杭群出土状況 (南西から)		
			下	旧河道2・3杭群出土状況 (南から)		

写真図版67	上	旧河道3 須恵器壘出土状況 (東から)	写真図版76	出土遺物4 (土器4)
	中	旧河道3 須恵器壘 (東から)	写真図版77	出土遺物5 (土器5)
	下	旧河道3 須恵器壘取りはずし後 (東から)	写真図版78	出土遺物6 (土器6)
			写真図版79	出土遺物7 (土器7)
写真図版68	上	調査区東壁断面北部 (南から)	写真図版80	出土遺物8 (土器8)
	中	調査区東壁断面中央付近～南端 (西から)	写真図版81	出土遺物9 (土器9・瓦)
			写真図版82	出土遺物10 (土器10)
	下	調査区東壁断面 (西から)	写真図版83	出土遺物11 (土器11)
			写真図版84	出土遺物12 (土器12)
写真図版69	上	調査区南壁断面 (北から)	写真図版85	出土遺物13 (土器13)
	中	調査区南壁断面 (西から)	写真図版86	出土遺物14 (土器14)
	下	調査区南壁断面 (西から)	写真図版87	出土遺物15 (土器15)
写真図版70	上	調査区北壁断面西部 (南から)	写真図版88	出土遺物16 (土器16)
	中	調査区北壁断面西部 (南から)	写真図版89	出土遺物17 (土器17)
	下	調査区北壁断面東部付近 (南から)	写真図版90	出土遺物18 (土器18)
			写真図版91	出土遺物19 (土器19)
写真図版71	左上	調査前の状況 (南西から)	写真図版92	出土遺物20 (土器20・瓦)
	右上	機械掘削状況	写真図版93	出土遺物21 (土器21・土製品)
	中左	平安時代遺構面調査状況	写真図版94	出土遺物22 (土器22)
	中右	調査風景	写真図版95	出土遺物23 (土器23・土製品)
	下左	掘立柱建物跡調査状況	写真図版96	出土遺物24 (石器・金属製品)
	下右	図化作業	写真図版97	出土遺物25 (木製品1)
写真図版72	左上	図化作業 (2012年度)	写真図版98	出土遺物26 (木製品2)
	右上	工業善通氏現地指導状況 (2012年度)	写真図版99	出土遺物27 (木製品3)
			写真図版100	出土遺物28 (木製品4)
	中左	青木哲哉氏現地指導状況 (2012年度)	写真図版101	出土遺物29 (木製品5)
			写真図版102	出土遺物30 (木製品6)
	中右	志筑小学校生見学(2012年度)	写真図版103	出土遺物31 (木製品7)
	下左	現地説明会実施状況 (2011年度)	写真図版104	出土遺物32 (木製品8)
			写真図版105	出土遺物33 (木製品9)
	下右	現地説明会実施状況 (2012年度)	写真図版106	出土遺物34 (木製品10)
			写真図版107	出土遺物35 (木製品11)
写真図版73		出土遺物1 (土器1)	写真図版108	出土遺物36 (木製品12)
写真図版74		出土遺物2 (土器2)	写真図版109	出土遺物37 (木製品13)
写真図版75		出土遺物3 (土器3・瓦)		



# 第1章 遺跡の位置と環境

## 第1節 地理的環境

田井A遺跡が所在する淡路市は、兵庫県淡路島の北部～中央部に位置している。淡路市は、2005年に旧津名郡の淡路町、津名町、北淡町、一宮町、東浦町の5町が合併して発足したもので、田井A遺跡は、旧津名町に属している。

淡路島の中央部には、緩やかな津名山地（丘陵）が南北に延びており、東西は断層によって大阪湾と播磨灘に急傾斜に落ち込んでいる。海岸平野はごく狭いため、旧津名町の市街地は、東海岸線に沿って形成されている。津名山地は、淡路市志筑と郡家を結ぶ谷によって区切られており、この谷部は、淡路島の東西を結ぶ有力な交通路となっている。

田井A遺跡は、この谷部を大阪湾へ流下する宝珠川の南西にあたる平野部にある。この志筑平野の古代地形復元案（伊藤宏幸 2004）によれば、現在は志筑市街地を流れる志筑川は、古代以前においてはより北東寄りの流路を流れており、志筑平野一帯には入江ないしは湿地帯が広がっていたとされる。

## 第2節 歴史的環境

### 1 後期旧石器時代～縄文時代

田井A遺跡周辺では、後期旧石器時代の明確な遺跡は知られていない。縄文時代の遺跡としては、老谷遺跡・大門道向遺跡・五反畑遺跡・覗遺跡・八幡遺跡・湯ノ谷池遺跡などの散布地が知られているほか、横入遺跡でも縄文時代の土器が出土しているが、明確な集落遺跡は確認されていない。

### 2 弥生時代

弥生時代になると、志筑平野周辺には複数の集落が成立する。それらのうち天神遺跡は、前期に成立し、中期まで継続しており、地域の中核的集落であった可能性が高い。また横入遺跡では、前期の水田面および旧河道中に杭を打設した堰が検出されている。今回報告する田井A遺跡の下層で縄文時代晩期～弥生時代前期の土器が出土したことを勘案するならば、少なくとも弥生時代前期には、志筑平野の広い範囲が水田として開墾されつつあった可能性を指摘しうる。他に弥生時代の集落、散布地として、田井B遺跡、古城江A・B遺跡、佐古遺跡、休場遺跡、権太夫原遺跡、王子遺跡、大谷浜遺跡、品ヶ谷遺跡等が知られている。

### 3 古墳時代

志筑平野では、古墳時代前期の集落、古墳ともに知られていない。古墳時代後期（6世紀後半～7世紀初頭）には、天神遺跡で集落が成立する。当該期の天神遺跡では、これまで聚穴住居跡は知られておらず、すべてが掘立柱建物跡であることから、通常の集落とは異なる機能が推定されている（伊藤 前掲）。この他に、古墳時代の遺物散布地として、柳原遺跡、池尻遺跡、王子遺跡、大谷浜遺跡、大谷五反田遺跡等が知られている。

### 4 古代～中世

古代に入ると、志筑地域は大きく変容する。その基点となるのが、淡路島最古の寺院跡とされる志筑



- 1 田井 A 遺跡 2 田井 B 遺跡 3 黒日東遺跡 4 脇遺跡 5 柳原遺跡 6 船橋遺跡 7 高松遺跡  
 8 志筑城跡 9 殿下遺跡 10 池尻遺跡 11 横入遺跡 12 志筑廃寺 13 臨池庵池遺跡  
 14 中田古城跡 15 老谷遺跡 16 大門道向遺跡 17 古城江 B 遺跡 18 佐古遺跡 19 休場遺跡  
 20 古城江 A 遺跡 21 高場遺跡 22 樫太夫原遺跡 23 妙安寺城跡 24 天神遺跡 25 天神北遺跡  
 26 王子遺跡 27 砂川遺跡 28 黒田西遺跡 29 石畑遺跡 30 傍示谷遺跡 31 大谷傍示遺跡  
 32 大谷浜遺跡 33 大谷五反田遺跡 34 五反畑遺跡 35 暇遺跡 36 志筑傍示遺跡 37 品ヶ谷遺跡  
 38 神川遺跡 39 八幡遺跡 40 湯ノ谷池遺跡

第 1 図 田井 A 遺跡の位置と周辺の遺跡

庵寺の成立である。志筑庵寺の創建は、7世紀末～8世紀初頭とされる。創建時に用いられた瓦には、藤原京と同范のものが含まれており、同寺院が大和地域との緊密な関係の下に成立したことは明らかである。津名郡の郡衙は、宝珠川沿いに谷を遡って丘陵地帯を越え、播磨灘側へ至った場所に位置する郡家長谷遺跡と推定されているが、大阪湾に面する志筑平野地域も、港湾を通じて畿内に通ずるという地理的重要性を持っていたと推測される。田井 A 遺跡において今回の調査で出土した木簡、人形をはじめとする多数の木製祭祀具は、官衙的性格を強く示唆しており、この時期に志筑平野地域が担っていた役割が注目される。

中世には、それまで入江ないしは湿地状態であった範囲の埋積が進行し、次第に現在の志筑平野の景観が成立したと考えられる。田井 A 遺跡周辺だけをとりても、20 か所以上の中世集落遺跡ないしは遺物散布地が見られるようになり、当該期に、開墾が大きく進んだことを示している。

#### 参考文献

伊藤宏幸編 2004 『志筑庵寺発掘調査報告1』 津名町教育委員会

## 第2章 調査の概要

### 第1節 調査に至る経緯

今回の発掘調査は、兵庫県淡路県民局洲本土木事務所が実施する、(二)志筑川床上浸水対策特別緊急事業に先立つものである。兵庫県教育委員会では、平成18(2006)年度に、洲本土木事務所の事業計画に基づいて対象地の分布確認調査を実施した。この分布調査で遺物が採集され、兵庫県教育委員会は洲本土木事務所に対し、事業地内に埋蔵文化財が存在するとの回答をおこなった。

平成19・20(2007・08)年度には、兵庫県教育委員会が、洲本土木事務所の依頼(淡路(洲土)第1990号 平成20年1月30日付 および 淡路(洲土)第1666号 平成20年11月20日付)に基づいて確認調査を実施した。この確認調査で、遺構の存在が明らかとなった範囲について、平成21年度、平成23・24年度の3年度にわたり、洲本土木事務所からの依頼により(淡路(洲土)第1620号 平成21年10月21日付・淡路(洲土)第1089号 平成23年4月21日付・淡路(洲土)第2230号 平成24年3月12日付)、本発掘調査を実施した。

第1表 田井A遺跡調査一覧

調査年度	調査番号	調査種別	調査期間	担当者	調査面積(m <sup>2</sup> )
2006	2006198	分布調査	2007/3/22	山田清朝・織 英記	20,400
2007	2007131	確認調査	2008/2/25 2008/2/27～2/29	篠宮 正・長濱誠司	64
2008	2008199	確認調査	2008/11/25～2008/12/15	山本 誠	87
2009	2009225	本発掘調査	2009/11/24～2010/2/26	西口圭介・久保弘幸	996
2011	2011185	本発掘調査	2011/10/26～2012/3/19	渡辺 昇・久保弘幸	1,715
2012	2012085	本発掘調査	2012/7/20～2012/11/16	久保弘幸・織 英記	1,624

### 第2節 発掘調査の概要

#### (1) 分布調査

分布調査は、上記事業地を対象として、地表面の観察により実施した。調査対象面積は、20,400m<sup>2</sup>である。分布調査の時点では、地表面で観察可能な遺構は見いだされなかったが、須臾器・土師器等の散布が認められたため、確認調査を実施することとなった。

#### 【調査の体制】

調査主体 兵庫県教育委員会

分布調査担当者 兵庫県立考古博物館 埋蔵文化財調査部

調査第1班 山田清朝・織 英記

#### (2) 確認調査

第1次確認調査は、上記事業地を対象として実施した。調査は、2m×2mの試掘坑16か所を設定して実施した。調査体制は以下のとおりである。

#### 【調査の体制】

発掘調査主体 兵庫県教育委員会

発掘調査担当者 兵庫県立考古博物館 埋蔵文化財調査部  
調査第2班 篠宮 正・長濱誠司

確認調査の結果、試掘坑のうちほぼすべてのトレンチにおいて遺物包含層が検出された。

第2次確認調査は、第1次確認調査で推定された遺跡の範囲を、さらに明確にするために実施した。調査は、試掘坑10か所を設定して実施した。調査体制は以下のとおりである。

【調査の体制】

発掘調査主体 兵庫県教育委員会  
発掘調査担当者 兵庫県立考古博物館 埋蔵文化財調査部  
企画調整班 山本 誠

確認調査の結果、試掘坑のうち7か所において遺物が検出され、その結果を受けて、田井A遺跡の調査範囲を設定することとなった。

(3) 本発掘調査

【調査の体制】

平成21(2009)年度の調査  
発掘調査主体 兵庫県教育委員会  
発掘調査担当者 兵庫県立考古博物館 埋蔵文化財調査部  
調査第1班 西口圭介・久保弘幸

平成23(2011)年度の調査  
発掘調査主体 兵庫県教育委員会  
発掘調査担当者 兵庫県立考古博物館 埋蔵文化財調査部  
調査第1課 渡辺 昇・久保弘幸

平成24(2012)年度の調査  
発掘調査主体 兵庫県教育委員会  
発掘調査担当者 (公財)兵庫県まちづくり技術センター 埋蔵文化財調査部  
調査第2課 久保弘幸・織 英記

【調査の方法と成果の概要】

本発掘調査区は3年度にわたり、のべ調査面積は4,335㎡である(図版1・2)。調査は、重機による表土掘削の後、遺物包含層以下を人力により掘削し、遺構検出作業を実施するという手順でおこなった。また遺構面の図化は空中写真測量によったが、個別遺構の平面・断面図は調査担当者が作成し、あわせて写真撮影も実施した。

平成21(2009)年度の調査では、996㎡の調査を実施した。この調査では、上層水田面とともに、多数の溝が検出された。この調査過程で、調査区北東端および北西壁際で下層遺構の有無を確認するためのトレンチ調査を実施した結果、調査区北東端では旧河道と、後に杭列Bと呼称される杭および板が検出された。また、調査区北西壁際のトレンチでは、下層水田の存在が確認された。このため、上層水田の調査終了後、下層水田の一部について本発掘調査を実施した。

平成23(2011)年度の調査では、1,715㎡について本発掘調査を実施した。この調査では、前回調査

で検出された下層水田、および旧河道について調査が実施され、少なくとも3条の重複した旧河道の存在と、杭列B・Cが確認された。

平成24(2012)年度の調査では、1,624㎡が調査対象となった。前年度には調査期間の関係上、杭列および旧河道を完掘することができなかったため、前年度調査区の一部も調査対象となった。この調査では、調査区北東部で中世の掘立柱建物跡群が検出されたほか、8か所に杭列が構築された旧河道部、および下層水田が調査された。

調査の結果、本遺跡では次章以降で評述するとおり、少なくとも上下3面の遺構面から、掘立柱建物跡、柱穴、土坑、溝、旧河道、杭列(井環)、水田跡等が検出された。

### 第3節 整理事業の概要

整理事業は、平成22(2010)～平成26(2014)年度に、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター 埋蔵文化財調査部において実施した。整理事業は同調査部整理保存課の所管の下に実施され、非常勤嘱託員が各作業を担当した。木製品および金属器の保存処理については、同課の岡本一秀が実施した。本書に収録した遺物写真については、年度ごとに(株)地域文化財研究所、(株)タニグチフォト、(株)クレアチオに委託して撮影を実施した。また、出土遺物等の自然科学的分析を、下記の通り委託によって実施し、その成果は本書に収録している。

#### 【自然科学的分析委託】

(株) 加速器分析研究所	放射性炭素年代測定
パリオ・サーヴェイ (株)	木製品樹種同定
(株) 古環境研究所	木製品樹種同定・種実同定・動物遺存体同定・昆虫遺体同定
(株) パレオ・ラボ	花粉分析

なお、整理事業に携わった非常勤嘱託員は以下のとおりである(順不同)。

今村直子、家光和子、小林俊子、渡辺二三代、小林陽子、村上令子、嶺岡美見、吉村あけみ、島田留里、高瀬歌子、西口由紀、柏原美音、栗山美奈、池田悦子、杉村明美、宮田麻子、森本貴子、八木和子、加藤裕美、佐々木響子、榎真菜美、小野潤子、藤尾裕子、桂 昭子、浜崎多規子、河合たみ、加古千恵子、荻野麻衣、島村順子、上田紗耶香、藤池かずさ、平宮可奈子、佐々木愛、菅生真理子、遠藤貴子、柴垣良樹、前谷幸次、松本恵梨子、梶原奈津子、古谷章子、寺西梨紗

また、木簡の文字釈読については、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の山本崇氏に依頼しておこなった。

なお本発掘調査時に、本遺跡の成立に至る地形形成過程を明らかにするため、青木哲哉氏(立命館大学)の指導の下に実施した。深掘トレンチによる調査成果については、青木氏より玉稿を頂戴し、本書第4章に掲載している。

本報告書に収録した遺物、写真、図等については、すべて兵庫県立考古博物館に保管している。

## 第3章 遺構と遺物

### 第1節 層序と遺構面の位置

#### 1 本発掘調査区の位置 (図版1・2)

本発掘調査区は、志筑川と宝珠川に挟まれた平野部に位置し、宝珠川の南に隣接している。北西側には標高40～50mを測る丘陵が広がり、南東側には大阪湾を望む。これまでの調査によれば、田井A遺跡から北東側の平野部は、弥生時代以前には深く入り込んだ湾となっており、以降、次第に埋積が進行して、中世に至り現在のような平野が形成されたと考えられている(伊藤幸幸編 2004)。

田井A遺跡で人の活動が行われた期間の多くの部分で、遺跡周辺は洪水の影響を受けやすい、低湿な環境下にあったのであろう。平安時代末～鎌倉時代に至り、ようやく集落を営みうる微高地が形成されたと思われるが、その段階においても、微高地は宝珠川に沿った限定された領域であり、周辺には低湿な環境が継続していたと思われる。

調査区付近の現在の標高は9.5m、遺構面の標高は、平安時代の遺構面が9.0m、奈良時代の遺構面(上層水田)が8.8m、飛鳥時代の遺構面(下層水田)が8.2～8.4m付近にあたる。

#### 2 調査区内の層序と遺構面の位置

図版3・4には、本発掘調査区全周壁面の地層断面図を掲載している。これは、3年度の調査において分層、図化したものであるが、全周を掲載する縮尺の関係から、調査時点では細分されていた地層を、時期ごとに包括し、地層の色調、粒度等の記載も、各層を代表する層相を掲載している。

**第Ⅰ層・第Ⅱ層** 調査区内では、表土層(第Ⅰ層:水田耕土)下に、砂質シルトから成る3～4層に細分される古水田土壌が見られる(第Ⅱ層)。これらは、包含される遺物から近世～近代に相当すると考えられ、本発掘調査範囲内全域に広がっている。

**第Ⅲ層** 第Ⅱ層の下位には、シルト混砂～細砂を主体とし、粗砂を含む古土壌層(第Ⅲ層)が、調査区内に広く認められる。この古土壌層は、土壌化の程度によって2～3層に細分されるが、いずれも平安時代～鎌倉時代の遺物を包含する。調査区北東部では、第Ⅲ層直下の面で、平安時代中期の遺構が検出されたが、その他の領域では遺構は検出されておらず、大きく離れた2011年度調査区南西部の北壁際で、同時期の溝(SR04)が検出されている。

**第Ⅳ層** 第Ⅲ層の下位には細砂～粗砂を主体とした洪水砂層が堆積している(第Ⅳ層)。調査区中央部付近の一部では、この砂層が断続する部分が見られるが、概ね、調査区全域に分布しており、場所によっては下位の第Ⅴ層を浸食している状況を確認できる。調査区中央の旧河道上層付近では、旧河道内の堆積物と第Ⅳ層の洪水砂の明確な重複関係を把握することはできなかった。

**第Ⅴ層** 第Ⅴ層は、シルトから細粒の砂を主体とする古土壌層である。調査区北部と、南西部では認められなかったが、その他の領域には広く堆積しており、調査区中央部では、この層単で水田遺構(上層水田)が検出された。奈良時代の古水田土壌と考えられる。

**第Ⅵ層** 細砂～粗砂を主体とした洪水砂層で、場所により3～4層に細分される。調査区北部～北西部では、第Ⅳ層によって浸食を受けているが、ほぼ調査区全域を覆う層である。

**第Ⅶ層** 特徴的な黒色の粘土～シルトから成る古水田土壌である。上面を覆う第Ⅵ層中の遺物から、当

該水田は7世紀代以前に営まれたものと推定される。調査区のはほぼ全域に広がっているが、水田遺構(畦畔)は調査区北西側で遺存状況が良好である。

**第Ⅶ層** 第Ⅶ層の下位に堆積する、青灰色～緑灰色の粘土～シルト層である。調査区中央部、北東崖際などで、本層より縄文時代晩期～弥生時代前期の土器が少量出土している。

**旧河道** 調査区中央部に位置し、ほぼ北・南の方位をもっている。調査区の壁面における観察では、多数回にわたって河道の形成と埋没があったものと思われるが、平面的に識別可能であったのは、旧河道1～3の3条である。河道内はシルト～砂礫によって埋積されていたが、主体となるのは砂～砂礫層であり、一定の流量をもった河道であったと思われる。

河道内からは奈良時代～平安時代初頭に属する、多数の土器・木製品が出土していることから、当該期間に形成され、埋没した河道であったと判断される。旧河道が、上層水田(奈良時代)を浸食し、かつ、第Ⅲ層(平安時代中期以降)に被覆される点からも、この判断は首肯される。

## 第2節 飛鳥時代の遺構と遺物

### 1 概要

飛鳥時代の遺構は、調査区中央部から北東部にかけて検出された、水田遺構（下層水田）である。黒色粘土～シルト層に造営された水田面で、その上面は厚い洪水砂に被覆されている。水田面からの出土遺物はほとんど見られなかったが、洪水砂中に包含される遺物が、概ね7世紀代と推定されることから、下層水田についても、飛鳥時代の所産と判断した。1条の大畦畔とこれに取りつく小畦畔から成る。

以下では、水田面の状況を記載するとともに、水田面を被覆する洪水砂中の遺物について記載をおこなう。

### 2 遺構（図版5 写真図版6～9・11・12・18・19・45）

下層水田面は、1条の大畦畔と12条の小畦畔が検出されたほか、水田面より多数の足跡が検出された。

大畦畔は、基底部の幅1.5～2.0m、頂部の幅0.9～1.2m、高さ25～40cmを測る。北東・南西方向にはほぼ直線的な延びを見せ、旧河道によっておよそ25mが浸食されたと考えられる。この流失部分を含めると、大畦畔の延長は97mに達する。この大畦畔に直交方向に延びる明確な大畦畔は検出されなかったが、その痕跡かと推定される土色の違いが、図中に破線で示したとおり、調査区南西部および調査区東部の壁際に検出されている。

小畦畔は、基底部の幅0.6～1.0m、頂部の幅0.4m前後、高さ20～25cmを測る。大畦畔に直交して取りつくものが見られるほか、大畦畔にほぼ平行して23.5mの延長を測るものが見られる。小畦畔相互も直交するものが目立つが、大きく湾曲するものも一部に見られる。

大小の畦畔で区画された水田のうち、面積の算出が可能なもの5筆についてその面積を示すならば、水田1が33.2㎡、2が28.0㎡、3が66.6㎡、4が60.5㎡、5が28.5㎡となり、相当のばらつきが認められる。

水田面上からは、極めて多数の足跡が検出された。そのすべてを記録することはできなかったが、一部の水田で図化をおこなった（図版6）。これによれば、足跡には明らかに人と判断できるものと、偶蹄類のものが混在している。前者の場合、遺存状況が良好な足跡では、指先、土踏まず等が識別できるものも見られることから、これが人の足跡であることに疑問の余地はない。偶蹄類の足跡は、その形状からウシの可能性が高いと判断している。

### 3 遺物（図版42・43 写真図版93・94）

下層水田面に直接的に伴うと判断された遺物はない。しかし下層水田の上面を被覆する洪水砂層からは、土師器、須恵器、土製品等が出土しており、下層水田の時期を推定する鍵となったため、第5節の内容と重複するが、本項でもこれらについて触れておく。

216～222、230、234、235、238、240は、いずれも下層水田を被覆する洪水砂あるいは、その上面付近にあたる上層水田の遺構検出面より出土したものである。216～220は須恵器の杯Hである。216・217は蓋で、216にやや古い様相が認められる。218～220は身で、形態に差はあるが時期的には近いものと思われ、蓋よりも新しい。

221は土師器の杯A、222は皿Aの破片である。

230は製塩土器であろう。粘土紐の継目が残る。

234・235は土馬の脚である。外面はヘラケズリによって成形され、ナデ調整が施される。234での足の表現はやや曖昧で穿孔は貫通している。235では蹄の表現がなされ、穿孔は上下からされているが、貫通はしていない。

238・240は須恵器の杯口である。238は蓋で、天井部は丸みを帯び、口縁部との境界が曖昧になっている。240は身で、体部が浅くなり、平底化している。7世紀まで下るものと思われる。

#### 4 小結

下層水田は、直線的な大畦畔と直交する小畦畔という、きわめて規格性の高い水田面である。区画された各水田の面積にばらつきが多いことと、典型的な条里型地割りと比較すると、水田区画の形態が異なることから、これを条里型地割と断ずるにはなお躊躇が伴う。しかし、今回検出された下層水田が、地形に沿って個々に造営され、その結果、不定形な水田が連鎖する「小区画水田」とは大きく異なることには疑問の余地がなからう。

水田の造営時期は明らかではないが、水田面を被覆する洪水砂層より、古墳時代後期～飛鳥時代の須恵器が出土することから、飛鳥時代を大きく下らない時期に厚い洪水砂で覆われ、その結果廃絶したとするのが妥当であろう。

このような規格性の高い水田面が、集落を単位とした個別的な開墾によって造営されるとは考え難い。田井A遺跡の西方約500mに、淡路最古の寺院跡と言われる志筑庵寺が存在することを勘案すれば、法隆寺周辺に古い条里型地割が認められるのと同様、田井A遺跡周辺に早い段階から条里型地割が形成されつつあった可能性を指摘しても大過あるまい。

今回の調査では、残念ながら直交方向の確実な大畦畔を検出することはできなかった。また、原地表に見られる条里型地割の、坪境までを調査対象とすることができなかったため、下層水田面が、原地表の坪境付近でどのような形態を示すかについては不明のままであり、調査上の今後の課題と言えよう。

### 第3節 奈良時代の遺構と遺物

#### 1 概要

当該時期に相当する古土壌層は、調査区内に広く堆積するが、遺構面は調査区中央部のみで検出された。これは、当該期の遺構が旧河道を除けば水田面（上層水田）に限られており、畦畔の遺存状況が良好な部分でのみ検出が可能であったという事情によるものであろう。以下では、当該期の遺構と遺物について、上層水田と旧河道部を中心に記載をおこなうが、記述の便宜のため、水田面およびこれに重複する溝群と、旧河道とに区分して記述を進めるものとする。なお、上層水田面とした遺構の一部は平安時代に属するが、編集の都合上本節で記載する。

#### 2 奈良時代の遺構と遺物

##### (1) 遺構と遺物

##### ア 上層水田面（図版7～11 写真図版1～5・9・10）

上層水田面及び水田面に伴う遺構としたものは、平成21年度（2009年度調査区及び平成23年度（2011年度）の調査区において検出された遺構である。2011年度の調査区は、2009年度調査区の西側及び南側に拡張した調査区であることから一括して記述する。

##### イ 概要（図版7）

兩年度をあわせた調査区の東西延長は約73mである。奈良時代（8世紀）～平安時代前期（9～10世紀）の遺構を検出した。

調査区全域にわたって、各時期の水田面とこれに伴う畦畔・溝、水田祭祀に伴う土器、旧河道1、埋没した旧河道1の痕跡に沿って走る溝、噴砂などを検出した。

このなかで、奈良時代の水田畦畔が、基本的に南北に近い方向を保って延びているのに対し、平安時代前期の畦畔は、現地表の水田区画とはほぼ同一の方向性をもつことが判明した。

##### ロ 遺構

遺構検出は8世紀代の遺構面において一括して実施したため、遺構面に被覆する洪水砂層を挟んだ上面の平安時代の遺構についても同一面において検出している。ここでは煩雑さを避けるため、通常まとめにおいて施す時期ごとの遺構の分類を行い、概ね4期に分類し、遺構について述べてゆく。

#### I期 8世紀前半の遺構

南北方向に走る畦畔（畦畔1～10） 調査区の中央から東半にかけて南北方向に走る畦畔を9条、東西方向に走る畦畔10を検出している。これらの畦畔は高さはごく低く、幅40～60cmを測る小畦畔である。全体に緩やかに蛇行するが、残りの良い畦畔4・5ではN5°E～N10°E、畦畔1・2ではN2°Wを測る。畦畔4・5間は約6mを測る。また、畦畔4・5・8は北端で途切れており、畦畔5と6の間から畦畔2に向かって東西方向（N80°E前後）に走行をとる畦畔もしくは段差が存在した可能性が想起される。これら南北方向の畦畔は、II期の畦畔と切り合い先行する。

#### II期 8世紀後半～9世紀の遺構

現地表に近い走行をもつ畦畔I（畦畔11～20） 調査区中央北よりを中心に、調査区に対して並行もしくは直交する畦畔を検出している。これらの畦畔は高さはごく低く、幅40～60cmを測る小畦畔である。畦畔11は調査区の東半から西端まで縦断しており、N51°E～N52°Eの方位をもつ。また、畦畔17は分枝し北側へと延びる。畦畔12は畦畔11と約2.5mの間隔をあけて並行しており、畦畔13・15・16が分枝している。N55°Eの方位をもつ。畦畔14は畦畔12と約1.4mの間隔をあけて並行して

おり、屈曲し南へと延び、水田の方形区画の一部を造りだしている。畦畔の残りは全体に悪く、水田一枚の規模は不明であるが、畦畔 13・14 あるいは畦畔 11・15 が限る東西方向は一邊約 7 m 前後を測る。また南北方向の規模については、畦畔 11・12 間では 2.5 m と狭く、傾斜の変換点であった可能性が高い。これらの畦畔はⅢ期の畦畔・溝に切られている。

畦畔 12 及び溝 11 の西端南側より、土師器長胴壺 1 点 (37) が出土している (図版 10 写真図版 3)。壺に伴う土坑などの施設は検出されなかった。壺は西側に口縁部を向けて横倒しの状態で圧潰している。出土位置が、溝・畦畔の先端にあたることからⅡ期の水田の水口祭祀などに伴う可能性が考えられる。壺の時期は 8 世紀後半と考えられ、Ⅱ期遺構面の時期を推測する資料である。

**溝 SD09** SD05 の北側に位置する。N45° W に走る。全長約 2.5 m・幅 25cm・深さ 8cm を測る丸底の溝である。暗灰黄砂によって埋没している。

**溝 SD11** 畦畔 12 の内側に沿って東西方向、N51° E に走る。全長約 7 m・幅 22cm・深さ 9cm を測る丸底の溝である。暗灰黄砂によって埋没している。

**旧河道** 2011 年度に調査を実施した。調査区の東端を蛇行しつつ南流する旧河道である。検出全長 30 m、幅 4～6 m を測る。河道内からは木製祭祀具人形・馬形、折敷、槽などが出土している。木製人形は 8 世紀末から 9 世紀初頭の時期が考えられる。この他、縄文時代～奈良時代の土器が多量に出土している。河道は埋没した後も旧地形に痕跡をとどめ、Ⅳ期では蛇行する溝 SD01～SD03・SD06・SD10 を形成したと考えられる。

### Ⅲ期 9 世紀の遺構

現地表に近い走行をもつ畦畔Ⅱ (畦畔 21～31) 調査区全域に、調査区に対して心持ち斜行する畦畔群を検出している。畦畔の幅はそのほとんどが約 20cm から 50cm に収まり小畦畔に属するものである。調査区の北端には畦畔 3 及び畦畔 22 が東西方向 N45° E に走っており、これらの畦畔に伴って溝 SD08 が検出されている。畦畔 3・22 は高さはごく低く、幅 40～50cm を測る。

畦畔 23・25・畦畔 31 は調査区を南北方向に横断しており、N15° E～N22° W の方位をもつ。このうち、畦畔 31 は畦畔 22 より分枝しており、畦畔 31 で分けて東側と西側の水田面は大きくレベル差を持っている。畦畔 25 は埋没した旧河道の肩にあり、他の南北方向の畦畔に比べ幅 0.8 m と広い。畦畔 31 とともに水田区画の東西方向を大きく限る役割を持っていた可能性が高い。畦畔 25・畦畔 31 間の幅は約 25.5 m である。

各畦畔の残りは全体に悪く、水田一枚の規模は不明であるが、畦畔 25・31 間の大きな区画に対して、畦畔 30・31 間は東西幅約 4.5 m、畦畔 26・27 間は南北約 4.3 m、畦畔 23・24 間は東西約 2.0 m と南北・東西ともに狭い。地形の凹凸に合わせ、大きく区画した中を更に細かく区画していた可能性が考えられる。

### Ⅳ期 10 世紀の遺構

更に上層の水田の土壌化によって水田畦畔等の詳細なあり方が不明な時期の遺構である。

**溝 SR04** 2011 年度に調査を実施した。調査区の北西端より出現し東走して北へ屈曲をみせる大型の溝である。検出長東西全長約 18 m・幅 2.3 m・深さ 0.8 m を測る丸底の溝である。走行は N51° E にとる。主に灰黄砂によって埋没している。溝は北側へ直角に屈曲しており、その在り様から集落・館を区画する溝である可能性が高い。溝内より黒色土器が出土しており 10 世紀代の時期と考えられる (図版 10)。

**溝 SD01・SD02・SD03・SD06・SD10** これらの溝は調査区の東端にかたまり、北東から南西に流

れる溝である。SD01・SD06がⅢ期の畦畔23・25を切っており、Ⅲ期よりも新しいと判断している。その位置からこれらの溝は旧河道1の凹みに流れ込んだ自然流路と考えられ、蛇行し主に暗灰黄砂によって埋没している。SD06は顕著な蛇行をみせ、幅1.25m・深さ20cmを測る比較的規模の大きい溝である。上半が黒褐色細砂質シルトによって埋没しており、よく土壌化している。

**噴砂** SD06の埋土を切って噴砂が検出された。立ち上がりはSD02・SD03埋土と同じ暗灰黄砂層の半ばに至っている。検出長約1.6m、走行はN48°Wにとる。

**溝SD05** 調査区南端を東西方向、N40°Eに走る。Ⅲ期では主に上層の溝が機能していたと考えられ、検出全長24.5m・幅0.6m・深さ0.25mを測る丸底の溝である。にぶい黄褐色極細砂によって埋没している。溝下層は、下層遺構と共に精査を実施した。検出全長24.5m・幅1.2m・深さ0.4mを測る逆台形の溝である。Ⅲ期に至るまで3回前後掘り直されている。

**溝SD08・SD08南分枝・SD04** SD08は畦畔3・畦畔22を両肩にもち東から西へN45°Eに走る。検出全長37.5m・幅0.6m・深さ0.15mを測る断面皿状の溝である。SD08の東端・西端は土地区画の屈曲に合わせて緩やかな蛇行をみせており、溝のあり方から水田の用水路として機能していたと考えられる。暗灰黄砂によって埋没する。SD08南分枝はSD08より分枝し南へと流れだす自然流路と考えられ、SR04もまた、その延長にあたると思われる。SD05の中層に流れ込む。SD08南分枝からSD04を含めた検出全長は約18m、幅0.25m・深さ0.05mを測る。断面は浅い皿状を呈する。暗灰黄砂によって埋没する。

**溝SD12** 畦畔30の西肩に沿って、北から南へN20°Wに走る溝である。検出全長6m・幅0.4mを測る。残りが悪く全容は不明である。

#### (ウ) 遺物 (図版31 写真図版76)

29～31はSR04から出土した。29は土師器の椀で、内面にヘラ磨きを施す。30は黒色土器A類の椀底部で見込み部に平行に施された暗文が認められる。31は須恵器の杯Aである。底部はヘラ切りの後ナデを施している。

32は土師器甕の口縁片である。SD01から出土した。

33は土師器甕の口縁部片である。奈良時代に属する。34は須恵器甕の口縁部片である。いずれもSD05から出土した。

35は須恵器の杯蓋である。口径から考えて杯Bのものと思われる。飛鳥時代～奈良時代初めに属する。SD08から出土している。

36は須恵器の口縁部片である。甕のものと思われる。P3から出土した。

37は土師器の甕である。1個体分が水田面で固まって出土した。使用痕を持たないものである。

### 3. 旧河道の遺構と遺物

#### (1) 概要

旧河道は調査区中央部を、北・南に横断しており、調査区の壁面における観察では、複雑に重複する3～6条が存在したと思われるが、調査時に平面的に識別可能であったのは、旧河道1～3の3条である。旧河道は1が最も新しく、3が最も古く形成されたものである。なお調査時に付された遺構名は、本報告書の記載名とは異なるため、その対照を各河道ごとに示した。

河道内からは奈良時代～平安時代初頭に属する、多数の土器・木製品が出土していることから、当該期間に形成され、埋没した河道であったと判断される。旧河道が、上層水田(奈良時代)を浸食し、か

つ、第三層（平安時代末～鎌倉時代）に被覆される点からも、この判断は首肯される。

旧河道のうち2・3内からは、少なくとも8か所の杭列が検出された。それらのいくつかは、河道内の堆積物中で明瞭な上下関係をもつことから、河道が埋没するに従って、順次構築されたものと考えられる。また、河道の最下底部からは、須恵器の甕を埋設した遺構が検出された。

(2) 旧河道1 (SR02:2011・SR170:2012)

ア 遺構 (図版12)

最も新しく形成された旧河道1は、調査区北西壁から緩やかに蛇行しつつ南流して、旧河道2・3の堆積物を浸食して南東壁に至る。河道は深いV字形からU字形の断面形を示し、特にその下底部はコブル級を含む砂礫層によってV字形ないしは深いU字形に浸食、埋積されていた。

旧河道1内には、旧河道2・3のような杭列は設けられていないが、これは本河道の形成と埋没が、ごく短期間のうちに継起したことを示唆するものであろう。

(3) 旧河道2 (SR01:2011・SR171:2012)・3 (SR03:2011・SR186:2012)

ア 遺構 (図版12)

旧河道2・3は、調査区内ではほぼ並行しつつ旧河道2が3の堆積物を浸食していることから、3の埋没後に2が形成されたことは明らかなように見える。しかし、この2条の旧河道は、場所によってはほぼ完全に重複していること、河道内がほぼ同様の堆積物で埋積されていること（図版13）、本発掘調査時に断面で検討したところでは、平面的に捉えられた2条の旧河道が単純に重複しているのではなく、実際には幅の広い河道内で、埋没の進行とともに分岐・合流を繰り返す、複雑な流路の変遷があったと考えられること等から、一括して記載をおこなう。

上記2つの河道を合わせた広い河道の縁辺からは、河畔林と思われる根株が多数検出されたこと、河道を埋積する堆積物が、砂、砂礫を主体としつつも、ラミナが見られる細粒の堆積物や、草本類遺体の堆積、腐植質を含む粘土～シルトを含むこと、河道内に多数の杭列が設けられていたこと等から、河道の形成から埋没までは、一定の期間を要したことは明らかである。

以下では、河道内より検出された杭列、須恵器埋設遺構等について記載をおこなう。

(7) 杭列A (図版14・15 写真図版55)

杭列Aは、旧河道の北半部に位置する。1列15本の杭から成り、杭列の延長は2.7mを測る。最も高位にある杭頂部の標高は8.5m前後を測り、杭の長さは40～90cmを測る。流路にほぼ直交する杭列であることから、井堰の機能が推定される。

(4) 杭列B (図版14～16 写真図版13・15・16・56)

杭列Bは、旧河道の南東半部に位置する。1列10本の杭と、幅20cm、長さ180cmの板1枚（図版58 151：モミ属）から成り、杭列の延長は5.4mを測る。最も高位にある杭頂部の標高は7.8mから7.9mの間にあり、杭の長さは20～80cmを測る。流路にほぼ直交する杭列であることから、井堰の機能が推定される。

杭列Bは、2009・11年度調査区の北東壁際に位置していたため、両年度には検出および平面図の作成を実施したのみでそのまま埋め戻しをおこなった。2012年度に改めて全体を調査しようとしたが、先の調査で検出されていた杭のうち、少なくとも5本の劣化が進行して、再調査することができなかった。このため、図版16で示した平面図と、同15で示した断面図の杭の数が整合していない。

(7) 杭列C (図版14・16・17 写真図版13・14・56～61)

杭列Cは、大型材を横木に用いた杭列C1を中心に、約25mの範囲に打設された一群の杭と横木から構成される。検出当初は、視覚的に判断してこれらを同一の遺構と考えていたが、調査の結果、少なくとも4段階に分離しうる可能性が高いという結果を得た。以下では、大型材の横木を含む一群をC1、その北側に位置する一群をC2、C1の南に接し、C1より低い位置にあるものをC3と呼称して記述を進める。

#### a 杭列C1

杭列C1は、旧河道2の南東壁際に位置し、その南東端は調査区外へと延びる。基底部の幅約2m、頂部の幅約0.7mを測る。河道北側の肩部から河道中央部にかけて設けられた土手状の盛土上（図版17）に、少なくとも2列24本の杭と、直径36cm、長さ4.5mを超える大型の横木によって構築された、大規模な杭列である。最も高位にある横木頂部の標高は約8mであり、これに伴う杭の長さは80cm～115cmを測る。杭列は横木の両側に、これを支えるように打設されている。流路にはほぼ直交する杭列であることから、大規模な井堰の機能が推定される。これは本来、北～南西に蛇行しつつ流下していた河道内に貯水し、南東方向に導水したものと推定され、奈良時代の農業用水を供給する機能を有していたものと推定してよからう。

#### b 杭列C2

杭列C2は、杭列C1の北東に位置する。2列17本の杭と、直径5～10cm、長さ1.1～2.5mの横木4本から成り、杭列の延長は3.2mを測る。最も高位にある杭頂部の標高は7.9m前後である。杭の長さは20～125cmを測る。調査時点では、この杭列はすべて同時に打設されたものと判断していたが、杭列の垂直投影図を作成して検討したところ、17本の杭のうち、5本は明らかに杭の下底レベルが高いことから、C2そのものが2段階に分離しうるものと判断するに至った。杭列の方向は、C1に対してやや斜行しているものの、この位置での旧河道の方向にはほぼ直交することから、井堰の機能が推定される。

#### c 杭列C3

杭列C1の南西に接する位置にあってはほぼC1と平行し、南東端は調査区外へと延びる。検出レベルを最頂部と比較すると、C2はC1よりも80～100cmほど低い位置にある。少なくとも杭13本、横木4本から構成され、杭列の延長は4.6m以上を測る。杭の長さは70～190cmを測り、横木は直径5～12cm、長さ3.0～4.2mを測る。

杭列C3の杭は、杭頂部と杭先端部を直線で結ぶと、すべての杭が水平面に対して20°～31°という大きく傾斜した状況で検出された。また1本を除き、すべての杭は横木より上位にある。このような緩斜度で杭を打設することそのものが困難であること、こうした緩斜度の杭の直下に横木を設置することによって、何らかの機能が付与されるとは考えがたいこと、今回の調査で検出された他の杭列では、ほとんどの杭が垂直ないしはこれに近い角度で打設されていること等から、C3は、本来垂直に打設されていた杭とこれに伴う横木が、何らかの要因で倒壊した状態であった可能性が高いと判断される。

#### (㉓) 杭列D（図版14・18 写真図版62）

杭列Dは、旧河道の北壁際に位置する。1列8本の杭と、最大径10cm、長さ210cm、および260cmを測る2段に組まれた丸太材の横木から成り、杭列の延長は2.8mを測る。最も高位にある杭頂部の標高は7.5mであり、杭の長さは56～85cmを測る。河道の分岐部に設けられており、流路にはほぼ直交する杭列であることから、井堰の機能が推定される。

#### (㉔) 杭列E（図版14・19・20 写真図版63～65）

杭列 E は、旧河道の北半中央に位置する、多数の杭および横木の一群を一括したものである。多数の杭および横木が明示的に分離できなかったため、一括して杭列 E としたが、本来は複数の杭列であった可能性がある。また、東側に隣接する杭列 G との境界は明瞭ではない。

少なくとも並行する 2 列 17 本の杭と、方位を異にする 1 列 14 本の杭、および 5 本の横木から構成されている。横木の直径は最大約 10cm を測る。最も高位にある杭頂部の標高は 8.4 m であり、杭の長さは最大で約 130cm を測る。並行する 2 列の杭列は河道に平行し、他の 1 列はほぼ直交する。前者については護岸であった可能性が、後者については井堰の機能が推定される。

(ウ) 杭列 F (図版 14・18)

杭列 F は、旧河道の北半部に位置する。1 列 7 本の杭と、最大径 8cm、長さ 103cm を測る丸太材の横木から成り、杭列の延長は 1.8 m を測る。最も高位にある杭頂部の標高は 7.75 m であり、杭の長さは 82cm～100cm を測る。流路にはほぼ直交する杭列であることから、井堰の機能が推定される。

(エ) 杭列 G (図版 14・19・20 写真図版 63)

杭列 G は、旧河道北東側に位置し、杭列 E との境界は不鮮明である。12 本の杭と、最長 2 m を測る 10 数本の丸太材から成り、杭列の延長は 3.6m を測る。丸太材は杭列とは接しておらず、本来、杭列の構造物であったのか否か、判断に苦しむ。最も高位にある杭頂部の標高は 7.9 m であり、杭の長さは 56～100cm を測る。杭列は河道の縁辺にはほぼ平行しており、堰としての機能と判断することはできない。むしろ導水施設的な機能を果たしていた可能性も指摘しうる。また杭列 G の位置する河道の北東縁辺では、河道底が大きく凹んでいることから、貯水に伴う施設であった可能性もあろう。この凹部から土師器甕、須恵器甕、馬歯等が出土している。

(オ) 杭列 H (図版 14・21)

杭列 H は、旧河道の北半に位置し、2 列 4 本の杭から成ると考えた。杭列の延長は 2.2 m を測る。最も高位にある杭頂部の標高は 7.82 m、杭の長さは 68～97cm を測る。しかし、2 列の杭列の間が 1 m 以上離れていることから、これらが同時にひとつの杭列を構成していたものかどうか、疑問が残る。

東側の 2 本の杭には、樹木の枝とともに草本遺体が多量に覆いかぶさった状態であった。流路にはほぼ直交するように見えるが、全体の構成に疑問の余地があり、機能の推定は困難である。

(カ) 埋設杭群 (図版 14・21 写真図版 66)

旧河道南部の下底の凹部で、杭 5 本がまとまって出土した。厳密な意味で遺構と言えるか否か議論の余地はあるが、杭の一括保存であった可能性を考慮して、ここで記載する。

杭は旧河道下底の凹部に、折り重なるように置かれており、1.2～1.4 m のもの 3 本と、2.1～2.2 m のもの 2 本から成る。いずれも丸太杭であるが、先端は丁寧加工されて尖り、いずれも使用可能な状態であった。太さや長さ等の要素が、河道内の杭列と共通することから、余剰の杭を保存するために河道底で水没させていた可能性があろう。

(キ) 須恵器設置遺構 (図版 14・21 写真図版 67)

旧河道 3 南部の杭列 B に接する河道底で、完形を保った大型の須恵器甕 (127) が、設置された状態で出土した。甕は、河道底をわずかに掘り窪めた中に、ほぼ直立の状態で置かれており、器体の大部分は河道内に堆積した砂で埋没していた。須恵器内部も砂で充填されており、内部からの出土遺物は見られなかった。出土状況から、甕は、河道底に意図して設置されたものと考えられる。

127 は体部外面にタタキを施した後、体部中心～頸部にかけてカキメ調整を施し、内面は同心円タタ

キを施している。肩部から体部上半に濃密な自然軸が流れ、他の小型須恵器が複数融着するほか、火眼れが多数見られる。底部外面には3箇所円形の変色部分が認められ、これは焼台痕と考えられる。

なお、この甕の内部を充填していた堆積物を水洗選別した結果、多数の種子が得られた。これらについては同定を委託し、その結果は本書第4章に掲載している。同定結果によれば、甕内部より出土した種実類は、ヤマモモ、ブナ科、カジノキ、クスノキ科、サンショウ属、ノブドウ、ブドウ属、ブドウ科、クマノミズキ、ホタルイ属、スケ属、タテ属、キンボウケ属などがある。可食部をもつ木本類の種実が含まれてはいるものの、全体の構成は多様であり、湿地性の草本種子までを含むことから、人為的に甕とともに埋設された可能性はきわめて低いと判断される。

#### イ 遺物

##### (7) 土器

旧河道からは多量の土器が出土しているが、大部分は洪水による堆積物中に遊離したものであり、原位置を保つものはごくわずかである。以下では、各河道ごとに記述を進める。なお器種名については「平城宮発掘調査報告XVI」(2005)に準拠している。

##### a 旧河道1 (図版32～34 写真図版76～81)

38～60は土師器あるいは土師質の土器である。38～42は皿である。38・39は端部を内側に巻き込むようになるもので、内面に暗文が認められる精製品である。40～42は端部を丸くおさめ、指頭圧痕が残るものもある。

43は杯Aである。44は椀で平底から内湾して立ち上がる口縁部を持つ。

45は精製高杯の脚部である。面取りした脚柱部を持つ。

46～49は甕である。46は小型のもので、当道跡では出土数が限られている。47～49は中型の長胴甕でハケを多用する。48は外面に煤が付着している。

50はカマド片である。51は把手の破片で鍋またはカマドの一部と思われる。

52～60は製塩土器と考えているもので、いくつかの形態が認められる。52はやや薄手で直線的に立ち上がる体部を持つ。53～56はやや厚手の椀形のものである。57は逆円錐形の体部を持つもので、丸底である。内外面に指ナデの痕が顕著である。58・59は口縁部片のみであるが、椀形あるいは57に似た形状である可能性を持つ。60は甕に近い形態を持つもので、粘土紐の接合痕が明瞭である。

61～79は須恵器である。61・62は杯G身と思われる。61は底部外面に平行するヘラ書き沈線が認められる。63～67は杯Aである。68・69は杯B身である。69は見込み部に工具痕跡が認められる。70は皿の底部と考えられ、外面に「福家」と墨書されている。

71～77は甕と考えられる。71は短く立ち上がる口縁と肩の張った体部を持つ甕Cである。72・73は斜めに立ち上がる頭部に外反する口縁部を持つ甕Lである。74は大きく開く口縁部を持ち、口縁端部を直立させる。75から77は甕の底部である。75・76は輪高台が付くもので、77は平底である。75は高台内部にヘラ記号が認められる。78は外反する短い口縁部を持つ鉢Dである。

79は甕である。肩の張った体部に外反する口縁部を持つ。端部は内側に拡張している。

80・81は瓦である。80は丸瓦で凸面の調整は不明だが、凹面には布目とヘラケズリの痕跡が残る。凹面端部は肥厚し面取りされている。81は平瓦で凹面に布目、凸面に縄目タキが認められる。

82～93は律令期以外に属すると思われる遺物である。82は縄文土器口縁部片である。表面に沈線文が施されている。

83～87は弥生土器、88は土師器である。83は体部に三条の張り付け凸帯が残る壺の体部である。前期のものと考えられる。84は平底を持つ壺の底部である、85は小型の広口壺で中期に属すると考えられる。86は底部穿孔を持つ鉢である。外面に連続タタキを施す。87は蓋形土器と判断した。外面にタタキが残る。86・87は後期に属すると思われる。88は浅い椀形の坏部を持つ高坏で、古墳時代のものと考えられる。

89～93は古墳時代に属する須恵器である。89～91は杯H蓋で89・90は天井部の回転ヘラケズリが残るが、91は回転ヘラ切りの後ナデである。92は杯H身で底部は回転ヘラ切りになっている。93は鉢である。体部の穿孔部周辺を打ち欠いている。

b 旧河道2 (図版38～41 写真図版86～92)

147～170は土師器である。147～149は杯Aである。147は口縁端部を強くなくて、巻き込み傾向にある。150は皿Aである。口縁部を内側に巻き込む。151は鉢Aである。内面に工具痕跡がある。152も形態は鉢Aと思われるが粘土継接合痕が明瞭であり、用途は別である可能性がある。153～177は鉢である。153は内外面とも被熱している。154も被熱、変色しており、153・154は製塩土器である可能性を持つ。155は平底で浅い形態で、ナデ調整で仕上げる。内面にスス、炭化物が付着しており、灯火具の可能性もある。

156は平底で胴の張らない形態である。外面にススが付着するため壺としておく。157は口縁端部を外側に巻き込む。小型の壺と考えられる。158は口縁の外反が弱い壺である。159～168は口縁が大きく外反する壺である。長胴のものが殆どであるが、162が鍋である可能性もある。161・162を除いて外面にススが付着する。169は罎である。頸部に罎を貼り付けている。体部外面にススが付着している。

170は壺の低い罎あるいはタガ状の突起であると思われる。169は河内地方からの搬入品である可能性がある。

171～189は須恵器である。171・172は平底から直線的に伸びる体部を持つ杯Aである。173～176は杯Bである。176は底部で、高台の剥離痕があり「□守カ」の墨書がある。177・178は杯B蓋である。

178は内面に墨が付着しており、転用罎である。

179・180は高坏の脚部である。短い形態のため、若干時期がさかのぼる可能性もある。

181は鉢Aである。口縁端部は内側に面を持つ。

182～184は肩の張る体部に大きく開く口縁部を持つ壺Kである。185は体部のみであるが、壺Lと考える。体部上半にカキ目を施す。火眼れが多く、内外面に自然釉が付着する。186は平瓶である。体部は丸みを帯び、外面調整が簡略化されている。7世紀後葉まで遡るものであろう。

187は短径直口の口縁部である。188・189は壺の口頸部である。188は端部を直立させる。189は口縁部を肥厚させ、外側に面を持つ。

190～204は律令期以外の遺物である。190は縄文土器深鉢の口縁部片である。波状口縁の頂部で口唇部に縄文を施し、体部は沈線で区画文を施している。後期に属すると考えられる。

191～193は弥生土器である。191は壺の底部と考えられる。192は高坏で、屈曲する杯部を持つ。後期のものと考えられる。193はミニチュア土器で壺である。口縁部に指オサエが残る。

194～204は古墳時代に属する須恵器である。194は高坏蓋である。

195～198は杯Hの蓋で、天井部にはヘラケズリが残っている。ヘラケズリの範囲、天井部と口縁部の形態から若干の型式差は認められる。6世紀後葉から7世紀前葉のものと思われる。199～201は杯

自身である。底部は回転ヘラケズリが残る。蓋と同時期のものと思われる。202・203は甗の体部である。203は手持ちの粗いヘラケズリを施している。

204は有蓋高坏である。長脚二段透かしのもので、脚部は若干焼きひずみがある。6世紀後半のものと思われる。

c 旧河道3 (図版35～38 写真図版82～86)

94～112は土師器である。94は杯Aで粘土紐と指痕跡が明確に残る。95・96は碗である。95は内面にヘラ記号があり、外面は二次焼成が認められる。96は95より深い形状で粘土紐の痕跡も明瞭である。97は鉢Aあるいは皿A、98は皿Aである。口縁部をヨコナデシ、底部には指オサエが残る。

99は鉢Bである。体部内外面にヘラミガキを施す。100は短く外反する口縁を持つ丸底の鉢である。

101は底部片である。尖り気味で外面に指オサエの痕が残る。102は薄手の製塩土器片である。外面に指オサエが顕著に残る。

103～112は甗である。いずれも大きく開く口縁部を持つ。103は小型の球胴甗である。当遺跡での出土数は希少である。外面にスス、内面に炭化物が付着する。104・105は体部の残りがよくないが、球胴甗あるいは鍋Aと考えられる。106～112は長胴甗である。109は内外面の調整にハケを用いる。110～112は外面にハケ調整、内面にケズリ調整を多用する。4点とも外面にススが付着している。

113～127は須恵器である。121・122は時期が古くなるため、後述する。

113は杯Aである。底部はヘラ切りである。114は口縁部直下と体部と底部の境界に沈線を施す金属器写しの杯である。115～117は杯Bである。直線的に伸びる体部に外側に踏ん張る高台が付く。118は平底から内湾して立ち上がる体部を持つ。119・120は杯B蓋と考えられる。120は天井部に墨書「十」がある。

123・124は壺Kの範疇に入るものと考えられる。頸部中央付近に2条の沈線をめぐらせる。

125～127は甗である。125は肩の張らない器形で内面には当て具痕が残り、外面のタタキはカキ目で消す。外面全体に自然釉がかり、別個体の破片が融着している。126は口縁部のみで、端部を上下に肥厚させる。127はほぼ定形である。体部上半に自然釉が濃密にかり、内面底部にも溜まっている。肩部を中心に別個体の破片が多数融着している。底部外面に円形の変色部分が3箇所あり、杯状の個体を焼台として使った際の痕跡と考えられる。

128～133は弥生土器・土師器である。128は広口壺の頸部で、多条沈線文を施す。弥生時代中期のものである。129・130は壺の底部と考えられる。131はミニチュアの甗である。132は高坏の脚部である。弥生時代後期のものと思われる。133は高坏の坏部から脚柱部である。古墳時代初期のものと思われる。

121・122、135～146は古墳時代の須恵器である。121・122は高坏のものと思われる蓋である。天井部につまみが付き、天井部と口縁部の境界に沈線をめぐらせる。

134～137は杯H蓋である。134は天井部と口縁部が明確なもので、天井部にヘラ記号がある。135～137は天井部が丸みを帯び、天井部と口縁部の境界が不明瞭になりはじめたものである。いずれも6世紀代のものである。138はつまみが欠損しているか杯G蓋である。7世紀まで下るものと考えられる。139～143は杯H身である。141は底部外面にヘラ記号がある。139～142はいずれも6世紀代のものである。143は平底で小型化したもので、7世紀まで下るものと考えられる。

144は提取である。肩部の把手が形骸化している。145・146は甗の体部である。いずれも底部外面にヘラ記号が認められる。いずれも7世紀代のものと思われる。

(f) 木製品 (図版 46～58 写真図版 97～109)

旧河道より出土した木製品は、祭祀遺物と杭を含む構造物に大別される。祭祀遺物には、人形、舟形、鋤形等の形代、齋串、皿を中心とした挽物、および曲物等の容器類が認められる。齋串のうち3点は、木筒を二次加工したものであるため、本稿では木筒として取り扱う。

また構造物には、杭、横木等の環の構造物と、その他の部材が含まれる。以下では、河道ごとに記載を進めるが、それに先立ち、本稿で用いる人形の形態分類について述べる。

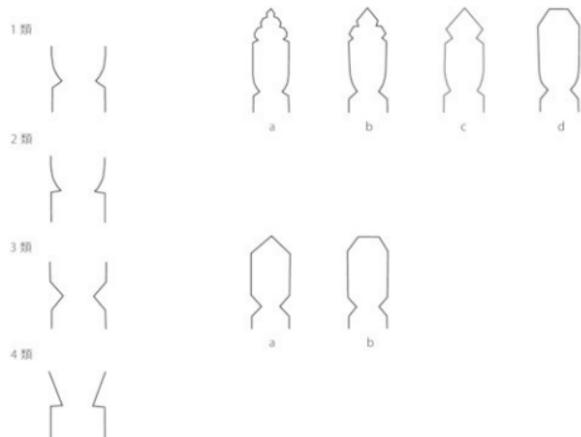
#### 人形の形態分類 (第2図)

田井 A 遺跡で出土した人形は、頭部の作出方法によって3形態に分類可能である。丸みをおびた頭部を作り、肩部が傾斜するものを1類、同様に丸みをおびた頭部を作り、肩部がほぼ直角をなすものを2類、板材の側面にV字形の切り込みを行って頭部と体部を作出したものを3類、逆台形状の頭部と、ほぼ直角をなす肩部を作るものを4類とする。

1類は、さらに冠の表現を含む頭部の形態により a～d の4形態に、3類も同様に a、b の2形態に細分される。

#### a 旧河道1

旧河道1からは、人形・齋串、木筒(?)、および祭祀遺物と思われる器種不明の製品が出土したほか、皿、曲物、槽等の容器類、薄板、棒状製品、付け木、建築物の部材(?)、杭等が出土している。



第2図 人形の分類

#### 【祭祀遺物】

人形は、1～4類のすべての形態が見られる（W1～W27）。形態組成のうち、1b類（W3～W7）および1d類（W9～W11）が相対的に多数を占める。人形のうち9点に、墨書により冠の文様、顔、衣服等が描かれている。冠には、鱗状、縦曲線、横線、黒塗り等の多様な表現が見られる。また衣服の表現では、衣服の合わせ目ないしは装飾の紐、および帯と思われる表現が特徴的である（W1・W8・W12・W13・W17・W22）。W12とW13は、衣服表現の筆致が酷似しており、本来は同一個体であった可能性がある。

またW18は、表面に顕著な削り痕をとどめていること、断面形が片凸レンズ状を呈すること等から、未製品の可能性がある。

W28～W36は、人形か壺串か判断しがたい断片であるが、W29は上部に1孔が穿たれていることから、木筒の可能性が残る。W37は薄板状に加工されたもの、W38・W39は薄板に多数の切り込みが見られるもので、如何なる器種に分類されるか判断しがたい。

W40は上部に2孔が認められ、うち1孔は貫通している。片面に格子状の墨書が見られるが、上半と下半では方向が異なる。この両者の境界線に切り込みを入れ、墨書面が内側になるように折られた状態で出土した。何らかの祭祀、あるいは呪術に関連するものと推察される。

#### 【容器類】

W41～W44は皿である。W41・W42には多数の刃物痕が見られるほか、W41の内面には、パッチ状の焼け跡が認められる。W43の中央には方形の穴が穿たれ、その角部分に2個の円孔、さらに離れて2個が一对となった円孔4孔が穿たれている。皿を再利用したものであろう。W44は摩耗が著しく、加工・使用痕等は不明である。

W45～W49は、曲物の蓋および側板である。W45とW48では、樹皮による綴じ皮（桜か）が遺存している。W49は長方形の容器の側板であらう。

W67は槽である。大型の材を削り抜いて作られており、本来は舟形あるいは長楕円形を呈していたものであろう。底面はほぼ平坦に作られている。

#### 【板・棒状製品】

W50～W66は、板状ないしは棒状製品である。いずれも器種を判断しがたい。板状製品には、人形ないしは壺串のような祭祀具の断片である可能性が捨象できないものが含まれる（W51～W54・W65）。またW63・W64は、箱の側板の可能性が想起される。棒状製品（W56～W60）には、断面が方形ないしは長方形をなすものと、円形をなすものが見られる。いずれも断片の資料であり、器種を判断できない。

W61は、丸棒の一端に抉りを入れ、その先端を球形に近い形状に加工したものである。図下端を折損するため断定はできないが、紡績具の一部であった可能性を考慮したい。

#### 【部材および杭】

W68～W76は部材および杭である。W68は長方形の孔を穿つ。両面ともに器表面の加工痕が顕著である。W69は、長方形の板の一端を凸字形に加工し、凸部の基部に貫通しない正方形の孔を穿っている。W70～W76は杭である。杭の出土数は多いため、代表的事例のみを図示している。杭はいずれも芯持ちの丸木であり、樹皮が残存するものが多い。杭の太さが比較的揃っている点は、里山林の管理育成という点から注目される。

#### b 旧河道2

旧河道2からは、木簡、人形・斎串・鋤形、楡扇、および祭祀遺物と思われる器種不明の製品が出土したほか、皿、曲物、槽等の容器類、薄板、棒状製品、付け木、建築部材(？)、杭等が出土している。

#### 【木簡】

木簡は3点が出土した(図版52 W77～W79)。そのすべてが、木簡としての機能を喪失した後に斎串として再加工されている。これらについては、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の、山本崇氏に釈読を依頼した。

W77は上下、左右共に折れた資料である。器表面の文字は依存状態が悪悪で、6文字があると判断されたものの、判読には至らなかった。裏面は無文字である。

W78は斎串に加工された後、上端を折損している。上部に2行にわたって文字が存在する。左行は遺存状態が悪く、ほとんど判読不能であるが、右行は7文字分が識別された。「□□□□五把」と判読され、3文字目は「冊」、5文字目は「束」の可能性もある。さらに、この行の下に割書があり、右行は「上□一東五」、左行は「未□二□□」と判読された。これらの内容から、当該木簡は出挙にかかる稲の出納を示すと判断された。裏面は無文字である。

W79は斎串に加工された後、上端を折損する。器表面の遺存状況は良好で墨痕も明瞭であるが、再加工により3文字分の偏の部分しか残されており、判読できない。裏面は無文字である。

#### 【祭祀遺物】

人形は、2類(W80)、3a類(W82)が見られるほか、1類に属する可能性が高い個体(W83)が含まれている。出土総数は少ないものの、いずれも墨書により顔面ないしは冠が表現されている。W81は本道路出土の人形としては、きわめて細身の作りである。

W84～W86、W90は、人形か斎串か判断しがたい断片である。W87・W88は、1類ないしは3類の人形である。

W91は鋤形と判断したが、一部が破損していることから、別の祭祀具である可能性も捨象できない。柄の部分は丁寧に作られているが、鋤の身部は切削痕が顕著に残されている。W92は楡扇の柄である。基部付近に、1孔を設けている。

W89・W93・W94は、直径数cmの枝を縦割にし、その一端を薄く削ったもので、加工度の低い斎串の可能性も推測されるが、機能を確定しがたい資料である。

W103～W110は、斎串である。またW111～W114も、斎串の可能性があると考えられる。

W103～W107は、薄い板状の素材に切り込みを入れて上端部を作出し、両側面に薄い羽毛状の切り込みを重ねている。W108～W110は、斎串の下端部である。またW111～W114・W117・W120も、同様の斎串であろう。

#### 【板・棒状製品】

W115・W116・W118・W119・W121・W122は、棒状の資料である。いずれも器種を判断しがたい。しかし、W116・W118・W119・W122は先端が尖るように加工されており、何らかの祭祀の機能を担っていた可能性を推定している。またW121は、中心に小孔を貫通させた特異な資料である。

#### 【容器類】

W142は曲物の蓋であろう。側板を留めた孔が6か所に設けられていたと思われる。W143は曲物の底板である。W144は曲物の底板を再利用したものであろう。約1/3を欠くが、残る部分には18か所

の小孔が穿たれている。W145は曲物の側板である。W146は皿である。W147は曲物底板であろう。

【その他の祭祀遺物（不明資料を含む）】

W123～W132およびW135～W141は、祭祀遺物の可能性があるもの、断定しがたいものを列挙した。W141はW89・W94・W95同様の製品であり、加工度の低い斎串であった可能性が考慮される。

W133・W134は付け木である。下端部に強い炭化が認められる。

【部材および杭】

W148～W150は杭および大型の板材である。W148は芯持ち丸木材の杭である。上端部の一部に加工痕が認められる。W149は板材である。全体に炭化している。W150は、樹皮に近い部分を板状に加工した資料である。

c 旧河道3

【祭祀遺物】

W100は舟形である。芯持ちの丸木から削り出しによって作出している。平坦な船底と、強く持ち上がった船先、櫂を表現し、中央には平坦な屋根をもつ方形の船室が設けられている。準構造船を表現した可能性が高い資料である。

W95は幅の狭い薄板に、現状で確認できる限りでは14本の刻みを入れた資料である。中央には、縦方向に蛇行するような木質の隆起があり、墨書の痕跡であった可能性が考慮される。

W96～W99は斎串である。W99は、上端部の2か所に切り込みを入れ、下端部を尖らせるように加工している。W96・W98も、側面の2か所に切り込みを入れる。

【容器】

W101は曲物の底板である。片面に、多数の刃物痕が認められる。

【部材】

W102は中央に方形の孔を穿った部材である。形態はW68に類似している。

## 第4節 平安時代の遺構と遺物

### 1 遺構 (図版 22 写真図版 24～26)

掘立柱建物、柱穴、土坑、溝などを検出した。以下では、遺構の種類ごとに遺構ならびに遺物の記載をおこなう。

#### (1) 掘立柱建物

調査区東南隅で8棟の掘立柱建物を検出した。検出状況から考え、調査区の南側まで広がるものと思われる。建物を構成する柱穴以外にも複数の柱穴が存在することから、本来は抽出した以上に建物が存在していたものと思われる。

#### SB01 (図版 23・24 写真図版 27・32)

梁行2間×桁行3間の総柱建物である。すべての柱穴を検出しており、梁行、桁行とも柱の通りは良い。桁行方向を基準にした棟軸はN42°Wである。柱穴の心の間で梁行3.5m、桁行5.45mを測り、それに基づいた面積は約19.1㎡である。SD26に切られているため、一部の柱穴が削平されているが、柱穴は円形でその規模は直径30cm、検出面からの深さ30cmと揃っている。

#### SB02 (図版 23～25 写真図版 28・32)

梁行2間×桁行3間の偏柱建物である。すべての柱穴を検出しており、梁行、桁行とも柱の通りは良い。桁行方向を基準にした棟軸はN42°Wである。柱穴の心の間で梁行4.8m、桁行6.2mを測り、それに基づいた面積は約29.8㎡である。一部の柱穴がSB03を構成する柱穴に切られている。柱穴はほとんどが円形で一部に楕円形のものがある。直径は35～65cm、検出面からの深さは40～65cmである。

P68から土師器小皿(2)、P72から黒色土器椀(3)、P86柱痕からは土師器小皿(4・5・6)と土師器台付椀(7)が重なって出土した。

#### SB03 (図版 23・25 写真図版 28・29・32)

梁行1間×桁行2間の総柱建物である。北西隅の柱穴がSD26に切られているものの、すべての柱穴を検出しており、梁行、桁行とも柱の通りは良い。桁行方向を基準にした棟軸はNS3°Eである。柱穴の心の間で梁行2.2m、桁行5.4mを測り、それに基づいた面積は約11.9㎡である。柱穴は円形で直径は25～45cm、検出面からの深さは20～30cmである。

P67から土師器小皿(8)が出土している。

#### SB04 (図版 23・25 写真図版 29)

梁行2間分だけを検出した。大半は調査区外に存在するものと思われる。柱穴の心の間で梁行4.2mを測る。推測される棟軸はN37°Wで柱の通りは良い。柱穴は長径20～40cmの楕円形で、深さは32～34cmである。

#### SB05 (図版 23・25 写真図版 29・33)

梁行2間分だけを検出した。大半は調査区外に存在するものと思われる。柱穴の心の間で梁行4.5mを測る。推測される棟軸はN42°Wで柱の通りは良い。柱穴は長径20～40cmの楕円形で、深さは24～30cmである。

P31から土師器小皿(9)須恵器椀(11・12)、P32から土師器椀(10)が出土している。

#### SB06 (図版 23・26 写真図版 30・34・35～39)

梁行2間×桁行3間の総柱建物で、北半中央の1間には半間の位置にも柱がある。添柱は間仕切りに伴うものと考え建物北半には床があり、南半は土間であったと思われる。南半西端にはよく焼けた土坑

と水平な面を上にして据えた石塊が南北に並んでおり、この建物に伴うものと考えている。

SD102・SD114・SD135に切られているものの、SD135・SD136との先後関係は明確ではない。すべての柱穴を検出しており、梁行、桁行とも柱の通りは良い。桁行方向を基準にした棟軸はN50°Eである。柱穴の心心間で梁行4.7～4.9m、桁行6.5mを測り、それに基づいた面積は約31.2m<sup>2</sup>である。柱穴は円形で直径は25～30cm、検出面からの深さは30～40cmである。

土坑(SK109)は直径40～45cmのやや歪んだ円形で、すり鉢状の断面形を持ち、検出面からの深さは30cmである。内部がよく焼けた上、錆びた鉄分が付着した土壌や扁平な石片が内部に充填しており、鍛冶炉である可能性が高い。

横に据えられた石塊は長辺33cm、短辺30cm、厚さ25cmに整えられたものである。隣接する鍛冶炉内から出土した石片はこの石塊と同質のもので、これの一部である可能性が高い。直径40cm、検出面から深さ15cmの浅い土坑に上面が水平になるように据えられ、上面は検出面より10cmほど突出している。

据えられた石塊の機能を推定するため、周辺の土壌を50cmメッシュでサンプリングし、鉄分の付着しているものと付着していないものとの割合を確認した。その結果は、炉自体を含む区画では67.1ポイント、石塊自体を含む区画では28.7ポイントであるのに対し、他の区画ではほとんど認められないというものであり、鍛造砕片や飛沫が石塊周辺に散布していたかどうかは確認が得られなかったが、この石塊が鉄床の一部である可能性は指摘しておきたい。

P119から土師器椀(13)が出土している。

#### SB07 (図版23・27 写真図版30・31)

梁行2間×桁行3間で東面に半間の庇が付く。SD114・SD135に切られているものの、東から2間目の棟持柱が検出されていないが能柱建物と思われる。SD135・SD136との先後関係は明確ではない。梁行、桁行とも柱の通りは良く、桁行方向を基準にした棟軸はN50°Eである。柱穴の心心間で梁行4.0～4.1m、桁行6.6～6.7mを測り、それに基づいた面積は約26.9m<sup>2</sup>である。柱穴は円形で直径は20～30cm、検出面からの深さは25～40cmである。SD06の南に接しており、棟軸も同一であるため、同時に存在していた可能性がある。

#### SB08 (図版23・27 写真図版31・34)

1間×1間の建物である。柱の配置は歪んだ平行四辺形になっている。南辺を基準にした棟軸はN50°Eである。北辺2.3m、南辺2.2m、東西辺は2.0mで、それに基づいた面積は約4.5m<sup>2</sup>である。柱穴はやや歪んだ円形で直径30～40cmである。P144から須恵器椀(14)が出土している。

#### (2) 溝

最上層で4条、上層でおおむね南東から北西に流れる溝を複数検出している。掘立柱建物と軸線は近似するが、多くが掘立柱建物を切っていることから、同一の土地区画上に営まれたものではあるが、建物群廃絶後のものと考えられる。

#### SD19～SD22 (図版23 写真図版42)

平成24年度調査区の西端近くに位置する。最上層のものである。長さ2.7mから7.2m、幅25cm前後、深さ5cm程度の浅い溝である。検出状況は平行に走る4条の短い溝であるが、いずれも暗褐色シルト混じり細砂をベースに営まれ、埋土がベースの混じる褐色細砂混じりシルトであることから、ほぼ平行する2条の溝であったと考えられる。いわゆる、畝状遺構が部分的に遺存したものである可能性が高い。

**SD23・SD24** (図版 23 写真図版 42)

上記溝の東側に位置する。最上層のものである。ほぼ南北に流れる長さ1.5mと1.8m、幅25cm、深さ5cmの短い溝である。本来同じ溝であった可能性が高い。埋土は褐色細砂混じりシルトでSD19～SD22と同じである。

**SD26** (図版 23 写真図版 43)

平成24年度調査区のほぼ中央部、掘立柱建物群の西端に位置する。南東から北西に流れる検出長20m、幅30cm、深さ10cmの直線的な溝である。SB01とSB03を切っている。黒褐色シルトを掘り込み、埋土は褐色シルトである。土師器(26)が出土している。

**SD101** (図版 23・28 写真図版 43)

平成24年度調査区の中央東寄り、掘立柱建物群の中心に位置する。南東から北西に流れる検出長20m、幅40cm、深さ9cmの直線的な溝である。黒褐色シルトを掘り込み、埋土は褐色シルトである。

**SD102** (図版 23・28 写真図版 43)

SD101の東隣に位置し、流れる方向も同じくする。検出長8m、幅80cm、深さ10cmの直線的な溝である。SB06とSB07を切っている。営まれているベース、埋土ともSD101と同じである。他の溝と比較して、幅が2倍となっており、土地を区画するための溝であった可能性がある。

**SD114** (図版 23 写真図版 43)

SB06・SB07、SD115・SD116を切り、SK105に切られる。検出長20.5m、幅40cm、深さ8cmの直線的な溝である。黒褐色のベースに掘り込まれ、埋土は褐色細砂混じりシルトが主体である。

**SD115・SD116** (図版 23)

調査区南東隅で検出した溝である。ほとんど削平されており、痕跡をとどめるだけである。SD102・SD114・SD135に切られる。位置的に重なる掘立柱建物との先後関係は不明で、上面から土師器小皿(27)が出土している。

**SD135** (図版 23 写真図版 43)

SD115・SD116を切り、SD114の東をほぼ平行して流れる。検出長13m、幅20cm、深さ5cmの直線的な溝である。黒褐色のベースに掘り込まれ、埋土は褐色細砂混じりシルトが主体である。羽釜片(28)が出土している。

(3) 土坑

**SK01** (図版 22・28 写真図版 40)

調査区西端で検出した。長軸1.35m、短軸1m、深さ11cmを測る隅丸方形の土坑である。埋土は灰色シルトである。遺物は出土していないが、埋土から見て近世以降のものと考えられる。

**SK02** (図版 22・28 写真図版 40)

調査区西端で検出した。長軸1.15m、短軸0.95m、深さ15cmを測る歪な楕円形の土坑である。埋土は灰色粗砂～シルトである。遺物は出土していないが、埋土から見て近世以降のものと考えられる。

**SK78** (図版 23・28 写真図版 40)

調査区北端のわずかに低くなった場所に位置する。南から延びてきた溝がすべて消失することから、もともと溝や掘立柱建物より一段低い場所に営まれた可能性がある。長軸2.7m、短軸2.0mの不整形な土坑である。断面形は皿状を呈し、検出面からの深さは30cmである。底面には炭を含んだ黒色シルト層が堆積し、そこから土師器小皿(21)瓦器椀(22)須恵器鉢(22)が出土した。

SK105 (図版 23・29 写真図版 41)

調査区北東部に位置する。SD114を切り、長軸1.4m、短軸1.0mの楕円形を呈する土坑である。断面は碗状を呈し、検出面からの深さは45cmである。

SK147 (図版 23・29 写真図版 41)

調査区北東部に位置する。長軸1.65m、短軸0.7mの長楕円形を呈する土坑である。断面は皿状を呈し、検出面からの深さは15cmである。黒褐色のベースに掘り込まれ、埋土は褐灰色細砂混じりシルトが主体である。

SK148 (図版 23・29 写真図版 41)

調査区東辺のほぼ中央付近に位置する。一辺約0.7mの隅丸方形を呈する土坑である。断面は深い皿状を呈し、検出面からの深さは最大で35cmである。黒褐色のベースに掘り込まれ、埋土は褐灰色細砂混じりシルトが主体である。須恵器甕(25)が出土している。

1 遺物

(1) 掘立柱建物出土遺物 (図版 30 写真図版 73～75)

1は土師器の小皿である。底部は回転ヘラ切り、SB01のP34掘方から出土した。

2～7はSB02を構成する柱穴から出土した。2は土師器の小皿で底部は回転ヘラ切り、P68から出土した。3は黒色土器A類で輪高台が付く。P72から出土した。4～6は土師器の小皿で5・6の底部は回転ヘラ切りである。7は土師器の台付碗でヘラ切りされた底部に高い高台が付く。

8は土師器の小皿で底部は糸切りである。SB03のP67から出土した。

9～12はSB05を構成する柱穴から出土した。9は土師器の小皿で底部は回転ヘラ切りである。10は土師器の碗で底部は回転ヘラ切りである。11・12は須恵器の碗で底部は回転糸切りである。9・11・12はP31から、10はP32から出土した。

13は土師器の碗で底部は回転糸切り、SB06のP119から出土した。

14は東播系須恵器碗で見込みがあり、底部は回転糸切りの平底である。SB08のP144から出土した。

14以外の土器は土師器小皿がほとんどを占めるため時期比定が困難であるが、土師器台付碗や須恵器碗の形態から見て10世紀代のものと考えておきたい。14については11世紀まで下る資料と考えられる。

(2) 柱穴出土遺物 (図版 30 写真図版 74・75)

15は黒色土器A類の碗である。内側に水平方向のヘラミガキが残る。P60から出土した。

16は土師器の小皿で底部は回転ヘラ切りである。17は平瓦の破片で内面に布目、外面に縄目タタキの痕跡が残る。いずれもP40から出土している。

18は須恵器の杯H身である。口縁部の立ち上がりは弱く、平底傾向である。P70から出土した。

19は土師器の甕である。長胴で内外面ともハケ調整、口縁部は端部に面を持つ。外面に煤の付着と二次焼成があり、使用痕が明瞭である。20は平瓦である。凹面に布目、凸面に縄目タタキの痕跡が残る。いずれもP70から出土している。

(3) 土坑出土遺物 (図版 31 写真図版 75)

21は土師器の小皿である。底部は回転ヘラ切りである。22は和泉型の瓦器碗である。見込み部の暗文は平行線状で外面下半には指頭圧痕が目立つ。23は須恵器の鉢底部である。魚住窯跡の鉢Cに含まれるものと思われる。24は須恵器の鉢体部である。21～24はSK78から出土した。

25は須恵器の甕口縁部である。外反する口縁で端部を外側に肥厚させる。SK148から出土した。

(4) 溝出土遺物（図版31 写真図版76）

26は土師器の底部である。托ではないかと思われる。SD26から出土した。

27は土師器の小皿である。底部はヘラ切り。SD115から出土した。

28は土師器羽釜の鈎部分である。SD135から出土した。

(5) 溝状遺構出土遺物（図版42 写真図版92）

205は平瓦片である。凹面には布目が残り、凸面は縄目タタキとナデを施している。SD183から出土した。

206～208はSD185から出土した。206は土師器の甕である。頸部の屈曲が弱い。207は須恵器の杯Aである。底部はヘラ切りである。208は脚付きの甕である。穿孔部の上下に沈線めぐらせ、内側にクシによる刺突文を施す。穿孔時の粘土塊が内側に残ったまま焼成され、土鈴様にもなっている。

## 第5節 包含層出土の遺物

図版 42～45 に、各時期包含層出土の遺物を一括して掲載した。

### 1 包含層出土土器（図版 42～44 写真図版 92・94・95）

209～235 は調査区西半で包含層などから出土した遺物である。

209・210 は縄文土器である。209 は沈線による区画文が認められる。210 は端部を内側に巻き込み浅鉢の口縁部片と思われる。外面に沈線、内面に条痕が認められる。

211～213 は弥生土器である。211 は広口壺の口縁部である。212 は壺の底部と考えられる。213 は外反する口縁部をもつ甕である。中期から後期のものと思われる。

214・215 は土師器の高坏である。古墳時代はじめのものと考えられる。

223～228・231・232 は律令期の須恵器である。223 は杯Aである。底部は回転ヘラ切りである。224・225 は杯B蓋、226～228 は杯B身と考えられる。231 は甕Aの口縁部、232 は甕Bの口縁部であろう。

229 は製塩土器と考えられる粗い胎土の鉢である。229 は器壁が薄く、指オサエの痕跡が残る。

233 は黒色土器A類の椀である。見込み部に工具痕が残る。

236～258 は調査区東半で包含層などから出土した遺物である。236・237 は弥生土器である。236 は大型鉢で把手が1箇所に残る。237 は多重沈線を施す甕の体部片である。いずれも前期に属すると考えられ、断ち割りトレンチから出土している。

239 は須恵器の杯Hである。体部が浅くなり、平底化している。7世紀まで下るものと思われる。

241～243 は土師器である。241 は平底の鉢で体部外面に工具痕があり二次焼成を受けている。製塩土器の可能性が。242・243 は罌甕の体部片である。

244～247 は須恵器である。244・245 は杯Bで、244 は身、245 は蓋である。246 は壺の底部と考えられる。247 は甕の口縁部片である。

248～251 は土師器小皿である。248・249 は底部をナデ調整で仕上げる。250 は底部を回転糸切り、251 は回転ヘラ切りである。

252 は和泉型瓦器碗である。体部下半に指オサエが明瞭で、見込み部に平行する暗文を施す。12世紀後半のものと考えられる。

253 は東播系の須恵器碗で口縁部に重ね焼きの痕跡が認められる。

254～256 は白磁碗の破片である。254 は碗口縁部で端部を肥厚させる。255 はケズリ出しの蛇の目を持つ底部、256 は輪高台を持つ底部である。双方とも高台は露胎である。

257 は施軸陶器である。ケズリ出し高台で畳付は露胎である。見込み部に目跡がある。

258 は土師質の土錘である。外面をナデ調整を行う。

### 2 石器・金属器（図版 45 写真図版 96）

S1 はわずかに基部がくぼむ凹基の打製石鏃である。先端を欠く。包含層から出土した。S2 は被熱した垂角鏃で、平坦面には磨り痕が認められる。旧河道1から出土した。S3 は円鏃である。使用痕跡は認められないが全体に赤化し、被熱している。包含層から出土した。

M1 は直径4cmの小型素文鏡である。2012年度調査において、調査区中央の南東壁際付近で、洪水砂中より出土した。M2 は鉄砲の弾と考えられる金属球である。第II層から出土した。M3 は頭部を折り曲げた角釘である。包含層から出土した。

## 第4章 自然科学的分析

### 第1節 田井 A 遺跡における放射性炭素年代 (AMS 測定)

(株) 加速器分析研究所

#### 1 測定対象試料

田井 A 遺跡は、兵庫県淡路市志筑 (北緯 34° 26' 19.7", 東経 134° 53' 41") に所在する。測定対象試料は、塚に関連する杭等から採取された木片 17 点、深掘トレンチで採取された土壌 3 点の合計 20 点である (第 3 表)。

#### 2 測定の意義

木片試料 1～17 の測定により、塚の使用年代を特定する。土壌試料 18～20 の測定により、遺跡が立地する地形の形成年代を明らかにする。

#### 3 化学処理工程

##### (1) 木片の化学処理

- 1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- 2) 酸-アルカリ-酸 (AAA : Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/ℓ (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と第 3 表に記載する。
- 3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO<sub>2</sub>) を発生させる。
- 4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- 6) グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

##### (2) 土壌の化学処理

- 1) メス・ピンセット、ふるいを使い、石や根などの混入物を取り除く。
  - 2) 酸処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。処理には 1mol/ℓ (1M) の塩酸 (HCl) を用い、第 3 表に「HCl」と記載する。
- 以下、(1) 3) 以降と同じ。

#### 4 測定方法

加速器をベースとした <sup>14</sup>C-AMS 専用装置 (NEC 社製) を使用し、<sup>14</sup>C の計数、<sup>13</sup>C 濃度 (<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)、<sup>15</sup>C 濃度 (<sup>15</sup>C/<sup>12</sup>C) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

#### 5 算出方法

- (1) δ <sup>13</sup>C は、試料炭素の <sup>13</sup>C 濃度 (<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である (第 3 表)。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) <sup>14</sup>C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 <sup>14</sup>C 濃度が一定であったと仮定して測定され、

1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。 $^{14}\text{C}$ 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第3表に、補正していない値を参考値として第4表に示した。 $^{14}\text{C}$ 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 $^{14}\text{C}$ 年代の誤差( $\pm 1\sigma$ )は、試料の $^{14}\text{C}$ 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

(3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の $^{14}\text{C}$ 濃度の割合である。pMCが小さい( $^{14}\text{C}$ が少くない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上( $^{14}\text{C}$ の量が標準現代炭素と同等以上)の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を第3表に、補正していない値を参考値として第4表に示した。

(4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の $^{14}\text{C}$ 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の $^{14}\text{C}$ 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 $^{14}\text{C}$ 年代に対応する較正曲線上の暦年範囲であり、1標準偏差( $1\sigma = 68.2\%$ )あるいは2標準偏差( $2\sigma = 95.4\%$ )で表示される。グラフの縦軸が $^{14}\text{C}$ 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない $^{14}\text{C}$ 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCal4.2較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として第4表に示した。暦年較正年代は、 $^{14}\text{C}$ 年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」)という単位で表される。

## 6 測定結果

測定結果を第3、4表に示す。

堰に関連する杭等の木片試料17点の $^{14}\text{C}$ 年代は、 $1580 \pm 20\text{yrBP}$ (試料1)から $1270 \pm 20\text{yrBP}$ (試料10)の間にあり、誤差( $\pm 1\sigma$ )の範囲で一致するものも含まれる。同じ遺構に属する試料はおおむね近い年代となるものが多いが、旧河道1の1と2の年代値の間にはかなりの差がある。暦年較正年代( $1\sigma$ )は、最も古い1が $1522 \sim 1416\text{cal BP}$ の間に3つの範囲、最も新しい10が $1261 \sim 1184\text{cal BP}$ の間に2つの範囲で示され、全体として古墳時代中期から古代頃に相当する(佐原 2005)。試料の炭素含有率はすべて50%を超え、化学処理、測定上の問題は認められない。

深掘トレンチで採取された土壌試料の $^{14}\text{C}$ 年代は、10層出土の18が $3950 \pm 30\text{yrBP}$ 、12層出土の19が $3180 \pm 30\text{yrBP}$ 、19層出土の20が $2920 \pm 30\text{yrBP}$ である。暦年較正年代( $1\sigma$ )は、18が $4499 \sim 4299\text{cal BP}$ 、19が $3445 \sim 3371\text{cal BP}$ 、20が $3139 \sim 3002\text{cal BP}$ の間に各々複数の範囲で示され、18が縄文時代中期末葉から後期初頭頃、19が後期後半から晩期初頭頃、20が晩期初頭から前葉頃に相当する(小林 2008)。これら3点の年代値の前後関係は層位の上下関係に対して逆転している。試料の炭素含有率はいずれも1%前後で、土壌としても高い値ではない。これらの土壌の堆積・埋没環境等を考慮し、測定結果について検討する必要がある。

文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51 (1) , 337-360  
 小林達雄編 2008 総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション  
 Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55 (4) , 1869-1887  
 佐原眞 2005 日本考古学・日本歴史学の時代区分, ウェルナー・シュタインハウス監修, 奈良文化財研究所編纂, 日本考古学 上, ドイツ展記念概説, 学生社, 14-19  
 Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of  $^{14}\text{C}$  data, *Radiocarbon* 19 (3) , 355-363

第3表 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$  補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (‰)
IAAA-133169	1 (2012085-14)	旧河道1	木片(付木)	AAA	-25.74 ± 0.48	1580 ± 20	82.17 ± 0.25
IAAA-133170	2 (2012085-19)	旧河道1	木片(板)	AAA	-26.40 ± 0.37	1320 ± 20	84.84 ± 0.24
IAAA-133171	3 (2012085-205)	旧河道2 杭列A 杭5	木片(杭)	AAA	-27.92 ± 0.41	1350 ± 20	84.58 ± 0.24
IAAA-133172	4 (2012085-239)	旧河道2 杭列B 杭5	木片(杭)	AAA	-29.74 ± 0.57	1410 ± 20	83.87 ± 0.24
IAAA-133173	5 (2012085-228)	旧河道2 杭列C 杭1	木片(杭)	AAA	-28.97 ± 0.33	1350 ± 20	84.56 ± 0.24
IAAA-133174	6 (2012085-281)	旧河道2 杭列C 杭54	木片(杭)	AAA	-26.99 ± 0.31	1370 ± 20	84.31 ± 0.24
IAAA-133175	7 (2012085-330)	旧河道2 杭列C 横木5	木片(横木)	AAA	-28.02 ± 0.53	1360 ± 20	84.45 ± 0.25
IAAA-133176	8 (2012085-337)	旧河道3 北平 杭列D 杭2	木片(杭)	AAA	-26.69 ± 0.31	1360 ± 20	84.47 ± 0.24
IAAA-133177	9 (2012085-354)	旧河道3 杭列E 杭10	木片(杭)	AAA	-26.77 ± 0.50	1360 ± 20	84.40 ± 0.25
IAAA-133178	10 (2012085-413)	旧河道3 杭列E 杭74	木片(杭)	AAA	-29.81 ± 0.49	1270 ± 20	85.37 ± 0.25
IAAA-133179	11 (2012085-420)	旧河道3 杭列F 杭4	木片(杭)	AAA	-26.53 ± 0.47	1290 ± 20	85.12 ± 0.25
IAAA-133180	12 (2012085-432)	旧河道3 杭列G 杭6	木片(杭)	AAA	-27.70 ± 0.66	1330 ± 20	84.74 ± 0.24
IAAA-133181	13 (2012085-471)	旧河道3 杭列H 杭3	木片(杭)	AAA	-28.83 ± 0.52	1280 ± 20	85.31 ± 0.25
IAAA-133182	14 (2012085-475)	旧河道3 杭列I 杭3	木片(杭)	AAA	-26.96 ± 0.59	1330 ± 20	84.76 ± 0.24
IAAA-133183	15 (2012085-485)		木片(杭)	AAA	-24.78 ± 0.56	1410 ± 20	83.92 ± 0.25
IAAA-133184	16 (2012085-サンプル5)	旧河道2 南1区	木片(根株)	AAA	-29.17 ± 0.60	1390 ± 20	84.07 ± 0.26
IAAA-133185	17 (2012085-サンプル13)	旧河道3 杭列H	木片(腐植体サンプル)	AAA	-30.66 ± 0.61	1350 ± 20	84.55 ± 0.26
IAAA-133186	18 (2012085-サンプル17)	深掘トレンチ 10層	土壌	HCl	-23.39 ± 0.73	3950 ± 30	61.19 ± 0.21
IAAA-133187	19 (2012085-サンプル18)	深掘トレンチ 12層	土壌	HCl	-24.32 ± 0.59	3180 ± 30	67.35 ± 0.23
IAAA-133188	20 (2012085-サンプル19)	深掘トレンチ 19層	土壌	HCl	-25.54 ± 0.45	2930 ± 30	69.53 ± 0.22

第4表 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$  未補正值、暦年較正用  $^{14}\text{C}$  年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-133169	1590 ± 30	8205 ± 023	1577 ± 23	1523calBP - 1514calBP (6.5%) 1504calBP - 1478calBP (21.2%) 1464calBP - 1416calBP (40.5%)	1530calBP - 1409calBP (95.4%)
IAAA-133170	1340 ± 30	8460 ± 023	1330 ± 22	1291calBP - 1261calBP (59.1%) 1190calBP - 1190calBP (9.1%)	1295calBP - 1235calBP (77.5%) 1207calBP - 1185calBP (17.9%)
IAAA-133171	1390 ± 30	8408 ± 023	1345 ± 22	1296calBP - 1276calBP (68.2%)	1305calBP - 1260calBP (93.0%) 1200calBP - 1190calBP ( 2.4%)
IAAA-133172	1490 ± 30	8306 ± 021	1412 ± 22	1329calBP - 1298calBP (68.2%)	1349calBP - 1291calBP (95.4%)
IAAA-133173	1410 ± 30	8387 ± 023	1347 ± 22	1296calBP - 1277calBP (68.2%)	1305calBP - 1260calBP (93.0%) 1190calBP - 1190calBP ( 1.8%)
IAAA-133174	1400 ± 30	8397 ± 023	1371 ± 22	1303calBP - 1285calBP (68.2%)	1325calBP - 1270calBP (95.4%)
IAAA-133175	1410 ± 30	8393 ± 023	1357 ± 23	1300calBP - 1280calBP (68.2%)	1311calBP - 1262calBP (95.4%)
IAAA-133176	1380 ± 30	8418 ± 023	1355 ± 22	1299calBP - 1280calBP (68.2%)	1308calBP - 1264calBP (95.4%)
IAAA-133177	1390 ± 30	8409 ± 023	1362 ± 23	1301calBP - 1282calBP (68.2%)	1312calBP - 1266calBP (95.4%)
IAAA-133178	1350 ± 30	8453 ± 023	1270 ± 23	1261calBP - 1228calBP (40.6%) 1211calBP - 1184calBP (27.6%)	1275calBP - 1178calBP (95.4%)
IAAA-133179	1320 ± 30	8485 ± 023	1294 ± 23	1277calBP - 1240calBP (43.0%) 1205calBP - 1186calBP (24.6%)	1285calBP - 1224calBP (61.8%) 1213calBP - 1182calBP (33.6%)
IAAA-133180	1370 ± 30	8427 ± 021	1330 ± 23	1294calBP - 1263calBP (68.2%)	1300calBP - 1237calBP (84.0%) 1206calBP - 1186calBP (11.4%)
IAAA-133181	1340 ± 30	8465 ± 023	1275 ± 23	1264calBP - 1230calBP (39.0%) 1209calBP - 1184calBP (29.2%)	1275calBP - 1180calBP (95.4%)
IAAA-133182	1360 ± 30	8442 ± 022	1327 ± 22	1293calBP - 1263calBP (68.2%)	1298calBP - 1238calBP (83.0%) 1205calBP - 1186calBP (12.4%)
IAAA-133183	1410 ± 30	8395 ± 023	1408 ± 24	1330calBP - 1296calBP (68.2%)	1347calBP - 1289calBP (95.4%)
IAAA-133184	1460 ± 30	8335 ± 023	1394 ± 24	1316calBP - 1289calBP (68.2%)	1340calBP - 1285calBP (95.4%)
IAAA-133185	1440 ± 30	8357 ± 023	1348 ± 24	1298calBP - 1276calBP (68.2%)	1307calBP - 1259calBP (92.6%) 1201calBP - 1189calBP ( 2.8%)
IAAA-133186	3920 ± 30	6139 ± 019	3946 ± 27	4499calBP - 4487calBP ( 6.1%) 4440calBP - 4400calBP (40.7%) 4399calBP - 4354calBP ( 7.8%) 4327calBP - 4299calBP (13.6%)	4515calBP - 4475calBP (13.0%) 4446calBP - 4294calBP (82.4%)
IAAA-133187	3160 ± 30	6745 ± 021	3175 ± 27	3445calBP - 3425calBP (22.3%) 3409calBP - 3371calBP (43.9%)	3450calBP - 3360calBP (95.4%)
IAAA-133188	2900 ± 30	6945 ± 021	2919 ± 25	3128calBP - 3128calBP ( 6.4%) 3099calBP - 3094calBP ( 9.0%) 3079calBP - 3062calBP (52.8%)	3158calBP - 2974calBP (95.4%)

## 第2節 横入遺跡と田井A遺跡の地形環境

青木 哲哉 (立命館大学非常勤講師)

### 1 はじめに

人間は、自然環境に影響され、またそれを利用して活動してきた。中でも地形は、人間の生活舞台であり、活動の場となってきただけに、地形環境と人間生活との間には密接な関係が存在する。地形環境は、第四紀に変化を続け、現在に至っている。そのため、過去の人間生活を浮き彫りにするには、各時期の地形環境とその変化を明らかにすることが必要と考えられる。

人間生活の解明につながる地形環境は、数万年や数千年オーダーでの考察だけでなく、それより細かいオーダーで捉えなければならない。これには、考古遺跡の発掘調査区における地形・地質調査が有効な方法となる。調査区では、微地形とそれを構成する堆積物が直接観察され、堆積物については詳細な区分が行える。このため、堆積物ごとの細かいオーダーで地形環境を復原し、その変化を辿ることができる。しかも、堆積物には編年された考古遺物がしばしば含まれる。復原された地形環境の時期はそれを通して明確にすることが可能となる。他方で調査区においては、人間活動の痕跡である遺構が検出され、過去の人間生活が知られる。ここでは、地形環境と人間生活の係わりをも考察できるのである。

本稿では、横入遺跡と田井A遺跡における地形環境を明らかにし、それと人間活動との関係について考察したい。調査では、両遺跡の調査区付近における地形の分類と堆積物の把握を試みた。地形分類では、まず1万分の1空中写真の判読と現地踏査によって調査区周辺の地形面を区分した。ついで、調査区付近における微地形の分類を、5,000の1空中写真の判読と調査区での地質調査や発掘調査の成果にもとづいて行った。堆積物に関しては、主に調査区での地質断面を詳細に観察した。堆積物の観察は、遺構検出面より上位だけでなく、各調査区において掘削したトレンチ断面で遺構検出面以下についても行った。こうして得られた地形と堆積物の調査結果に、遺構の分布や時期などの発掘調査成果を加えて、調査区付近における地形環境、及びそれと人間活動との係わりを考察した。

### 2 調査区付近の地形分布

#### (1) 調査区周辺の地形面について

横入遺跡と田井A遺跡の調査区は淡路島東部の小規模な平野に位置する。この平野では、志筑川と宝珠川が南東へ流れ、大阪湾に注ぎ込む。これらの河川は、上・中流部でそれぞれ狭長な平野を形成するものの、下流部では1つの平野を流下し、河口付近で合流する。調査区はこうした下流部につくられた平野の北西部に位置している。平野の周囲には山地と丘陵がみられる。山地は、調査区の北東に分布し、標高およそ125mの低いものである。他の平野周辺には、大阪層群からなる丘陵が広がる。これは、標高50m前後のなだらかな地形で、多数の谷に刻まれている。

これらに囲まれた下流部の平野は、完新世段丘、現犯蓋原、及び支流性扇状地に分けられ、海岸付近には砂堆が認められる(第3図)。各地形の特徴は次のとおりである。

〔完新世段丘〕 これは平野で最もよく発達する。段丘面はほぼ平坦で下流へ緩やかに傾斜し、段丘崖は50cm前後の比高をもつ。田井A遺跡の調査区はこの段丘上に位置する。

〔現犯蓋原〕 この地形面は、志筑川と宝珠川の流路沿いに細長くみられ、断続的に分布する個所もあ

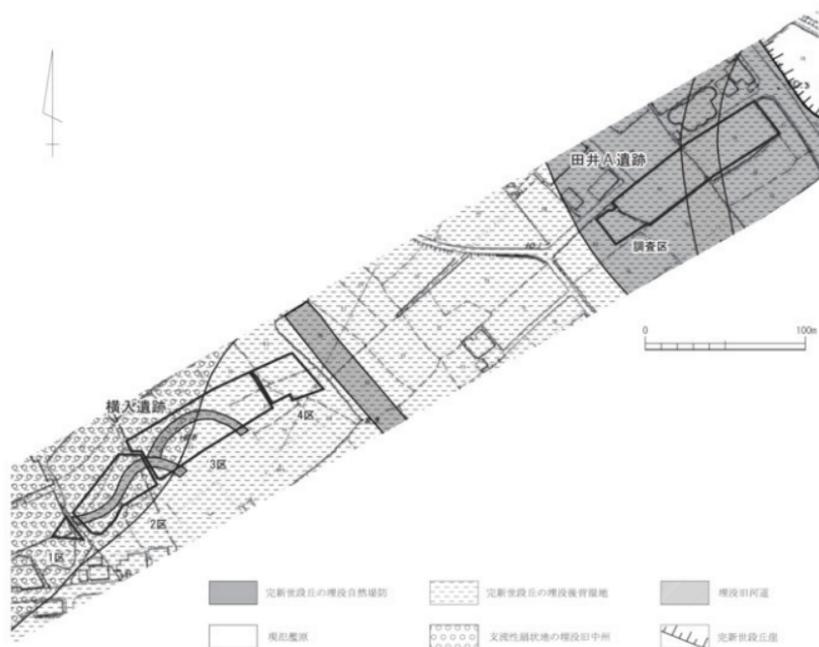
る。これは、最も低い地形面で、洪水の際に冠水する危険性が高い。志筑川の最下流部は市街地化されているため、現氾濫原が不明瞭となっている。

〔砂堆〕 これは、海岸付近に2列存在し、海岸線と平行に延びる。それぞれが300～500mの幅を有し、平野の面積に比して大規模なものである。比高は1.0～1.5mで2列の間付近を志筑川が流れる。砂堆の多くは市街地化されており、海寄りの砂堆末端は人為的な埋立てによって改変されている。

〔支流性扇状地〕 この扇状地は、背後の山地や丘陵から堆積物が供給されてきたもので、平野の縁辺に点々と認められる。多くは、丘陵を翹む谷の中から麓にかけて発達し、複合扇状地をなしている。地表傾斜は10%前後と大きく、完新世段丘と傾斜変換線で接する。横入遺跡の調査区は支流性扇状地と完新世段丘の境界付近にみられる。



第3図 調査区周辺の地形分類図



第4図 調査区付近における微地形の分布

(2) 調査区付近の微地形について

a) 横入遺跡の調査区付近

調査区は完新世段丘の自然堤防帯と支流性扇状地の境界付近に位置する。調査区の南西およそ130mには志筑川が流れ、約50m北西には丘陵が迫る。調査区で見られる支流性扇状地はこの丘陵を刻む谷から発達したものである。調査区付近では、自然堤防帯の微地形である埋没後背湿地や埋没旧河道と、支流性扇状地の埋没旧中州や埋没旧河道が重層した状態で認められる(第4図)。

埋没後背湿地は上下に2つみられ、これらは2区から4区にかけてのほぼ全域に広がる。3区では、これらのうち下位の埋没後背湿地に埋没旧河道が分布する。これは、志筑川の流路跡と考えられ、南西から北東に向かった後南東へ蛇行して延びる。またこの埋没後背湿地では、3区東半部や4区において水田跡が検出されている。中でも、3区東半部の水田跡は弥生時代前期から中期前半のものであり<sup>1)</sup>、層位からみて弥生時代前期の可能性が高い。他方、上位の埋没後背湿地では弥生時代中期から8世紀の畦畔や溝、土坑などが検出されている。とくに3区と4区では水田跡が検出されており、3区のそれは弥生時代中期から古墳時代の水田跡にあたる<sup>2)</sup>。

支流性扇状地は上下の埋没後背湿地間に認められる。1区から4区には、南東へ発達する支流性扇状地の末端がみられ、埋没した旧中州と旧河道が分布する。2区では、この扇状地を流れた弥生時代前期

ころの旧河道が杭列(堰)とともに検出されている<sup>3)</sup>。これは、調査区北西の丘陵から流れ出す志筑川支流の流路跡にあたり、おおむね西から東へやや蛇行して延びる。こうした扇状地末端の埋没旧中州上と埋没旧河道上では、1区から3区西半部において弥生時代中期から8世紀の溝や土坑などが検出されている。溝(環濠)は弥生時代中期前半のものであり<sup>4)</sup>、2区ではその一部が埋没旧河道に沿って延びる。また、土坑は祭祀に使われた古墳時代中期のもので、2区の埋没旧中州上で認められている<sup>5)</sup>。

#### b) 田井 A 遺跡の調査区付近

調査区は完新世段丘の自然堤防帯に位置する。ここは、横入遺跡の調査区より北東に約210m離れており、およそ60m東には宝珠川が流れる。調査区付近では、自然堤防、後背湿地、及び旧河道が埋没した状態で分布し(第4図)、横入遺跡の調査区と同様に重なっている。埋没後背湿地は上下にみられ、間には埋没自然堤防と埋没旧河道が存在する。これらのうち、埋没後背湿地は調査区のほぼ全域に広がる。下位の埋没後背湿地では、7世紀の水田跡が調査区の広い範囲で検出され、調査区南西部ではその下から7世紀より古い水田跡が認められている。

埋没旧河道は、宝珠川の流路跡に該当し、調査区中央部をほぼ南北に延びる。そこでは、少なくとも3本の旧河道が堰を伴って検出されており、これらはいずれも8世紀から9世紀初頭の流路跡にあたる。このような埋没旧河道の両側には、埋没自然堤防が認められる。東西2つの埋没自然堤防は南北に比較的長く延び、それぞれに調査区東半部と西半部の多くが位置する。調査区西半部の埋没自然堤防上では8世紀の水田跡が検出され、調査区西端には10世紀の溝がみられる。また、調査区東半部の埋没自然堤防上からは10世紀の柱穴群や土坑などが検出されている。

### 3 調査区における堆積物の特徴

#### (1) 横入遺跡調査区の堆積物について

調査区では、大きく5層の堆積物が観察される(第5図～第9図)。これらは、3層の後背湿地堆積物と2層の支流性扇状地堆積物にあたり、交互に重なって認められる。最下位で観察される後背湿地堆積物は、灰黒色や黒灰色のシルト(第7図の堆積物23・26・28、第8図の堆積物43・46・47・49・51、第9図の堆積物19・21)と主に青灰色の砂質シルトやシルト(第7図の堆積物25、第8図の堆積物42・44・48・50、第9図の堆積物20・22)の互層である。各堆積物の多くは10～30cmの厚さをもち、間には灰色や青灰色の砂とシルト質砂(第7図の堆積物24・27、第8図の堆積物45)が挟まれる。灰黒色と黒灰色のシルトは5層観察され、それぞれは洪水によるシルトの堆積後にその上部またはすべてが低湿な環境下で土壌化されたものである。これらのうち、中位に位置する灰黒色のシルト(第7図の堆積物26)は縄文時代中期後葉ころに相当する $4.110 \pm 30\text{yrBP}$ ( $2.761\text{calBC} - 2.576\text{calBC}$ )の<sup>14</sup>C年代値を示す<sup>6)</sup>。こうした後背湿地堆積物は3区と4区で確認されている。

この上位に位置する支流性扇状地堆積物は青灰色の砂礫、砂、及びシルト質砂(第9図の堆積物14～18)からなる。これらはマサ土に該当し、厚さは1.1m前後である。砂礫は上部にみられ、含まれる礫は径0.5～2cmの亜角礫～亜円礫を主体とする。このような支流性扇状地堆積物は主に4区で認められる。3区では、これが青灰色の砂質シルトやシルト(第7図の堆積物22、第8図の堆積物41)に変化し、南西に向かって徐々に薄くなる。

これを覆う後背湿地(2-(2)-a)で示した下位の埋没後背湿地)堆積物は、灰黒色や黒灰色のシルト(第5図の堆積物33・35・38、第6図の堆積物22・24・26・28、第7図の堆積物11・14・16・

18・21、第8図の堆積物24・30・33・35・39、第9図の堆積物13)と青灰色の砂質シルトやシルト(第5図の堆積物30～32・34・37、第6図の堆積物21・23・25・27、第7図の堆積物10・13・15・17・20、第8図の堆積物28・29・32・34・36、第9図の堆積物12)の互層である。間には、灰黒色や暗灰色のシルト質砂(第5図の堆積物36、第8図の堆積物31)がレンズ状に挟まれる。全体の厚さは50cm～1mで、4区では2区や3区と比べて薄い。このような後背湿地堆積物には、低湿な環境下で生成された灰黒色と黒灰色のシルトが5層認められ、それぞれ10～30cmの厚さをもつ。これらのうち3区で見られる黒灰色のシルト(第8図の堆積物35)からは、縄文時代後期初頭ころに該当する3870±30yrBP(2464calBC～2284calBC)の<sup>14</sup>C年代値が得られている<sup>7)</sup>。また、3区東半部で最上位に位置する灰黒色と黒灰色のシルト(第8図の堆積物24)は弥生時代前期ころの水田土壌にあたる。

3区では、こうした後背湿地堆積物の上部に旧河道(2-(2)-a)で示した埋没旧河道)堆積物が認められる。旧河道は、志筑川の流路跡で、幅がおおよそ2m、深さが70～80cmの小規模なものである。旧河道堆積物は主に青灰色の砂(第7図の堆積物12、第8図の堆積物26)や暗灰色のシルト質砂(第8図の堆積物27)で、これらは弥生時代前期ころの水田土壌に覆われる。旧河道堆積物(第7図の堆積物12)に混入する木片の<sup>14</sup>C年代値は、縄文時代後期前葉ころに相当する3790±30yrBP(2296calBC～2140calBC)である<sup>8)</sup>。なお、この調査区ではおおむね北西～南東方向に延びる正断層が観察される。これは後背湿地堆積物の最下位にみられる黒灰色のシルト(第8図の堆積物39)を切り、それ以降の堆積物は断層の北東側で約30cm落ちている。

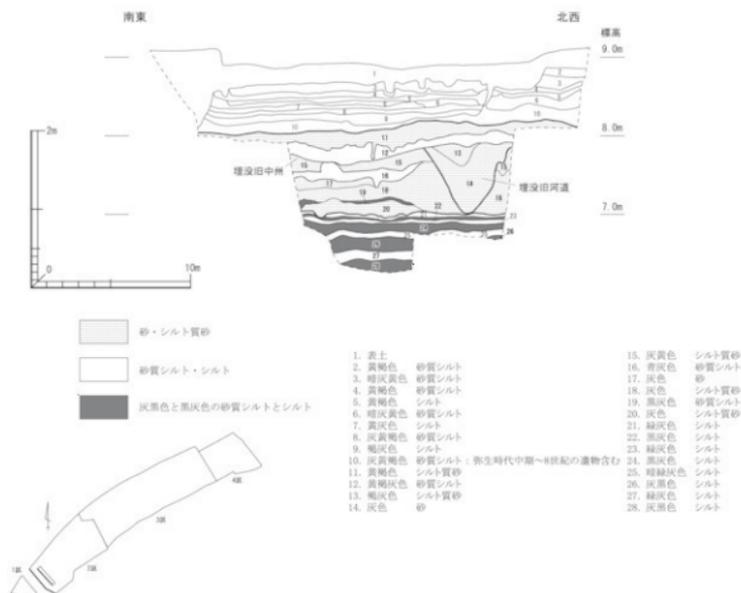
後背湿地堆積物の上位には、再び支流性扇状地(2-(2)-a)で示した支流性扇状地)堆積物がみられる。これは、2区で約1mの厚さをもつものの、東に向かって薄くなる。この支流性扇状地堆積物もマサ土に該当し、4層程度に細分される。これらは灰色や褐色色などを呈する砂とシルト質砂(第5図の堆積物12・23・25・28、第6図の堆積物11・15・17・18・20、第7図の堆積物2・4・5・7・9、第8図の堆積物16・19・21・23、第9図の堆積物10・11)で、青灰色や黄灰色などの砂質シルトとシルト(第5図の堆積物13・24・27、第6図の堆積物12・16、第7図の堆積物3・6・8、第8図の堆積物17・18・20・22)を薄く挟む。砂とシルト質砂は、主に極粗砂や粗砂からなり、径2cm以下の礫を含むことが多い。これらのうち下部と中部にみられるもの(第5図の堆積物23・25・28、第6図の堆積物15・17・18・20、第8図の堆積物19・21・23)は、2区から3区西半部に分布し、旧中州堆積物にあたる。

2区では、この旧中州堆積物を切る旧河道(2-(2)-a)で示した埋没旧河道)堆積物がみられる。この旧河道は、弥生時代前期ころに流れた志筑川支流の流路跡で、約4mの幅と1m前後の深さをもつ。旧河道の下部から中部には灰色の砂とシルト質砂(第5図の堆積物20・22、第6図の堆積物13・14)、上部には黄灰色の砂質シルト(第5図の堆積物19)が堆積する。

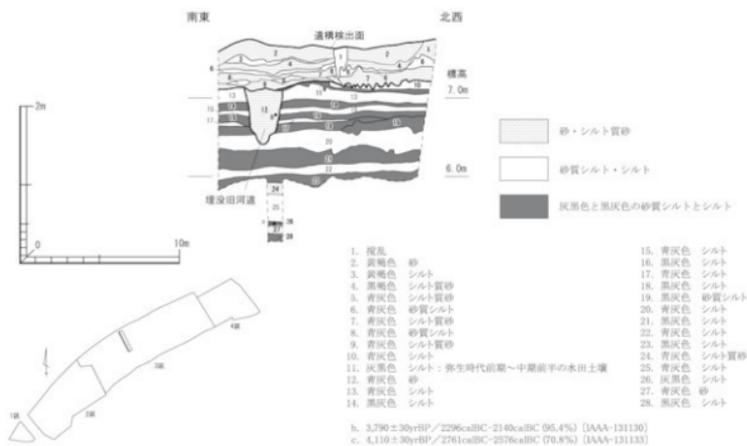
最上位に位置する後背湿地(2-(2)-a)で示した上位の埋没後背湿地)堆積物は2区から4区に60～80cmの厚さで認められる。これは10層前後に分けられ、多くが灰黄色や灰色などの砂質シルトとシルト(第5図の堆積物2～11、第6図の堆積物2～10、第8図の堆積物2～4・7～12・14・15、第9図の堆積物2～9)である。各堆積物は5～20cmの厚さではほぼ水平に堆積し、支流性扇状地を被覆する。これらのうち2区と3区の下部に位置する黄灰色や黒褐色などの砂質シルトやシルト(第5図の堆積物11、第6図の堆積物10、第8図の堆積物12)には、弥生時代中期から8世紀の遺物が含まれる。2区と3区ではそれらの下面で弥生時代中期から古墳時代の遺構が検出され、4区では最下位にみられる暗褐色のシルト(第9図の堆積物9)が水田土壌に相当する。



第5図 埋入遺跡2区における南西-北東方向の地質断面図 (上半部は北西層群・下半部はトレンナ断面)



第6図 横入遺跡2区における南東・北西方向の地質断面図（上半部は南西壁断面・下半部はトレンチ断面）

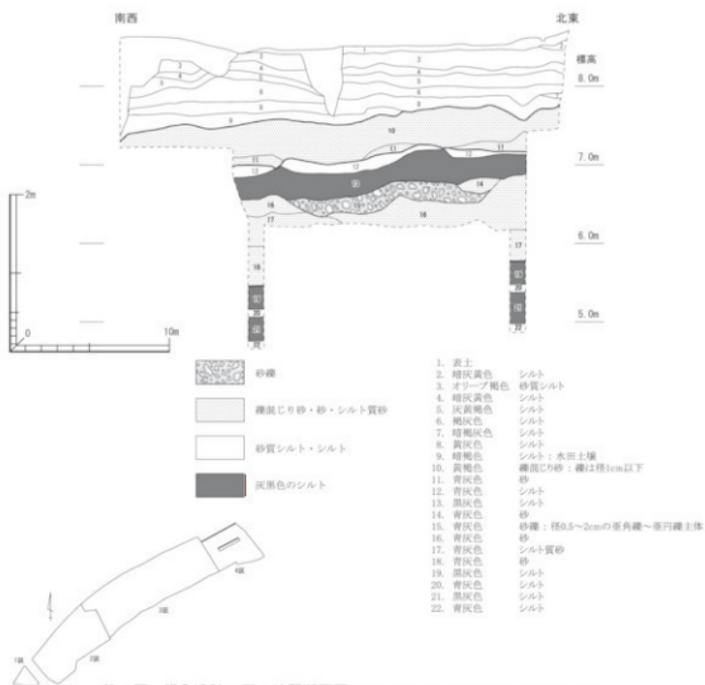


第7図 横入遺跡3区における南東・北西方向のトレンチ断面図



第8図 構入遺跡3区における南西-北東方向の地質断面図 (上半部は北西壁断面・下半部はトレンチ断面)

- |         |       |         |       |
|---------|-------|---------|-------|
| 1. 黄土   | 砂質シルト | 28. 青灰色 | シルト   |
| 2. 暗灰色  | シルト質砂 | 29. 青灰色 | シルト   |
| 3. 灰色   | シルト   | 30. 暗灰色 | シルト   |
| 4. 灰色   | シルト   | 31. 暗灰色 | シルト質砂 |
| 5. 暗灰色  | シルト   | 32. 青灰色 | シルト   |
| 6. 暗灰色  | シルト   | 33. 暗灰色 | シルト   |
| 7. 暗灰色  | シルト   | 34. 暗灰色 | シルト   |
| 8. 暗灰色  | シルト   | 35. 暗灰色 | シルト   |
| 9. 灰色   | シルト   | 36. 青灰色 | シルト   |
| 10. 暗灰色 | シルト   | 37. 灰色  | シルト   |
| 11. 暗灰色 | シルト   | 38. 暗灰色 | シルト   |
| 12. 暗灰色 | シルト   | 39. 暗灰色 | シルト質砂 |
| 13. 灰色  | シルト   | 40. 暗灰色 | シルト質砂 |
| 14. 灰色  | シルト   | 41. 暗灰色 | シルト   |
| 15. 灰色  | シルト   | 42. 暗灰色 | シルト   |
| 16. 灰色  | シルト質砂 | 43. 暗灰色 | シルト   |
| 17. 黄褐色 | シルト質砂 | 44. 青灰色 | シルト   |
| 18. 暗灰色 | シルト   | 45. 暗灰色 | シルト   |
| 19. 暗灰色 | シルト   | 46. 暗灰色 | シルト   |
| 20. 青灰色 | シルト質砂 | 47. 暗灰色 | シルト   |
| 21. 青灰色 | シルト   | 48. 青灰色 | シルト   |
| 22. 青灰色 | シルト   | 49. 青灰色 | シルト   |
| 23. 青灰色 | シルト   | 50. 青灰色 | シルト   |
| 24. 暗灰色 | シルト   | 51. 暗灰色 | シルト   |
| 25. 暗灰色 | シルト   |         |       |
| 26. 暗灰色 | シルト   |         |       |
| 27. 暗灰色 | シルト   |         |       |
- 砂質シルト：新石時代中期→8世紀の遺物を含む  
シルト：黒埴土
4. 3470±30calBP/2464±80C-2284±80C (0.3%) (JAAA-13112)

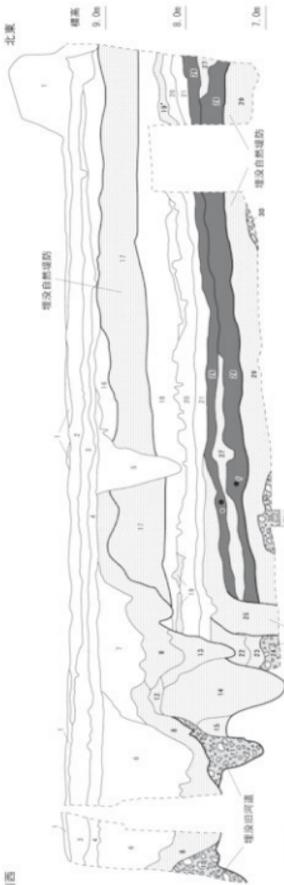


(2) 田井A遺跡調査区の堆積物について

調査区では、大きくみて5層の堆積物が認められる(第10図・第11図)。これらは、3層の後背湿地堆積物と2層の自然堤防堆積物であり、交互に重なっている。最下位で観察される後背湿地堆積物は、約1mの厚さがあり、5層に分けられる。これらは暗灰色や灰色のシルト(第11図の堆積物32・34・36)と灰黒色や黒灰色を呈するシルト(第11図の堆積物33・35)の互層で、低湿な環境下で土壌化した後者の堆積物は2層みられる。その上位に位置する自然堤防堆積物は調査区東半部で観察される。厚さは約90cmで、上面は南西へ高度を下げる。これは主に灰色の砂とシルト質砂(第10図の堆積物42、第11図の堆積物29・31)からなり、間には灰色の砂礫(第11図の堆積物30)が挟まれる。砂礫は20～25cmの厚さで認められ、礫は径1cm以下の垂角礫～垂円礫を主体とする。

自然堤防堆積物の上位には、後背湿地(2-(2)-b)で示した下位の埋没(後背湿地)堆積物がみられる。これは、調査区東半部で下位の自然堤防を約1.1mの厚さで覆い、自然堤防の上面高度が下がる調査区西半部では1.5m以上の厚さを有する。調査区西半部ではこの堆積物が15層前後に細分される。これらは基本的に灰黒色や黒灰色のシルト(第10図の堆積物19・26・30・36・41、第11図の堆積物26・28)と緑灰色や灰色などの砂質シルトやシルト(第10図の堆積物20～23・29・32・34・37・40、第11図





φ. 3.200±.300(H)/4446±.08(C)-4294±.08(C) (92.4%) (JAAA-133186)  
 φ. 3.200±.300(H)/4446±.08(C)-2974±.08(C) (90.4%) (JAAA-133187)  
 φ. 2.200±.300(H)/7158±.08(C)-2974±.08(C) (90.4%) (JAAA-133188)

- 18. 埋灰色 砂質シルト：7世紀の大田上層
- 19. 埋灰色 砂質シルト
- 20. 埋灰色 シルト質砂
- 21. 埋灰色 砂質シルト
- 22. 埋灰色 埋没旧河運：礫は径1cm以下
- 23. 埋灰色 シルト
- 24. 灰青色 砂層：径1cm以下の埋没礫～埋没河運主体
- 25. 灰青色 シルト質砂
- 26. 埋灰色 シルト質砂
- 27. 埋灰色 シルト質砂
- 28. 埋灰色 シルト質砂
- 29. 灰青色 シルト質砂
- 30. 埋灰色 シルト質砂
- 31. 灰青色 砂層：径1cm以下の埋没礫～埋没河運主体
- 32. 埋灰色 シルト
- 33. 埋灰色 シルト
- 34. 埋灰色 シルト
- 35. 埋灰色 シルト質砂
- 36. 埋灰色 シルト
- 37. 埋灰色 シルト質砂

- 1. 埋灰色 シルト
- 2. 埋灰色 シルト
- 3. 埋灰色 シルト
- 4. 灰黄褐色 シルト
- 5. オリーブ褐色 シルト
- 6. 埋灰色 砂質シルト：10世紀の遺物を含む
- 7. 埋灰色 砂：8世紀の遺物を含む
- 8. 埋灰色 砂質シルト：8世紀の遺物を含む
- 9. 灰青色 砂：8世紀の遺物を含む
- 10. 灰オリーブ色 砂層：径3cm以下の埋没礫～埋没河運主体、埋没旧河運の遺物を含む
- 11. 灰青色 砂層：埋没旧河運の遺物を含む
- 12. 埋灰色 砂：8世紀の遺物を含む
- 13. 灰オリーブ色 砂：8世紀の遺物を含む
- 14. 埋灰色 シルト
- 15. 埋灰色 シルト質砂：8世紀の遺物を含む
- 16. 埋灰色 シルト
- 17. 埋灰色 シルト質砂



第11図 田井A遺跡調査区東半部の地質断面図（上半部は北西側断面、下半部はトレンチ断面）

の堆積物 18・20・21) からなり、灰色や青灰色などの砂とシルト質砂(第10図の堆積物 24・25・28・31・33・38、第11図の堆積物 19・27) がレンズ状に挟まれる。堆積物の多くは5～30cmの厚さをもつ。

このような後背湿地堆積物には、灰黒色や黒灰色を呈するシルトが5層認められ、それらのうち3層(第10図の堆積物 19・36・41、第11図の堆積物 18・26・28) が調査区東半部の自然堤防上にはほぼ連続的にみられる。ただし、最上位に位置する黒灰色のシルト(第10図の堆積物 19) は調査区東半部で暗灰色のシルト(第11図の堆積物 18) に変化する。調査区中央部では、こうした3層のうち中位の黒灰色シルト(第11図の堆積物 26) を切る旧河道が2本認められる。これらは、ほぼ南北に延びる宝珠川の流路跡で、多くが侵食によって残されていない。また、最も下位の灰黒色シルト(第11図の堆積物 28) は、縄文時代後期後半から晩期初頭に該当する  $3,180 \pm 30\text{yrBP}$  ( $3,450\text{calBC} - 3,360\text{calBC}$ ) の  $^{14}\text{C}$  年代値を示す<sup>9)</sup>。中位の黒灰色シルト(第11図の堆積物 26) には、調査区北東端で弥生時代前期の遺物が混入し、上位に位置する黒灰色と暗灰色のシルト(第10図の堆積物 19、第11図の堆積物 18) はともに7世紀の水田土壌である。

その上位には再び自然堤防(2-(2)-b)で示した埋没自然堤防堆積物が認められる。この堆積物は、黄褐色や黄灰色の砂とシルト質砂(第10図の堆積物 16～18、第11図の堆積物 17) からなり、調査区の広範囲に分布する。ただし、厚さは50～70cmしかなく、これは調査区西半部が北から発達する自然堤防、東半部が南へ延びる自然堤防の末端付近に位置するためである。

最も上位にみられる後背湿地(2-(2)-b)で示した上位の埋没後背湿地堆積物は、40～80cmの厚さをもつ。これは5層前後に分けられ、それぞれは黄褐色や灰オリーブ色などの砂質シルトやシルト(第10図の堆積物 2・3・5・14・15、第11図の堆積物 2～4) である。これらのうち最下位の暗褐色シルト(第10図の堆積物 15) は、調査区西半部に分布し、8世紀の水田土壌にあたる。調査区中央部では、このシルトを切る旧河道(2-(2)-b)で示した埋没旧河道堆積物が認められる。そこには、少なくとも3本の流路跡が重複してみられる。いずれも宝珠川の流路跡に相当し、5～25mの幅と1.4～2mの深さである。旧河道堆積物は、主に灰色や褐色、灰オリーブ色などの砂礫、砂、及びシルト質砂で、流路によっては上部に砂質シルトが認められる。これらの堆積物には主として8世紀の遺物が含まれ、遅くとも9世紀初頭には流路の埋積が終了したと考えられている。旧河道堆積物より上位にみられる後背湿地堆積物のうち、調査区西半部で観察される灰オリーブ色の砂質シルト(第10図の堆積物 5) と東半部における灰黄褐色のシルト(第11図の堆積物 4) には10世紀の遺物が含まれる。とくに調査区東半部では、灰黄褐色のシルト下面で同時期の遺構が検出されている。

#### 4 調査区付近における地形環境の変遷

調査区付近の地形環境は、これまで述べた事柄からみて次のように考察される。

〔ステージ1〕 縄文時代中期後葉前後、横入遺跡の2区から4区では、主にシルトが洪水に伴って幾度も堆積し、後背湿地が発達した。そこでは、堆積したシルトの上部が低湿な環境の下で土壌化し、灰黒色や黒灰色のシルトが生成された。

〔ステージ2〕 縄文時代中期後葉から後期初頭までに、横入遺跡4区を中心に砂や砂礫が堆積し、支流性扇状地が発達した。これらの堆積物は調査区北西の丘陵から数度の洪水によってもたらされた。

〔ステージ3〕 横入遺跡の2区から4区では、支流性扇状地の形成後に後背湿地が発達した。低湿な後背湿地では、洪水堆積の度に灰黒色や黒灰色のシルトが土壌化によって生成された。このような後背

湿地の形成開始期から縄文時代後期初頭までのある時期には、調査区付近で地震が発生した。その際、3区では正断層が形成され、断層の北東側が約30cm相対的に沈んだ。縄文時代後期前葉ころになると、3区付近に広がる後背湿地を志筑川が流下し、この流路は間もなく砂とシルト質砂に埋積された。一方、田井A遺跡の調査区でも後背湿地の形成がみられた。そこでは、横入遺跡と同様に低湿な環境が現出し、細粒堆積物の土壌化が行われた。その後、調査区東半部では宝珠川の氾濫に伴って砂やシルト質砂などがもたらされ、縄文時代後期中ごろまでに自然堤防が形成された。

〔ステージ4〕横入遺跡の調査区では、縄文時代後期前葉以降洪水のほとんど起こらない安定した環境が続き、弥生時代前期ころになると3区東半部の後背湿地で水田稲作が営まれた。その後、1区から3区西半部には極粗砂や粗砂が北西からの洪水によって供給され、支流性扇状地の形成がはじまった。2区では、扇状地をつくる志筑川の支流が東西に流れ、その両側に中州が形成された。この流路では、弥生時代前期ころに堰がつくられ、さらに砂などによる埋積がなされた。これに対して、田井A遺跡の調査区東半部では、縄文時代後期後半から弥生時代前期にかけてシルト質砂やシルトなどの洪水堆積が自然堤防上でみられた。その結果、自然堤防は浅く埋没した。

〔ステージ5〕横入遺跡の調査区には弥生時代前期から中期前半にも砂がもたらされ、支流性扇状地の3区東半部と4区への発達がみられた。さらにこの扇状地が砂質シルトやシルトの被覆によって浅く埋没した後、比較的安定した環境が8世紀まで続いた。こうした環境の下、埋没した支流性扇状地上では人間活動がみられた。扇状地の末端には弥生時代中期前半に環濠が掘られ、埋没旧中州上には古墳時代中期に祭祀用の土坑がつくられた。他方、田井A遺跡の調査区では弥生時代前期以降に宝珠川が調査区中央部を2度南北に流れた。これらの埋積後には、砂質シルトやシルトなどが7世紀までに堆積し、後背湿地が発達した。7世紀にはこの後背湿地に水田がつくられた。

〔ステージ6〕田井A遺跡の調査区では、7世紀から8世紀への遷移期に比較的大規模な洪水が発生した。その際、砂とシルト質砂が堆積し、自然堤防が形成された。調査区西半部の自然堤防は、その後すぐにシルトに覆われ、浅く埋没した。8世紀にはこの埋没自然堤防上で水田が経営された。

〔ステージ7〕その後、田井A遺跡の調査区では宝珠川が調査区中央部を南北に流下した。これは少なくとも3度なされ、その度に流路の形成と埋積が繰り返された。人間は流路が形成されるごとに堰を築き、水を利用した。こうした流路の埋積は遅くとも9世紀初頭までに終わった。

〔ステージ8〕9世紀から10世紀にかけて、田井A遺跡の調査区では砂質シルトとシルトが洪水によってもたらされ、後背湿地が形成された。そのため調査区東半部の自然堤防は浅く埋没し、10世紀にはこの埋没自然堤防上で人間が居住した。このころ横入遺跡の調査区でも後背湿地の発達がみられた。

〔ステージ9〕横入遺跡と田井A遺跡の調査区では、10世紀以降にも洪水に伴って砂質シルトやシルトが堆積した。洪水は数度及び、その度に後背湿地は発達していった。

〔ステージ10〕後背湿地の発達後、志筑川と宝珠川が下方侵食を行った。その結果、横入遺跡と田井A遺跡の調査区が位置する平野は段丘化し、各河川に沿って現況蓋原が形成された。

## 5 おわりに

横入遺跡と田井A遺跡の調査区は、志筑川と宝珠川が形成した平野の完新世段丘上に位置する。これは自然堤防帯が10世紀以降に段丘化したものである。横入遺跡の調査区では後背湿地と支流性扇状地、田井A遺跡の調査区では自然堤防と後背湿地が埋没した状態で認められ、各調査区には埋没旧河

道が分布する。横入遺跡の調査区では、支流性扇状地が上下に2つみられ、4区に存在する下位の支流性扇状地は縄文時代中期後葉から後期初頭までに、また1区から4区に発達するそれは縄文時代後期前葉から弥生時代中期前半までに形成されたものである。旧河道は2本分布し、3区のそれは縄文時代後期前葉ころにつくられた志筑川の流路跡で、2区の旧河道は弥生時代前期ころに形成・埋没した志筑川流路のものにあたる。これらはそれぞれの形成後に後背湿地堆積物によって埋没した。

他方、田井A遺跡の調査区では、自然堤防が上下に2つ分布する。ひとつは調査区東半部に縄文時代後期後半以前に、他の1つは調査区のほぼ全域に7世紀から8世紀に遷移する時期に形成されたものである。旧河道は少なくとも5本が調査区中央部に重複してみられる。いずれも南北に流下した宝珠川の流路跡にあたり、そのうち2本は弥生時代前期から7世紀、残る3本は8世紀から9世紀初頭に形成・埋積されたものである。これらも横入遺跡と同様にそれぞれの形成後に後背湿地堆積物に被覆された。

両遺跡の調査区では、こうした地形の変化過程で人間活動がみられた。横入遺跡1区から3区西半部では、埋没した支流性扇状地の末端に弥生時代中期前半に環濠がつくられ、扇状地上が生活空間となった。これは、支流性扇状地が後背湿地に比べて高燥で排水されやすいことに起因する。また、3区と4区の後背湿地では、弥生時代前期ころや弥生時代中期から古墳時代に水田稲作が営まれた。後背湿地が水田に利用された主因は、そこが低湿でほぼ平坦な地表をなすことにある。このように人間活動は弥生時代中期から古墳時代までみられた。これは、その間調査区付近が洪水のほとんど及ばない比較的安定した環境であったことに係わると考えられる。

一方、田井A遺跡の調査区では、東半部の埋没自然堤防上で弥生時代前期と10世紀に人間が活動し、10世紀にはそこが居住域として利用された。調査区東半部では、縄文時代後期後半以前と7世紀から8世紀への遷移期に自然堤防が形成され、10世紀にはそれらが上下に重なって埋没していた状況であった。そのため調査区東半部は、かなり高燥で排水の便がよく、居住に適していたと考えられる。また水田稲作は、7世紀に下位の自然堤防上に発達した後背湿地でなされ、8世紀には調査区西半部で浅く埋没した上位の自然堤防上で営まれた。とくに、後者が居住域とならず水田に利用された一因は、その直前に比較的大規模な洪水が発生し、人間が水害の危険性を認識していたことにあると推定される。横入遺跡と田井A遺跡の調査区では、以上のような地形環境と人間活動の関係が認められるのである。

## 注

- 1) 兵庫県教育委員会「第3章 遺構」、「横入遺跡」(兵庫県教育委員会)所収、2014年
- 2) 前掲1)
- 3) 前掲1)
- 4) 前掲1)
- 5) 前掲1)
- 6) (株)加速器分析研究所「第5章 自然科学分析 第2節 横入遺跡における放射性炭素年代(AMS測定)」、「横入遺跡」(兵庫県教育委員会)所収、2014年
- 7) 前掲6)
- 8) 前掲6)
- 9) この<sup>14</sup>C年代値は(株)加速器分析研究所の測定によるものである。

### 第3節 田井 A 遺跡の花粉およびプラント・オパール分析

森 将志 (株) パレオ・ラボ

#### 1 花粉分析

兵庫県淡路市に所在する田井 A 遺跡において、弥生時代前期の堆積層である深掘 10 層から分析試料が採取された。以下では、試料に対して行った花粉分析の結果を示し、考察した。

#### 2 試料と方法

分析試料は、深掘 10 層から採取された黒色 (7.5YR1.7/1) 粘土 1 点である。試料の堆積時期は弥生時代前期と考えられている。この試料について、以下の手順で分析を行った。

試料 (湿重量約 3g) を遠沈管にとり、10% 水酸化カリウム溶液を加え 10 分間湯煎する。水洗後、40% フッ化水素酸溶液を加え 1 時間放置する。水洗後、比重分離 (比重 2.1 に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離) を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理 (無水酢酸 9 : 濃硫酸 1 の割合の混酸を加え 20 分間湯煎) を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。検鏡は、この残渣より適宜プレパラートを作製して行った。作製したプレパラートは全面を検鏡し、その間に現れる花粉・胞子を全て数えた。

#### 3 結果

検鏡した結果、分析試料には十分な量の花粉化石が含まれていなかった。検出された花粉は、樹木花粉のコナラ属コナラ亜属 1 点と、シダ植物胞子の単条溝胞子が 1 点、三条溝胞子が 10 点である。これらの花粉・胞子の一覧表を第 5 表に示した。なお、今回の分析試料は、十分な量の花粉化石が得られなかったため、分布図は示していない。

第 5 表 産出花粉胞子一覧

学名	和名	
樹木		
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	1
シダ植物		
monolete type spore	単条溝胞子	1
trilete type spore	三条溝胞子	10
Arboreal pollen	樹木花粉	1
Spores	シダ植物胞子	11
Total Pollen & Spores	花粉・胞子総数	12

#### 4 考察

今回の分析試料には花粉化石がほとんど含まれていなかった。一般的に花粉は湿乾を繰り返す環境に弱く、酸化的環境に堆積すると紫外線や土壌バクテリアなどによって分解され消失してしまう。そのため、堆積物が酸素と接触する機会が多い堆積環境では花粉化石が残りにくい。分析試料には花粉化石がほとんど含まれていないため、深掘 10 層は、堆積時あるいはその後の環境において非常に乾燥した時期があったと思われる。その中、シダ植物胞子は分解に強いいため、比較的多く産出したと思われる。ちなみに、以前に行ったプラント・オパール分析の結果では、ネザサ節型やキビ族、ウシクサ族の機動細

胞珪酸体が産出しているが、特に湿潤な環境を示しているものではなかった。今回は十分な量の花粉化石が得られなかったため、花粉分析から古植生について言及するのは難しい。

#### 5 プラント・オパール分析

兵庫県淡路市の田井 A 遺跡において、弥生時代前期の堆積層である深掘 10 層から分析試料が採取された。この層における水田跡の存否を確認するため、プラント・オパール分析を行った。以下では、プラント・オパール分析の結果を示し、水田やイネ科植生について述べた。

#### 6 試料と方法

分析試料は、深掘 10 層から採取された黒色 (7.5YR1.7/1) 粘土 1 点である。試料の堆積時期は弥生時代前期と考えられている。この試料について、以下の手順で分析を行った。

秤量した試料を乾燥後、再び秤量する (絶対乾燥重量測定)。別に試料約 1g (秤量) をトルソーカーにとり、約 0.02g のガラスビーズ (直径約 0.04mm) を加える。これに 30% の過酸化水素水を約 20～30cc 加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により 0.01mm 以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定および計数は、機動細胞珪酸体由来するプラント・オパールについて、ガラスビーズが 300 個に達するまで行った。

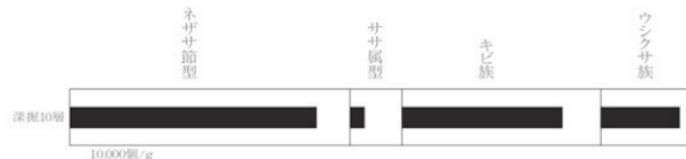
#### 7 結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料 1g 当りの各プラント・オパール個数を求め (第 6 表)、分布図に示した (第 12 図)。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は、試料 1g 当りの検出個数である。

検鏡の結果、ネザサ節型機動細胞珪酸体、ササ属型機動細胞珪酸体、キビ族機動細胞珪酸体、ウシクサ族機動細胞珪酸体の 4 種類の機動細胞珪酸体が確認できた。各分類群の産出量は、ネザサ節型機動細胞珪酸体が 76,900 個、ササ属型機動細胞珪酸体が 1,300 個、キビ族機動細胞珪酸体が 50,000 個、ウシクサ族機動細胞珪酸体が 24,400 個である。その他に、棒状植物珪酸体が 2,600 個産出している。

第 6 表 試料 1g 当りのプラント・オパール個数

	ネザサ節型 (個/g)	ササ属型 (個/g)	キビ族 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)	棒状植物珪酸体 (個/g)
深掘10層	76,900	1,300	50,000	24,400	2,600



第 12 図 田井 A 遺跡における植物珪酸体分布図

#### 8 考察

検鏡の結果、深掘 10 層にはイネ機動細胞珪酸体が含まれていなかった。水田跡であってもイネ機動細胞珪酸体が産出しない例もあるが (杉山・松田, 2010)、今回の結果から深掘 10 層が水田跡である可

能性は低いと判断される。

その他の機動細胞珪酸体ではネザサ節型が最も多く産出した。よって、遺跡周辺の開けた場所や林縁部に、ケネザサやゴキタケなどのネザサ節型のササ類が生育していたと思われる。次いでキビ族の産出が目立つが、キビ族にはアワやヒエ、キビといった栽培種とエノコログサやタイヌビエなどの野生種の両方が含まれる。これらを機動細胞珪酸体の形態から両者を区別するのは難しいため、ここではキビ族が遺跡周辺に生育していたと指摘するに留める。さらに、ウシクサ族の産出も見られるが、ウシクサ族にはオギなどの湿地的環境に生育する種とススキやチガヤなどの乾燥的環境に生育する種の両方が含まれる。今回はヨシ属の産出が見られず、湿地的環境の存在を示す状況が希薄なため、弥生時代前期の田井 A 遺跡周辺には主にススキやチガヤなどの乾燥的環境に生育する種が生育していたと思われる。また、ササ属型機動細胞珪酸体の産出も見られ、遺跡周辺に広がる森林の下草としてミヤコザサなどのササ属型のササ類も生育していたであろう。

#### 引用文献

杉山真二・松田隆二（2010）香形遺跡のプラントオパール分析（平成19年度調査）。仙台市教育委員会編「香形遺跡」：181-186。仙台市教育委員会。

## 第4節 田井 A 遺跡出土木製品等の樹種同定

バリノ・サーヴェイ（株）・（株）古環境研究所

### 1 はじめに

田井 A 遺跡出土木製品の樹種同定については、平成 25・26 年度の 2 年度にわたって実施した。平成 25 年度にはバリノ・サーヴェイ（株）に 46 点、平成 26 年度には（株）古環境研究所に 53 点をそれぞれ委託して分析した。

本節では、両者から提出された分析結果について記載するが、それぞれの分析手法は概ね類同であるため、重複を避け、ここでは各年度の分析結果と同定結果に対する考察のみを記載し、分析手法および両社の報告に引用された参考文献については割愛する。第 2 項以下は、両社の同定結果報告書からの転載である。

### 2 田井 A 遺跡出土木製品の樹種（バリノ・サーヴェイ（株））

#### (1) 結果

樹種同定結果を第 8 表に示す。木製品は、針葉樹 4 分類群（モミ属・スギ・ヒノキ・ヒノキ科）と広葉樹 4 分類群（コナラ属コナラ亜属クスギ節・コナラ属コナラ亜属コナラ節・クスノキ・クスノキ科）に同定された。

#### (2) 考察

木製品は、容器や祭祀具を主体として、服飾具（楯扇）等がある。これらの木製品には、合計 8 種類が認められた。確認された各種類の材質をみると、針葉樹のモミ属、スギ、ヒノキ、ヒノキ科は、木理が通直で割裂性が高く、加工は容易である。このうち、モミ属は保存性が低いとされるが、ヒノキやヒノキ科は耐水性が比較的高い。また、スギは晩材部が広く、早材部と晩材部の材質差が大きいが、ヒノキやヒノキ科は晩材部が薄く、比較的均質である。広葉樹のクスギ節とコナラ節は、比較的重硬で強度が高い。クスノキは、やや軽軟～中庸で、耐朽性・防虫性が高い。クスノキ科は多くの種類があり、材質もやや重硬～軽軟な種類まで材質に幅がある。

第 7 表 田井 A 遺跡出土木製品の器種別種類構成

種類・器種	容 器		服飾		祭祀具		施設・器具		土木	合計
	曲物 側板	浅物 蓋・底	別物 皿	楯扇 槽	楯串 -	形代 舟形 人形	板状 -	棒 -		
針葉樹										
モミ属					1	10	9			20
スギ						1				1
ヒノキ	5	2	1			3	4	1		17
ヒノキ科				1				1		1
広葉樹										
クスギ節					2			1	1	4
コナラ節									1	1
クスノキ				1						1
クスノキ科						1				1
合 計	5	2	1	1	3	14	15	1	2	46

1) 種別が空白の資料は、杭を土木材、板を施設材・器具材とした。

2) 種別と器種が空白の資料は、施設材・器具材の板と棒に含めた。

3) (長方形) 曲物の側板、曲物の蓋の側板、曲物の側板は、曲物の側板に一括した。W55、W53も形状から曲物の側板に含めた。また、W45とW147は曲物の蓋・底とした。

4) 祭祀具?は、祭祀具に含めた。

木製品の器種別種類構成を第7表に示す。なお、器種分類が空白の資料については、伊東・山田（2012）を参考にして、板を施設材・器具材、杭を土木材とした。また、器種が空白の資料は、板状を呈する資料が多く、他に分割棒状の資料があることから、施設材・器具材の板と棒に含めて集計した。全体的にモミ属やヒノキを中心とした針葉樹材の利用が多く、広葉樹の利用は少ない。器種別に見ると、容器は、曲物と挽物に大きく分けられる。曲物は、側板、蓋・底の全てがヒノキに同定され、モミ属は1点も認められない。このことから、曲物には、加工性の他、耐水性も考慮した木材利用が推定される。挽物は、高台の無いタイプの皿1点でヒノキに同定された。このタイプの皿は、畿内を中心とした地域に一般的な形態とされる。木皿については、国単位で形態や木材利用に特徴があり、畿内に近い摂津国や山城国では高台の無いヒノキの木皿が多い傾向があるとされる（藤田・阿刀2012）。淡路については調査事例が少ないが、今回の資料の形態および木材利用は、畿内に近い地域の事例に似ている。なお、今回の皿は、中央付近などに穿孔が見られることから、別の用途に転用されたことが推定される。例物は大型の桶1点であり、クスノキに同定された。クスノキの材質を考慮すれば、高い耐朽性を考慮した木材利用が推定される。また、大型の資料であることから、大径材が得やすい点もクスノキが利用された背景と考えられる。

服飾具では、櫛屑の破片1点があり、ヒノキに同定された。櫛屑は、ヒノキの板目板を利用することが多く、その点で今回の資料は既存の事例とも調和的である。

祭祀具は、齋串と形代に分けられる。齋串は、板目板状の資料（W114）にモミ属、ミカン割状の資料（W141,W93）にクスギ節が認められ、木取りや形状によって樹種が異なる傾向がある。形代は、人形あるいは人形？が14点、舟形が1点である。人形は板目板の資料が13点を占めており、板目板は1点のみである。樹種をみると、板目板となる資料はモミ属が10点、ヒノキが3点で、モミ属に利用が偏る傾向がある。兵庫県内の人形の事例をみると、但馬でスギ、播磨でヒノキの利用が見られ、他の資料と同じく、日本海側でスギ、瀬戸内側でヒノキが利用される傾向がある。モミ属に偏った用材傾向は、兵庫県内の他地域では見られないことから、本地域に特有の木材利用の可能性が大きい。周辺地域をみると、距離は離れるが、下川津遺跡（香川県）の人形にヒノキと共にモミ属やツガ属が多く利用される結果が報告されており（伊東・山田2012）、木材利用の類似性という点で注目される。一方、板目板となる資料1点はスギであった。兵庫県内の資料では、主に日本海側の但馬や丹後でスギの利用が多いが、瀬戸内側の地域ではヒノキの利用が多い（藤田・阿刀2012）。このような状況を考えれば、スギの人形については、スギの利用が多い日本海側や琵琶湖周辺地域との関連性も考えられる。舟形は、芯持丸木で舟体中央部に構造物が表現される。本資料はクスノキ科に同定され、他の祭祀具とは木材利用が異なる。同様の舟形については、樹種に関する資料がほとんど無いため、木材利用の傾向などは不明である。今後、芯持丸木を使った舟形の木材利用については注視していく必要がある。

施設材・器具材は、器種は不明であるが、板状の資料が多く、他に棒状の資料が1点ある。板状の資料をみると、針葉樹のモミ属やヒノキの利用が多い。器種が明瞭な資料と比較すれば、モミ属は祭祀具など、ヒノキは容器などに木材利用が似ている。なお、クスギ節に同定された資料は、やや厚い板目板状の資料で、中央に四角のホソ穴があることから、別材と組み合わせて使用したことが推定される。クスギ節の材質や資料の形状を考慮すれば、農具など、強度を要する用途が推定される。

杭は、いずれも芯持丸木であり、クスギ節とコナラ節に同定された。いずれも二次林等に普通に見られる種類であり、遺跡周辺に生育していた樹木を杭に利用した可能性がある。

第8表 田井A遺跡の樹種同定結果 (2011年度調査)

No	報告番号	種別	器種	キーマニング No	出土遺構	層位	木取り	種類
1	W113			登 004	旧河道 2		板目	ヒノキ
2	W120		板材	登 005	旧河道 2		板目	ヒノキ
3	W15	祭祀具	人形	登 006	旧河道 1		板目	モミ属
4	W14	祭祀具	人形	登 007	旧河道 1 南西半	アゼ	板目	モミ属
5	W4	祭祀具	人形	登 008	旧河道 1 南西半	極細砂～シルト	板目	モミ属
6	W100	祭祀具	舟形	登 009	旧河道 3 南壁際	腐食貫細砂 ～極細砂	芯持丸木	クスノキ科
7	W141	祭祀具	斎申	登 011 登 012		旧トレンチ埋土 を含む	ミカン割	コナラ属コナラ亜属 クスギ節
8	W20	祭祀具?	人形?	登 014	旧河道 1	北半 砂レキ	板目	ヒノキ
9	W56			登 015	旧河道 1	北半 砂レキ	分割棒状	ヒノキ
10	W35	容器	曲物	登 023	旧河道 1 北東	埋土上部	板目	ヒノキ
11	W53	容器	曲物	登 024	旧河道 1 北東	埋土上部	板目	ヒノキ
12	W43	容器	皿	登 028 登 029	旧河道 1	アゼ	板目	ヒノキ
13	W87	祭祀具	人形	登 035	旧河道 2 枕列 C2 脇		板目	ヒノキ
14	W33			登 039	旧河道 1 南西半		板目	モミ属
15	W39			登 040	旧河道 1 南西半		板目	ヒノキ
16	W70		杭	登 041	旧河道 1 南西半		芯持丸木	コナラ属コナラ亜属 コナラ節
17	W26			登 042	旧河道 1 南西半		板目	モミ属
18	W3	祭祀具	人形	登 044	旧河道 1 南西半	西側下底砂層	板目	モミ属
19	W65			登 045	旧河道 1 南西半		板目	モミ属
20	W50			登 047	旧河道 1 南西半		板目	ヒノキ科
21	W83,W84, W85,W86	祭祀具	人形	登 048	旧河道 2 西側		板目	モミ属
22	W80	祭祀具	人形	登 049	旧河道 2 西側		板目	モミ属
23	W90			登 050	旧河道 2 西側		板目	モミ属
24	W90			登 050	旧河道 2 西側		板目	モミ属
25	W90			登 050	旧河道 2 西側		板目	モミ属
26	W88	祭祀具	人形	登 051	旧河道 2 西側		板目	モミ属
27	W92	服飾具	楯扇	登 053	旧河道 2 西側		板目	ヒノキ
28	W8	祭祀具	人形	登 054	旧河道 1 東側		板目	モミ属
29	W16	祭祀具	人形	登 055	旧河道 1 東側		板目	モミ属
30	W17	祭祀具	人形	登 056	旧河道 1 東側		板目	ヒノキ
31	W114	祭祀具	斎申	登 057	旧河道 2 西側		板目	モミ属
32	W45	容器	曲物の蓋	登 059	旧河道 1 南西半		板目	ヒノキ
33	W45	容器	曲物の蓋の側板	登 059	旧河道 1 南西半		板目	ヒノキ
34	W57		板材	登 063	旧河道 1 南西半		分割材	モミ属
35	W151		板材	登 064	旧河道 2 東側	堤防状遺構 東側護岸	板目	モミ属
36	W67	容器	槽	登 065	旧河道 1	南側	板目	クスノキ
37	W71		杭	登 069	旧河道 1 南西半		芯持丸木	コナラ属コナラ亜属 クスギ節
38	W93	祭祀具	自然木 斎申	登 086	旧河道 1・2 交 差部	下層 砂レキ層	ミカン割	コナラ属コナラ亜属 クスギ節
39	W7	祭祀具	人形	登 087	旧河道 1 南西半	下層 砂層	板目	モミ属
40	W68			登 091	旧河道 1 南西半	下層 砂層	板目	コナラ属コナラ亜属 クスギ節
41	W64			登 092	旧河道 1 南西半	下層 砂層	板目	モミ属
42	W46	容器	曲物	登 093	旧河道 1 南西半	下層 細砂	板目	ヒノキ
43	W147			登 099	旧河道 2		板目	ヒノキ
44	W49	容器	(長方形) 曲物の側板	登 101	旧河道 1	シルト～細砂 (南壁)	板目	ヒノキ
45	W48	容器	曲物の側板	登 102	旧河道 1	シルト～細砂 (南壁)	板目	ヒノキ
46	W18	祭祀具	人形	登 103	旧河道 1	シルト～細砂 (南壁)	板目	スギ

### 3 田井A遺跡における樹種同定（株）古環境研究所

#### (1) 結果

第9表に結果を示し、器種と樹種の相関について第13図に表す。

#### (2) 考察

同定の結果、田井A遺跡の木製品は、ヒノキ14点、モミ属8点、コナラ属クスギ節7点、マツ属複雑管束亜属5点、クリ3点、ヤナギ属2点、シイ属2点、ヤマグワ2点、カヤ1点、スギ1点、コナラ属コナラ節1点、スルデ1点、モチノキ属1点、ハイノキ属1点、トネリコ属1点、広葉樹2点、草本1点であった。

最も多いヒノキは、曲物、曲物底板、人形、皿、木筒、斎串などに使用されており、木理通直で肌目緻密、大きな材が取れる良材であり、特に保存性が高い。続くモミ属は温帯性のモミと考えられ、人形、杭に使用されており、木理は概ね通直で肌目は粗い。耐久性、保存性は低いが、軽軟な事から加工が容易な木材である。コナラ属クスギ節は、杭に使用されており、概して弾力に富んだ強い材である。マツ属複雑管束亜属は横木、杭などに使用されており、木理概ね通直で、肌目は粗く、水湿に良く耐える材である。クリは横木、杭に使用されており、重硬で保存性が良い材である。ヤナギ属は、株、根株であった。耐朽性、保存性は低く、切削、加工の容易な材である。ヤマグワは、杭、横木に使用されており、やや堅硬で靱性に富んだ材である。スギは、板に使用されており、木理通直で肌目は粗い。加工工作が容易で、大きな材がとれる良材である。シイ属、カヤ、コナラ属コナラ節、スルデ、モチノキ属、ハイノキ属、トネリコ属は、杭に使用されている。シイ属はやや重硬で耐朽性、保存性は低い材である。カヤは木理通直で緻密、やや重硬で弾力のある材で、耐朽性、保存性高く、水湿に耐える。コナラ属コナラ節は、強靱で弾力に富む材である。スルデは概して強さ中庸の材である。モチノキ属、ハイノキ属は概してやや堅硬な材である。トネリコ属は概して強靱で堅硬な材である。広葉樹と草本は、杭付着物(漏物? 網代?)、腐植体サンプルであった。

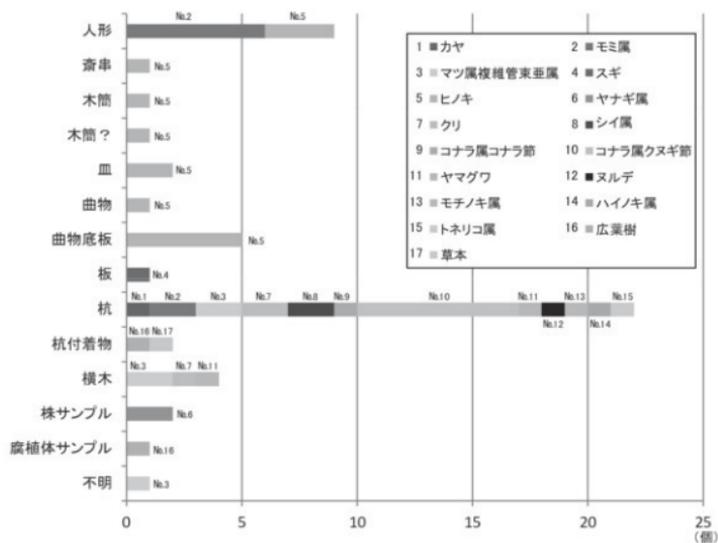
多い器種を見ると、杭22点ではコナラ属クスギ節7点、モミ属2点、マツ属複雑管束亜属2点、クリ2点、シイ属2点、カヤ1点、コナラ属コナラ節1点、ヤマグワ1点、スルデ1点、モチノキ属1点、ハイノキ属1点、トネリコ属1点であった。人形9点では、モミ属6点、ヒノキ3点であった。曲物底板5点は、全てヒノキであった。横木4点では、マツ属複雑管束亜属2点、クリ1点、ヤマグワ1点であった。

ヒノキ、モミ属、マツ属複雑管束亜属、カヤ、スギは温帯に広く分布する針葉樹であり、いずれも高木となる。広葉樹の内、コナラ属クスギ節、クリ、ヤナギ属、コナラ属コナラ節、ヤマグワ、フジキ、スルデは落葉高木、シイ属は常緑高木であり、モチノキ属、ハイノキ属、トネリコ属には落葉性と常緑性の樹種がある。いずれの樹種も温帯に分布する樹種ばかりであり、田井A遺跡の木製品の樹種は、当時遺跡の近隣に生育していたか流通によってもたらされたものとみられよう。

第9表 田井A遺跡における樹種同定結果 (2012年度調査)

番号	報告番号	器種など	結果(学名/和名)	
1	W47	曲物	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
2	W12	人形	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
3	W69	板	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
4	W5	人形	<i>Abies</i>	モミ属
5	W10	人形	<i>Abies</i>	モミ属
6	W1	人形	<i>Abies</i>	モミ属
7	W11	人形	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
8	W2	人形	<i>Abies</i>	モミ属
9	W6	人形	<i>Abies</i>	モミ属
10	W42	皿	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
11	W41	皿	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
12	W25	人形	<i>Abies</i>	モミ属
13	W108	木筒?	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
14	W142	曲物底板	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
15	W145	曲物底板	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
16	W82	人形	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
17	W143	曲物底板	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
19	W152	不明	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複雑管束重属
20	W78	木筒	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
21	W144	曲物底板	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
22	W101	曲物底板	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
23	W99	煮串	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
24	W153	杭	<i>Castanopsis</i>	シイ属
25	W154	杭	<i>Abies</i>	モミ属
26	W155	杭	<i>Ilex</i>	モチノキ属
27	W156	杭	<i>Abies</i>	モミ属
28	W157	杭	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>	コナラ属クスギ節
29	W158	杭	<i>Symplocos</i>	ハイノキ属
30	W159	杭	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>	コナラ属クスギ節
31	W160	杭	<i>Morus australis</i> Poir.	ヤマグワ
32	W161	杭	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>	コナラ属クスギ節
33-①	W162	横木	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複雑管束重属
33-②	W163	横木	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複雑管束重属
34	W164	横木	<i>Morus australis</i> Poir.	ヤマグワ
35	W165	杭	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
36	W166	横木	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
37	W167	杭	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>	コナラ属クスギ節
38	W168	杭	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複雑管束重属
39	W170	杭	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>	コナラ属クスギ節
40	W169	杭	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複雑管束重属
41-①	W171	杭	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>	コナラ属クスギ節
41-②	W172	杭付着物(編物?網代?)	broad-leaved tree	広葉樹
41-③	W173	杭付着物(編物?網代?)	grass	草本
42	W174	杭	<i>Castanopsis</i>	シイ属
43	W175	杭	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>	コナラ属クスギ節
44	W176	杭	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
45	W177	杭	<i>Rhus javanica</i> L.	スルデ
46	W178	杭	<i>Fraxinus</i>	トネリコ属
47	W179	杭	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
48	W180	杭	<i>Torreya nucifera</i> Sieb. et Zucc.	カヤ
49	W181	株1サンプル	<i>Salix</i>	ヤナギ属
50	W182	根株5サンプル	<i>Salix</i>	ヤナギ属
51	W183	腐植体サンプル	broad-leaved tree	広葉樹

\* W152 ~ W183 は樹種同定の為



第 13 図 木製品の器種と樹種の相関図

## 第5節 田井A遺跡における種実同定

(株)古環境研究所

### 1 はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出しその群集の構成や組成を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

### 2 試料

試料は以下の通りである。

第10表 試料一覧

登録番号	遺構名	層位	備考
2012085	486		北側側溝
2012085	487	旧河道1南半	砂層 検出面-50~80cm
2012085	488	旧河道1南半	砂層 検出面-50~80cm
2012085	489	旧河道1南半	粗砂~シルト混極細砂 検出面-50~80cm
2012085	490	旧河道1	畦、人形付近
2012085	491	旧河道1北半	検出面-50~80cm
2012085	492	旧河道1北半	検出面-50~80cm
2012085	493	旧河道1畦の下	人形周辺の土壌
2012085	494	旧河道2	検出面-50cm
2012085	496	旧河道2南1区	砂~砂礫層 畦断面23・24層
2012085	497	旧河道2南1区	砂~砂礫層 畦断面23・24層
2012085	498	旧河道2南2区	粗砂~砂礫層
2012085	499	旧河道2南2区	粗砂 立木株検出時
2012085	500	旧河道1北半	暗灰色細砂
2012085	501	旧河道2北半	砂~砂礫層
2012085	502	旧河道2北半西側	暗灰色極細砂~細砂 検出面-80cm
2012085	503	旧河道2北半	砂~砂礫層
2012085	504	旧河道1-2北半	台風による流出
2012085	505	旧河道3	断面検出作業時
2012085	506		大甕の中から出てきた種子

### 3 方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行う。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

#### 4 結果

##### (1) 分類群

樹木 14、草本 4 の計 18 分類群が同定された。主要な分類群を第 14 図に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴、第 14 図に示したもののサイズを記載する。

[樹木]

マツ属 複雑管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxyton* 毬果 マツ科 長さ×幅: 5.65mm×3.06mm

黒褐色で卵形を呈す。種鱗先端の外部に露出する部分は扁平五角形であり、その中央にはへそがある。

ヤマモモ *Myrica rubra* S. et Z. 核 ヤマモモ科 長さ×幅: 6.60mm×4.82mm

茶褐色で楕円形を呈し、両端がややとがる。一端にへそがあり、表面は粗い。断面は扁平である。

ツブラジイ *Castanopsis cuspidata* Schott. 果皮(破片) ブナ科

堅果は広卵形を呈し、先端に花柱が見られる。

ブナ科 Fagaceae 果皮(破片)

黒褐色で楕円形を呈し、表面は平滑である。この分類群はつき部、殻斗が欠落し破片のため、科レベルの同定までである。

カジノキ *Broussonetia papyrifera* Vent. 種子(破片) クワ科

黄褐色で広倒卵形を呈し、基部に突起がある。表面にはいぼ状の隆起がある。

ヤマグワ *Morus australis* Poir. 種子(破片) クワ科

茶褐色で広倒卵形を呈し、基部に突起がある。表面はやや粗い。

クスノキ *Cinnamomum camphora* S. 種子 クスノキ科 長さ×幅: 6.79mm×6.64mm

黒褐色で球形を呈す。一条の稜線が走りその中央が突起する。

クスノキ科 Lauraceae 種子(破片)

茶褐色で球形(5mm~15mm)を呈し、一条の稜線が走りその中央が突起する。ここでは破片だったため、科レベルの同定までである。

モモ *Prunus persica* Batsch 核(完形・半形・破片) バラ科

黄褐色~黒褐色で楕円形を呈し、側面に縁合線が発達する。表面にはモモ特有の隆起がある。

サンショウ属 *Zanthoxylum* 種子(破片) ミカン科

黒色で楕円形を呈し、側面にへそがある。表面には網目模様がある。この分類群はへそが欠落し破片のため、属レベルの同定までである。

ノブドウ *Ampelopsis brevipedunculata* var. *heterophylla* Hara 種子 ブドウ科 長さ×幅: 4.45mm×4.05mm

茶褐色で広卵形を呈す。腹面に「ハ」字状の孔が2つあり、背面のカラザは長く伸びる。

ブドウ属 *Vitis* 種子 ブドウ科 長さ×幅: 5.06mm×3.65mm

茶褐色で卵形を呈し、先端がとがる。腹面には二つの孔があり、背面には先端が楕円形のへそがある。

ブドウ科 Vitaceae 種子(破片) ブドウ科

この分類群は破片でカラザの部分が欠損しているものである。

クマノミズキ *Cornus brachypoda* C. A. Mey. 核(破片) ミズキ科 長さ×幅: 2.70mm×3.00mm

淡褐色で球形を呈す。表面に一本の広い溝がめぐり、数本の細い縦筋が走る。

[草本]

ホタルイ属 *Scirpus* 果実 カヤツリグサ科 長さ×幅：2.04mm×1.65mm、1.97mm×1.87mm

黒褐色で、やや光沢がある。広倒卵形を呈し、断面は両凸レンズ形である。表面には横方向の微細な隆起があり、基部に4～8本の針状の付属物を持つ。

スゲ属 *Carex* 果実 カヤツリグサ科 長さ×幅：2.47mm×2.11mm

茶褐色で倒卵形、扁平である。果皮は柔らかい。

タデ属 *Polygonum* 果実 タデ科 長さ×幅：2.83mm×2.20mm

黒褐色で卵形を呈す。表面にはやや光沢があり、断面は三角形である。

キンボウゲ属 *Ranunculus* 果実 キンボウゲ科 長さ×幅：2.69mm×1.92mm

淡褐色で楕円形を呈す。表面はやや粗く、コルク質である。

## (2) 種実群集の特徴

### 1) 旧河道1 (登録番号2012085-487～493、500)

全て樹木種実で、ヤマモモ1、ツブラジイ1、ブナ科4、ヤマグワ1、クスノキ1、クスノキ科1、モモ8、不明種実2が同定された。

### 2) 旧河道2 (登録番号2012085-494～499、501～503)

全て樹木種実で、マツ属複雑管束亜属1、モモ14が同定された。

### 3) 旧河道1-旧河道2 (2012085-504)

全て樹木種実で、マツ属複雑管束亜属1、モモ3が同定された。

### 4) 旧河道3 (2012085-505)

樹木種実のモモ1が同定された。

### 5) 2012085-486 (北側側溝)

樹木種実のモモ2が同定された。

### 6) 2012085-506 (大澗 報告番号127 内)

樹木種実のヤマモモ2、ブナ科3、カジノキ1、クスノキ科2、サンショウ属1、ノブドウ1、ブドウ属1、ブドウ科1、クモノミズキ1、草本種実のホタルイ属6、スゲ属2、タデ属2、キンボウゲ属1が同定された。

## 5 考察

旧河道1 (登録番号2012085-487～493、500) はモモを主に、ヤマモモ、ツブラジイ、ブナ科、ヤマグワ、クスノキ、クスノキ科が、旧河道2 (登録番号2012085-494～499、501～503) と旧河道1-旧河道2 (2012085-504)、旧河道3 (2012085-505)、2012085-486 (北側側溝) もモモが主であり、他にマツ属複雑管束亜属が同定された。栽培植物のモモが中心となり、他に食用になるのはヤマモモである。ヤマグワやツブラジイも食べられるが、周囲に生育していて反映されたのか、食用に採取されたものの残渣かは不明である。ツブラジイは二次林種だが、クスノキとともに照葉樹林の構成要素でもある。ヤマグワは二次林種で水路際等に生育する。マツ属複雑管束亜属 (アカマツ、クロマツは含まれる) も二次林であり、遺跡周囲が二次林化していたことが推定される。

2012085-506 (大澗127内) の種実類は、多様な種実が同定され、食用にもなるヤマモモ、ブドウ属、二次林種であるカジノキ、サンショウ属、クモノミズキ、ノブドウ、草本のホタルイ属、スゲ属、タデ属、キンボウゲ属などの雑草にあたる水生植物から構成される。この種実類の構成は人為的な有用植物の集積ではなく自然堆積によると考えられ、大澗の埋没時に堆積物とともに入り込んだと考えられる。周囲

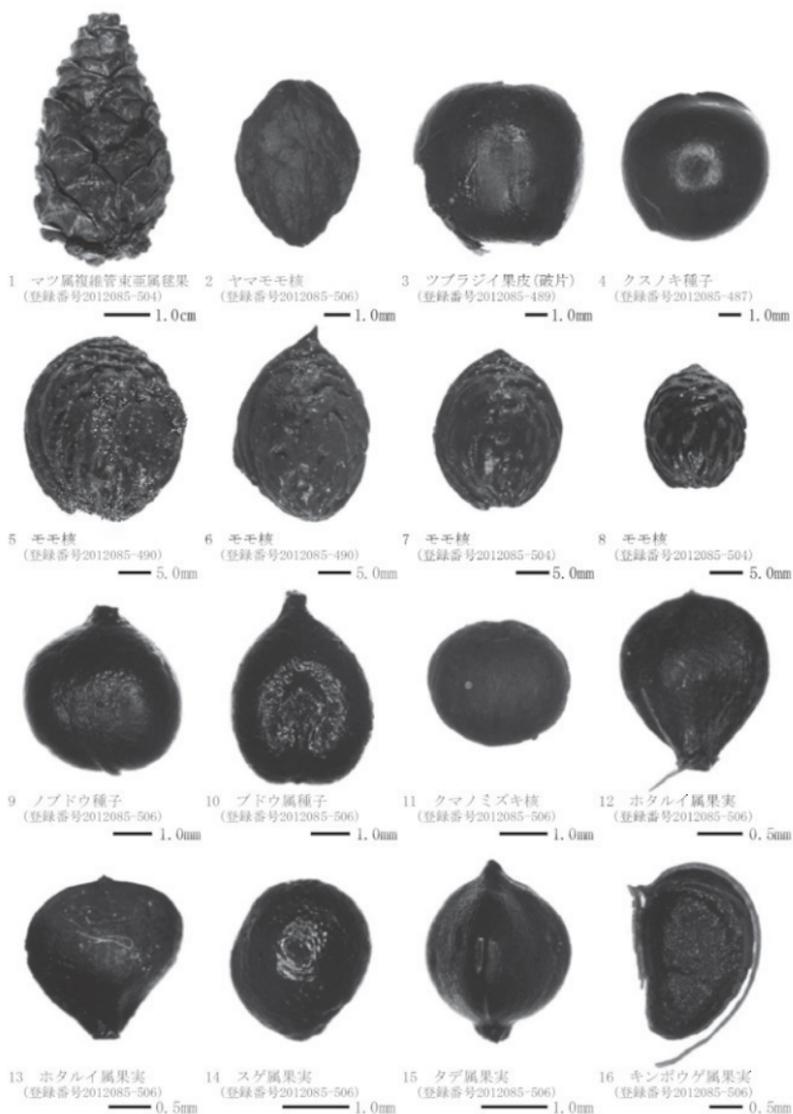
にはカジノキ、サンショウ属、クマノミズキ、ノブドウの二次林種が生育し、大甕の出土地点ないし出土層準ではホタルイ属、スゲ属、タデ属、キンボウゲ属の水生植物が生育し、浅く滞水環境であったと推定される。

#### 6 まとめ

田井A遺跡における種実同定の結果、樹木種実のマツ属複雑管束果属、ヤマモモ、ツブラジイ、ブナ科、カジノキ、ヤマグワ、クスノキ、クスノキ科、モモ、サンショウ属、ノブドウ、ブドウ属、ブドウ科、クマノミズキ、草本種実のホタルイ属、スゲ属、タデ属、キンボウゲ属が同定された。樹木種実では栽培植物ないし二次林種がほとんどで、周辺が二次林化していたことが推定される。2012085-506（大甕 127 内）の種実類は周囲の植生を反映し、大甕埋没時に周囲から堆積物とともに流入した種実類とみなされる。

#### 参考文献

- 笠原安夫（1985）日本雑草図説。要賢堂, 494p.
- 笠原安夫（1988）作物および田畑雑草種類。弥生文化の研究第2巻生業。雄山閣 出版。p.131-139.
- 金原正明（1996）古代モモの形態と品種。月刊考古学ジャーナルNo.409。ニューサイエンス社。p.15-19.
- 南木睦彦（1992）低湿地遺跡の種実。月刊考古学ジャーナルNo.355。ニューサイエンス社。p.18-22.
- 南木睦彦（1993）葉・果実・種子。日本第四紀学会編。第四紀試料分析法。東京大学出版会。p.276-283.



第14図 田井A遺跡の種実

## 第6節 田井A遺跡における昆虫遺体同定

(株)古環境研究所

### 1 はじめに

昆虫の上翅や前胸背板などは比較的強靱なものが多く、堆積物中に残存することがある。堆積物から昆虫遺体を検出しその群集の構成要素を明らかにすることで、過去の植生や古環境の推定、さらに自然改変などの情報を得ることができる。また出土した単体試料等を同定し、トイレ遺構などの特定にも利用される。

ここでは、田井A遺跡で出土した昆虫遺体を同定し、当時の堆積環境及び地理環境を推定する。

### 2 試料

試料は、SR170の砂礫層より出土した昆虫片である。いずれも水洗選別されたものである。

### 3 方法

同定は、形態的特徴および現生標本との対比によって行った。結果は同定レベルによって科、属、種などの階級で示す。

### 4 結果

#### (1) 分類群および出現部位

コウチュウ目1分類群が同定された。試料はいずれも節片に分離しており、破片の状態であった。出現部位は、前胸背板破片と前腿節(右?)破片の2部位である。出現した分類群の写真を第15図に示す。

コウチュウ目 Coleoptera コガネムシ上科 Scarabaeoidea

コガネムシ科 Scarabaeidae ヒメコガネ *Anomala rufocuprea* Motschulsky

[出現部位]

前胸背板 Prothorax 破片3点、前腿節(右) Femnr 1点

#### 5 所見とまとめ

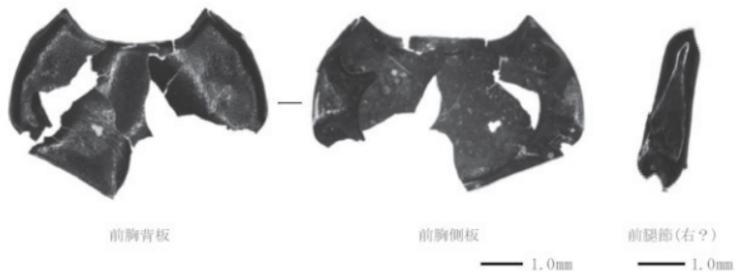
検出された昆虫片は、点刺等の表面構造や形状、色彩等からコガネムシ科のヒメコガネ *Anomala rufocuprea* Motschulsky と同定された。前胸背板破片3点、前腿節(右?)破片1点はいずれも重複がなく、部分的に分離部の形状が合致することなどから同一個体由来する可能性が高いと思われる。前胸背板の破片下面には部分的に前胸背板も認められる。ヒメコガネは食葉性のコガネムシで、6~8月頃に成虫が現れ、クズやイトドリ、ワラビ、クリなど幅広い草や木の葉を食べる。さらに現在では農林業害虫としても知られ、ダイズやラッカセイ、ブドウなどの葉を食害する他、幼虫は土中で様々な植物の根を食べ、シバヤスギ、ヒノキなどの苗木などにも被害を及ぼす。

今回、1個体のヒメコガネから遺跡全体の古環境に言及することは難しいが、草地など人間の介在を受けた植物が広がっていた可能性が指摘できる。

### 参考文献

- 森 勇一 (1995) 静岡草川合遺跡(八反田地区)より得られた昆虫群集について。静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書(第63集)川合遺跡(八反田地区Ⅱ)。静岡県埋蔵文化財調査研究所, 327-329。  
岡島秀治, 1983, 日本の甲虫, 自然観察シリーズ15生態編, 小学館。

・ヒメコガネ



第 15 図 田井 A 遺跡の昆虫遺体

## 第7節 田井A遺跡から出土した動物遺存体

(株)古環境研究所

### 1 はじめに

日本の国土は火山灰性の酸性土壌に広く覆われ、動物遺存体の保存状態には恵まれないのが一般的である。そのため動物遺存体が出土するのは貝塚、石灰岩地帯の洞穴や岩陰などが代表的で、近年では湿地環境の遺跡や遺構からも多くの動物遺存体が報告されている。報告する試料は、全身骨格のなかで最も保存状態に恵まれる歯である。なお、同定に際しては、丸山真史博士にご協力いただいた。

### 2 試料

試料は、旧河道2から出土した歯2点、旧河道3から出土した歯12点、計14点である。

### 3 方法

試料は、肉眼で観察し、現生骨格標本と形態的特徴を比較して種類を同定した。

### 4 結果

旧河道2から出土した試料はウマ (*Equus caballus*) の切歯と臼歯の破片、旧河道3から出土した試料はウマの左右の第2・3・4前臼歯、第1・2・3後臼歯である。

旧河道2の馬歯は、破損が著しく、上下、左右を特定できない。旧河道3の馬歯の左右は同一個体かどうか定かではないが、それぞれの第2前臼歯から第3後臼歯までは同一個体である。出土したすべての臼歯を計測した(第12表)。第2前臼歯から第3後臼歯まで並べた状態で咬合部における全臼歯列長が、それぞれ159.64mm、164.24mmを測る(第12表)。顎骨に植立していないため、精密な臼歯列長の計測値ではないが、およそ体高130～135cmの日本在来の御崎馬や木曾馬に相当する大きさと推定される(註)。また、歯冠高の計測値に基づいた年齢を推定した(註)。各臼歯で求められる推定年齢に幅があり、左が生後6～11年、右が生後6～10年と推定され、いずれも若齢から壮齢の馬と考えられる。

### 5 まとめ

出土した動物遺存体は、いずれも顎骨から遊離したウマの歯である。旧河道2から出土した歯について、歯種を特定することは困難である。旧河道3から出土した歯は、左右の第2前臼歯から第3後臼歯までであり、いずれも歯き盛りの年齢で死亡したウマと考えられる。

註 西中川敏編(1991)に掲載される日本在来馬の計測値と比較した。また、歯冠高による推定年齢は、推定式に依った。

### 参考文献

西中川敏編1991「古代遺跡出土骨から見たわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究」平成2年度文部省科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告

第 11 表 田井A遺跡における馬歯一覧

No.	調査番号	年月日	地区	遺構	土層	備考	大分類	小分類	部位	部分	左右
1	2012085	20120905		旧河道2	検出面		哺乳綱	ウマ	切歯	破片	-
2	2012085	20120905		旧河道2	検出面		哺乳綱	ウマ	臼歯	破片	-
3	2012085	20121026	南1区東側	旧河道3	粗砂		哺乳類	ウマ	臼歯	下顎 P2-M3	右
4	2012085	20121029		旧河道3	黄褐色粗砂		哺乳類	ウマ	臼歯	下顎 P2-M3	左

第 12 表 田井A遺跡における馬歯計測値

No.	歯種	歯冠長	歯冠幅	歯冠高	推定年齢	臼歯列長	
	P2	31.29	12.4	33.42	8～9	84.33	159.64
P3		14.32	39.69	8～9			
P4		15.37	47.95	7～8			
M1		14.15	40.16	9～10	75.46		
M2	25.5	12.8	54.26	7～8			
M3			59.65	6～7			
No. 4	歯種	歯冠長	歯冠幅	歯冠高	推定年齢	臼歯列長	
	P2	30.19	12.91	34.75	7～8	85.28	164.24
P3		14.63	36.77	8～9			
P4	28.23	16.16	47.89	7～8			
M1		14.02	38.75	10～11	79.88		
M2	24.73	13.28	53.02	7～8			
M3	30.46	12.1	57.2	6～7			

咬合面の計測（歯槽部計測は不可）



No. 3 ウマ 臼歯 下顎P2-M3 (右)

— 1.0cm



No. 4 ウマ 臼歯 下顎P2-M3 (左)

— 1.0cm

第 16 図 田井A遺跡の動物遺存体

## 第5章 結 語

### 第1節 遺跡の変遷

今回の本発掘調査区では、縄文時代晩期・弥生時代前期から平安時代に至る、4段階の遺構・遺物が検出された。遺跡内の堆積物の様相からは、いずれの時期においても調査区付近は比較的低湿で、洪水の影響を受けやすい環境であったものと思われる。

【第1段階】 縄文時代晩期～弥生時代前期に相当する。調査区内に広く堆積した粘土層中に遺物が包含されるが、明確な遺構は検出されなかった。遺物の分布も局部的であり、この段階では、調査区内で継続的に人の活動が行われたとは言いが、低湿地における何らかの活動が存在したことは確定である。隣接する横入遺跡において、弥生時代前期の水田、塚などが検出されている点が参考となろう。なお、調査区南西端で検出された時期不明の水田畦畔（第2段階の水田より下位）が、この段階に属する可能性も捨象できない。

【第2段階】 飛鳥時代（7世紀代）を中心とする時期には、調査区内は広く水田化された（下層水田）。水田を被覆する洪水砂中には、8世紀代以降の遺物は含まれない。調査区を北東～南西に90m以上にわたって縦断する大畦畔と、これに直交して取りつく小畦畔によって形成されており、現在の地表で観察される条里型地割と、ほぼ同様の方向性をもつ点が注目される。

【第3段階】 奈良時代（8世紀代）から、平安時代初頭までを含む段階である。第2段階の水田面が洪水により埋没した後、調査区中央部付近において、正南北方向の畦畔をもつ水田面が形成された（上層水田）。上層水田面は、第3章で記載したとおりさらに細分される。調査区北東側では、この段階の古土壌層は厚い洪水砂によって浸食を受けており、遺構は検出されなかった。この段階にはさらに、上層水田面を浸食してほぼ南北方向にのびる複数の河道が、調査区中央部に形成された。この旧河道の堆積物には、奈良時代の土器・木製品が多量に包含されており、上流部における官衙的遺跡の存在が推定できる。また、旧河道内には8か所の塚が構築されており、河道周辺に水田等が存在したことを示している。

【第4段階】 平安時代中期の集落が形成された段階である。調査区北東部に、掘立柱建物跡群が形成され、これらは調査区の南東外へと広がっている。調査区中央部～南西部にかけては、当該時期の遺構は検出されなかったが、調査区壁面における地層断面の検討からは、この段階の古土壌層が調査区全域に広がっていると判断された。より標高の高い調査区北東側に集落が、低い南西側に耕地が形成されていたと推測される。

### 第2節 各段階の遺構・遺物の評価

第1段階の遺物は、調査区全体での検出量がわずかであり、その評価は難しい。志筑川下流域における縄文時代晩期～弥生時代前期の人の活動は、横入遺跡での確定な事例があり、今回の田井A遺跡での事例も、その一部を示すものであろう。

第2段階の下層水田面は、完全な条里型地割とは言えないものの、調査区内で100m近くを直線的に延びる大畦畔は規格性の高さを示しており、地形に沿って形成される、小区画で不定型な水田とは異なるものと言えよう。現地表に見られる条里型地割とはほぼ同一方向を示すことから、本地域における条里

型地割形成の基礎となった可能性も推測しうる。

下層水田面の形成時期は、水田面を被覆する洪水砂内から出土した遺物から、7世紀代と思われる。この段階には、田井A遺跡の西約500mに位置する志筑廃寺が造営されており、このような規格性の高い水田を形成する政治・経済的背景が本地域に存在したことは間違いないであろう。

水田面からは、多数の人および偶蹄類の足跡が検出された。この偶蹄類については、現在のところ牛であったと推定している。なお下層水田面を被覆する洪水砂層より出土した小型青銅鏡については、弥生時代ないし古墳時代に属する遺物であろうが、調査地内では当該時期の遺構面は認められず、調査地近隣の包含層中あるいは古墳にあったものが、洪水により流出したものが、あるいは祭祀的な意味をもって、河道内、あるいは河道付近で使用された結果であるのかは断じがたい。

第3段階の上層水田面については、ほぼ正方位の畦畔が検出されている。これは、下層水田が洪水により埋没した後、田井A遺跡周辺において、新たに正方位の区画をもつ水田が整備された可能性を示唆するものである。しかしながら、8世紀代に形成されたと思われる旧河道群によって浸食をうけていることから、上層水田面の存続期間はごく短いものであったと思われる。

少なくとも3回にわたって形成された旧河道からは、多量の土器とともに、祭祀遺物を中心とした木製品が多数出土した。注目されるのは、木筒3点と人形・斎串等の祭祀遺物である。

木筒のうち2点の文字は判読できないが、1点は「□□□□五把」と判読され、三文字目は「卅」、五文字目は「東」の可能性があるとされた。さらに、この行の下に割書があり、右行は「上□一東五」、左行は「未□二□□」を判読された。これらの内容から、当該木筒は出挙にかかる桶の出納を示すと考えられる。出挙には、官が行うものと私的なものがあるが、いずれにせよ、相当の経済的基盤を有さなければ実施しえないものであろう。

こうした文字資料と、旧河道内から出土した木筒および木製祭祀具を合わせ考えるならば、旧河道上流部に、当該時期の官衙ないしは有力豪族の拠点施設等が存在した可能性は極めて高いと言わねばならない。田井A遺跡が所在する津名郡の郡衙は、約4km西に所在する郡家長谷遺跡が推定地となっているが、田井A遺跡の旧河道上流部には、郡衙に匹敵する施設が存在した可能性が高いと言えよう。木製品・土器類の水磨が進行していないことから、上流部の遺跡は、田井A遺跡に近く近接して存在すると推定される。なお、今回出土した木筒は、奈良時代のものとしては淡路島内初の事例である。

また人形には墨書で冠帽、顔、衣服等を表現した事例が多く見られるが、このように表現が多彩な事例は卑下でも稀有のものであり、この点からも注目されてよい遺跡である。

第4段階にあたる平安時代中期に属する建物跡群は、当該時期の一般的な集落の規模を超えるものではない。しかし、掘立柱建物跡内に鍛冶炉が設けられた事例はきわめて数少ないものと思われることから、平安時代の集落内における小鍛冶の実態を示す好資料と言えよう。

### 第3節 自然科学的分析の評価

既述のように田井A遺跡の周辺は、古代に至るまで低地環境が継続していたと考えられている。今回の調査において、青木智哉氏（立命館大学）の指導の下に実施した深掘調査においても、遺構面より下位の堆積物は、灰色～青灰色粘土層と黒色粘土層の互層状を呈する部分が認められ、低湿地環境であったことを示唆している。加速器質量分析計による放射性炭素年代測定（AMS）によれば、このような環境は、調査地周辺では縄文時代後期～晩期ごろまで継続していたと思われる。ただし、この間の植生

を明らかにするために実施した花粉分析では、残念ながら良好な結果は得られなかった。

下層水田面にかかる試料による年代測定（AMS）では、概ね古墳時代後期～飛鳥時代の年代が示されており、これは、下層水田面を被覆する洪水砂中の遺物による判断と整合的である。

旧河道内に構築された堰の杭の樹種同定では、コナラ属が優勢であることが示された。1m～2mという長く、ほぼ同じ太さの杭を多数準備することは、自然林の伐採のみでは困難と思われる。このようなサイズの杭を多数準備するために、最も効果的なのは、かつて近畿の里山の風景であった薪炭林のような管理法であろう。コナラ属の雑木の幹を一定の高さで伐採し、そこから派生する枝を、一定年数ごとに伐採利用するという方法である。この方法に拠れば、比較的直線的に伸びた一定の太さの枝を、多数確保することが可能である。奈良時代前後、田井 A 遺跡周辺においても、このような里山林の管理が行われていた可能性があらう。

人形を中心とした祭祀遺物の樹種同定では、調査時の予測どおり、モミ属が卓越し、ヒノキがこれに次ぐことが明らかとなった。このような樹種の素材が、一元的に供給されていたのが、在地で個別的な素材確保が行われていたのか、今後、注目されてよいだろう。

旧河道 2・3 中で検出された根株の樹種は、ヤナギ属であった。ヤナギ属には湿地を好むものがあり、現在の河畔林でもそのような景観は珍しくない。旧河道 2・3 は河畔林が成立しうる程度の期間は、河道として機能していたと判断できる。これは、堰を構築して水利を図るという営為が一定期間おこなわれていたという考古学的判断と整合的である。

旧河道中および洪水砂中より出土した動物歯は、すべて牡鹿の馬歯と同定された。奈良時代の旧河道ないしこれを被覆する洪水砂であり、当該期に田井 A 遺跡周辺で馬の利用が盛んであったことを示すものだろう。牡鹿での死亡が、自然死であるのか屠殺であるのかは不明だが、祭祀遺物を多く出土していることとの関連については、今後の調査で注意すべきであろう。

旧河道中より検出された甲虫の鞘翅は、ヒメコガネと同定された。ヒメコガネはマメ類、ブドウ、クリなどの葉を食害することが知られている。こうした植物は、人為的な環境において相対的に優勢であることから、河道形成時期には、遺跡周辺に畑地、里山といった人為環境が成立していた可能性がある。昆虫類は、植物よりも鋭敏に環境変化を示すことが多く、遺跡出土の昆虫遺体には、今後、さらなる注意がはられる必要があるだろう。

# 遺物一覽表



出土器一覧表1

器名	器種	出土層	125	130	140	150	160	170	180	190	200	210	220	230	240	250	260	270	280	290	300	310	320	330	340	350	360	370	380	390	400	410	420	430	440	450	460	470	480	490	500	510	520	530	540	550	560	570	580	590	600	610	620	630	640	650	660	670	680	690	700	710	720	730	740	750	760	770	780	790	800	810	820	830	840	850	860	870	880	890	900	910	920	930	940	950	960	970	980	990	1000																																																																																																																																																																								
1	30	75	1.0x0.5	0.4x	0.14	0.0012	0.01	0.1	1.1	6.2	11.0	15.0	19.0	23.0	27.0	31.0	35.0	39.0	43.0	47.0	51.0	55.0	59.0	63.0	67.0	71.0	75.0	79.0	83.0	87.0	91.0	95.0	99.0	103.0	107.0	111.0	115.0	119.0	123.0	127.0	131.0	135.0	139.0	143.0	147.0	151.0	155.0	159.0	163.0	167.0	171.0	175.0	179.0	183.0	187.0	191.0	195.0	199.0	203.0	207.0	211.0	215.0	219.0	223.0	227.0	231.0	235.0	239.0	243.0	247.0	251.0	255.0	259.0	263.0	267.0	271.0	275.0	279.0	283.0	287.0	291.0	295.0	299.0	303.0	307.0	311.0	315.0	319.0	323.0	327.0	331.0	335.0	339.0	343.0	347.0	351.0	355.0	359.0	363.0	367.0	371.0	375.0	379.0	383.0	387.0	391.0	395.0	399.0	403.0	407.0	411.0	415.0	419.0	423.0	427.0	431.0	435.0	439.0	443.0	447.0	451.0	455.0	459.0	463.0	467.0	471.0	475.0	479.0	483.0	487.0	491.0	495.0	499.0	503.0	507.0	511.0	515.0	519.0	523.0	527.0	531.0	535.0	539.0	543.0	547.0	551.0	555.0	559.0	563.0	567.0	571.0	575.0	579.0	583.0	587.0	591.0	595.0	599.0	603.0	607.0	611.0	615.0	619.0	623.0	627.0	631.0	635.0	639.0	643.0	647.0	651.0	655.0	659.0	663.0	667.0	671.0	675.0	679.0	683.0	687.0	691.0	695.0	699.0	703.0	707.0	711.0	715.0	719.0	723.0	727.0	731.0	735.0	739.0	743.0	747.0	751.0	755.0	759.0	763.0	767.0	771.0	775.0	779.0	783.0	787.0	791.0	795.0	799.0	803.0	807.0	811.0	815.0	819.0	823.0	827.0	831.0	835.0	839.0	843.0	847.0	851.0	855.0	859.0	863.0	867.0	871.0	875.0	879.0	883.0	887.0	891.0	895.0	899.0	903.0	907.0	911.0	915.0	919.0	923.0	927.0	931.0	935.0	939.0	943.0	947.0	951.0	955.0	959.0	963.0	967.0	971.0	975.0	979.0	983.0	987.0	991.0	995.0	999.0	1000

出土器一覧表2

器名	器種	出土層	出土時期	1/25	原寸	重量	検出数	検出率	色澤	形状	取上	備考	数量
29	38	180B3	Ⅷ	5004	16.6	4.0	14.6	1.9	土色(黄褐色)	丸	埋土層から発見	丸	100
30	37	180B3	Ⅷ	5004	16.6	2.3	6.2	10.0	土色(黄褐色)	丸	埋土層から発見	丸	100
31	37	180B3	ⅧA	5004	15.5	3.6	9.4	6.0	土色(黄褐色)	丸	埋土層から発見	丸	107
32	37	180B3	Ⅷ	5002	16.6	2.0	10.8	1.0	土色(黄褐色)	丸	埋土層から発見	丸	3
33	37	180B3	Ⅷ	5008	16.6	3.0	10.8	1.0	土色(黄褐色)	丸	埋土層から発見	丸	3
34	37	180B3	Ⅷ	5009	16.6	4.1	10.8	1.0	土色(黄褐色)	丸	埋土層から発見	丸	2
35	37	180B3	Ⅷ	5008	14.15	1.25	10.8	0.1	土色(黄褐色)	丸	埋土層から発見	丸	4
36	37	180B3	Ⅷ	5009	13.3	3.15	10.8	0.1	土色(黄褐色)	丸	埋土層から発見	丸	1
37	37	180B3	Ⅷ	18000000	13.000000	13.000000	26.00	13.00	土色(黄褐色)	丸	埋土層から発見	丸	52
38	37	180B3	Ⅷ	5001	16.6	2.0	13.0	1.0	土色(黄褐色)	丸	埋土層から発見	丸	142
39	37	180B3	ⅧA	5001	16.6	3.2	13.0	1.0	土色(黄褐色)	丸	埋土層から発見	丸	131
40	37	180B3	Ⅷ	5001	16.6	3.0	13.0	1.0	土色(黄褐色)	丸	埋土層から発見	丸	141
41	37	180B3	Ⅷ	5001	16.6	3.0	13.0	1.0	土色(黄褐色)	丸	埋土層から発見	丸	121
42	37	180B3	Ⅷ	5001	16.6	2.0	13.0	1.0	土色(黄褐色)	丸	埋土層から発見	丸	137
43	37	180B3	ⅧA	5001	16.6	3.0	13.0	1.0	土色(黄褐色)	丸	埋土層から発見	丸	136
44	37	180B3	Ⅷ	5001	16.6	3.0	13.0	1.0	土色(黄褐色)	丸	埋土層から発見	丸	130
45	37	180B3	ⅧA	5001	16.6	3.1	13.0	1.0	土色(黄褐色)	丸	埋土層から発見	丸	132
46	37	180B3	Ⅷ	5001	16.6	4.0	13.0	1.0	土色(黄褐色)	丸	埋土層から発見	丸	140
47	38	180B3	Ⅷ	5001	16.6	2.6	13.0	1.0	土色(黄褐色)	丸	埋土層から発見	丸	103
48	38	180B3	Ⅷ	5001	16.6	12.2	13.0	1.0	土色(黄褐色)	丸	埋土層から発見	丸	133
49	38	180B3	Ⅷ	5001	16.6	23.3	13.0	1.0	土色(黄褐色)	丸	埋土層から発見	丸	134
50	38	180B3	Ⅷ	5001	16.6	4.3	13.0	1.0	土色(黄褐色)	丸	埋土層から発見	丸	130
51	38	180B3	Ⅷ	5001	16.6	5.6	13.0	1.0	土色(黄褐色)	丸	埋土層から発見	丸	129
52	38	180B3	Ⅷ	5001	16.6	5.1	13.0	1.0	土色(黄褐色)	丸	埋土層から発見	丸	127
53	38	180B3	Ⅷ	5001	16.6	5.3	13.0	1.0	土色(黄褐色)	丸	埋土層から発見	丸	122
54	38	180B3	Ⅷ	5001	16.6	4.3	13.0	1.0	土色(黄褐色)	丸	埋土層から発見	丸	146
55	38	180B3	Ⅷ	5001	16.6	4.2	13.0	1.0	土色(黄褐色)	丸	埋土層から発見	丸	140
56	38	180B3	Ⅷ	5001	16.6	3.6	13.0	1.0	土色(黄褐色)	丸	埋土層から発見	丸	140

出土器一覽表3

器名	器種	出土層	位置	出土時期	寸法	重量	材質	形状・文様	色澤	図式	取上	調査	備考	収蔵庫
57	57-79	0B20	0B20	0B20	100	267	鉄	100mm×100mm×10mm 100mm×100mm×10mm	黒	片断	100mm×100mm×10mm 100mm×100mm×10mm	100mm×100mm×10mm 100mm×100mm×10mm	片断	201105
58	58-38	0A20	0A20	0A20	100	495	鉄	100mm×100mm×10mm	黒	片断	100mm×100mm×10mm	100mm×100mm×10mm	片断	201105
59	59-38	0A20	0A20	0A20	100	535	鉄	100mm×100mm×10mm	黒	片断	100mm×100mm×10mm	100mm×100mm×10mm	片断	201105
60	60-38	0A20	0A20	0A20	100	610	鉄	100mm×100mm×10mm	黒	片断	100mm×100mm×10mm	100mm×100mm×10mm	片断	201105
61	61-38	0A20	0A20	0A20	100	610	鉄	100mm×100mm×10mm	黒	片断	100mm×100mm×10mm	100mm×100mm×10mm	片断	201105
62	62-38	0A20	0A20	0A20	100	610	鉄	100mm×100mm×10mm	黒	片断	100mm×100mm×10mm	100mm×100mm×10mm	片断	201105
63	63-38	0A20	0A20	0A20	100	610	鉄	100mm×100mm×10mm	黒	片断	100mm×100mm×10mm	100mm×100mm×10mm	片断	201105
64	64-38	0A20	0A20	0A20	100	610	鉄	100mm×100mm×10mm	黒	片断	100mm×100mm×10mm	100mm×100mm×10mm	片断	201105
65	65-38	0A20	0A20	0A20	100	610	鉄	100mm×100mm×10mm	黒	片断	100mm×100mm×10mm	100mm×100mm×10mm	片断	201105
66	66-38	0A20	0A20	0A20	100	610	鉄	100mm×100mm×10mm	黒	片断	100mm×100mm×10mm	100mm×100mm×10mm	片断	201105
67	67-38	0A20	0A20	0A20	100	610	鉄	100mm×100mm×10mm	黒	片断	100mm×100mm×10mm	100mm×100mm×10mm	片断	201105
68	68-38	0A20	0A20	0A20	100	610	鉄	100mm×100mm×10mm	黒	片断	100mm×100mm×10mm	100mm×100mm×10mm	片断	201105
69	69-38	0A20	0A20	0A20	100	610	鉄	100mm×100mm×10mm	黒	片断	100mm×100mm×10mm	100mm×100mm×10mm	片断	201105
70	70-38	0A20	0A20	0A20	100	610	鉄	100mm×100mm×10mm	黒	片断	100mm×100mm×10mm	100mm×100mm×10mm	片断	201105
71	71-38	0A20	0A20	0A20	100	610	鉄	100mm×100mm×10mm	黒	片断	100mm×100mm×10mm	100mm×100mm×10mm	片断	201105
72	72-38	0A20	0A20	0A20	100	610	鉄	100mm×100mm×10mm	黒	片断	100mm×100mm×10mm	100mm×100mm×10mm	片断	201105
73	73-38	0A20	0A20	0A20	100	610	鉄	100mm×100mm×10mm	黒	片断	100mm×100mm×10mm	100mm×100mm×10mm	片断	201105
74	74-38	0A20	0A20	0A20	100	610	鉄	100mm×100mm×10mm	黒	片断	100mm×100mm×10mm	100mm×100mm×10mm	片断	201105
75	75-38	0A20	0A20	0A20	100	610	鉄	100mm×100mm×10mm	黒	片断	100mm×100mm×10mm	100mm×100mm×10mm	片断	201105
76	76-38	0A20	0A20	0A20	100	610	鉄	100mm×100mm×10mm	黒	片断	100mm×100mm×10mm	100mm×100mm×10mm	片断	201105
77	77-38	0A20	0A20	0A20	100	610	鉄	100mm×100mm×10mm	黒	片断	100mm×100mm×10mm	100mm×100mm×10mm	片断	201105
78	78-38	0A20	0A20	0A20	100	610	鉄	100mm×100mm×10mm	黒	片断	100mm×100mm×10mm	100mm×100mm×10mm	片断	201105
79	79-38	0A20	0A20	0A20	100	610	鉄	100mm×100mm×10mm	黒	片断	100mm×100mm×10mm	100mm×100mm×10mm	片断	201105
80	80-38	0A20	0A20	0A20	100	610	鉄	100mm×100mm×10mm	黒	片断	100mm×100mm×10mm	100mm×100mm×10mm	片断	201105
81	81-38	0A20	0A20	0A20	100	610	鉄	100mm×100mm×10mm	黒	片断	100mm×100mm×10mm	100mm×100mm×10mm	片断	201105
82	82-38	0A20	0A20	0A20	100	610	鉄	100mm×100mm×10mm	黒	片断	100mm×100mm×10mm	100mm×100mm×10mm	片断	201105
83	83-38	0A20	0A20	0A20	100	610	鉄	100mm×100mm×10mm	黒	片断	100mm×100mm×10mm	100mm×100mm×10mm	片断	201105
84	84-38	0A20	0A20	0A20	100	610	鉄	100mm×100mm×10mm	黒	片断	100mm×100mm×10mm	100mm×100mm×10mm	片断	201105
85	85-38	0A20	0A20	0A20	100	610	鉄	100mm×100mm×10mm	黒	片断	100mm×100mm×10mm	100mm×100mm×10mm	片断	201105
86	86-38	0A20	0A20	0A20	100	610	鉄	100mm×100mm×10mm	黒	片断	100mm×100mm×10mm	100mm×100mm×10mm	片断	201105









出土器一覽表8

器名(器種)	出土層	器種	出土層	1/25	縮尺	高さ	口径	重量	材質	形状	取上	調査	備考	図録番号
208	41	磁器	10000	127	1/10	61.2	94		白磁	10000	10000	10000	10000	208
209	41	磁器	10000	118	4.1	14.2	96		白磁	10000	10000	10000	10000	209
210	41	磁器	10000	114	3.6	61.4	94		白磁	10000	10000	10000	10000	210
211	41	磁器	10000	123	4.3	61.3	94		白磁	10000	10000	10000	10000	211
212	41	磁器	10000	111	3.1	61.3	94		白磁	10000	10000	10000	10000	212
213	41	磁器	10000	111	4.1	61.3	94		白磁	10000	10000	10000	10000	213
214	41	磁器	10000	127	3.6	14.5	94		白磁	10000	10000	10000	10000	214
215	41	磁器	10000	111	3.1	61.3	94		白磁	10000	10000	10000	10000	215
216	41	磁器	10000	111	3.1	61.3	94		白磁	10000	10000	10000	10000	216
217	41	磁器	10000	111	3.1	61.3	94		白磁	10000	10000	10000	10000	217
218	41	磁器	10000	111	3.1	61.3	94		白磁	10000	10000	10000	10000	218
219	41	磁器	10000	111	3.1	61.3	94		白磁	10000	10000	10000	10000	219
220	41	磁器	10000	111	3.1	61.3	94		白磁	10000	10000	10000	10000	220
221	41	磁器	10000	111	3.1	61.3	94		白磁	10000	10000	10000	10000	221
222	41	磁器	10000	111	3.1	61.3	94		白磁	10000	10000	10000	10000	222
223	41	磁器	10000	111	3.1	61.3	94		白磁	10000	10000	10000	10000	223
224	41	磁器	10000	111	3.1	61.3	94		白磁	10000	10000	10000	10000	224
225	41	磁器	10000	111	3.1	61.3	94		白磁	10000	10000	10000	10000	225
226	41	磁器	10000	111	3.1	61.3	94		白磁	10000	10000	10000	10000	226
227	41	磁器	10000	111	3.1	61.3	94		白磁	10000	10000	10000	10000	227
228	41	磁器	10000	111	3.1	61.3	94		白磁	10000	10000	10000	10000	228
229	41	磁器	10000	111	3.1	61.3	94		白磁	10000	10000	10000	10000	229
230	41	磁器	10000	111	3.1	61.3	94		白磁	10000	10000	10000	10000	230
231	41	磁器	10000	111	3.1	61.3	94		白磁	10000	10000	10000	10000	231
232	41	磁器	10000	111	3.1	61.3	94		白磁	10000	10000	10000	10000	232
233	41	磁器	10000	111	3.1	61.3	94		白磁	10000	10000	10000	10000	233
234	41	磁器	10000	111	3.1	61.3	94		白磁	10000	10000	10000	10000	234
235	41	磁器	10000	111	3.1	61.3	94		白磁	10000	10000	10000	10000	235
236	41	磁器	10000	111	3.1	61.3	94		白磁	10000	10000	10000	10000	236
237	41	磁器	10000	111	3.1	61.3	94		白磁	10000	10000	10000	10000	237
238	41	磁器	10000	111	3.1	61.3	94		白磁	10000	10000	10000	10000	238
239	41	磁器	10000	111	3.1	61.3	94		白磁	10000	10000	10000	10000	239
240	41	磁器	10000	111	3.1	61.3	94		白磁	10000	10000	10000	10000	240
241	41	磁器	10000	111	3.1	61.3	94		白磁	10000	10000	10000	10000	241
242	41	磁器	10000	111	3.1	61.3	94		白磁	10000	10000	10000	10000	242
243	41	磁器	10000	111	3.1	61.3	94		白磁	10000	10000	10000	10000	243
244	41	磁器	10000	111	3.1	61.3	94		白磁	10000	10000	10000	10000	244
245	41	磁器	10000	111	3.1	61.3	94		白磁	10000	10000	10000	10000	245
246	41	磁器	10000	111	3.1	61.3	94		白磁	10000	10000	10000	10000	246
247	41	磁器	10000	111	3.1	61.3	94		白磁	10000	10000	10000	10000	247

出土器一覧表9

器名	器種	出土層	出土位置	高さ	口径	底径	重量	形状	色澤	破損	図式	取上	調査	備考	図番	
208	47	磁器	106号	磁器	106号	71	磁器	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口
209	47	磁器	106号	磁器	106号	22	磁器	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口
210	47	磁器	106号	磁器	106号	55	4.9	27.0	1.300	丸口						
211	47	磁器	106号	磁器	106号	207	2.1		丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口
212	47	磁器	106号	磁器	106号	106	7.6		丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口
213	47	磁器	106号	磁器	106号	210	1.0		丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口
214	47	磁器	106号	磁器	106号	215	3.2		丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口
215	47	磁器	106号	磁器	106号	216	1.5		丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口
216	47	磁器	106号	磁器	106号	217	3.75		丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口
217	47	磁器	106号	磁器	106号	600			丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口
218	47	磁器	106号	磁器	106号	153	4.2		丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口
219	47	磁器	106号	磁器	106号	120	3.2		丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口
220	47	磁器	106号	磁器	106号	123	3.2	14.2	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口
221	47	磁器	106号	磁器	106号	4.8	27.8		丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口
222	47	磁器	106号	磁器	106号	20	10.2		丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口
223	47	磁器	106号	磁器	106号	169	1.0		丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口
224	47	磁器	106号	磁器	106号	211	2.3		丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口
225	47	磁器	106号	磁器	106号	4.2			丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口
226	47	磁器	106号	磁器	106号	62	7.7		丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口
227	47	磁器	106号	磁器	106号	7.7	1.3		丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口
228	47	磁器	106号	磁器	106号	6.6	1.8		丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口
229	47	磁器	106号	磁器	106号	8.0	1.3		丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口
230	47	磁器	106号	磁器	106号	4.5	1.7		丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口
231	47	磁器	106号	磁器	106号	14.0	4.4		丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口
232	47	磁器	106号	磁器	106号	14.0	4.4		丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口
233	47	磁器	106号	磁器	106号	16.2	2.8		丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口
234	47	磁器	106号	磁器	106号	3.2			丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口
235	47	磁器	106号	磁器	106号	1.5			丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口
236	47	磁器	106号	磁器	106号	1.5			丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口	丸口

出土石器一覽表

報告番号	図版番号	写真図版番号	種別	器種	出土遺構	法量 (mm.g)				備考	調査番号	実測番号
						長さ	幅	厚さ	重量			
S1	45	96	石器	石鏃	包含層 旧河道1_北東半	18.0	18.4	3.3	1.0		139	201185
S2	45	96	石器	披熟礫		47.8	66.5	38.0	147.9		160	201185
S3	45	96	石製品	凹礫	機城掘削	84.5	77.5	76.5	634.9	赤化、披熟小	369	2012085

出土金属器一覽表

報告番号	図版番号	写真図版番号	種別	器種	出土遺構	法量 (mm.g)				備考	調査番号	実測番号
						長さ	幅	厚さ	重量			
M1	45	96	銅製品	鏡	上層遺構面精査	面径 40.0	面厚 3.0	総高 2.5	15.2		鉄1	201185
M2	45	96	鉄製品	鉄段玉	包含層	直径 10.7			7.1		鉄2	201185
M3	45	96	鉄製品	釘	上層遺構面精査	長さ 51.5	幅 6.5	厚さ 6.0	2.1		鉄3	2012085

出土石器一覧表1

調査番号	区画番号	発見物番号	種別	出土位置	法量 (mm)		幅	厚さ	残存	本取り	分析番号		備考
					口縁-基部	長さ					201182	201205	
W1	66	97	磨製片	田原直1 北平	266	47	0.7	頭部+体部上半	残日	磨製あり	6	モ1風	
W2	66	97	磨製片	田原直1 北平	113	32	0.5	0.7 頭部	残日	磨製あり	8	モ1風	
W3	66	97	磨製片	田原直1 南西平	438	42	0.6	頭部	残日	磨製あり	18	モ1風	
W4	66	97	磨製片	田原直1 南西平	105	46	0.7	頭部	残日	磨製あり	5	モ1風	
W5	66	97	磨製片	田原直1 北平	902	53	1.1	頭部+体部	残日	磨製あり	4	モ1風	
W6	66	97	磨製片	田原直1 北平	428	38	0.5	頭部+体部	残日	磨製あり	9	モ1風	
W7	66	97	磨製片	田原直1 南西平	235	43	0.8	頭部+体部上半	残日	磨製あり	39	モ1風	
W8	66	98	磨製片	田原直1 東野	148	57	1.1	11は残存のみ欠損	残日	磨製あり	26	モ1風	
W9	66	98	磨製片	田原直1 赤子	71	41	0.4	頭部+体部	残日	磨製あり	11	モ1風	
W10	66	98	磨製片	田原直1 赤子	211	43	0.5	頭部+体部	残日	磨製あり	5	モ1風	
W11	66	98	磨製片	田原直1 北平	211	53	0.2	頭部+体部上半	残日	磨製あり	7	モ1風	
W12	47	99	磨製片	田原直1	95	32	0.2	頭部+基部の一部	残日	磨製あり	2	ヒノキ	W13と同一体の可能性がある
W13	47	99	磨製片	田原直1 南平	115	85	0.3	2箇所中央	残日	磨製あり		ヒノキ	W13と同一体の可能性がある 下部は斜めに切り込みを入れたと推定している
W14	47	99	磨製片	田原直1 南西平	215	49	0.9	一方の片は石製物工が施さる	残日	磨製あり	4	モ1風	
W15	47	99	磨製片	田原直1 東野	149	57	1.2	頭部+体部	残日	磨製あり	3	モ1風	
W16	47	99	磨製片	田原直1 東野	521	39	0.9	頭部+体部+基部上半	残日	磨製あり	29	モ1風	
W17	47	99	磨製片	田原直1 東野	430	33	0.3	11は残存のみ欠損	残日	磨製あり	30	ヒノキ	
W18	47	99	磨製片	田原直1 北平	287	46	0.9	頭部+体部+基部の一部	残日	磨製あり	46	モ1風	
W19	47	99	磨製片	田原直1 北平	215	37	0.5	体部の一部+基部の一部	残日	磨製あり		スサ	
W20	47	99	磨製片	田原直1 北平	79	37	0.5	体部上半	残日	磨製あり	8	ヒノキ	
W21	47	99	磨製片	田原直1	145	48	0.6	体部上半	残日	磨製あり		ヒノキ	
W22	47	99	磨製片	田原直1 南平	281	45	0.3	体部下半+基部の一部	残日	磨製あり		ヒノキ	
W23	47	99	磨製片	田原直1 南平	107	18	0.2	体部	残日	磨製あり		ヒノキ	
W24	47	99	磨製片	田原直1 南平	128	14	0.3	体部	残日	磨製あり		ヒノキ	
W25	47	99	磨製片	田原直1 赤子	383	62	0.7	体部	残日	磨製あり	12	モ1風	
W26	47	99	磨製片	田原直1 南西平	74	14	0.5	基部の一部	残日	磨製あり	17	モ1風	
W27	47	99	磨製片	田原直1	363	13	0.9	空面側片	残日	磨製あり		ヒノキ	
W28	48	100	水曜	田原直1	133	19	0.4		残日	磨製あり		ヒノキ	下流側に加工
W29	48	100	水曜	田原直1	76	20	0.5	1箇所欠片あり	残日	磨製あり		ヒノキ	下流側に加工
W30	48	100	水曜	田原直1 赤子	90	24	0.7		残日	磨製あり		ヒノキ	
W31	48	100	水曜	田原直1	93	19	0.7		残日	磨製あり		ヒノキ	
W32	48	100	水曜	田原直1 田原直2付近	83	23	0.6	下流側片	残日	磨製あり	14	モ1風	
W33	48	100	水曜	田原直1 南西平	127	32	0.9	空面側片	残日	磨製あり		ヒノキ	
W34	48	100	水曜	田原直1 南平	149	15	1.0		残日	磨製あり		ヒノキ	
W35	48	100	水曜	田原直1 南西平	139	24	0.7		残日	磨製あり		ヒノキ	
W36	48	100	水曜	田原直1 赤子	113	40	0.5		残日	磨製あり		ヒノキ	
W37	48	100	水曜	田原直1 南平	109	38	0.8		残日	磨製あり		ヒノキ	
W38	48	100	水曜	田原直1 南西平	109	38	0.8		残日	磨製あり		ヒノキ	
W39	48	100	水曜	田原直1 南西平	172	25	0.8		残日	磨製あり	15	ヒノキ	両面で取り込みを有している
W40	48	100	水曜	田原直1 北平	147	42	0.5	2箇所欠片あり 1箇所のみ貫通	残日	磨製あり		ヒノキ	磨製あり
W41	48	100	水曜	田原直1 南平	210	15	1.97	2箇所	残日	磨製あり	11	ヒノキ	両面ともが磨痕あり
W42	48	100	水曜	田原直1 南平	185	307	1.2	2箇所	残日	磨製あり	10	ヒノキ	両面ともが磨痕あり

出土土器一覧表2

調査番号	区画番号	発掘番号	器物番号	種別	出土層	出土層番号	高さ (cm)	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	保存	採取日	発掘番号	調査番号	備考
W43	48	100	青砂	土師皿1	南西半	(158)	1.4	07.2	16.5	9.2	0.6		1.2 (口縁部はわずかに残存) 中央に方形の孔 周辺に土師面(口縁)の残あり	既日	2011RS1_2012RS5	細腹 黒を再利用したもの。	
W44	48	100	青砂	土師皿1	南西半								同上	既日			同一形体
W45	49	101	青砂	土師皿1	南西半	174							同上	既日	32		同一形体 内面黒色染あり
W46	49	101	青砂	土師皿1	南西半		13.7		9.9	0.4			同上	既日	30		同一形体
W46	49	101	青砂	土師皿1	南西半	230			17.8	12.8	0.5	1.2		既日	42		同一形体
W47	49	101	青砂	土師皿1	南西半	195			14.9	4.8	0.4			既日	45	1	同一形体
W48	49	101	青砂	土師皿1	南西半		14.5		4.9	0.3			同じ変形	既日			同一形体
W49	49	101	青砂	土師皿1	南西半		46.3		8.3	1.2			13個(同じ変形) 1個(口縁部)のみ	既日	44		同一形体
W50	50	102	青砂	土師皿1	南西半		9.9		5.2	0.2			2個(底面あり)	既日	20		ヒノキ材
W51	50	102	青砂	土師皿1	南西半		8.8		5.6	0.5				既日			
W52	50	102	青砂	土師皿1	南西半		9.6		3.7	0.6				既日			
W53	50	102	青砂	土師皿1	北東		6.8		3.0	0.5				既日	11		
W54	50	102	青砂	土師皿1	北東		2.9		2.2	0.5				既日	10		
W55	50	102	青砂	土師皿1	北東		16.2		5.0	0.7			口縁の一部	既日	10		
W56	50	102	青砂	土師皿1	南西半		13.2		1.8	1.5				分断状況	9		
W57	50	102	青砂	土師皿1	南西半		11.5		2.5	1.3				分断状況	24		
W58	50	102	青砂	土師皿1	南西半		4.1		2.9	0.6				既日	31		
W59	50	102	青砂	土師皿1	南西半		4.9		1.5	1.0			分断状況	既日			下腹広から加工しているか 下腹跡に加工
W60	50	102	青砂	土師皿1	南西半		24.6		11	0.9				既日			下腹は斜めに割付加工 口縁部は斜めに割付加工 腹面は斜めに割付加工 腹面は斜めに割付加工
W61	50	102	青砂	土師皿1	南西半		28.0		2.3	2.0				既日			下腹は斜めに加工
W62	50	102	青砂	土師皿1	南西半		20.1		3.9	1.3				既日			下腹は斜めに加工
W63	50	102	青砂	土師皿1	南西半		25.6		2.5	1.0			上方に乳丁痕所 下方に乳丁痕所 (6.5x1.0mm)あり	既日			
W64	50	102	青砂	土師皿1	南西半		22.9		6.1	1.3				既日	41		ヒノキ
W65	50	102	青砂	土師皿1	南西半		22.7		5.1	1.0				既日	19		ヒノキ
W66	50	102	青砂	土師皿1	南西半		17.7		3.4	1.1				既日	31		ヒノキ
W67	50	102	青砂	土師皿1	南西半		11.2		7.9	2.4	3.6			既日	36		ヒノキ
W68	51	103	青砂	土師皿1	南西半		17.9		5.9	1.9			口縁部(口縁)の残あり(窪み) 口縁部(口縁)の残あり(窪み)	既日	40		ヒノキ
W69	51	103	青砂	土師皿1	南西半		31.1		4.3	2.0			口縁部は残存 口縁部(口縁)の残あり(窪み)	既日		3	ヒノキ
W70	51	103	土木材	土師皿1	南西半		13.8		2.5	2.6			痕跡あり 側面残存	心持木	16		コナラ 腹口 ヒノキ 腹口 ナラ 腹口
W71	51	103	土木材	土師皿1	南西半		26.7		6.2	5.9				心持木	37		コナラ 腹口 ヒノキ 腹口 ナラ 腹口
W72	51	103	土木材	土師皿1	南西半		29.8		6.1	6.4			側面残存	心持木			コナラ 腹口 ヒノキ 腹口 ナラ 腹口
W73	51	103	土木材	土師皿1	南西半		25.0		9.3	8.0				心持木			コナラ 腹口 ヒノキ 腹口 ナラ 腹口
W74	51	103	土木材	土師皿1	南西半		27.0		6.9	6.0				心持木			コナラ 腹口 ヒノキ 腹口 ナラ 腹口
W75	51	103	土木材	土師皿1	南西半		24.3		3.3	3.3			側面残存	心持木			コナラ 腹口 ヒノキ 腹口 ナラ 腹口
W76	51	103	土木材	土師皿1	南西半		107.9		0.8	0.8			側面残存	心持木			コナラ 腹口 ヒノキ 腹口 ナラ 腹口
W77	52	104	土木材	土師皿2	南西半		8.1		0.9	0.3			上方側面あり 左右側面割れ	心持木			側面あり

出土木器一覽表3

器名番号	区域番号	発出物種番号	種別	出土遺構	口径(単位)	器高	口径	底径	重量(gm)	保存	採取日	発掘番号	時期	備考
W78	52		木地	田代22 南3区	13.2	24	0.2	上側部分 下側部分 左右側部分	23	上側部分 下側部分 左右側部分	8月	2011NS1-2012NS5	ヒノキ	黒染あり 黒染に転写
W79	52		木地	田代22 南3区	23.2	1.1	0.3	上側部分 下側部分 左右側部分	21	上側部分 下側部分 左右側部分	8月	2011NS1-2012NS5	ヒノキ	黒染あり 黒染に転写
W80	53	104	祭祀具	田代22 西側	20.2	6.1	0.9	1.1	1.1	胴部・体底の一部	8月	2011NS1-2012NS5	ヒノキ	黒染あり
W81	53	104	祭祀具	田代22 南3区	12.3	2.7	0.7	体底・胴部ごく一部(下は欠損)	16	体底・胴部ごく一部(下は欠損)	8月	2011NS1-2012NS5	ヒノキ	黒染あり
W82	53	104	祭祀具	田代22 南3区	17.6	4.1	0.3	胴部の一部	11	胴部の一部	8月	2011NS1-2012NS5	ヒノキ	黒染あり
W83	53	104	祭祀具	田代22 西側	9.9	4.3	0.5	胴部の一部	21	胴部の一部	8月	2011NS1-2012NS5	ヒノキ	黒染あり
W84	53	104	祭祀具	田代22 西側	9.2	1.6	0.5	体底の一部?	11	体底の一部?	8月	2011NS1-2012NS5	ヒノキ	黒染あり
W85	53	104	祭祀具	田代22 西側	9.5	1.8	0.4	体底の一部?	11	体底の一部?	8月	2011NS1-2012NS5	ヒノキ	黒染あり
W86	53	104	祭祀具	田代22 西側	7.5	1.9	0.5	体底の一部?	11	体底の一部?	8月	2011NS1-2012NS5	ヒノキ	黒染あり
W87	53	104	祭祀具	田代22 南側大宮村 東 側北西端	11.2	4.4	0.9	体底上半	13	体底上半	8月	2011NS1-2012NS5	ヒノキ	黒染あり
W88	53	104	祭祀具	田代22 西側	22.3	5.8	0.9	胴部・体底の一部	26	胴部・体底の一部	8月	2011NS1-2012NS5	ヒノキ	一年の間に加工済みあり 下側は斜めに加工
W89	53	104	祭祀具	田代21・田代22交差点	15.7	1.7	2.6		23	ミサン類	8月	2011NS1-2012NS5	ヒノキ	一年の間に加工済みあり 下側は斜めに加工
W90	53	104	祭祀具	田代22 西側	28.2	4.7	0.6		23	8月	2011NS1-2012NS5	ヒノキ	黒染あり	
W91	53	104	祭祀具	田代22 西側	12.1	2.7	0.5	1箇所欠か?	21	8月	2011NS1-2012NS5	ヒノキ	黒染あり	
W92	53	104	祭祀具	田代22 西側	8.5	2.3	0.5		25	8月	2011NS1-2012NS5	ヒノキ	黒染あり	
W93	53	104	祭祀具	田代21・田代22交差点	19.5	2.9	1.1		27	8月	2011NS1-2012NS5	ヒノキ	黒染あり	
W94	53	104	祭祀具	田代21・田代22交差点	11.0	2.5	0.5	腰の部分	27	ミサン類	8月	2011NS1-2012NS5	ヒノキ	コナノ葉つ ナラ葉痕跡 下側は斜めに加工済みあり 下側は斜めに加工
W95	54	104	祭祀具	田代21・田代22交差点	24.6	1.8	2.0		26	ミサン類	8月	2011NS1-2012NS5	ヒノキ	コナノ葉つ ナラ葉痕跡 下側は斜めに加工済みあり 下側は斜めに加工
W96	54	105	祭祀具	田代23 東側東端	10.2	1.6	2.3		23	ミサン類	8月	2011NS1-2012NS5	ヒノキ	黒染あり 中心部を削り 中心部を削り
W97	54	105	祭祀具	田代23 東側東端	18.2	1.9	0.4		11	8月	2011NS1-2012NS5	ヒノキ	黒染あり 4本・35本の筋入りあり	
W98	54	105	祭祀具	田代23 東側東端	29.9	0.8	0.2	1111変形	11	8月	2011NS1-2012NS5	ヒノキ	2箇所切り込みあり 下側は斜めに加工	
W99	54	105	祭祀具	田代23 東側東端	20.6	2.0	0.4		11	8月	2011NS1-2012NS5	ヒノキ	2箇所切り込みあり 下側は斜めに加工	
W100	54	105	祭祀具	田代23 南側東端	16.8	1.0	0.2		11	8月	2011NS1-2012NS5	ヒノキ	2箇所切り込みあり 下側は斜めに加工	
W101	54	105	祭祀具	田代23 南側東端	60.5	1.1	0.2	1111変形	6	8月	2011NS1-2012NS5	ヒノキ	2箇所切り込みあり 下側は斜めに加工	
W102	54	105	祭祀具	田代23 東側東端	17.7	5.6	4.4	胴部の一部欠損	22	心付木	8月	2011NS1-2012NS5	ヒノキ	外側は削物あり
W103	54	105	祭祀具	田代23 東側東端	17.3	3.1	0.5	上1/4程度	22	8月	2011NS1-2012NS5	ヒノキ	外側は削物あり	
W104	55	106	祭祀具	西側25区	21.2	6.5	2.4	1/4程度	24	8月	2011NS1-2012NS5	ヒノキ	外側は削物あり	
W105	55	106	祭祀具	田代22 南3区	12.5	2.1	0.3	上半(切り跡は社交面)	21	8月	2011NS1-2012NS5	ヒノキ	外側は削物あり	
W106	55	106	祭祀具	田代22 南3区	22.5	2.3	0.4	上半(切り跡は社交面)	21	8月	2011NS1-2012NS5	ヒノキ	外側は削物あり	
W107	55	106	祭祀具	田代22 南3区	28.5	2.2	0.2	切り跡は大面	21	8月	2011NS1-2012NS5	ヒノキ	外側は削物あり	
W108	55	106	祭祀具	田代22 南3区	14.7	1.7	0.3	上半(切り跡は社交面)	17	8月	2011NS1-2012NS5	ヒノキ	外側は削物あり	
W109	55	106	祭祀具	田代22 南3区	20.3	2.1	3.5	1111変形	21	8月	2011NS1-2012NS5	ヒノキ	外側は削物あり	
W110	55	106	祭祀具	田代22 南3区	16.1	2.9	0.4	1/4程度	13	8月	2011NS1-2012NS5	ヒノキ	外側は削物あり	

出土土器一覧表4

器物番号	区画番号	発出場所 番号	種別	出土位置	法量 (cm)			形状	保存	本取り	発掘番号		備考
					口径	高さ	底径				2011RS	2012RS	
W109	55	106	祭祀具	田河原22 南2区	25.2	2.3	0.2	下平	破目			下部は斜めに加工	
W110	55	106	祭祀具	田河原22 南2区	23.1	2.3	0.6	下平	破目				
W111	55	106	祭祀具	田河原22 南2区	23.7	4.3	0.7	空腹残片	破目				
W112	55			田河原22	8.6	1.8	0.5		破目				
W113	55	106	祭祀具	田河原22 西側	21.9	3.4	0.9		破目			ヒノキ	
W114	55	106	祭祀具	田河原22 西側	29.7	1.6	0.6		破目			ヒノキ	
W115	55	106	祭祀具	田河原22 西側	8.0	0.6	0.4		破目			ヒノキ	
W116	55			田河原22 田河原北側	12.0	1.3	0.9		破目				
W117	55			田河原22 北側	10.7	1.5	0.6		破目				
W118	55	106	祭祀具	田河原22 北側	20.7	3.5	0.4		破目				
W119	55			田河原22 北2区	14.3	1.1	0.7		ヒノキ之類				
W120	55	106	祭祀具	田河原22 北2区	21.3	2.0	0.5		破目			下部は斜めに加工 上部は2.2割けの空腹	
W121	55	106	祭祀具	1区 トロノナ	10.1	1.3	1.1	90°心に孔あり	心付本			ヒノキ	
W122	55	106	祭祀具	1区 田河原 板倉中	21.8	1.4	1.2		破目				
W123	56			田河原22	6.6	4.2	1.0		破目				
W124	56			田河原22 北平 地区北側	6.1	1.6	0.3		破目				
W125	56			田河原22 北平 地区北側	8.6	2.4	1.0		破目				
W126	56	107	祭祀具	田河原22 南2区	19.7	2.8	1.5		破目				
W127	56	107	祭祀具	田河原22 南2区	10.1	1.6	0.3	切り掛け穴	破目			細片あり	
W128	56	107	祭祀具	田河原22 南2区	12.5	3.2	1.2		破目			細片あり	
W129	56	107	祭祀具	田河原22 南側大野村東 側北平側	5.2	3.0	0.5		破目				
W130	56			田河原22 南1区	7.7	4.5	0.8		破目			両面は空腹	
W131	56	107	祭祀具	田河原22 南側大野村東 側北平側	11.2	3.0	0.7		破目				
W132	56	107	祭祀具	田河原22 南2区	6.8	2.9	0.4		破目			先頭を削って加工したもの	
W133	56			田河原22 南2区	23.6	1.2	1.1		破目			瓶口残片あり	
W134	56			田河原22 南2区	12.5	3.2	1.2		破目			瓶口残片あり	
W135	56			田河原22 北平	19.5	2.2	2.3		心付本			細片を削いで平頭状に仕上げている 削ぎの長さ約あり	
W136	56			田河原22 地区北側	11.5	2.7	2.3		破目			コナラ属コ ナラ属属々 又平腹	
W137	56	107	祭祀具	田河原22 南2区	23.1	3.4	0.8		破目			ヒノキ	
W138	56	107	祭祀具	田河原22 南2区	12.7	1.7	0.5	小片	破目				
W139	56			田河原22 南2区	10.1	1.7	1.5		破目				
W140	56	107	祭祀具	田河原22	6.8	1.8	0.6	小片	破目				
W141	56	107	祭祀具	田河原	23.0	2.3	1.2		ヒノキ之類			コナラ属コ ナラ属属々 又平腹	
W142	57	108	祭祀具	田河原22 南2区	21.1	3.0	0.7	1/8 高さ以上は残存 が中心に欠損	破目			14	ヒノキ
W143	57	108	祭祀具	田河原22 南2区	15.1	3.8	0.8	4箇所本打穴残存 内2箇所本打穴	破目			17	ヒノキ
W144	57	108	祭祀具	田河原22 南2区 板倉中	30.8	1.9	1.2	18箇所本打穴 本打穴の間の残存	破目			21	ヒノキ
W145	57	108	祭祀具	田河原22 南2区	20.8	3.4	0.5		破目			15	ヒノキ

出土木器一覧表5

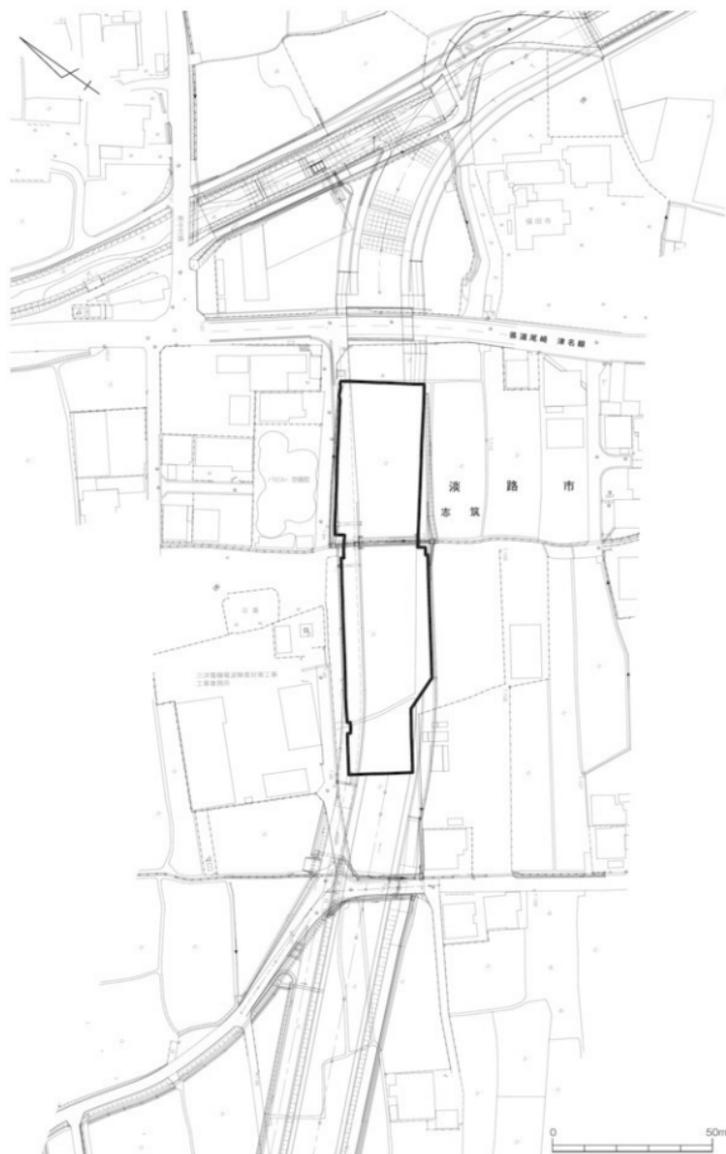
順行番号	区画番号	発出機番 番号	種別	出土位置	口深(単位)	器高	口径	底径	容量	重量	保存	本取り	分析番号	材質		
W146	57	108	竹筒	110HJ22	0.6	129	4.0					帳目	2011NS1_2012NS5	新種	無片残あり	
W147	57	108		110HJ22		31.3	32.4	0.9	2.5			帳目			ヒノキ	加工痕あり
W148	58	109	土木杖	110HJ22 帳目		689	6.3	4.7	11.6		心持木					上部一部加工 下部は未加工
W149	58	109		110HJ22		20.3	11.5	2.6	1.4		帳目					下部二次変形している 表面に凹凸部あり
W150	58	109		110HJ22 東側		81.7	14.5	2.7			帳目					3.5cm行目線の加工
W151	58	109		110HJ22 東側		194.3	20.0	3.9	15.4		残欠は保存 直近の口縁一部欠損	帳目	35	木ノ皮		
W152				110HJ22 南江区		91.0	20.0	3.5					19	ワフ属類		
W153				110HJ22 南江区		81.0	9.0	9.0					21	竹炭系属		
W154				110HJ22 南江区		93.3	7.0	7.0					25	ナイ属		
W155				110HJ22 南江区		43.3	4.3	3.7					26	木ノ皮		
W156				110HJ22 南江区		78.0	6.0	5.5					27	木ノ皮		
W157				110HJ22 南江区		31.0	5.0	4.5					28	ワフ属類		
W158				110HJ22 南江区		39.0	6.5	6.5					29	ハイノキ属		
W159				110HJ22 南江区		20.0	7.0	6.0					30	コナク属類		
W160				110HJ22 南江区		132.0	3.5	4.5					31	ヤブタリ		
W161				110HJ22 南江区		110.0	5.0	4.5					32	コナク属類		
W162				110HJ22 南江区		43.0	12.0	12.0					33	メギ属		
W163				110HJ22 南江区		12.0	24.0	16.7					34	コナク属類		
W164				110HJ22 南江区		12.0	24.0	16.7					35	ワフ属類		
W165				110HJ22 南江区		66.0	10.0	9.0					36	ナリ		
W166				110HJ22 南江区		203.0	11.0	10.5					37	コナク属類		
W167				110HJ22 南江区		127.0	8.0	8.0					38	ワフ属類		
W168				110HJ22 南江区		116.0	7.0	6.0					39	竹炭系属		
W169				110HJ22 南江区		147.0	7.5	6.0					40	竹炭系属		

出土土器一覧表6

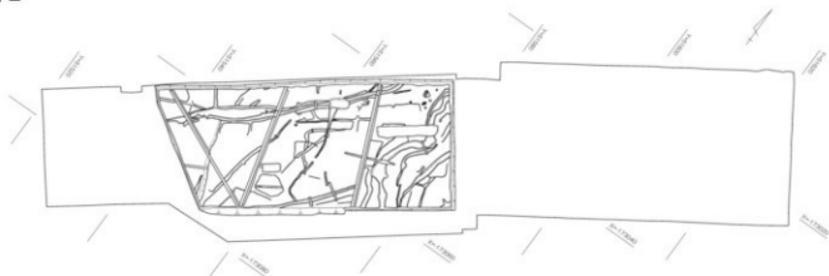
調査番号	区画番号	発見時期 番号	種別	出土位置	口径 (cm)	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	保存	収蔵	収蔵番号	学術番号	詳細	備考
W170			H104.B3 K154B3			224.0	30.0	9.0			2011.B3_2012.B5	20	コナラ属ク ヌナ属 実跡なし	
W171			H104.B3 K154B3			100.0	5.0	4.0			41.1	41.1	コナラ属ク ヌナ属 実跡なし	
W172			H104.B3 K154B3								41.2	41.2	広葉樹 実跡なし	植物ノ類代?
W173			H104.B3 K154B3								41.3	41.3	草本 実跡なし	植物ノ類代?
W174			H104.B3 K154B3			96.0	5.0	5.0			42	42	コナラ属ク ヌナ属 実跡なし	
W175			H104.B3 K154B3			75.0	6.6	6.0			43	43	コナラ属ク ヌナ属 実跡なし	
W176			H104.B3 K154B3			73.0	6.0	5.5			44	44	コナラ属ク ヌナ属 実跡なし	
W177			H104.B3 K154B3			170.0	7.0	6.0			45	45	草本 実跡なし	
W178			H104.B3 K154B3			97.0	7.0	6.0			46	46	トネリコ属 実跡なし	
W179			H104.B3 K154B3			97.0	6.0	7.0			47	47	クワ科 実跡なし	
W180			不明			180.0	20.0	10.0			48	48	クワ 実跡なし	
W181											49	49	科1コナラ ヤナシ属 実跡なし	
W182											50	50	ヤナシ属 実跡なし	
W183											51	51	廣葉樹ヤナ シ属 実跡なし	
W184											51	51	広葉樹 実跡なし	

# 圖 版

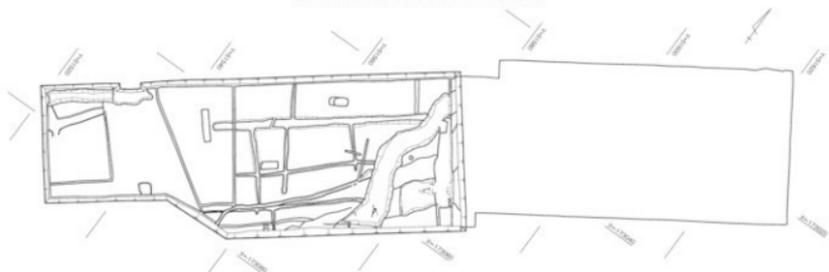




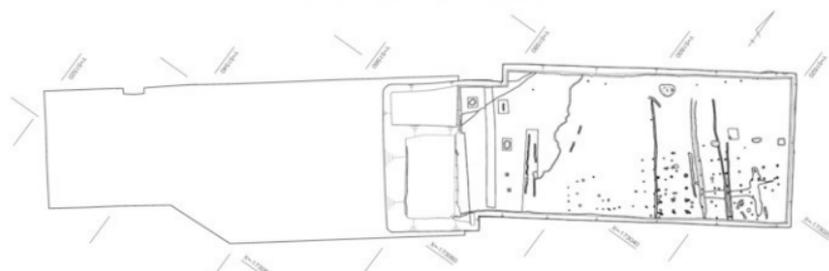
調査区位置図



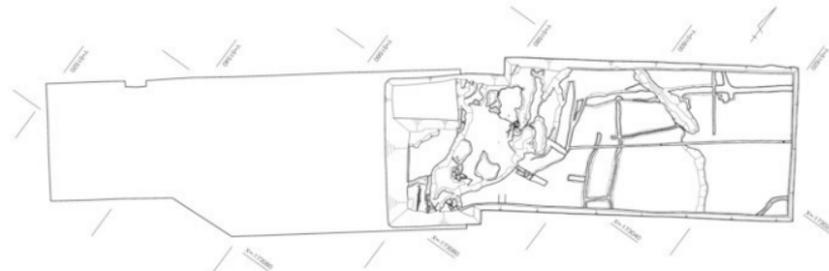
調査区西側上層水田面 (2009年度調査)



調査区西側下層水田面 (2011年度調査)



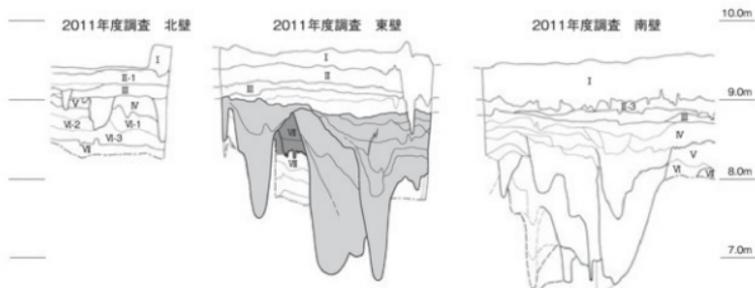
調査区東側上層遺構面 (2012年度調査)



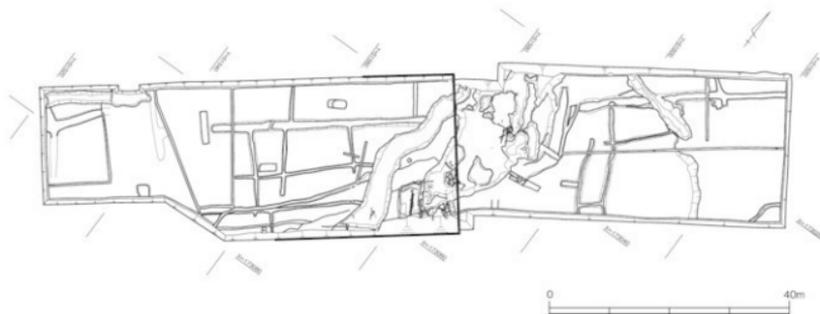
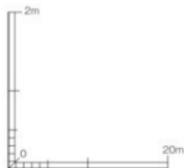
調査区東側下層水田面 (2012年度調査)



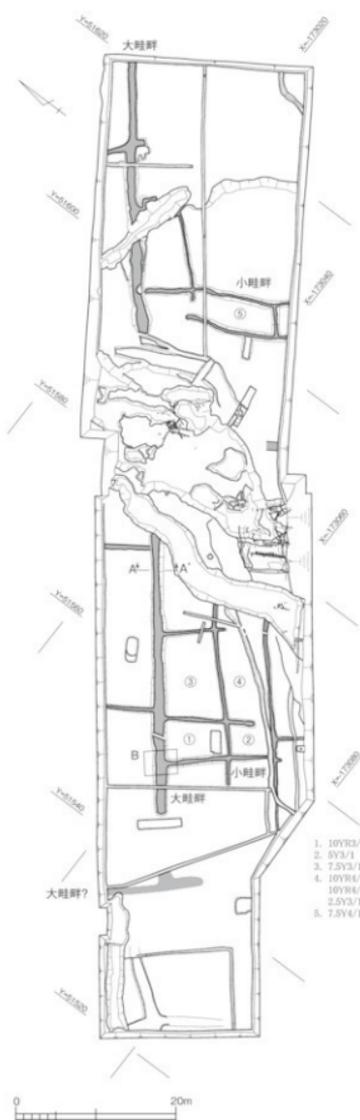




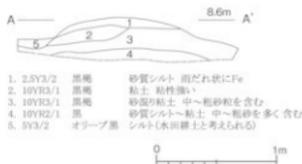
- I. 黄土を含む現代の表土(耕土)  
2.5Y3/2 黒褐 粘細砂～細砂
- II. 近世～近代の耕土  
II-1 2.5Y3/3 黄褐 シルト質粘細砂～2.5Y4/1 黄灰 粘細砂  
II-2 2.5Y4/2 暗黄灰 シルト質粘細砂～2.5Y4/4 オリーブ褐 シルト
- III. 中央の古土層(遺物も含層)  
2.5Y4/1 黄灰 シルト混粘細砂・細砂～10YR4/2 灰黄褐 細砂～粗砂
- IV. 洪水砂層  
2.5Y4/3～4/4 オリーブ褐 シルト混粘細砂～細砂 酸化が見られる部分では、下部は4.2m以下の層を含む粗砂～極粗砂となる  
調査区北東部では、10YR4/2 灰黄褐 粘細砂～粗砂ないしは細砂を含むシルト混粘細砂～細砂
- V. 奈良時代の古土層(上層水田)  
10YR3/3 暗褐 シルト質粘細砂 土壌化している
- VI. 洪水砂層  
VI-1 10YR5/3 にぶい黄褐 細砂  
VI-2 10YR3/1 オリーブ黒 シルト～粘細砂 一部に砂のブロックレンズを挟む
- VI-3 2.5Y4/4 黄褐 細砂～中砂
- VII. 飛鳥時代の古土層(下層水田)  
10YR4/1 暗灰～10YR3/2 黒褐 粘土～シルト質粘細砂  
縄文時代末期～奈良時代前期の古土層(遺物も含層)  
5Y5/2 オリーブ黒 砂質シルト～7.5Y5/2 オリーブ黒シルト



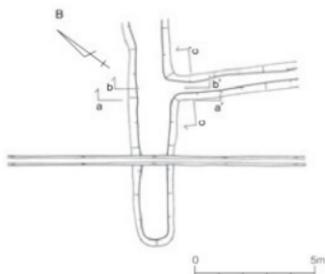
調査区断面図(2)



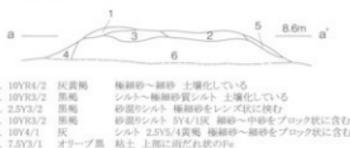
大畦畔東側



1. 2.5Y3/2 黒地 砂質シルト 雨だれ状にF\*
2. 10YR3/1 黒地 粘土 粘性強い
3. 10YR3/1 黒地 砂質の粘土 砂～粗砂粒を含む
4. 10YR2/1 黒地 砂質シルト～粘土 中～粗砂を多く含む
5. 5Y3/2 オリーブ黒 シルト(水田跡と上考えられる)

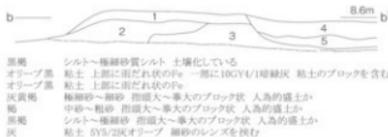


大畦畔西側



1. 10YR4/2 灰黄褐 極細砂～細砂 土壌化している
2. 10YR3/2 黒地 シルト～極細砂質シルト 土壌化している
3. 2.5Y3/2 黒地 砂質シルト 極細砂をレンズ状に挟む
4. 10YR3/2 黒地 砂質シルト 5Y4/1灰 極細～中砂をブロック状に含む
5. 10Y4/1 灰 シルト 2.5Y5/4黄褐 極細砂～細砂をブロック状に含む
6. 7.5Y3/1 オリーブ黒 粘土 上部に雨だれ状のF\*

大畦畔・小畦畔取りつき部



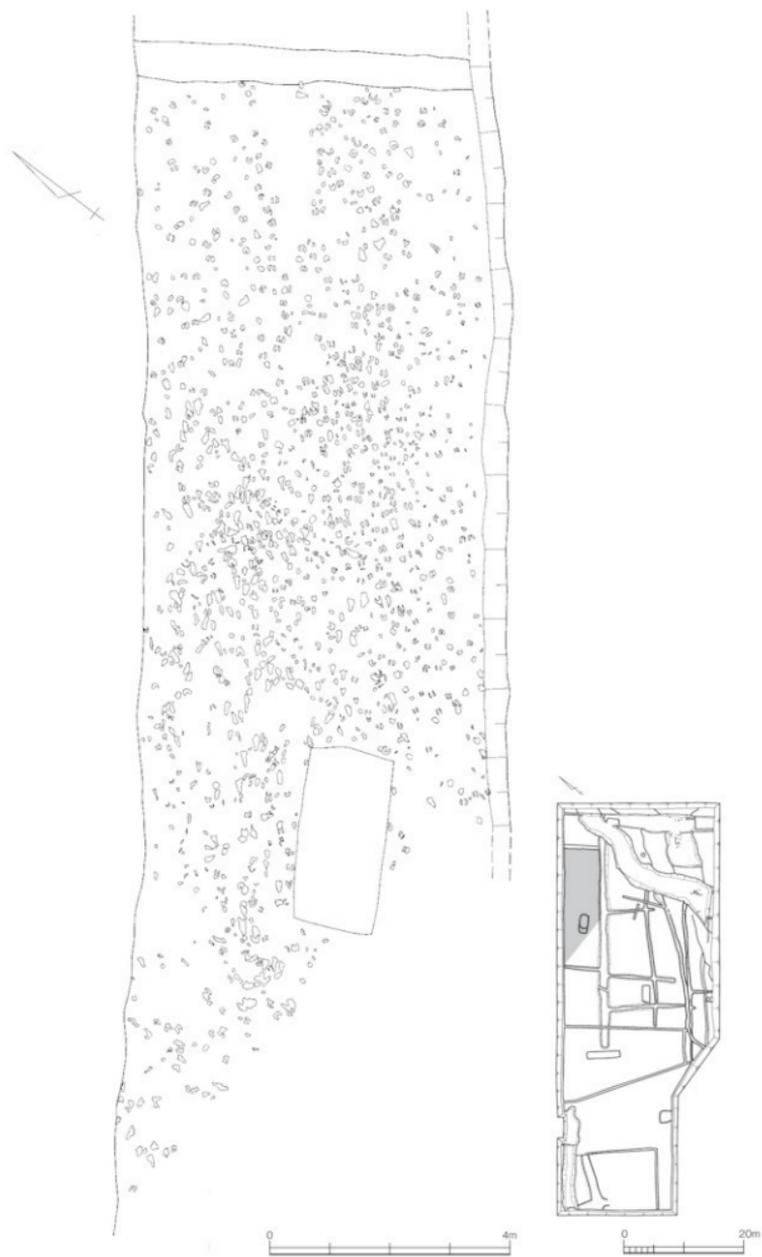
1. 10YR3/2 黒地 シルト～極細砂質シルト 土壌化している
2. 5Y3/1 オリーブ黒 粘土 上部に雨だれ状のF\* 一部に10YR4/1暗緑灰 粘土のブロックを含む
3. 7.5Y4/1 オリーブ黒 粘土 上部に雨だれ状のF\*
4. 10YR4/2 灰黄褐 極細砂～細砂 指頭大～拳大のブロック状 人為的盛土か
5. 10YR4/6 黒地 中砂～粗砂 指頭大～拳大のブロック状 人為的盛土か
6. 2.5Y3/1 黒地 シルト～極細砂 指頭大～拳大のブロック状 人為的盛土か
7. 7.5Y4/1 灰 粘土 5Y5/2灰オリーブ 細砂のレンズを挟む

小畦畔

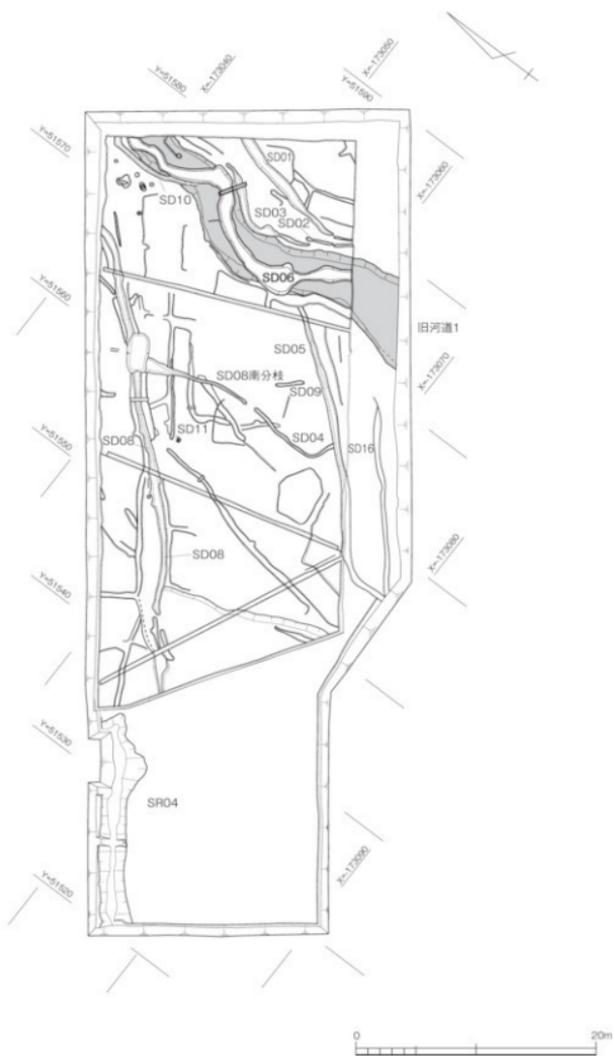


1. 10YR4/2 灰黄褐 極細砂～細砂 指頭大～拳大のブロック状 人為的盛土か
- 10YR4/6 黒地 中砂～粗砂 指頭大～拳大のブロック状 人為的盛土か
2. 5Y3/1 黒地 シルト～極細砂 指頭大～拳大のブロック状 人為的盛土か
3. 7.5Y4/1 灰 粘土 5Y5/2灰オリーブ 細砂のレンズを挟む
2. 2.5Y3/1 黒地 粘土
- 7.5Y3/1 オリーブ黒 粘土 上部に雨だれ状のF\*

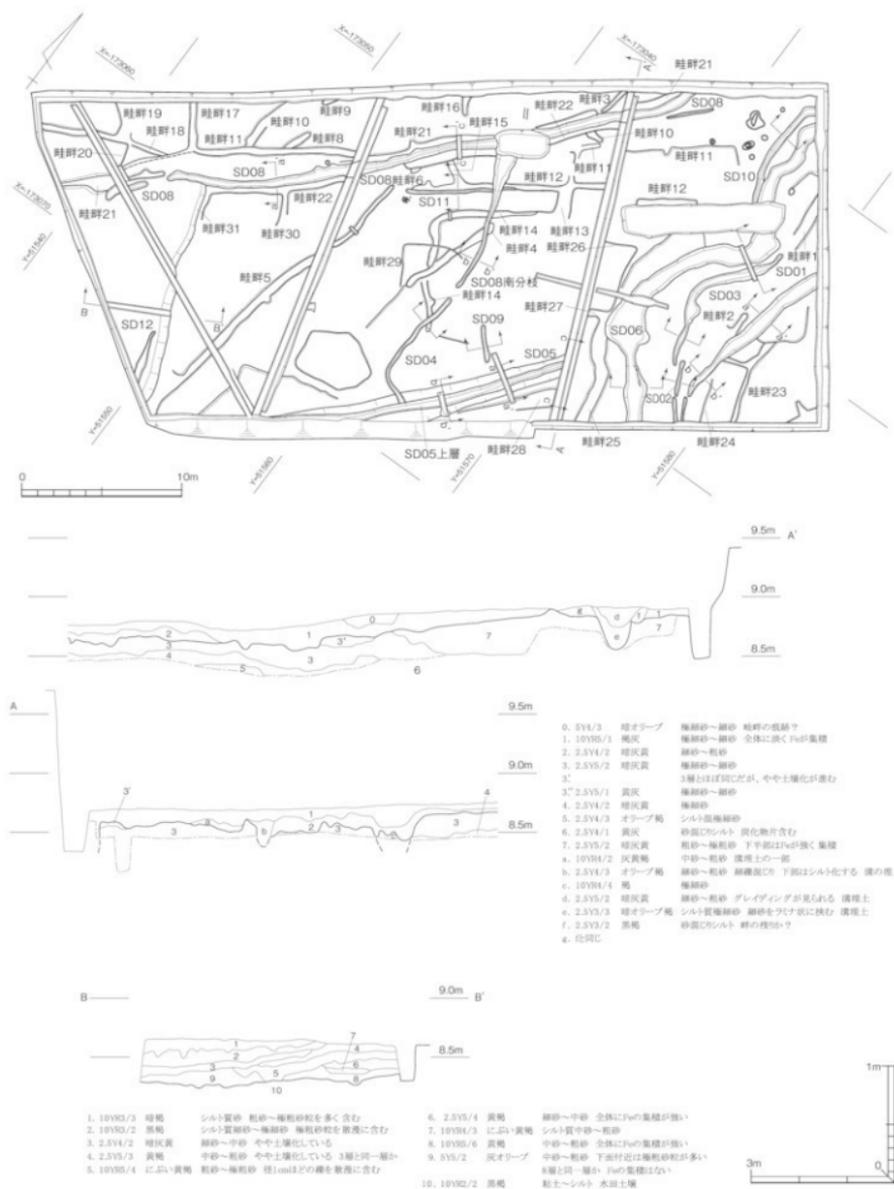
下層水田面平面図・畦畔断面図



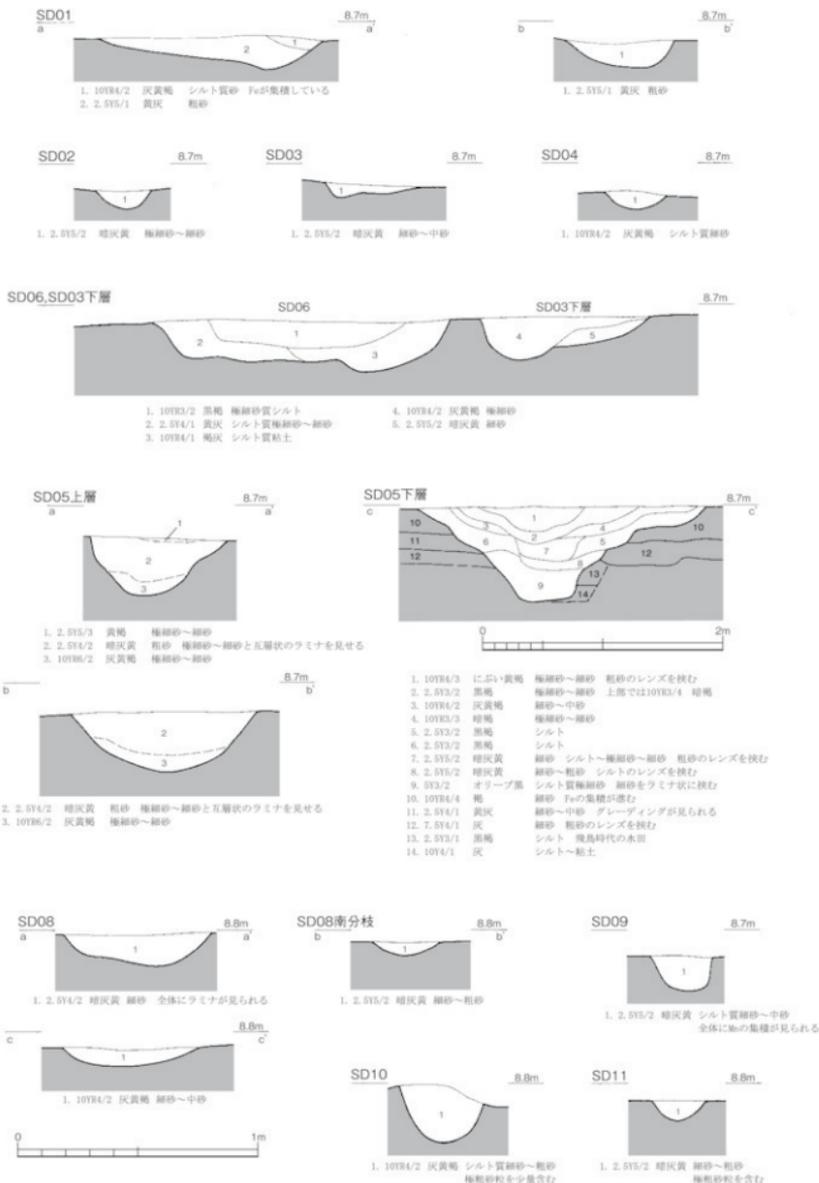
下層水田面足跡検出状況



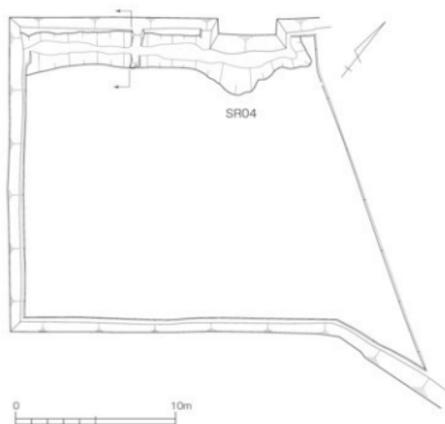
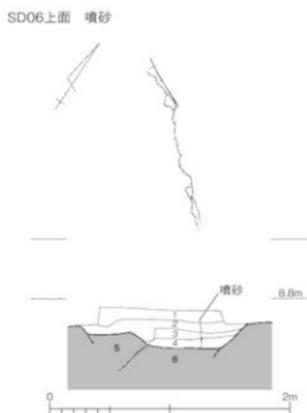
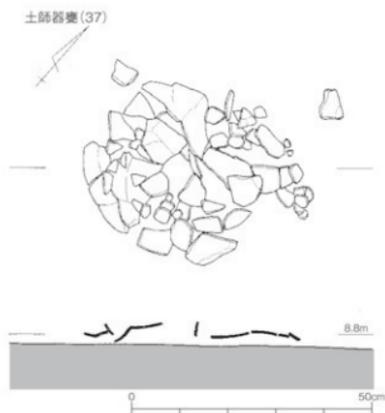
上層水田面全体図



上層水田面 平面・断面図

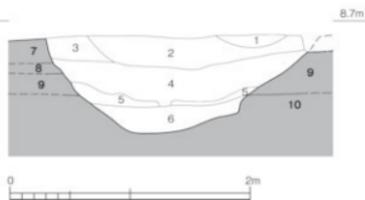


上層水田面遺構断面図

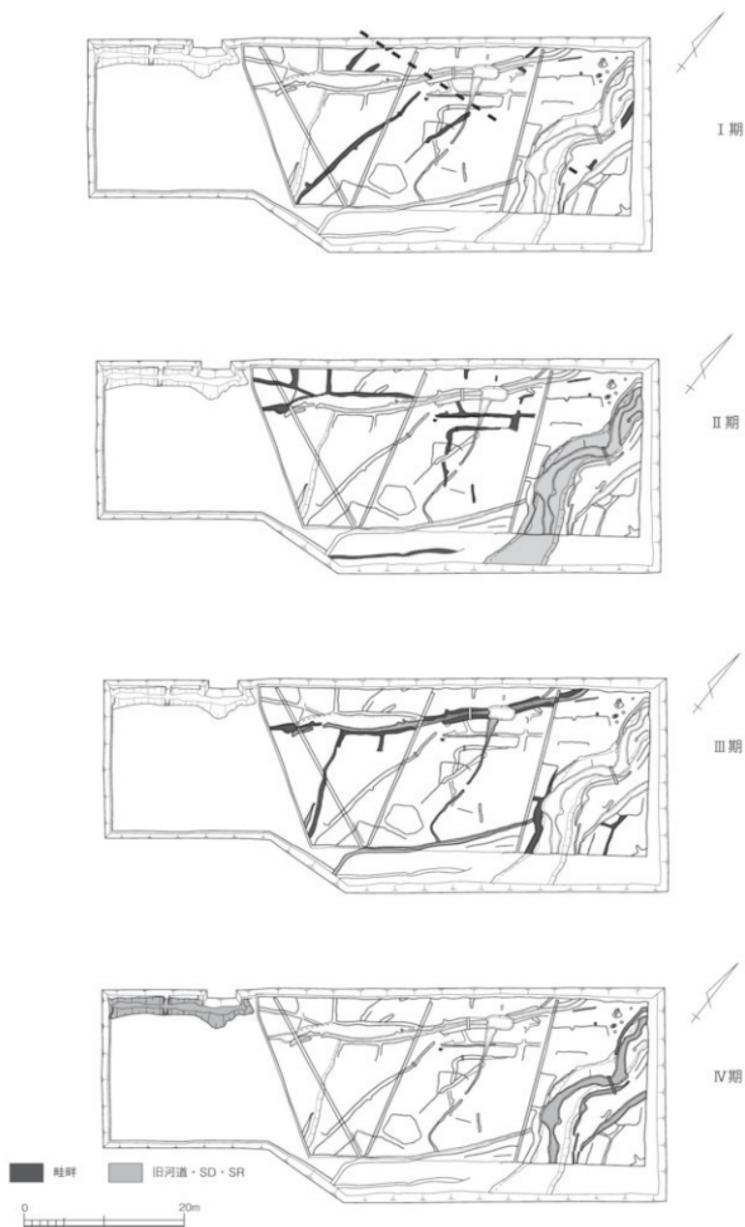


1. 2. 314/2 暗灰黄 砂質シルト 粗砂～極粗砂を多く含む 全体にFeが集積
2. 2. 314/2 暗灰黄 砂質シルト 1層より粗砂粒子が少ないが、基質は逆に砂っぽい
3. 315/1 灰 シルト 全体にFeが集積
4. 315/1～4/1 灰 シルト+粘土 雨だれ状のFe集積が見られる
5. 10193/2 灰黄褐 シルト質極細砂 上半にFe集積
6. 2. 316/1 黄灰 細砂～粗砂

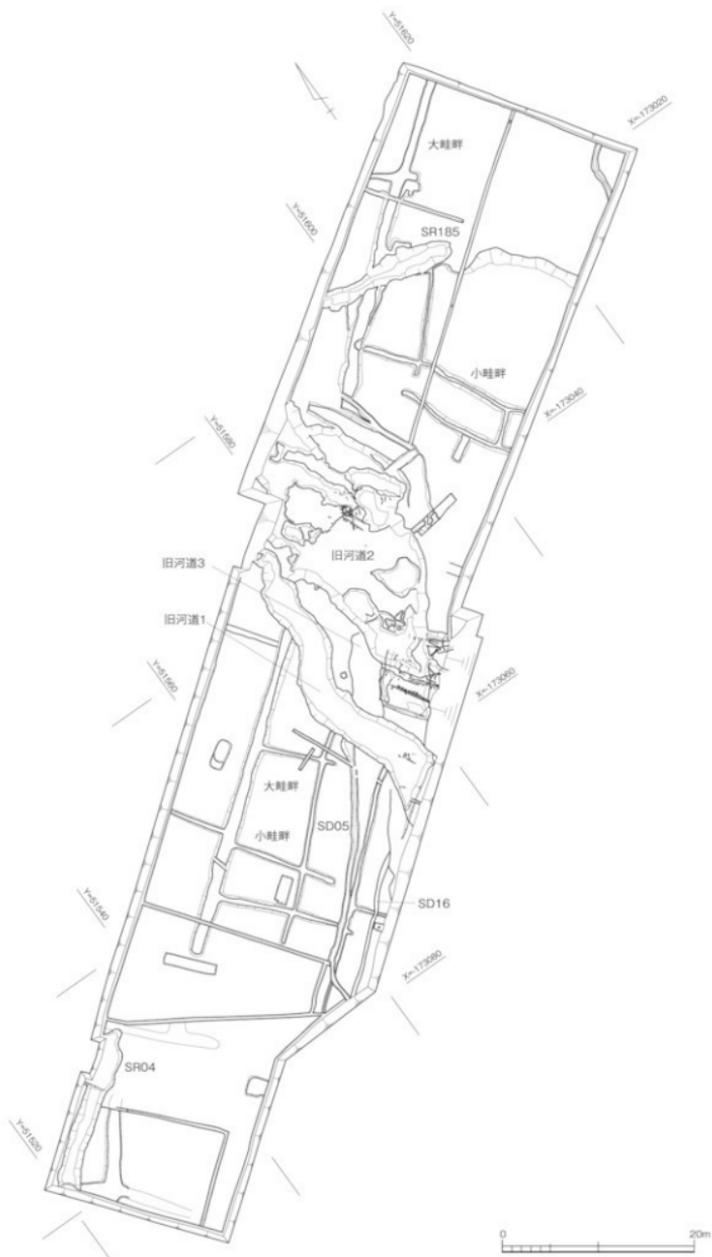
SR04



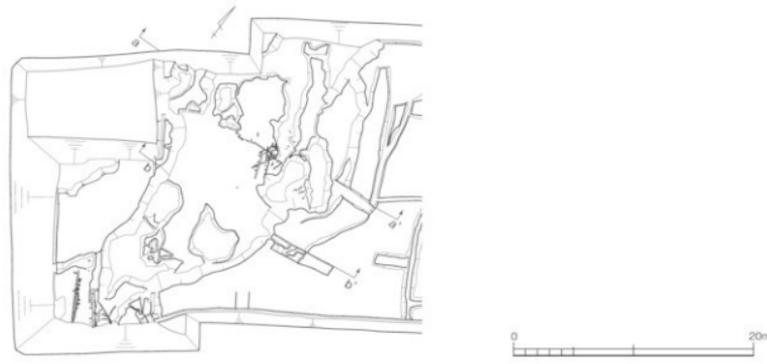
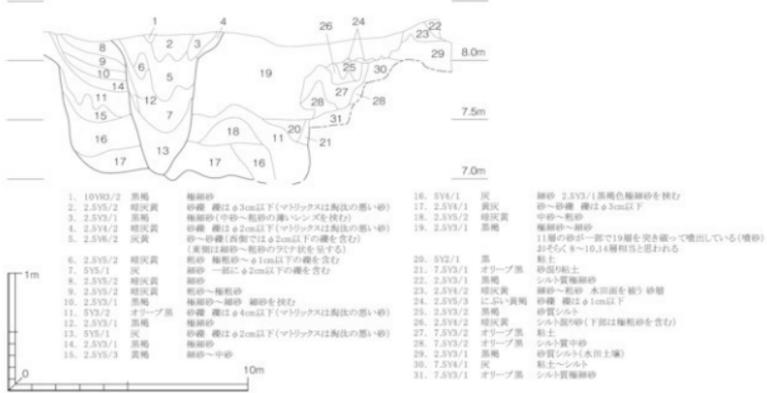
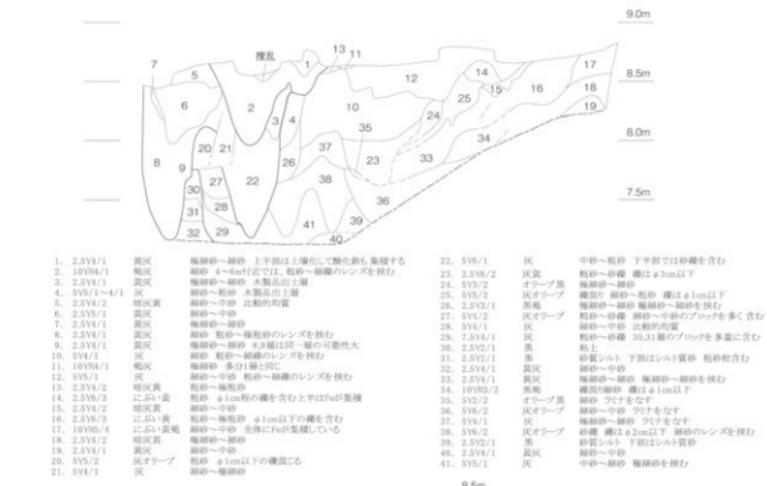
1. 10194/2 暗灰色 シルト質細砂
2. 10193/2 灰黄褐 粗砂 極細砂のレンズはきむ、上半はFeの集積が著しい
3. 7.514/1 灰色 極細砂質シルト 上半はFe
4. 2.516/2 灰黄色 粗砂～極粗砂 極細砂を含むフナが見られる
5. 2.513/1 黄褐色 シルト 極細砂のレンズをはきむ 腐植質を含む
6. 2.516/2 灰黄色 粗砂～極粗砂 黒褐色シルトのレンズをはきむ
7. 10194/1 暗灰色 シルト 上半はFe
8. 2.514/1 黄灰色 極細砂～細砂 フナが見られる
9. 10193/1 黄褐色 砂質シルト
10. 7.514/1 灰色 細砂～粗砂(中砂主体)



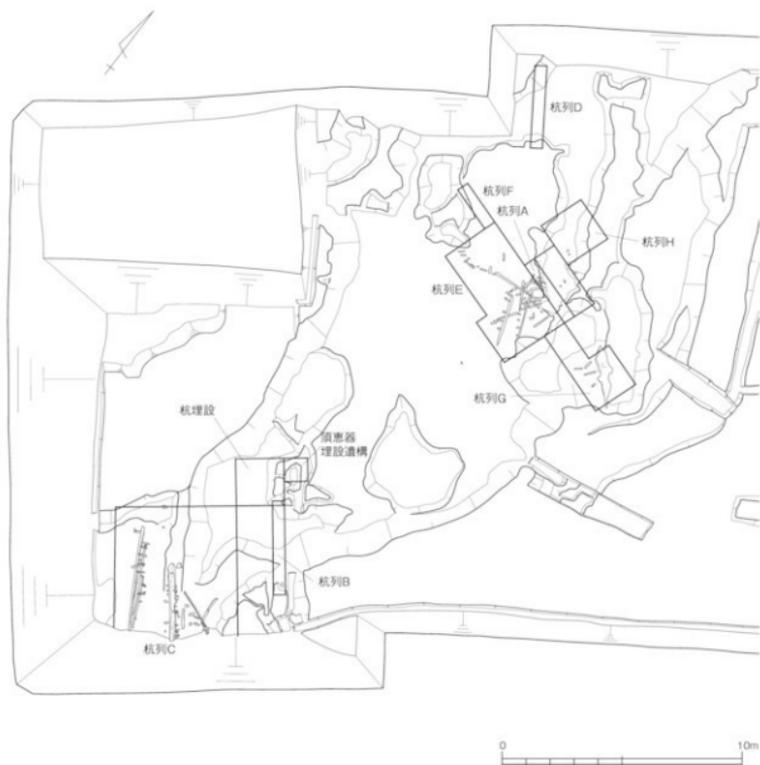
上層水田面遺構変遷図



下層水田面全体図

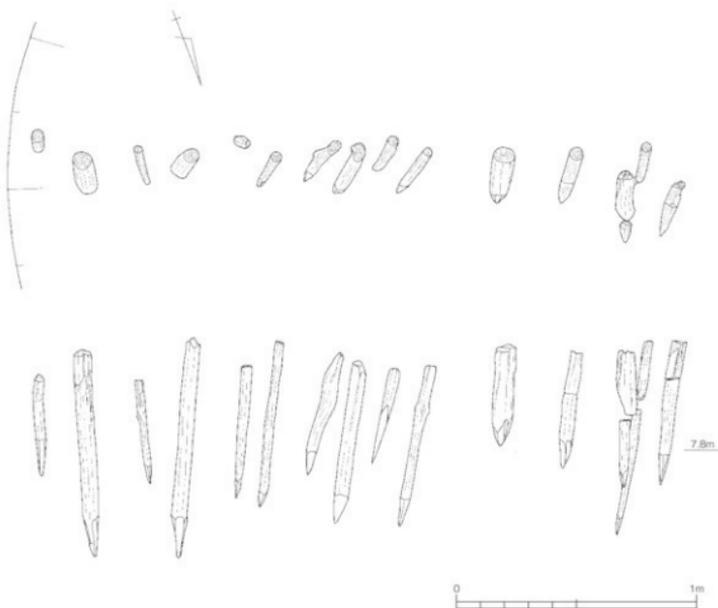


旧河道断面図

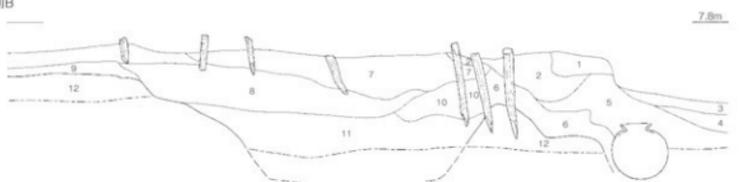


旧河道内杭列位置図

杭列A

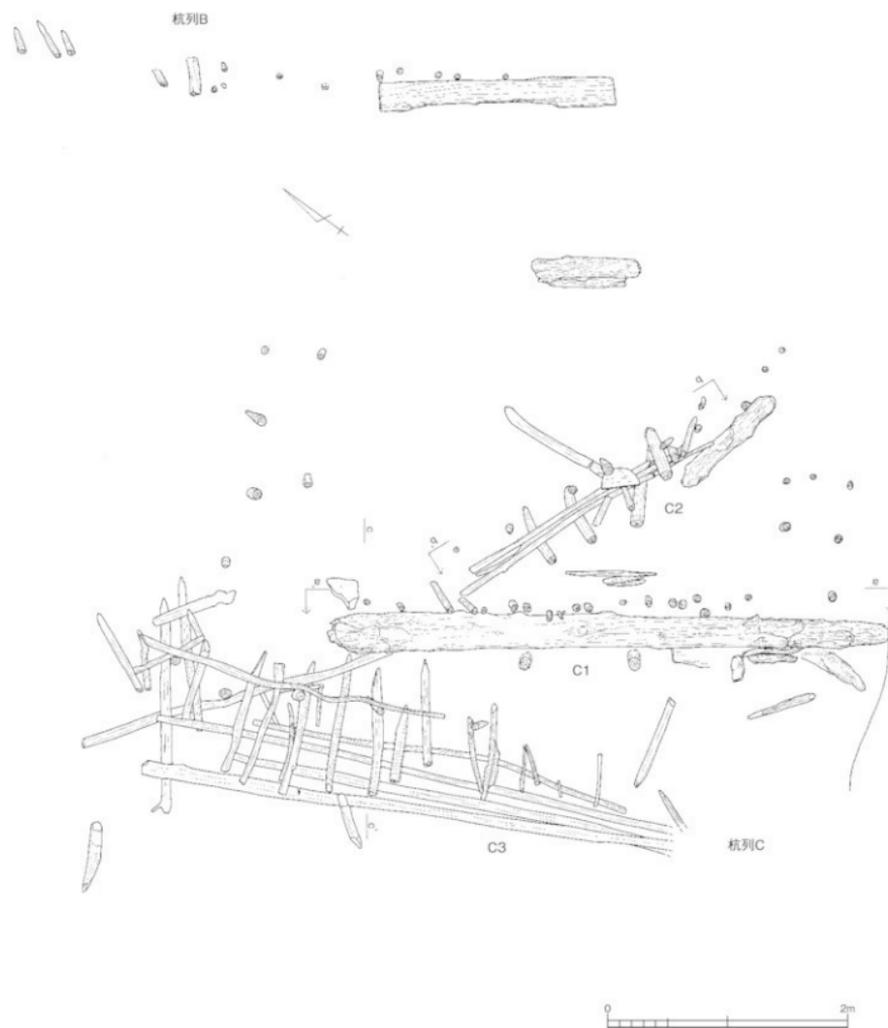


杭列B



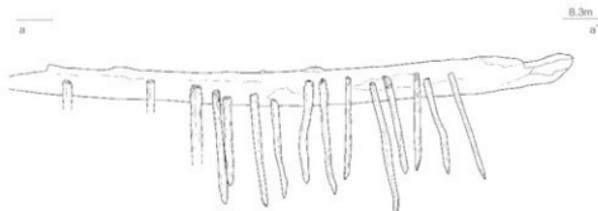
- |              |      |                             |
|--------------|------|-----------------------------|
| 1. 2. 5Y3/1  | 黒褐色  | 極細砂                         |
| 2. 2. 5Y6/2  | にぶい黄 | 砂礫 礫はφ3cm以下 マトリックスは褐色の細い砂   |
| 3. 2. 5Y6/3  | にぶい黄 | 細砂～粗砂                       |
| 4. 5Y4/1     | 灰    | 極細砂～細砂 一部でシルトのレンズを挟む        |
| 5. 5Y5/1     | 灰    | 粗砂～極粗砂                      |
| 6. 2. 5Y5/1  | 黄灰   | 細砂～粗砂 黒褐色極細砂のレンズを挟む         |
| 7. 2. 5Y3/2  | 黒褐色  | 極細砂 ラミナをなす                  |
| 8. 2. 5Y3/3  | 黄褐色  | 粗砂～砂礫 砂礫をレンズ状に挟む (礫はφ3cm以下) |
| 9. 2. 5Y3/2  | 黒褐色  | 黒褐色極細砂のレンズを挟む               |
| 10. 2. 5Y3/1 | 黒褐色  | 細砂～極細砂                      |
| 11. 5Y4/1    | 灰    | 細砂 ラミナを見せる                  |
| 12.          |      | ベース                         |
| 13. 2. 5Y5/2 | 暗灰黄  | 細砂～粗砂 黒褐色極細砂とラミナをなす         |

杭列A・B 平面・断面図



杭列B·C 平面图

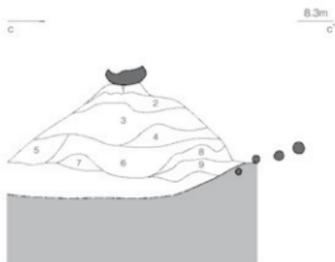
C1



C2



C3

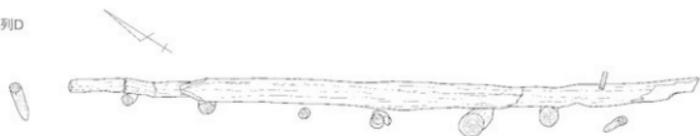


- |                  |        |                                  |
|------------------|--------|----------------------------------|
| 1. 2. 5YR/3~8/6  | 淡黄~黄   | 粗砂~小礫                            |
| 2. 5GY/1         | 暗オリーブ灰 | 粗砂混り粘質シルト                        |
| 3. 10Y3/1        | オリーブ黒  | 極細砂 一部に10Y5/1 灰 粘質シルトブロック含む      |
| 4. 10Y3/1        | オリーブ黒  | 細砂~粗砂                            |
| 5. 10Y3/1        | オリーブ黒  | 細砂混り極細砂 5GY/1 暗オリーブ灰 粘質シルトブロック含む |
| 6. 10Y3/1        | オリーブ黒  | 粘質シルト 細砂~粗砂混じる                   |
| 7. 10Y3/1        | オリーブ黒  | 極細砂 フラミン状に10Y5/1 灰 極細砂混じる        |
| 8. 10Y3/1        | オリーブ黒  | 粘質シルト 2. 3Y5/4 黄褐 粗砂混じる          |
| 9. 10Y4/1        | 灰      | 粘質シルトと粗砂混じる                      |
| 10. 2. 5YR/3~8/6 | 淡黄~黄   | 粗砂~小礫                            |

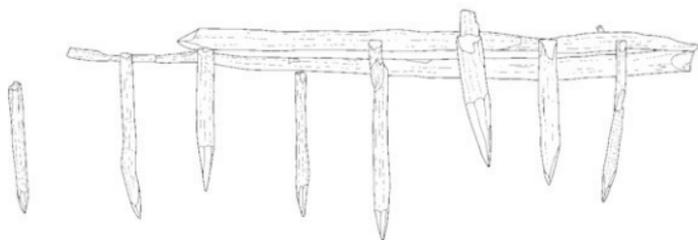
0 2m

杭列C 断面図

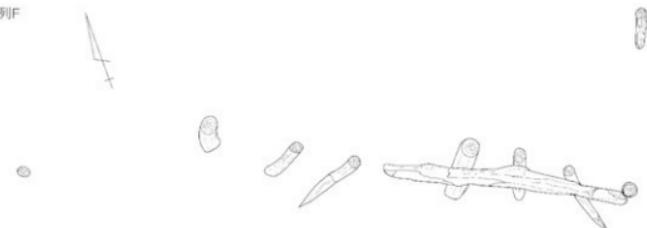
杭列D



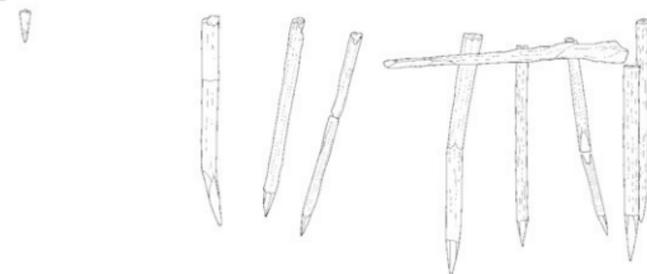
7.8m



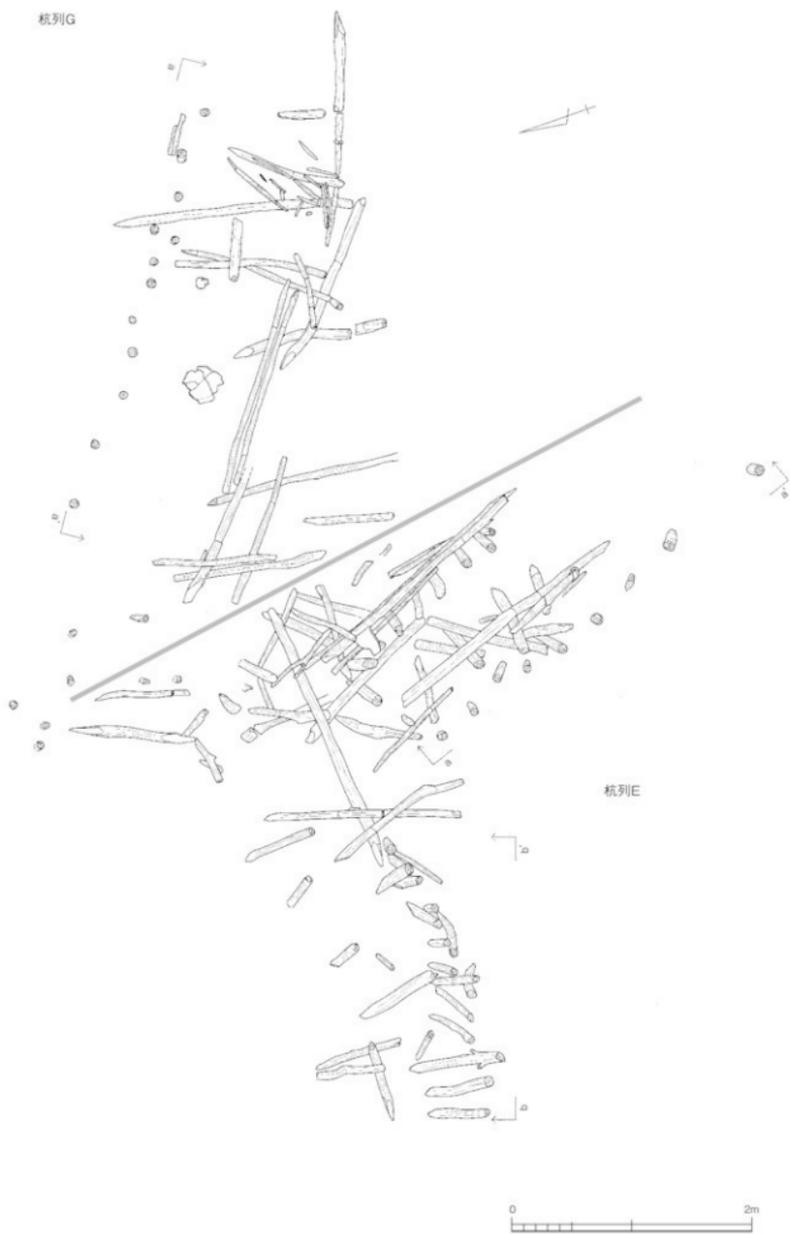
杭列F



7.8m



杭列D·F 平面·断面图

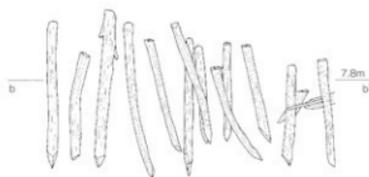


杭列E·G 平面图

杭列G



杭列E

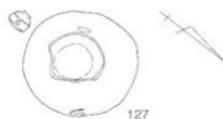
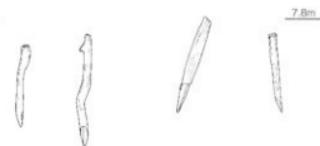
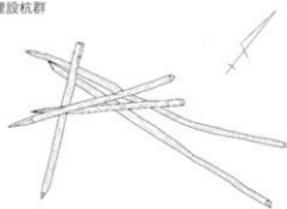


杭列E·G 断面图

杭列H



埋設杭群



出土状況 127

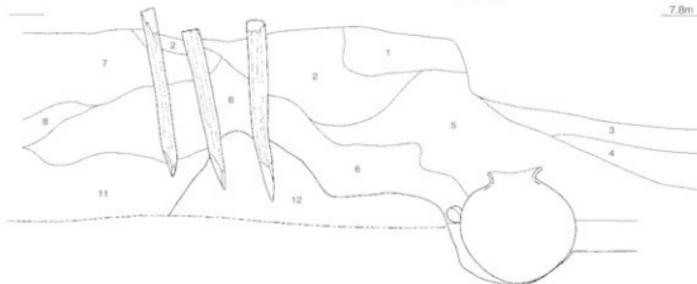


取り上げ後

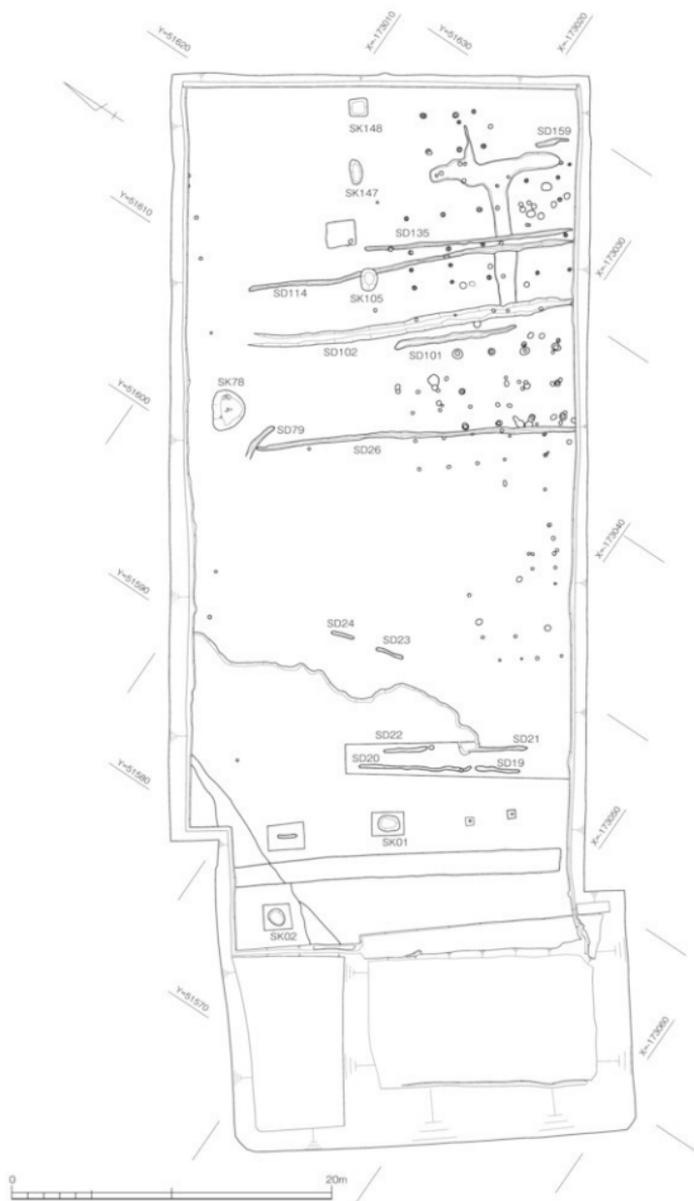
7.8m

須恵器埋設遺構

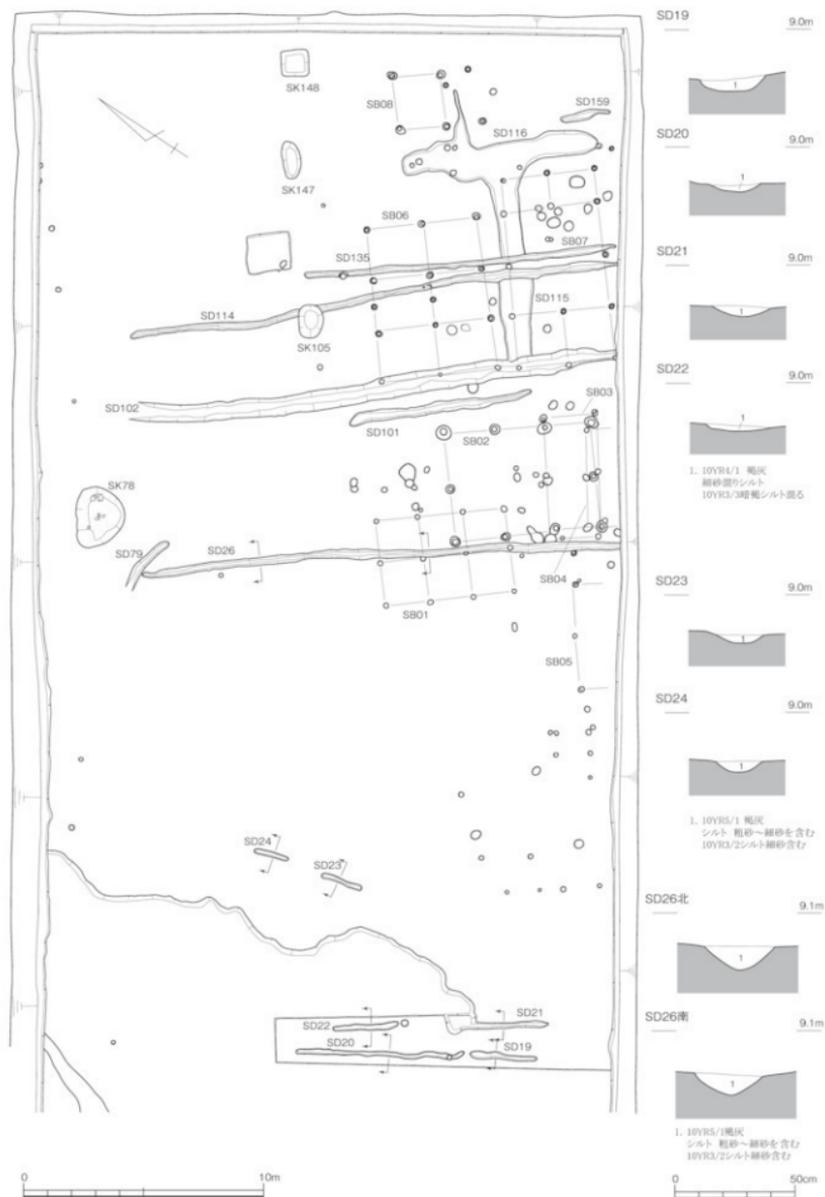
1. 2. 913/1 黒地 榎細砂
2. 2. 916/2 にぶい黄 砂礫 礫はφ3cm以下 マトリックスは黄褐色の黒い砂
3. 2. 916/3 にぶい黄 細砂〜粗砂
4. 914/1 灰 榎細砂〜細砂 一部でシルトのレンズを挟む
5. 915/1 灰 粗砂〜極粗砂
6. 2. 915/1 黄灰 細砂〜粗砂 黒褐色極細砂のレンズを挟む
7. 2. 915/2 黄灰 榎細砂 ラミナをなす
8. 2. 915/3 黄灰 粗砂〜砂礫 砂礫をレンズ状に挟む (礫はφ2cm以下) 黒褐色極細砂のレンズを挟む
10. 2. 913/1 黒地 榎細砂
11. 914/1 灰 細砂 ラミナをなせる
12. ベース



杭列H・杭群・須恵器埋設遺構 平面・断面図

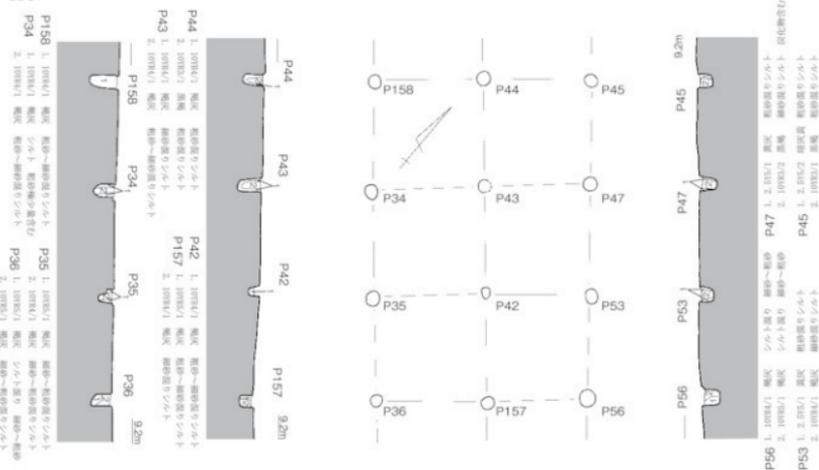


平安時代遺構面 全体図

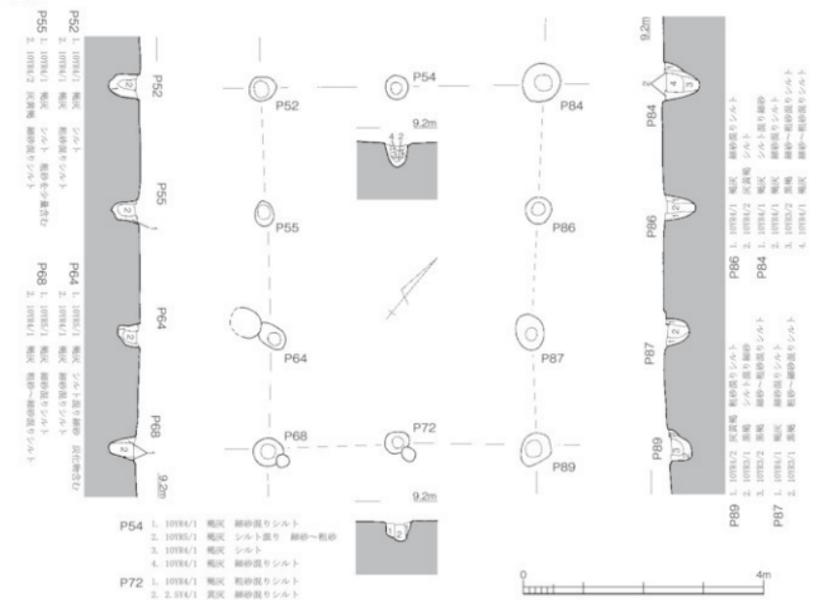


平安時代遺構面溝 平面図・断面図

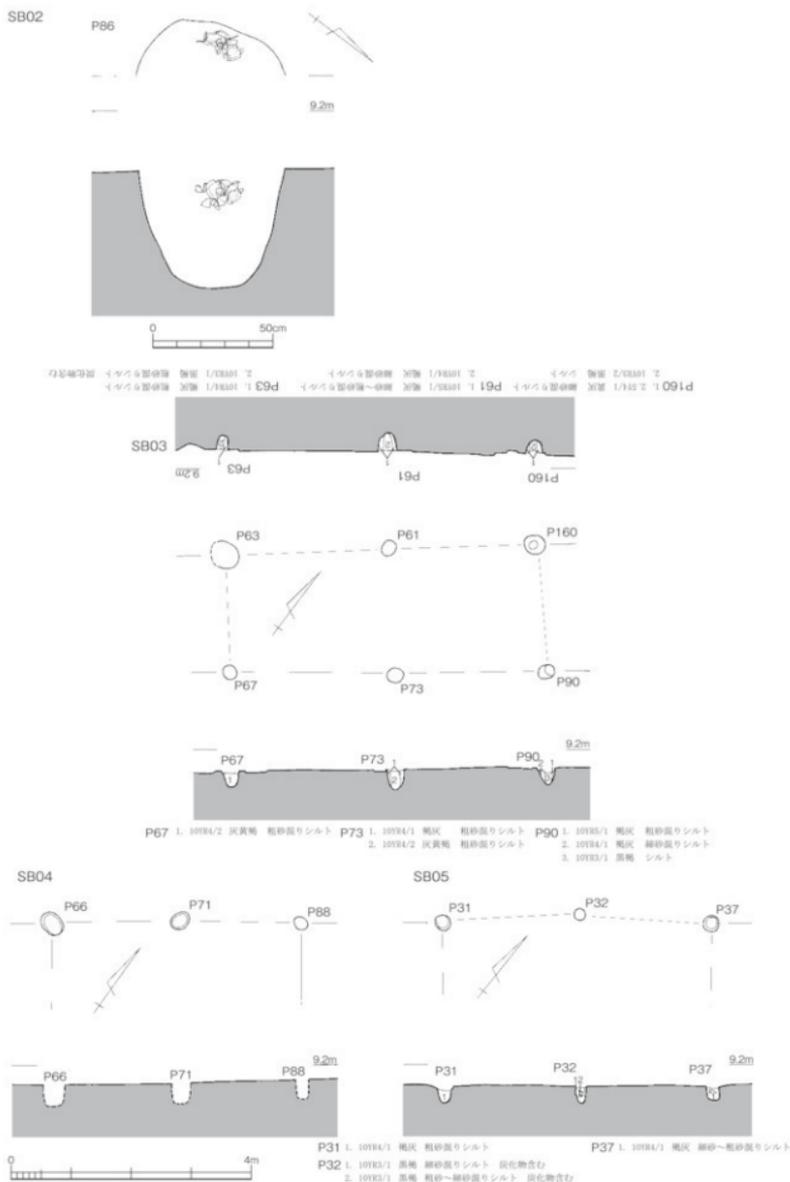
SB01



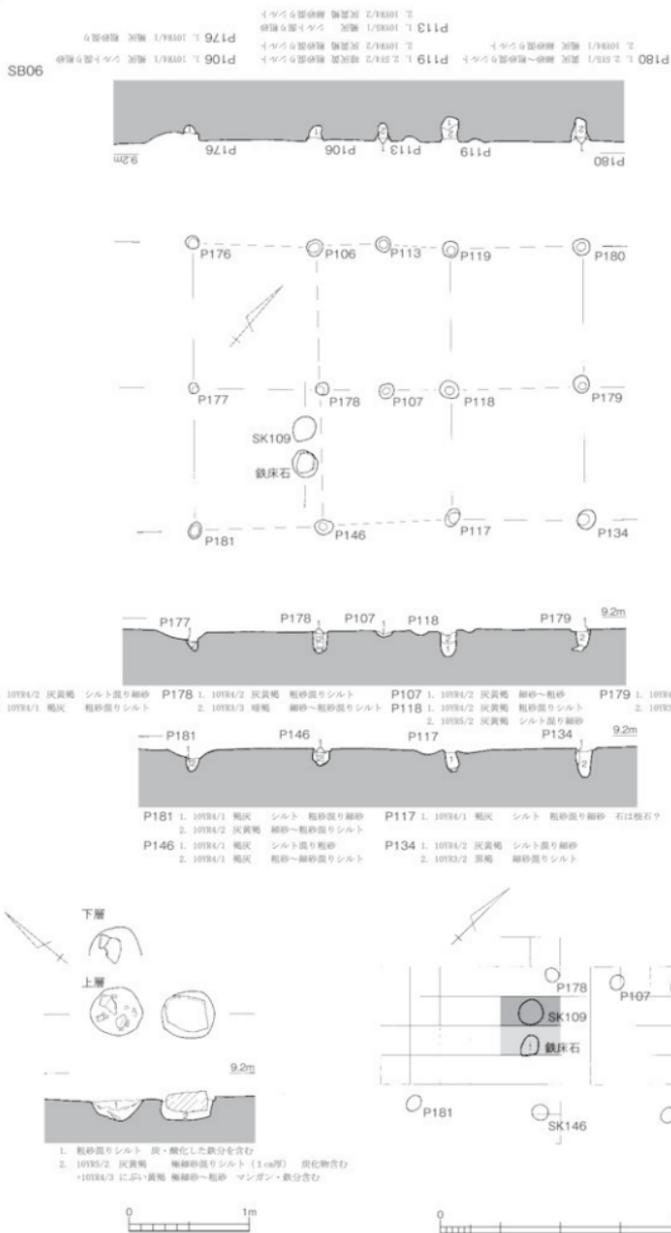
SB02



SB01・SB02 平面・断面図



SB02・P86 SB03～SB05 平面・断面図



SB06 平面・断面図



SD101

9.2m



1. 10YR4/1 黄灰 細砂混りシルト
2. 10YR3/3 暗褐 シルト混り細砂

SD102北セクション

9.2m



1. 10YR4/1 黄灰 細砂混りシルト
2. 10YR3/3 暗褐 シルト混り粗砂〜細砂

SD102南セクション

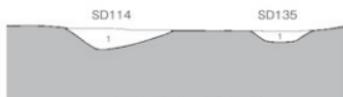
9.2m



1. 10YR4/1 黄灰 細砂混りシルト
2. 10YR3/3 暗褐 シルト混り粗砂〜細砂

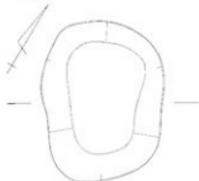
SD114-SD135

9.2m



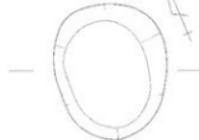
1. 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト (ベース)

SK01



1. 5Y4/1 灰 シルト 部分的に10YR4/4褐
2. 10YR4/2 灰黄褐 粗砂
3. 10YR4/1 黄灰〜10YR3/3暗褐 シルト混り細砂

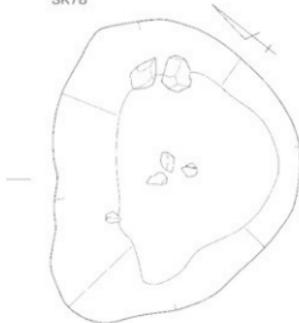
SK02



1. 5Y5/1 灰 粗砂〜粗砂
2. 5Y5/1 灰 シルト〜細砂
3. 5Y4/1 灰 シルト

0 50cm

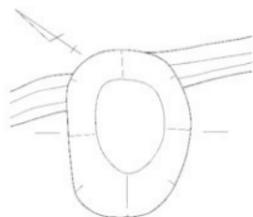
SK78



1. 10YR4/1 黄灰 シルト 粗砂混り細砂
2. 5Y2/1 黒 粗砂混り粘質シルト (炭多く含む) (遺物含む)
3. 2.5Y4/1 黄灰 細砂〜粗砂混りシルト
4. 2.5Y5/1 黄灰 粗砂〜粗砂混り粘質シルト
5. 10YR6/2 灰黄褐 粗砂混りシルト
6. 10YR5/1 黄灰 10YR4/4褐 シルト混り粗砂〜粗砂

0 1m

SK105

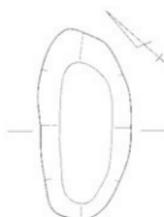


9.3m



1. 2.014/1 堀戻 シルト混り細砂 (酸化鉄・マンガン含む)
2. 2.014/1 堀戻 細砂混りシルト

SK147

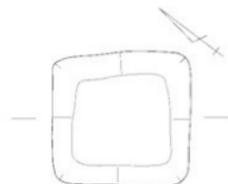


9.3m

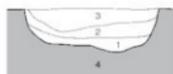


1. 10194/1 堀戻 細砂混りシルト (酸化鉄・マンガン)
2. 2.013/2 黒堀 シルト混り細砂～粗砂

SK148

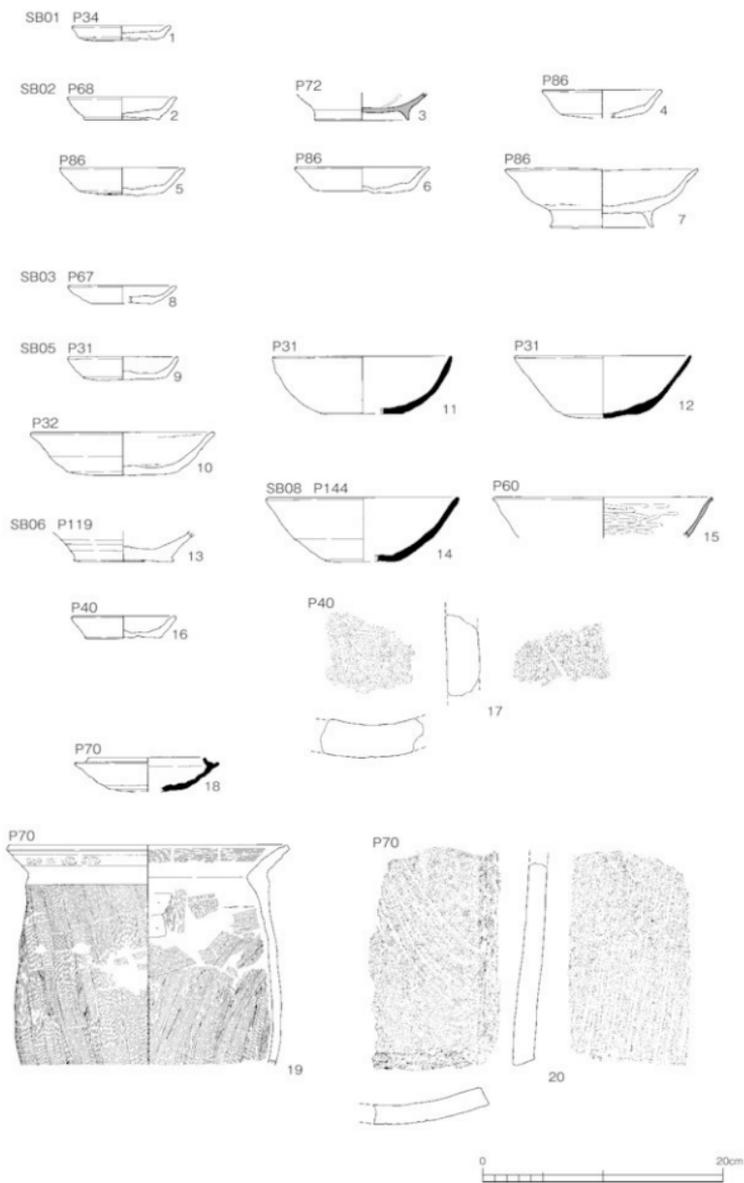


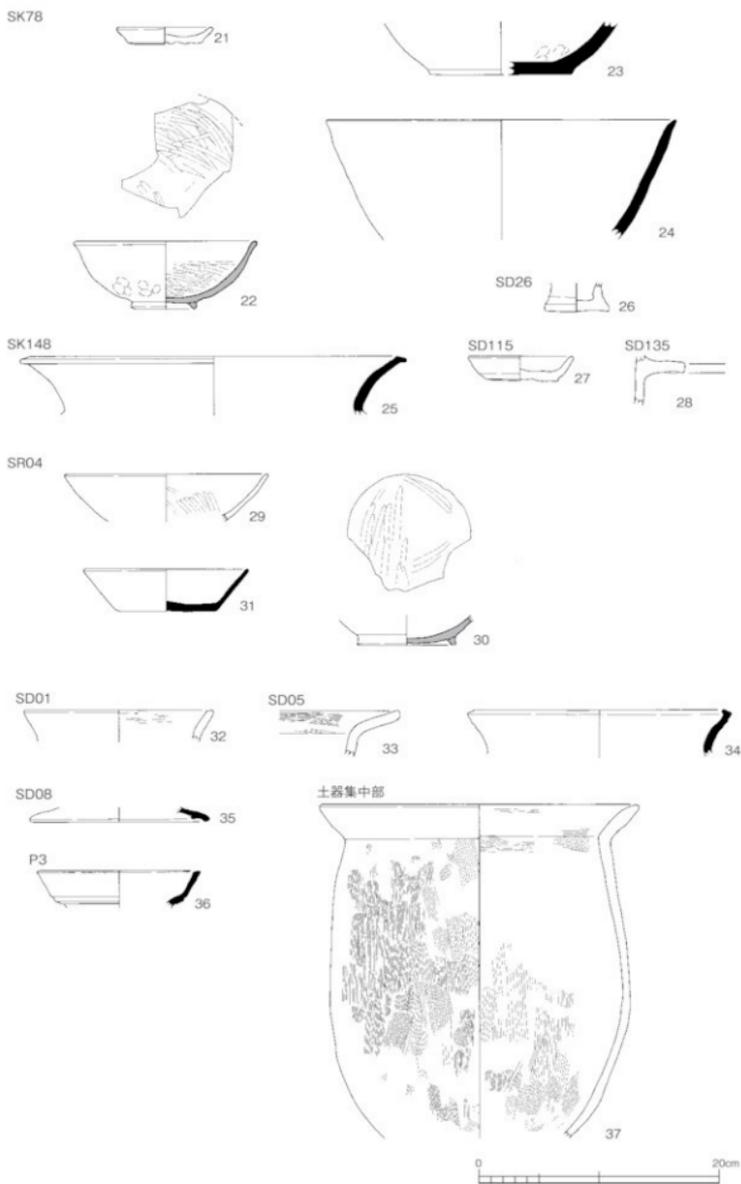
9.3m



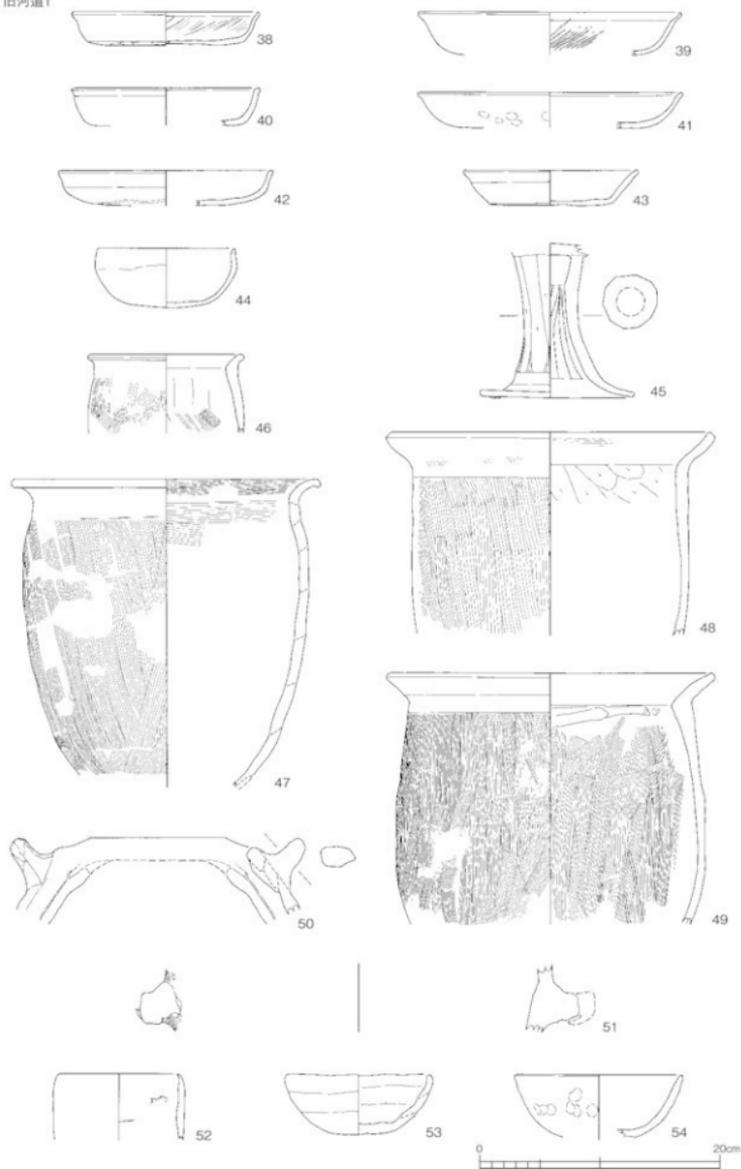
1. 10194/1 堀戻 細砂混り粘質シルト
2. 10194/2 灰黄堀 細砂混り粘質シルト
3. 2.014/2 堀戻黄 細砂混りシルト
4. 10193/2 黒堀 シルト



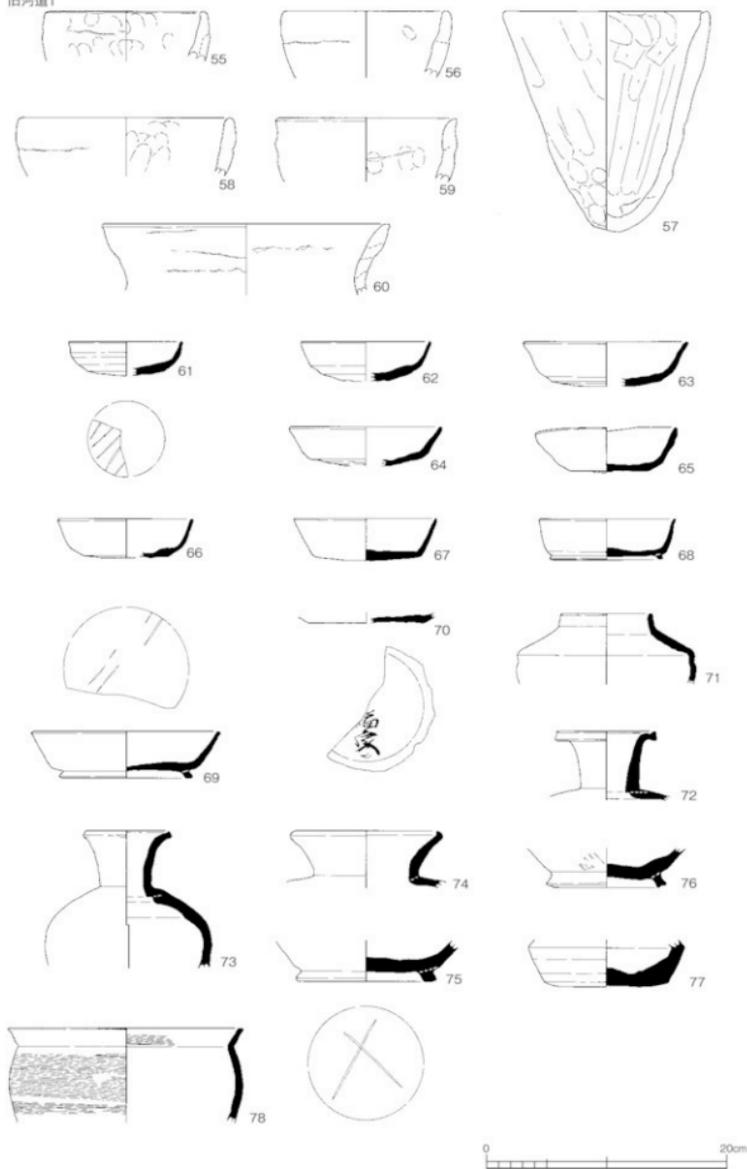




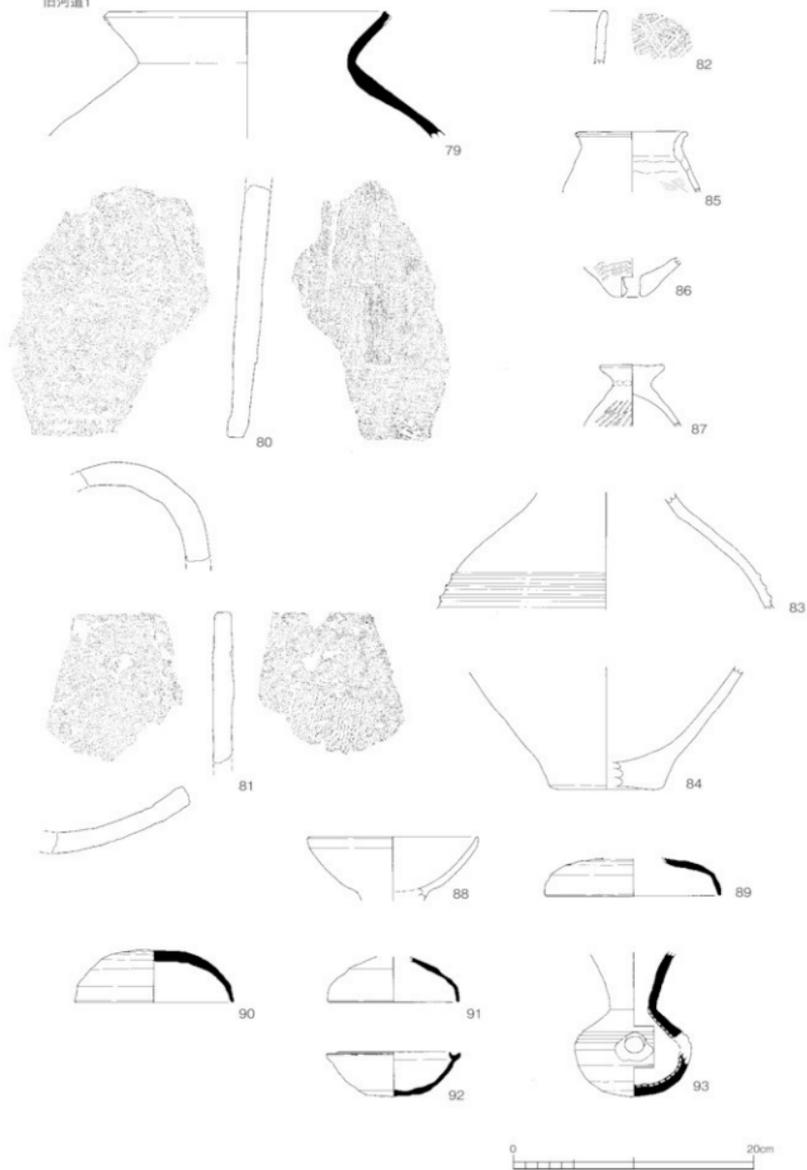
旧河道1



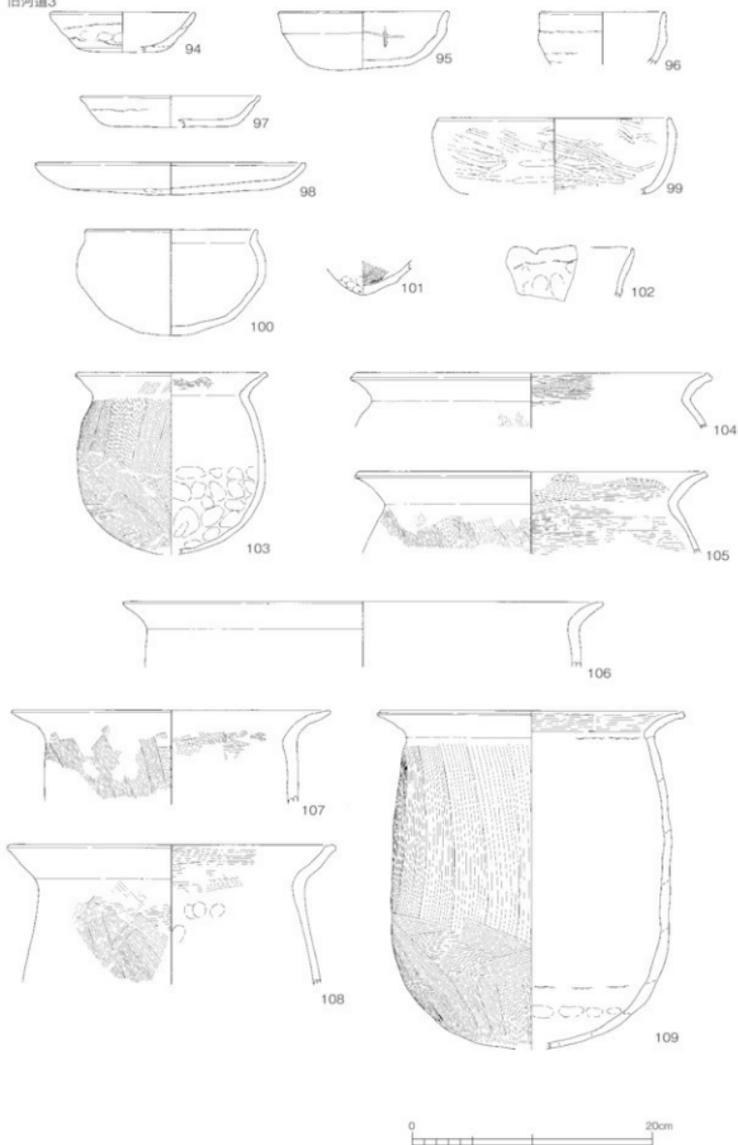
旧河道1



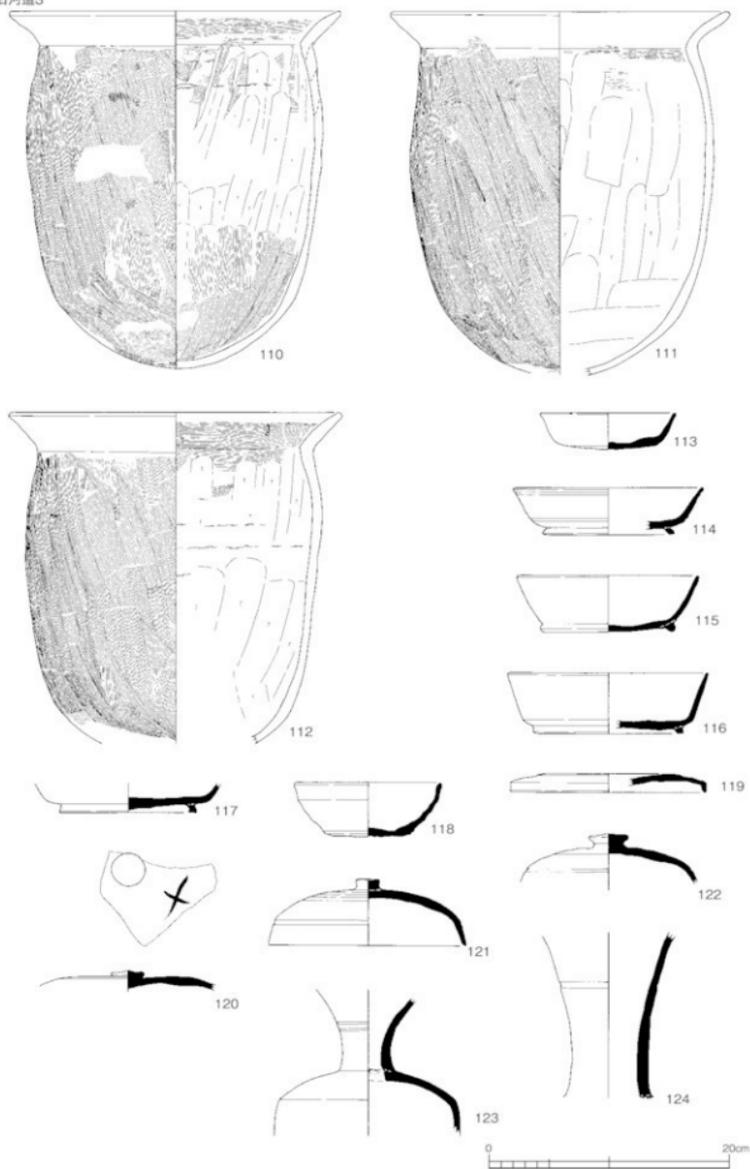
旧河道1



旧河道3



旧河道3



旧河道3



125



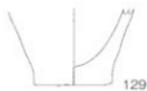
126



127



128



129



130



131



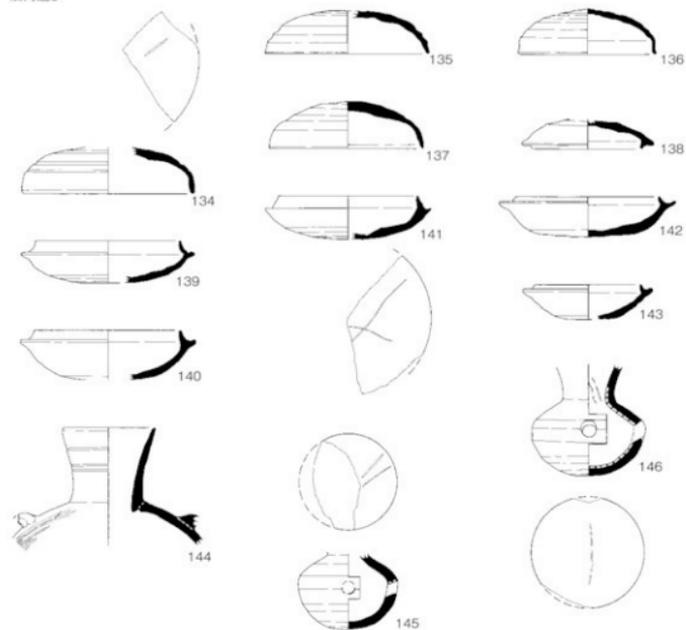
132



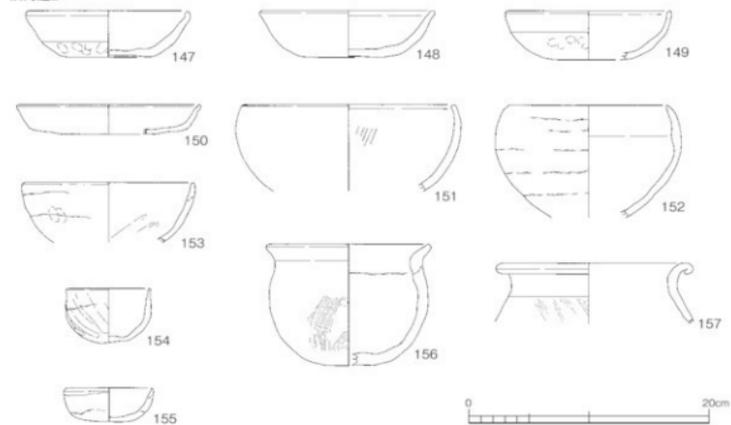
133



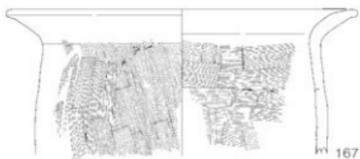
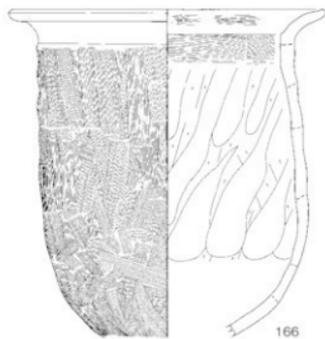
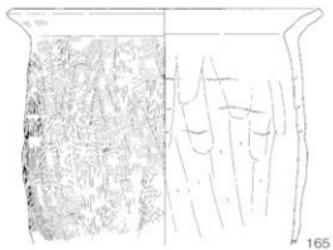
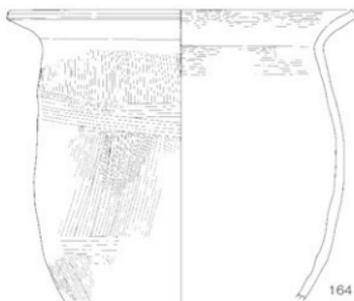
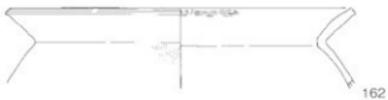
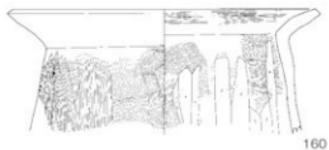
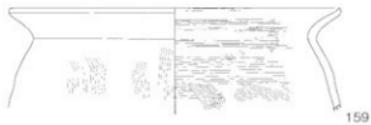
旧河道3

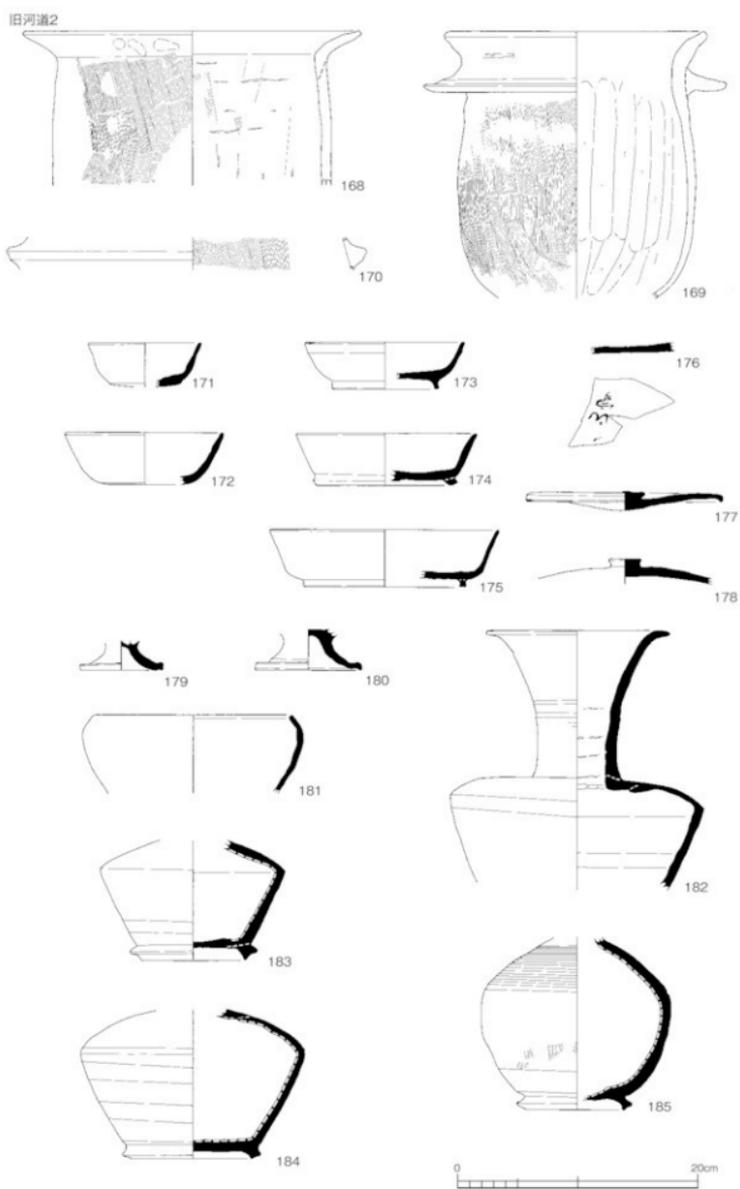


旧河道2

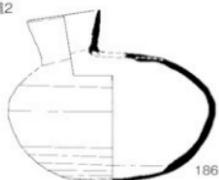


旧河道2

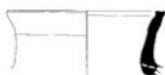




旧河道2



186



187



188



189



190



191



192



193



194



195



196



197



198



199



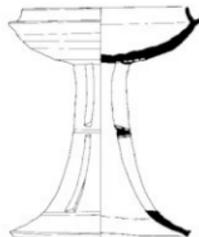
200



201



202



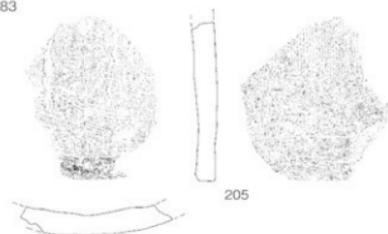
204



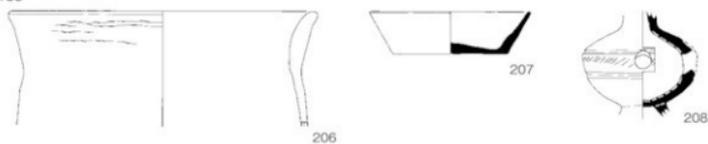
203



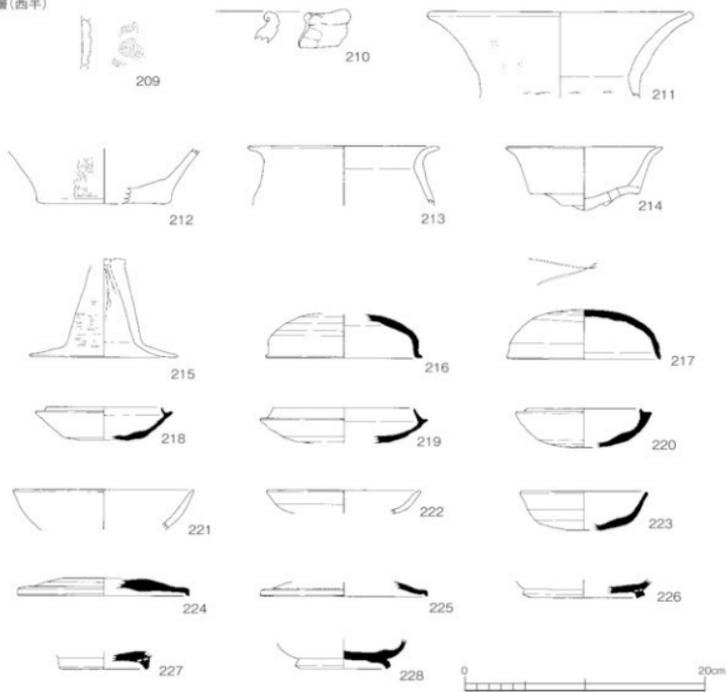
SD183



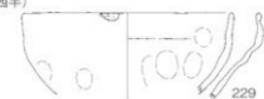
SD185



包含層(西半)



包含層(西半)



229



230



231



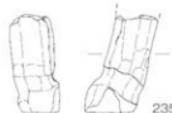
232



233



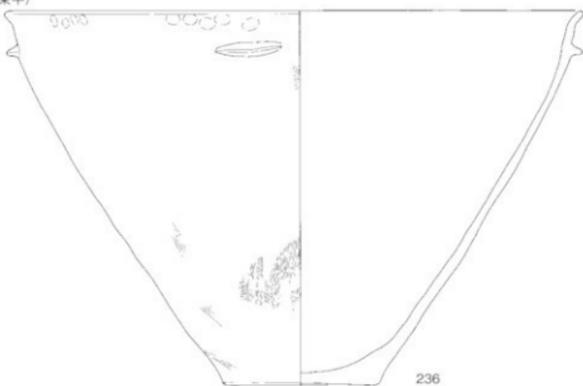
234



235



包含層(東半)



236



237



238



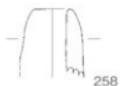
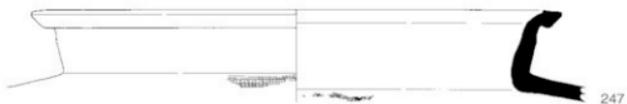
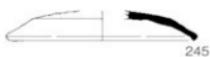
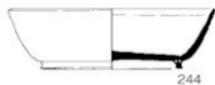
239

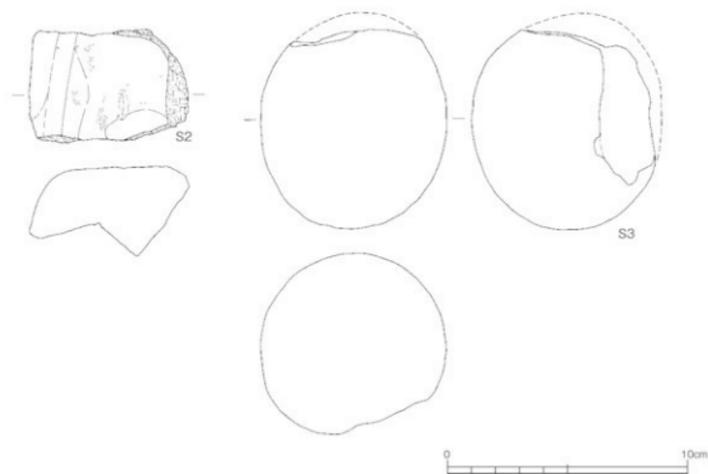
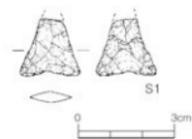


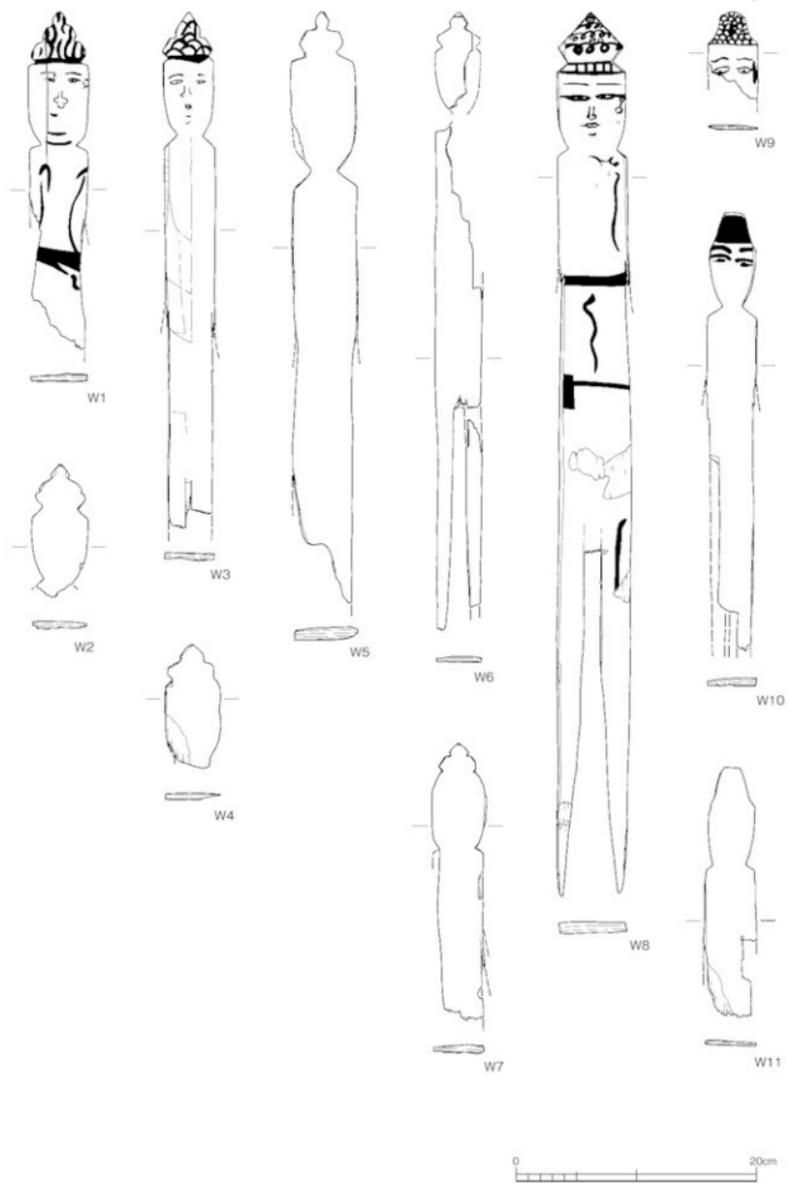
240

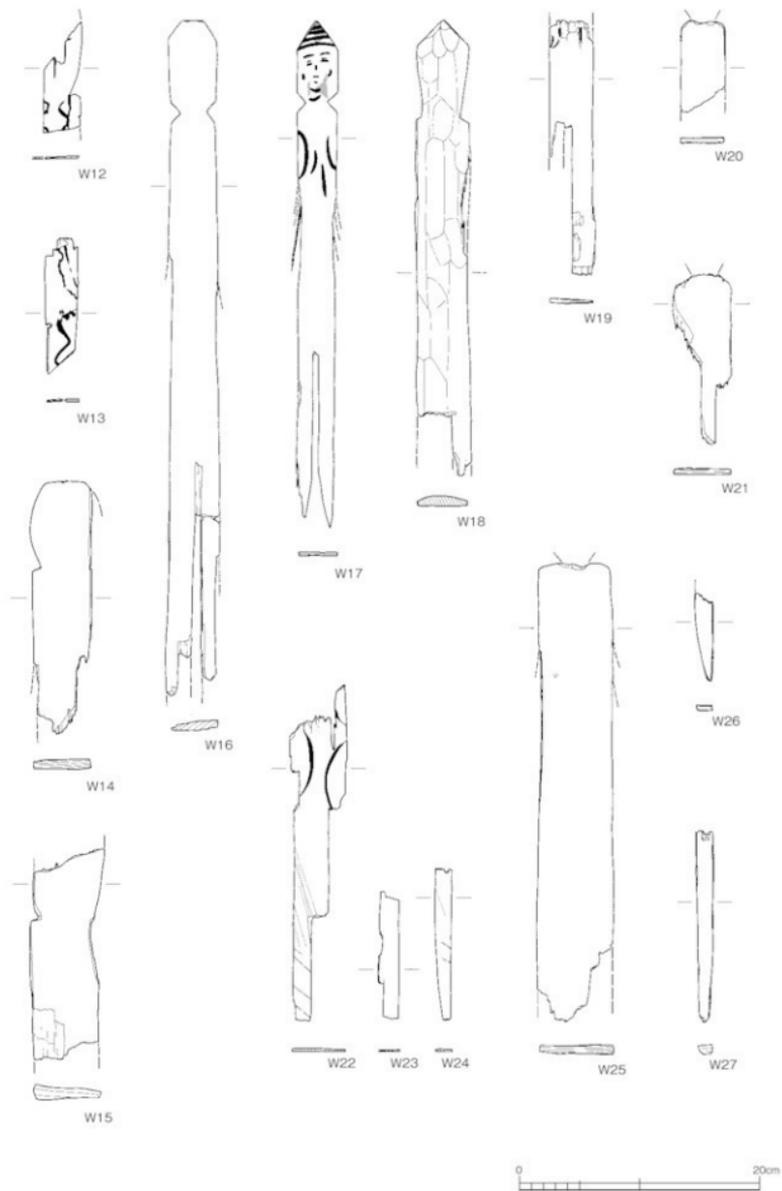


包含層

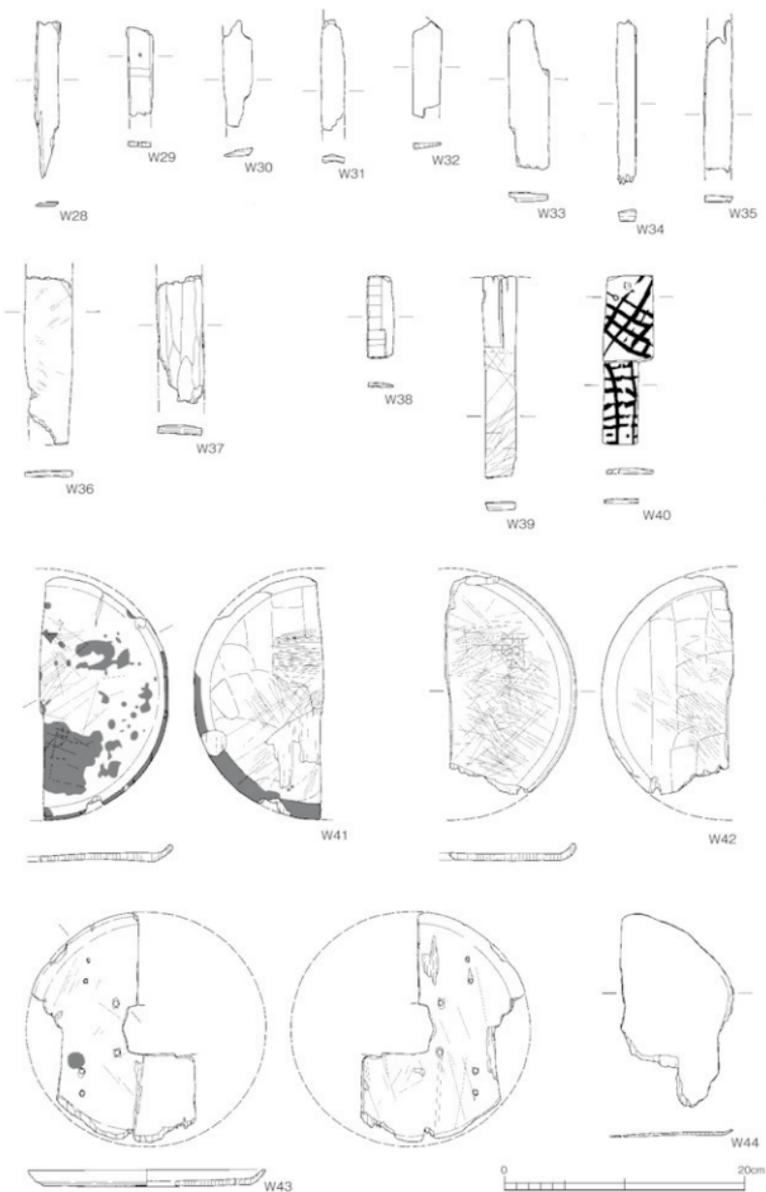


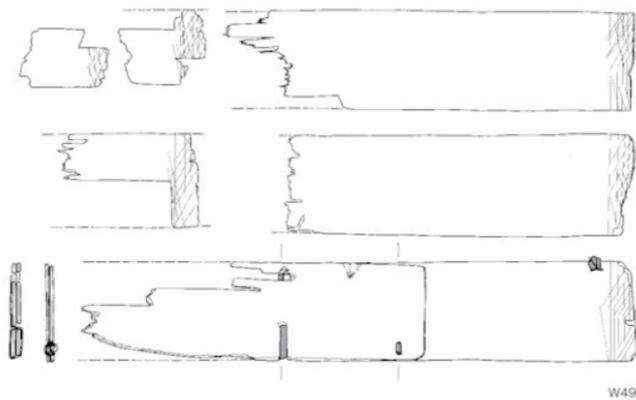
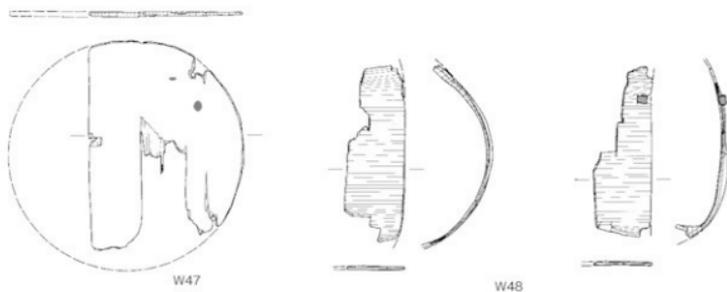
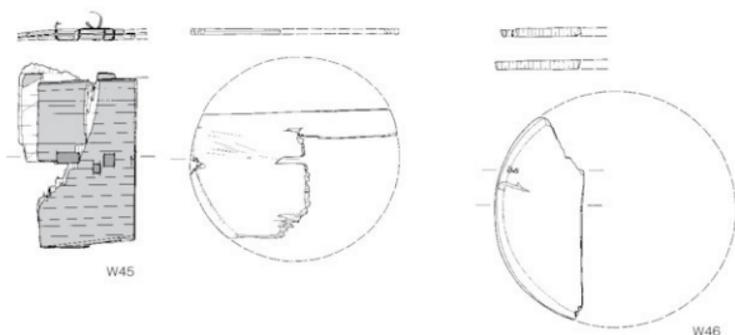


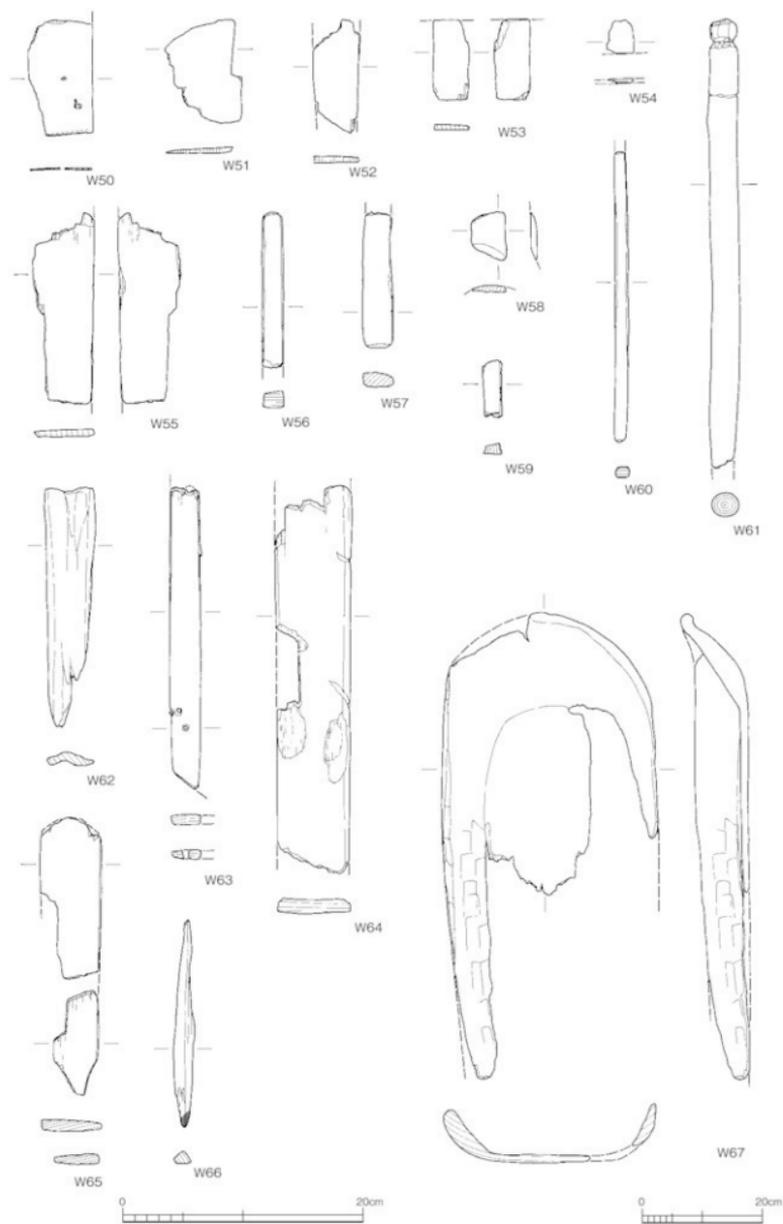




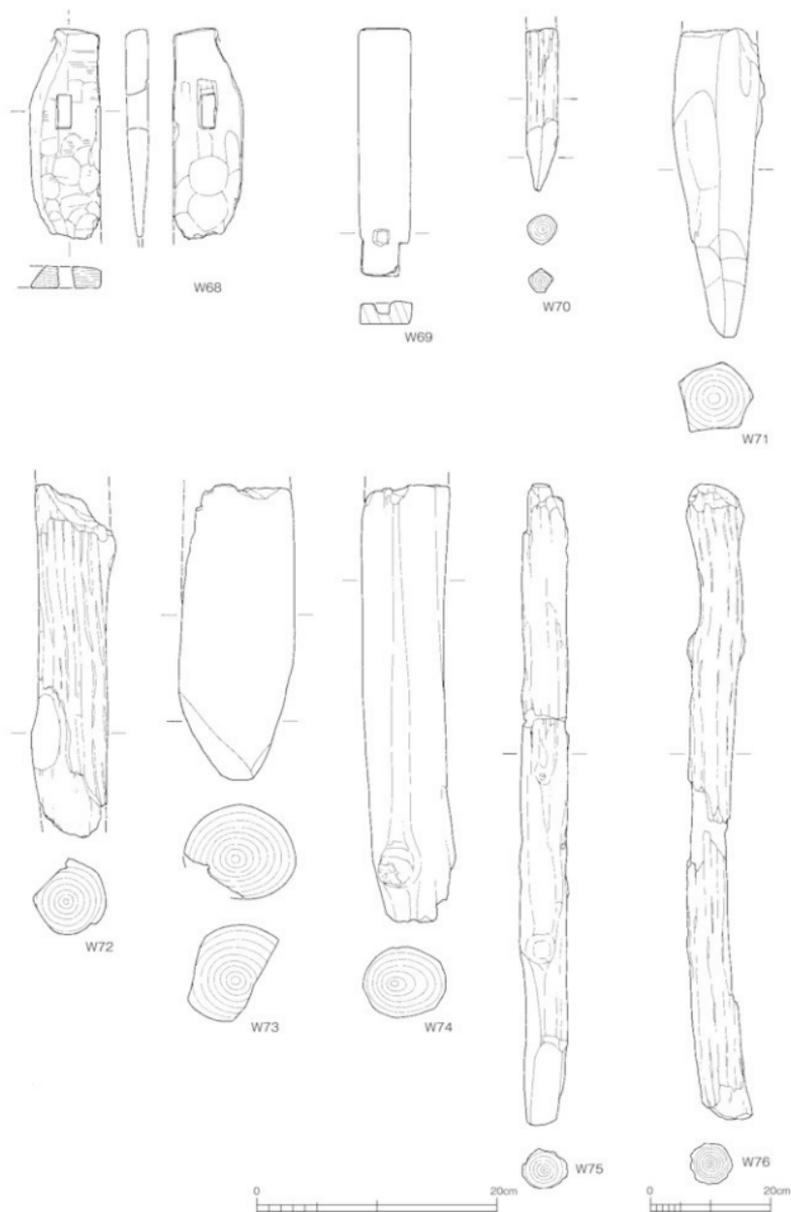
出土遺物18(木製品2)





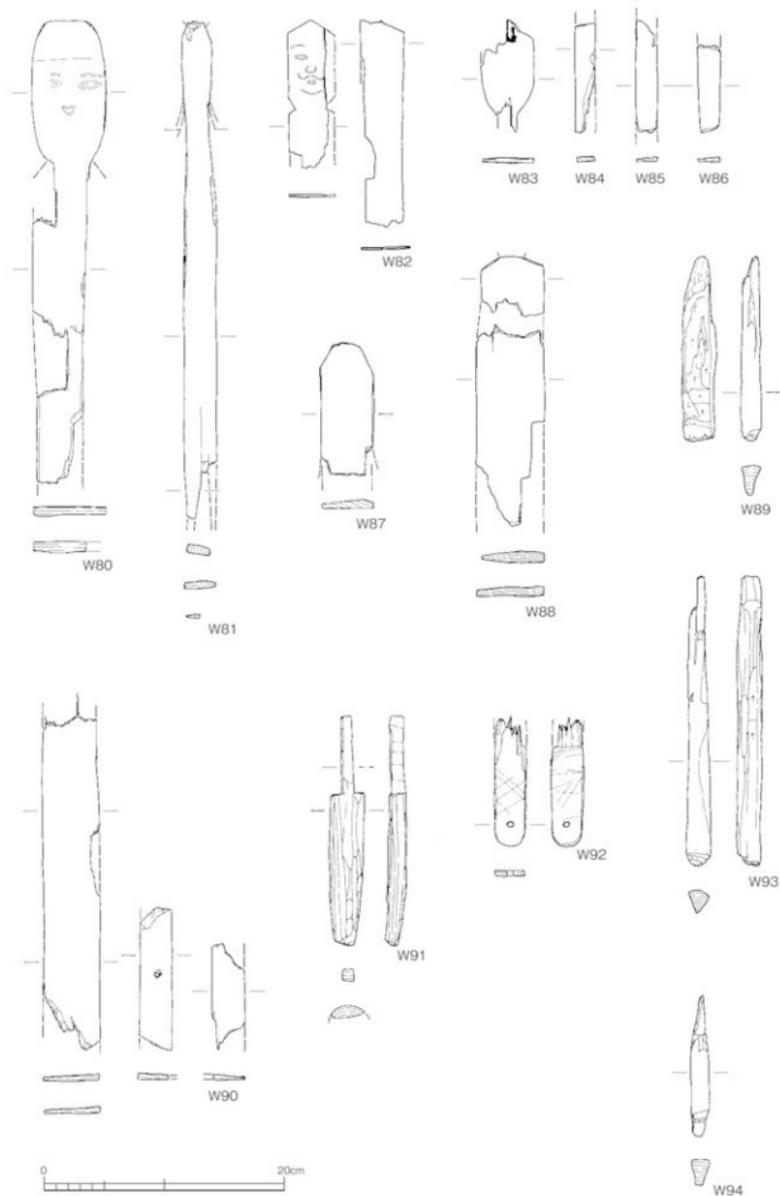


出土遺物21(木製品5)

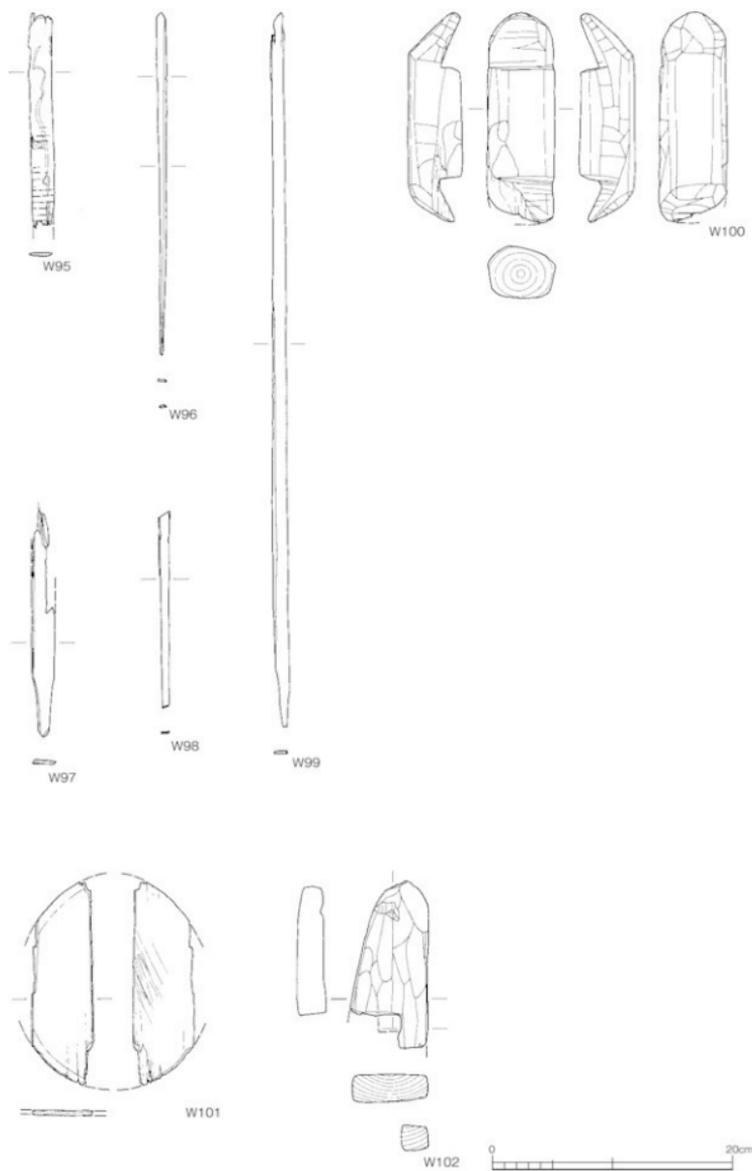


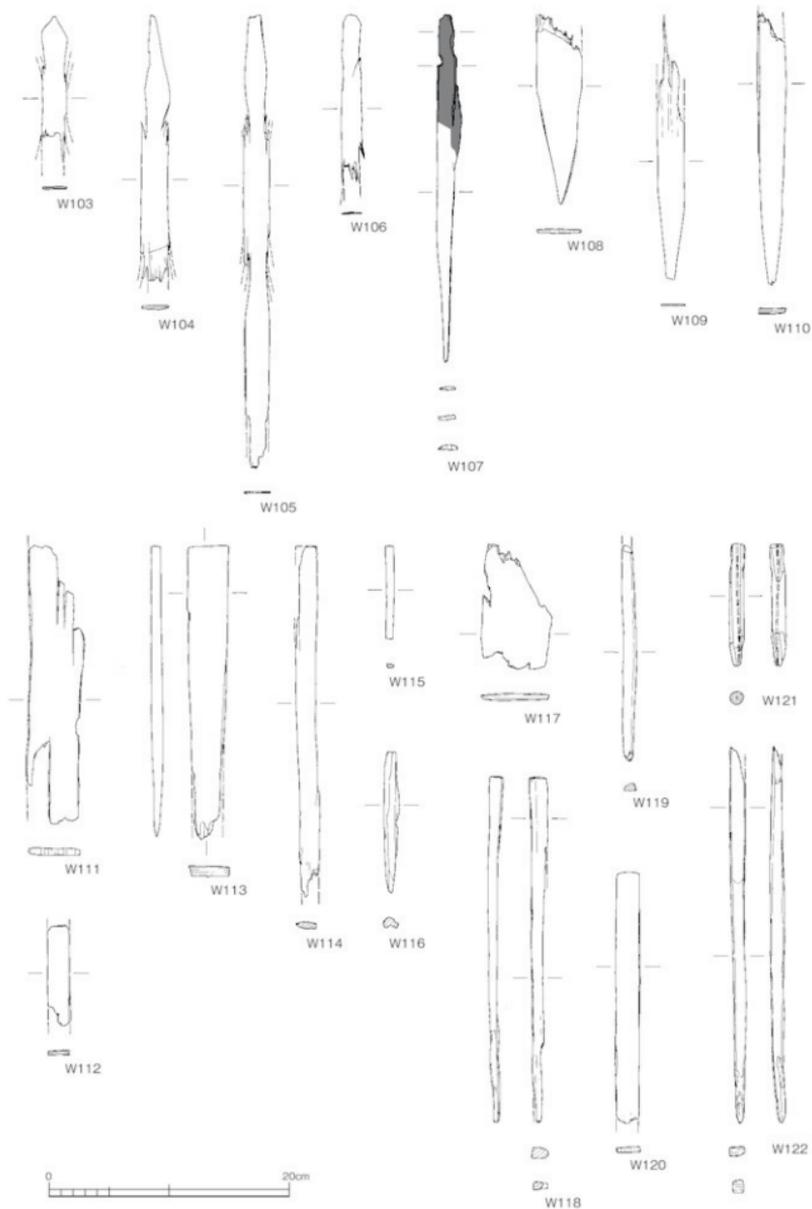
出土遺物22(木製品6)

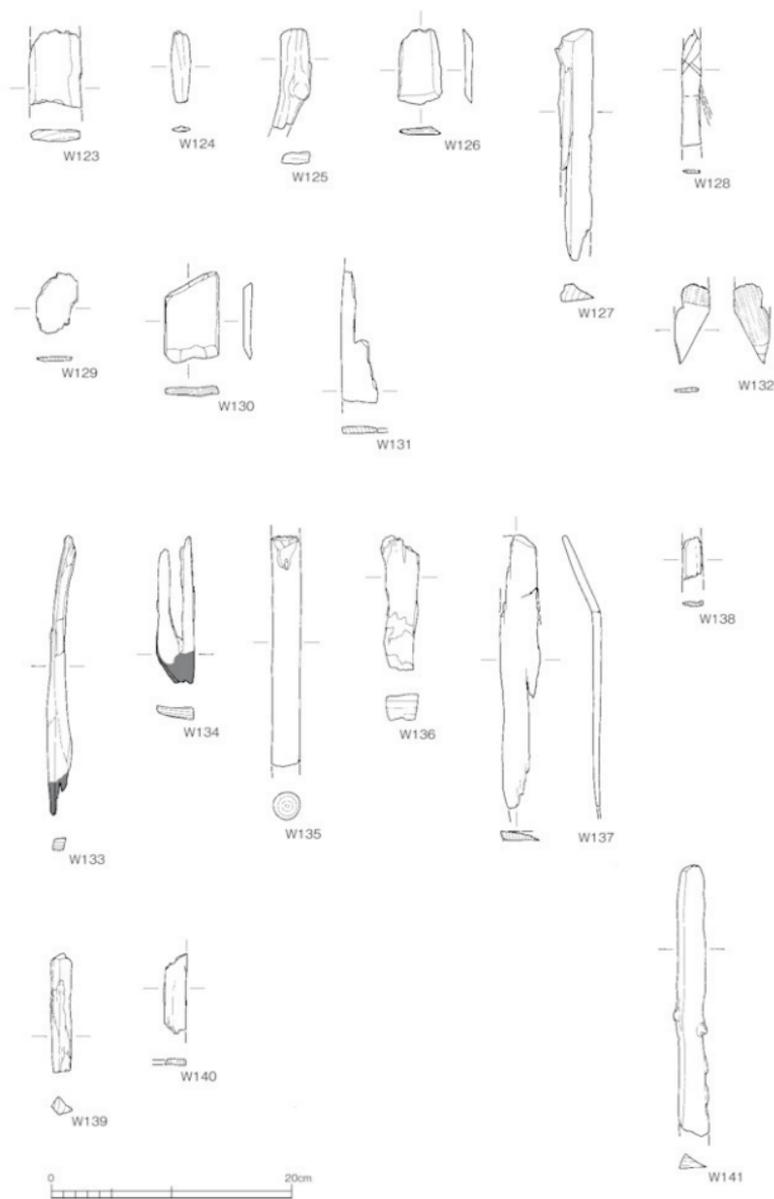


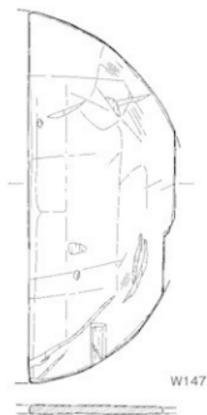
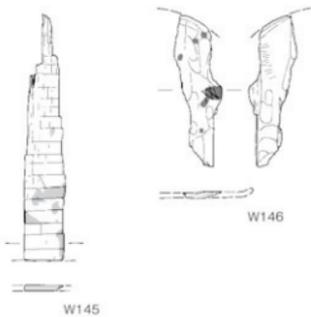
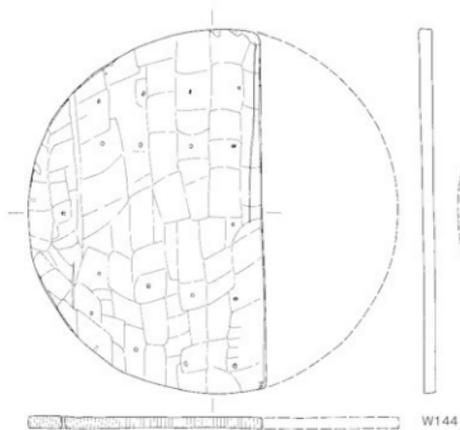
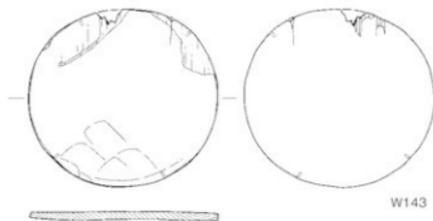


出土遺物24(木製品8)











# 写真図版





上層水田面（奈良時代遺構面）全景（南から）



上層水田面（南東から）

写真図版 2

2009 年度調査



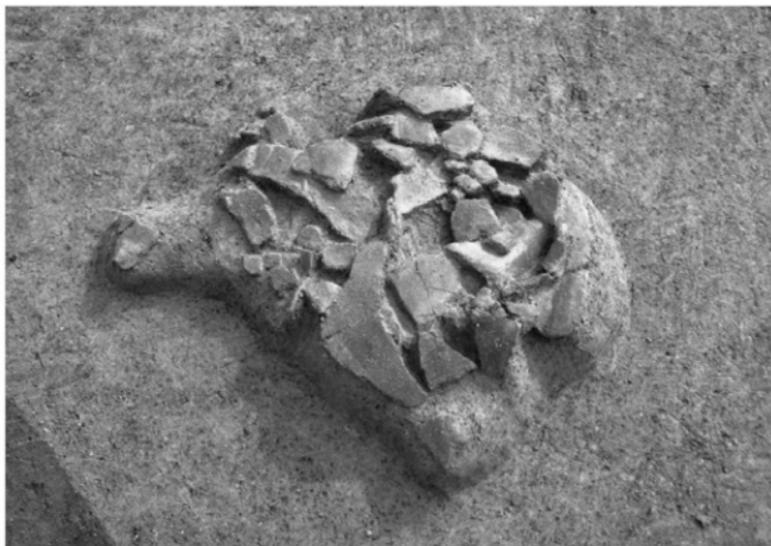
上層水田面(南東から)



上層水田面(北東から)



上層水田面 土器出土状況(東から)



上層水田面 土器出土状況(北から)

# 写真図版 4

2009 年度調査



旧河道部上面(北西から)



旧河道部上面(南東から)



上層水田畔断面(北東から)



旧河道部噴砂断面(南東から)



溝 SD01 断面(南から)



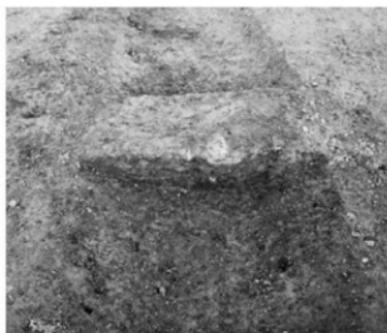
溝 SD04 断面(南から)



溝 SD05 断面(西から)



溝 SD06 断面(西から)



溝 SD08 断面(南から)



溝 SD09 断面(南から)



溝 SD10 断面(南から)



溝 SD11 断面(南から)

# 写真図版 6

2011 年度調査



奈良時代遺構面  
旧河道の重複状況  
(西から)



旧河道全景  
(北東から)



旧河道と下層水田面の  
重複状況(北から)



飛鳥時代遺構面全景(西から)



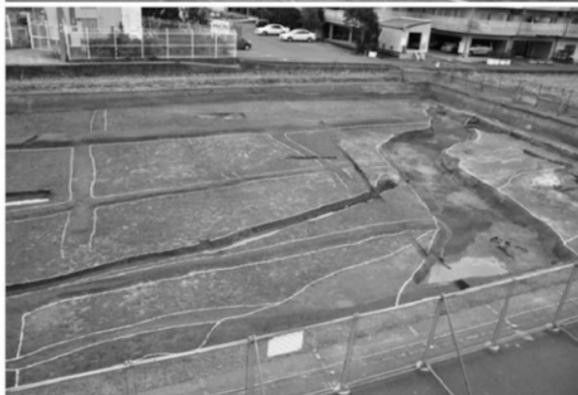
飛鳥時代遺構面全景(東から)

写真図版 8

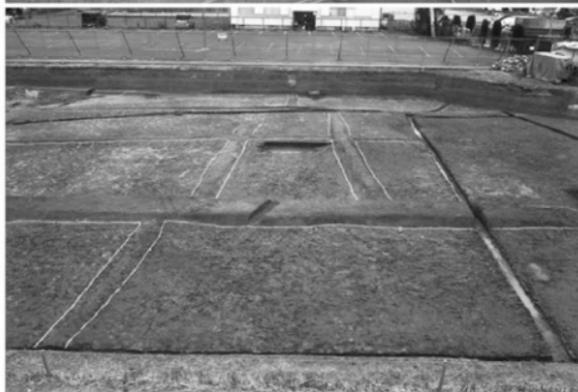
2011 年度調査



飛鳥時代遺構面  
(南東から)



飛鳥時代遺構面  
(南から)



飛鳥時代遺構面  
(北西から)



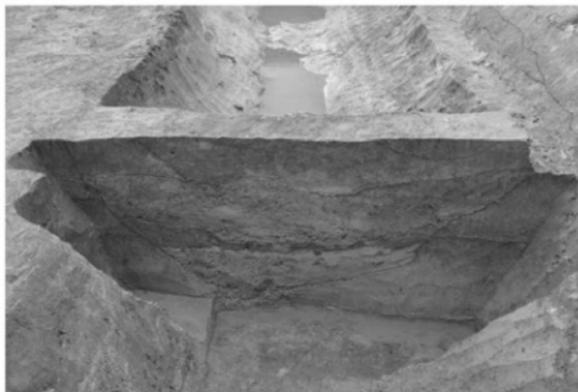
平安時代遺構面  
(南東から)



飛鳥時代遺構面  
(北から)



飛鳥時代遺構面  
(南東から)



溝 SR04 断面(東から)



溝 SD05 断面(西から)



溝 SD06 断面(西から)

溝 SD05 下層断面  
(西から)



溝 SD05 下層断面  
(西から)



飛鳥時代遺構面  
大睦群断面(西から)



写真図版 12

2011 年度調査



小畦畔断面(南から)



大・小畦畔とりつき部  
断面(西から)



大・小畦畔とりつき部  
断面(部分 西から)



奈良時代遺構面旧河道 2・3 杭列 B・C 検出状況 (西から)



旧河道 2・3 杭列 B・C 検出状況 (北から)

写真図版 14

2011 年度調査



旧河道 2・3 杭列 C  
検出状況  
(南から)



旧河道 2・3 杭列 C  
検出状況  
細部(西から)



旧河道 2・3 杭列 C  
検出状況  
細部(北西から)



旧河道 2・3 杭列 B 検出状況 (西から)



旧河道 2・3 杭列 B 検出状況 (北西から)

# 写真図版 16

2011 年度調査



旧河道 2・3 杭列 B  
検出状況細部  
(南西から)



旧河道 2・3 杭列 B  
検出状況細部  
(北西から)



旧河道 2・3 杭列 B  
検出状況細部  
(北から)



洪水砂中の青銅鏡出土状況



青銅鏡出土状況



旧河道内 槽出土状況(南から)



旧河道内 槽出土状況(南から)



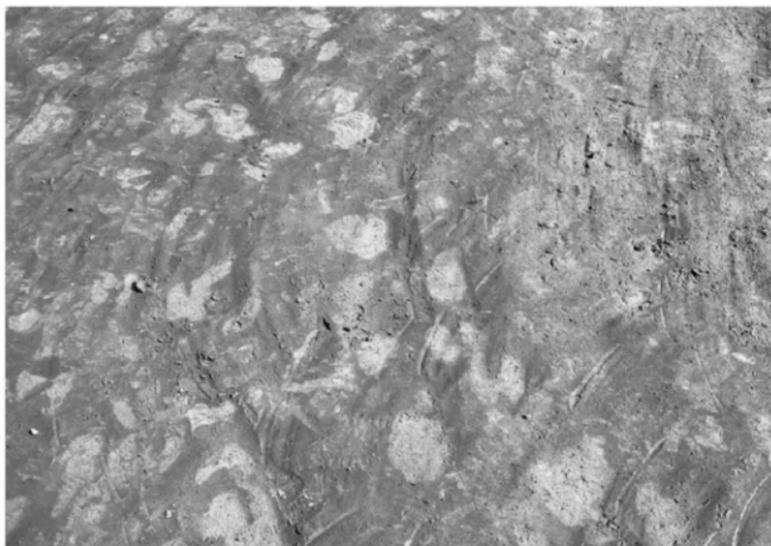
旧河道内 舟形出土状況(南から)



洪水砂中の馬歯出土状況



下層水田面（飛鳥時代遺構面）足跡（西から）



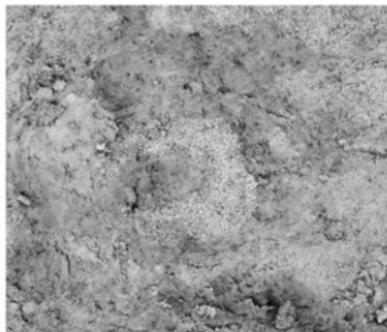
下層水田面足跡（西から）



水田面足跡 1 検出状況(南から)



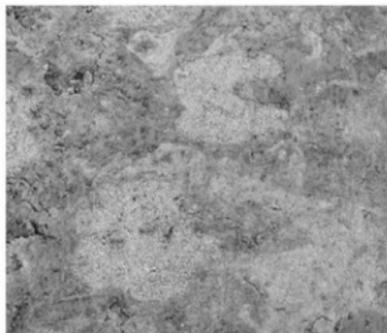
水田面足跡 1 掘削後(南から)



水田面足跡 3 検出状況(南から)



水田面足跡 3 掘削後(南から)



水田面足跡 4 (上)・5 (下)検出状況(南から)



水田面足跡 4 (上)・5 (下)掘削後(南から)



調査区北壁断面東部  
(南西から)



調査区北壁断面中央  
(南東から)

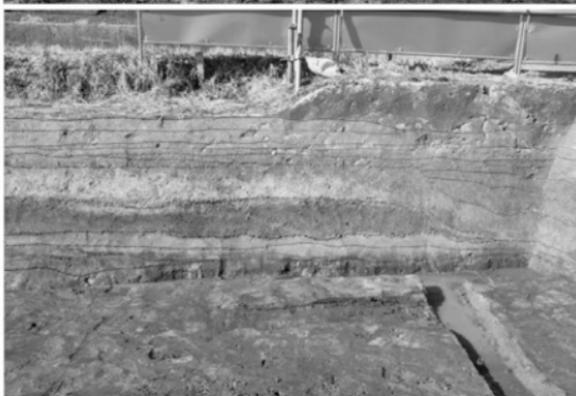


調査区北壁断面西部  
(南西から)

調査区北壁断面東部  
(東から)



調査区北壁断面東部  
(南東から)



調査区北壁断面中央  
(南東から)





調査区西壁断面  
(北から)



調査区南壁断面西部  
(北西から)



調査区南壁断面東部  
(北西から)

調査区南壁断面東部  
(北西から)



調査区南壁断面東部  
(北西から)



下層遺構面下位  
暗緑灰色粘土層中の  
土器出土状況





上層遺構面（平安時代遺構面）全景（南西から）



上層遺構面全景（北東から）



上層遺構面（平安時代遺構面）全景（北東から）



上層遺構面東部（西から）



平安時代遺構面掘立柱建物跡群(北西から)



掘立柱建物跡群(西から)

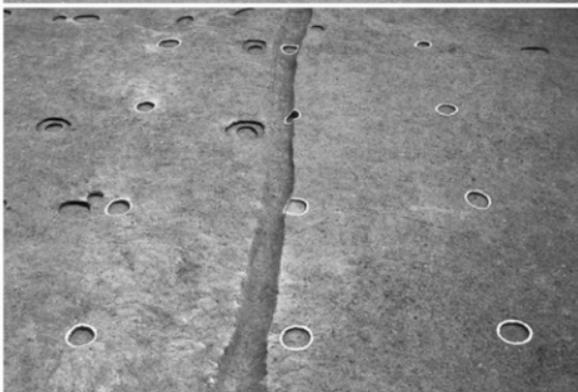
掘立柱建物跡群(北から)



掘立柱建物跡 SB01  
(南西から)



掘立柱建物跡 SB01  
(北西から)

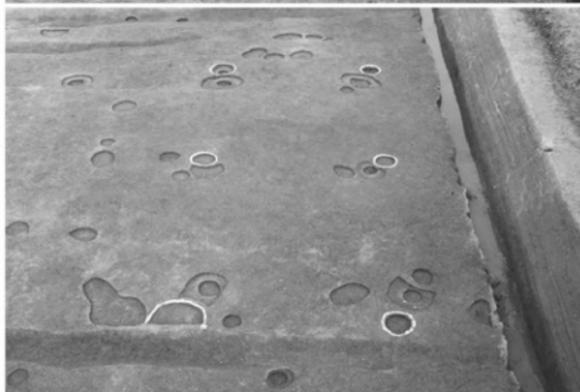




掘立柱建物跡 SB02  
(南西から)



掘立柱建物跡 SB02  
(北西から)

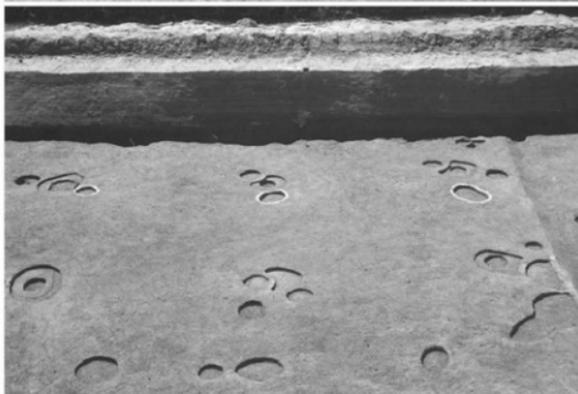


掘立柱建物跡 SB03  
(南西から)

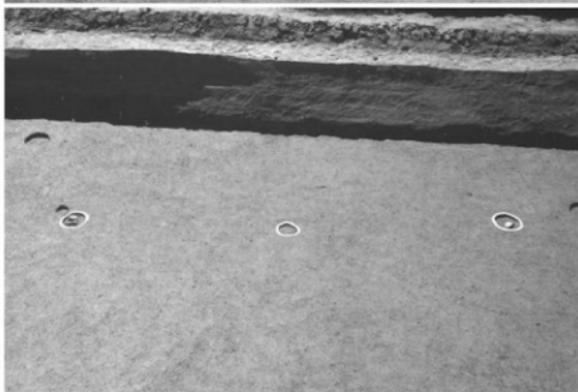
掘立柱建物跡 SB03  
(北西から)

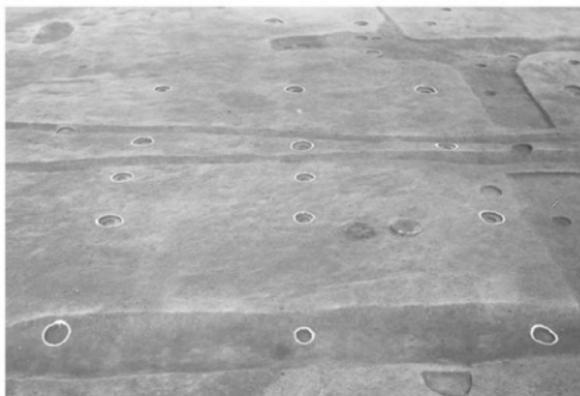


掘立柱建物跡 SB04  
(北西から)



掘立柱建物跡 SB05  
(北西から)





掘立柱建物跡 SB06  
(南西から)



掘立柱建物跡 SB06  
(北西から)



掘立柱建物跡 SB07  
(南西から)

掘立柱建物跡 SB07  
(北西から)



掘立柱建物跡 SB08  
(北西から)





掘立柱建物跡 SB01 P34 遺物出土状況(南東から)



掘立柱建物跡 SB02 P68 遺物出土状況(南西から)



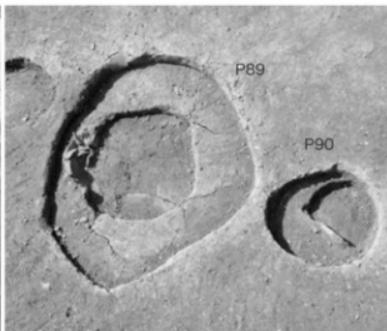
掘立柱建物跡 SB02 P86 根石出土状況(北東から)



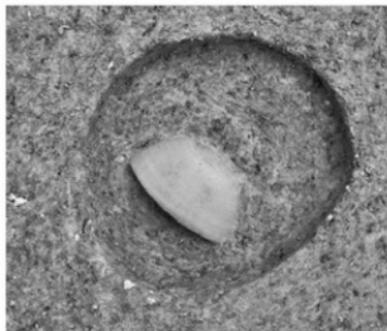
掘立柱建物跡 SB02 P89 遺物出土状況(北東から)



掘立柱建物跡 SB02 P89 遺物出土状況(北東から)



掘立柱建物跡 SB02 P89・SB03 P90  
遺物出土状況(南東から)



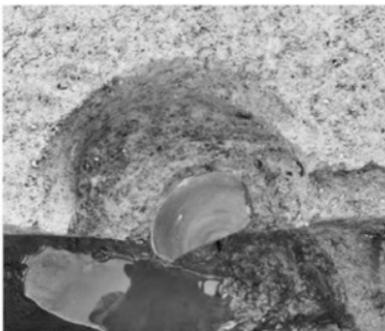
掘立柱建物跡 SB05 P31 遺物出土状況(南西から)



掘立柱建物跡 SB05 P31 遺物出土状況(北西から)



掘立柱建物跡 SB05 P31 遺物出土状況(北西から)



掘立柱建物跡 SB05 P31 遺物出土状況(北西から)



掘立柱建物跡 SB05 P31 遺物出土状況(北西から)



掘立柱建物跡 SB05 P32 遺物出土状況(北西から)

写真図版 34

2012 年度調査



掘立柱建物跡 SB06 P117 根石出土状況(南東から)



掘立柱建物跡 SB06 P179 根石出土状況(北西から)



掘立柱建物跡 SB08 P144 遺物出土状況(北東から)



掘立柱建物跡 SB08 P144 断面(北東から)



P40 断面(南西から)

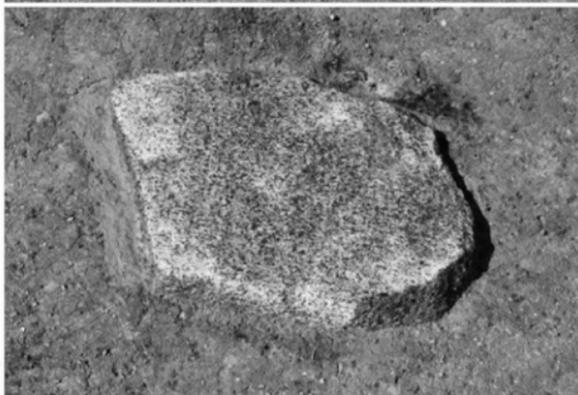


P40 遺物出土状況(南西から)

SB06 床面  
鉄床石 110(左)・  
土坑 SK109(右)  
(北東から)

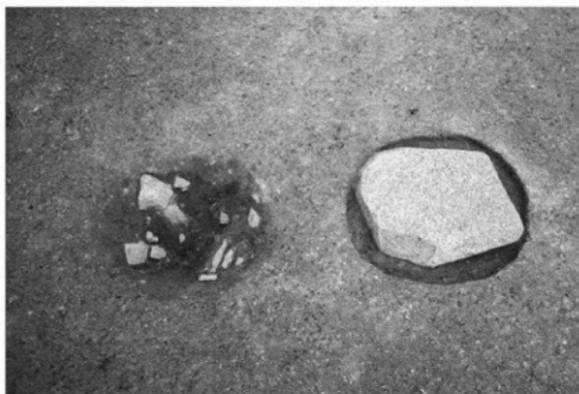


鉄床石 110  
(北東から)

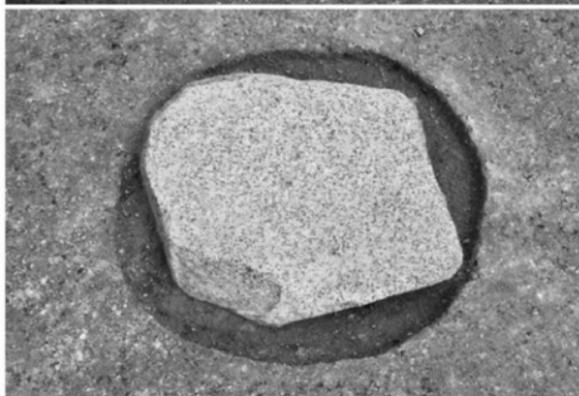


土坑 SK109 検出状況  
(南西から)

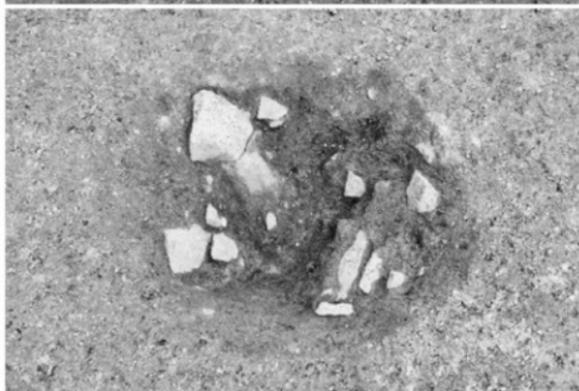




SB06 床面  
土坑 SK109(左)・  
鉄床石 110(右)  
(南西から)

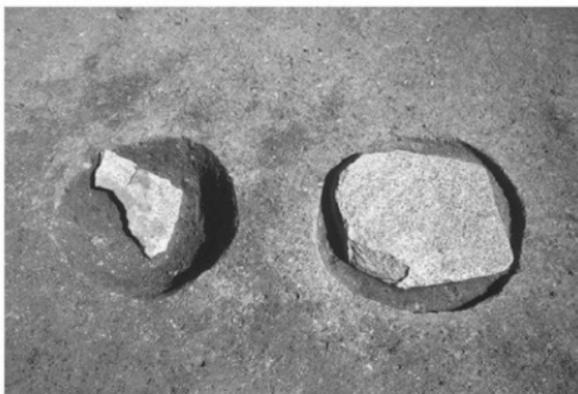


鉄床石 110(南西から)



土坑 SK109(南西から)

SB06 床面  
土坑 SK109(左)・  
鉄床石 110(右)  
(南西から)

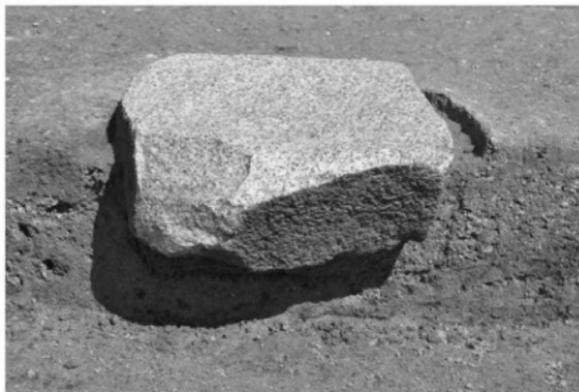


土坑 SK109  
(南西から)



土坑 SK109(左)・  
鉄床石 110(右)  
断面(南西から)





SB06 床面  
鉄床石 110 断面  
(南西から)



土坑 SK109 断面  
(南西から)



土坑 SK109 断面  
(南西から)

SB06 床面  
土坑 SK109 底面  
(北東から)

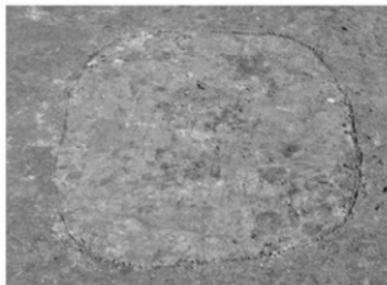


土坑 SK109 底面  
(北東から)

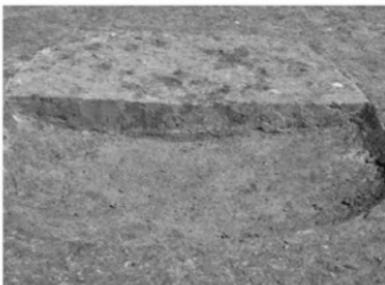


土坑 SK109 底面  
(南東から)

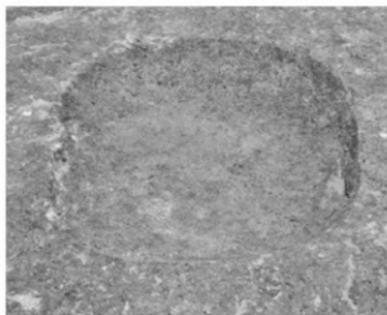




土坑 SK01 検出状況(南東から)



土坑 SK01 断面(南東から)



土坑 SK01 完掘状況(南東から)



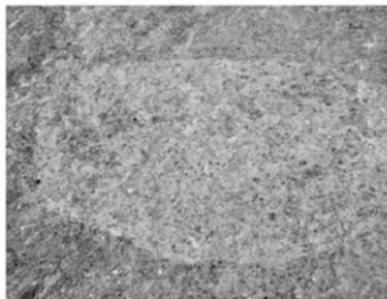
土坑 SK02 断面(南から)



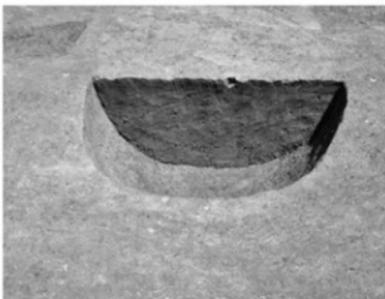
土坑 SK78 断面(南西から)



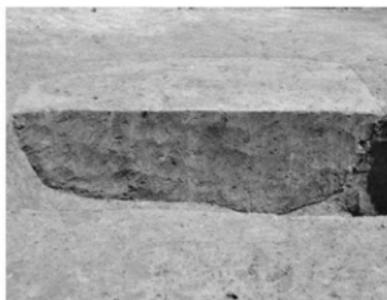
土坑 SK78 遺物等出土状況(南東から)



土坑 SK105 検出状況(南東から)



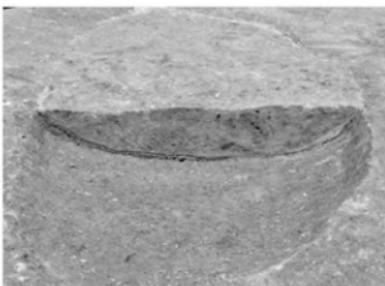
土坑 SK105 断面(南西から)



土坑 SK148 断面(南西から)



土坑 SK148 完掘状況(南西から)



土坑 SK147 断面(南西から)

# 写真図版 42

2012 年度調査



溝 SD19 断面(南東から)



溝 SD20 断面(南東から)



溝 SD21 断面(南東から)



溝 SD22 断面(南東から)



溝 SD23 断面(南東から)



溝 SD24 断面(南東から)



溝 SD26 北断面(南東から)



溝 SD26 南断面(南東から)



溝 SD101 断面(南東から)



溝 SD102 南断面(南東から)



溝 SD102 北断面(南東から)



溝 SD114(左)・SD135(右)断面(南東から)



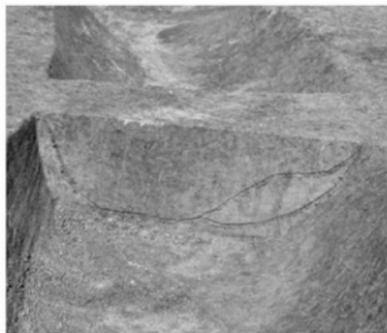
溝 SD183・  
SD184  
SR185 全景  
(北東から)



溝 SD183・SD184 全景(北西から)



溝 SD183 断面(南東から)



溝 SD184 断面(南東から)



溝 SD115 土師器皿出土状況(南東から)

奈良時代旧河道全景  
(南から)



飛鳥時代遺構面全景  
(北東から)



飛鳥時代遺構面全景  
(南西から)



# 写真図版 46

2012 年度調査



旧河道 1 人形出土状況(南東から)



旧河道 1 人形出土状況(南から)



旧河道 1 人形出土状況(南南東から)



旧河道 1 北半 人形出土状況(南西から)



旧河道 1 北半 人形出土状況(南東から)



旧河道 1 北半 人形出土状況(北東から)



旧河道1北半 人形出土状況(北東から)



旧河道1北半 人形冠帽出土状況(北東から)



旧河道1北半 木製品出土状況(南から)



旧河道1 木皿出土状況(北東から)



旧河道2南1区 木製品出土状況(南東から)

旧河道2南2区杭列B東側 人形出土状況  
(北東から)

写真図版 48

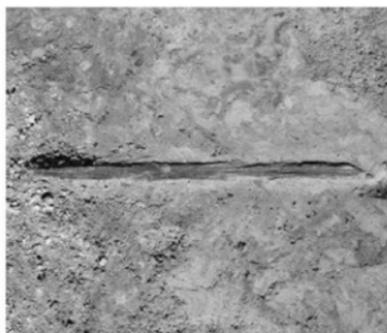
2012 年度調査



旧河道 2 南 2 区 木製品出土状況(北東から)



旧河道 2 南 3 区 木簡出土状況(北東から)



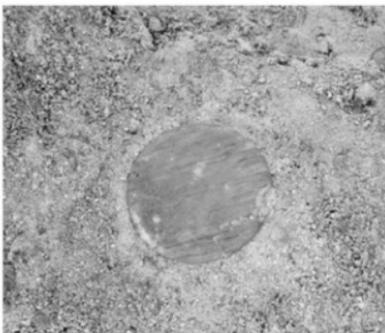
旧河道 2 南 3 区 斎串出土状況(南東から)



旧河道 2 南 3 区 木製品出土状況(北東から)



旧河道 2 南 3 区 木製品出土状況(北東から)



旧河道 2 南 2 区 木製品出土状況(南東から)



旧河道2 あぜ 15 層 土器出土状況(南東から)



旧河道2 南2区 土器出土状況(南西から)



旧河道2 北半 土器出土状況(北東から)



旧河道2 北半 土器出土状況(北から)



旧河道2 北半 土器出土状況(南東から)



旧河道2 北半 土器出土状況(南東から)



旧河道3 杭列E付近 木製品出土状況



旧河道3南3区 木製品出土状況(北西から)



旧河道3南3区杭列C内 木製品出土状況  
(北東から)



旧河道3 須恵器出土状況(南西から)



旧河道3南1区東側下底 馬歯出土状況  
(北西から)



旧河道3南1区東側 馬歯出土状況  
(南西から)



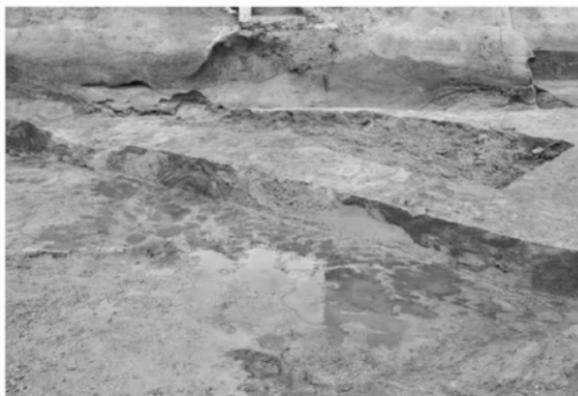
旧河道1 北壁断面  
(南東から)



旧河道1・2  
北壁断面(南東から)



旧河道1・2  
あぜ断面(南から)



旧河道1 あぜ断面  
検出面— 50cm～— 80cm  
(南東から)



旧河道2 あぜ断面  
(南から)



旧河道2南区  
あぜ断面(南東から)

旧河道2南1区  
根株検出状況(南東から)



旧河道 SR185 全景  
(北から)



旧河道 SR185 断面  
(南東から)





旧河道2全景(北から)



旧河道2全景(北から)



旧河道2南1区杭列A検出状況(南西から)



旧河道2杭列A(北から)



旧河道2 杭列B・C  
(北東から)



旧河道2 杭列B・C  
周辺の状況(北から)



旧河道2 杭列B  
断面(北東から)



旧河道2・3 杭列C(南東から)



旧河道2・3 杭列C(北西から)



旧河道 2・3 杭列C横木 1 枝払痕  
(北から)



旧河道 2・3 杭列C横木 1 伐採痕(北から)



旧河道2・3 杭列C(南西から)



旧河道2・3 杭列C断ち割り(北東から)



旧河道 2・3 杭列C断ち割り(北東から)



旧河道 2・3 杭列C横断面(北西から)



旧河道 2・3 杭列C東側(北東から)



旧河道 2・3 杭列C最下部(北東から)



旧河道2 杭列D  
(北東から)



旧河道3 杭列D  
(南から)



旧河道3 杭列D  
横木2直下草本遺体  
(北東から)



旧河道3 杭列E(北西から)



旧河道3 杭列E(北西から)

写真図版 64

2012 年度調査



旧河道3 杭列E  
(南西から)



旧河道3 杭列E  
(北西から)



旧河道3 杭列E  
(南東から)



旧河道 杭列E・G(南から)



旧河道3 杭列E(南西から)



旧河道3 埋設杭群出土状況(南西から)



旧河道3 埋設杭群出土状況(南から)

旧河道3  
須恵器甕出土状況  
(東から)



旧河道3  
須恵器甕(東から)



旧河道3  
須恵器甕取りはずし後  
(東から)





調査区東壁断面北部  
(南から)



調査区東壁断面  
中央付近～南端  
(西から)



調査区東壁断面  
(西から)



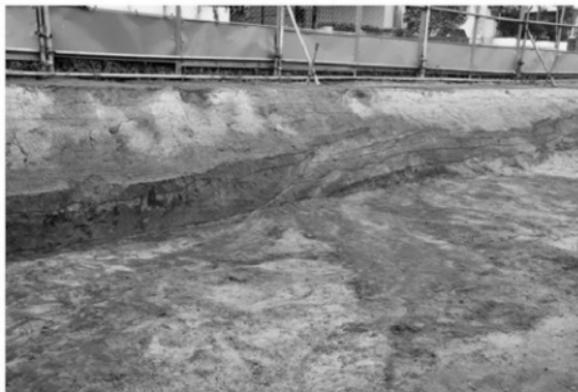
調査区南壁断面(北から)



調査区南壁断面(西から)



調査区南壁断面(西から)



調査区北壁断面西部  
(南から)



調査区北壁断面西部  
(南から)



調査区北壁断面東部付近  
(南から)



調査前の状況(南西から)



機械掘削状況



平安時代遺構面調査状況



調査風景



掘立柱建物跡調査状況



図化作業

## 写真図版 72

2011 年度調査

2012 年度調査



図化作業(2012 年度)



工楽普通氏現地指導状況(2012 年度)



青木哲哉氏現地指導状況(2012 年度)



志筑小学校生見学(2012 年度)



現地説明会実施状況(2011 年度)



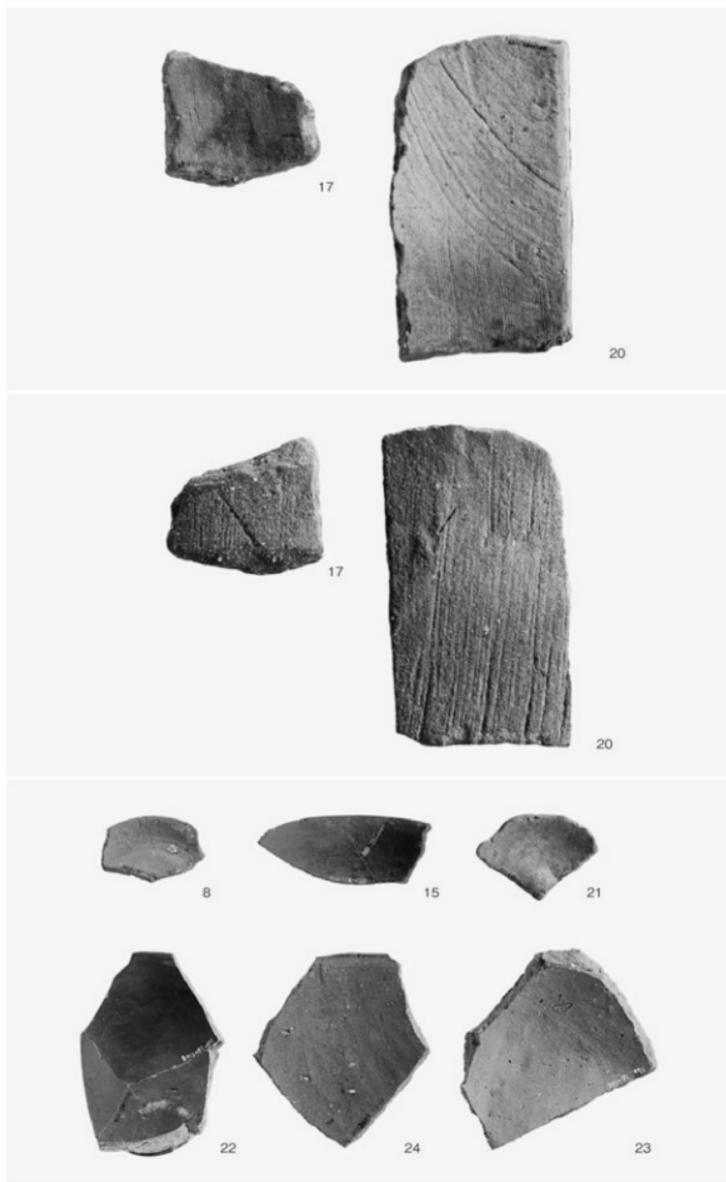
現地説明会実施状況 2(2012 年度)



出土遺物 1 (土器 1)



出土遺物 2 (土器 2)



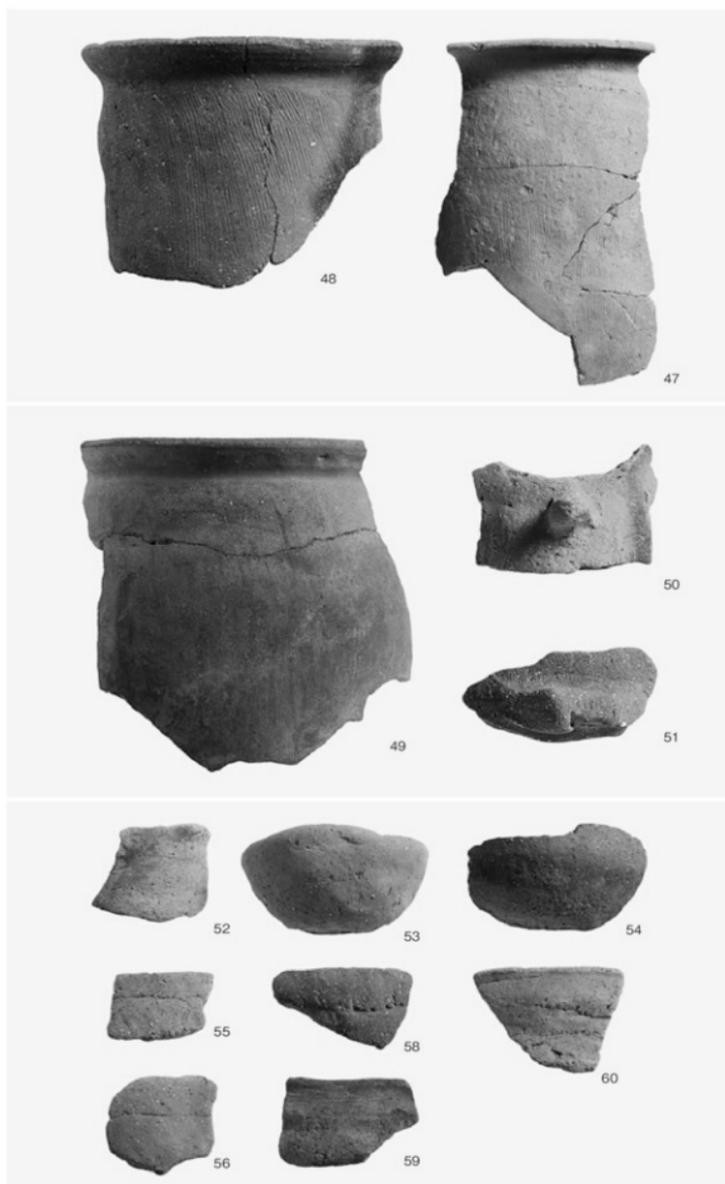
出土遺物 3 (土器 3・瓦)



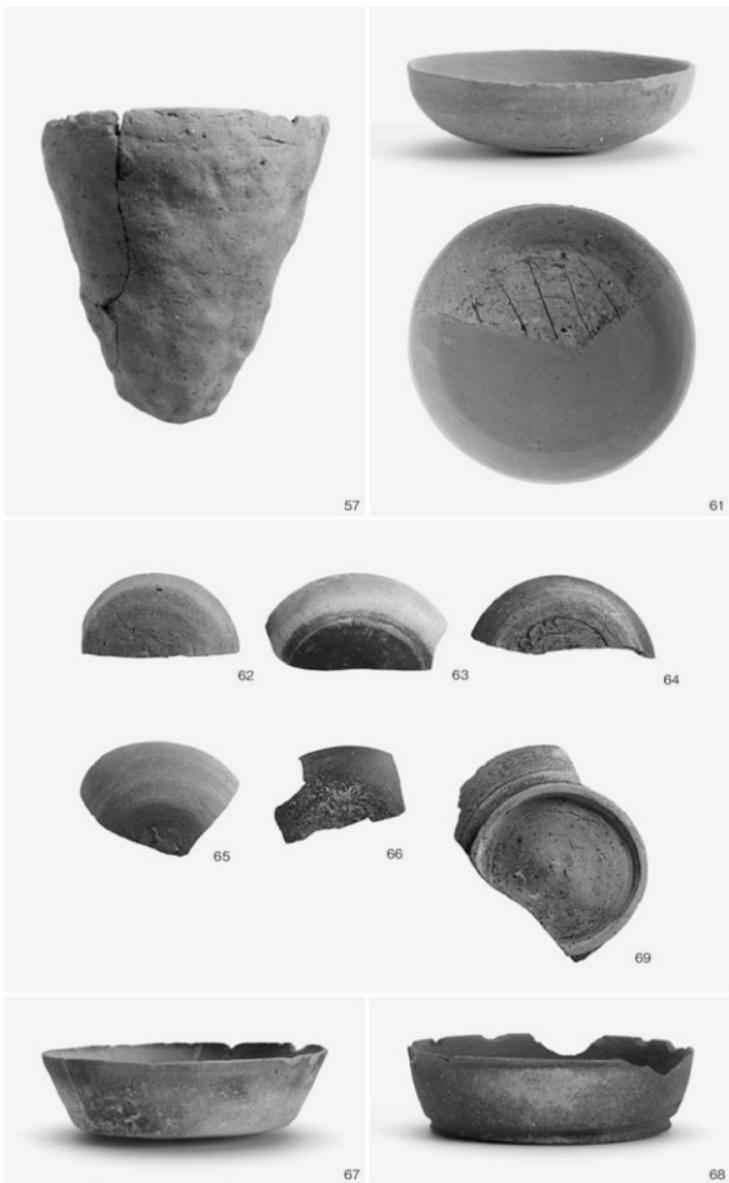
出土遺物 4 (土器 4)



出土遺物 5 (土器 5)



出土遺物 6 (土器 6)



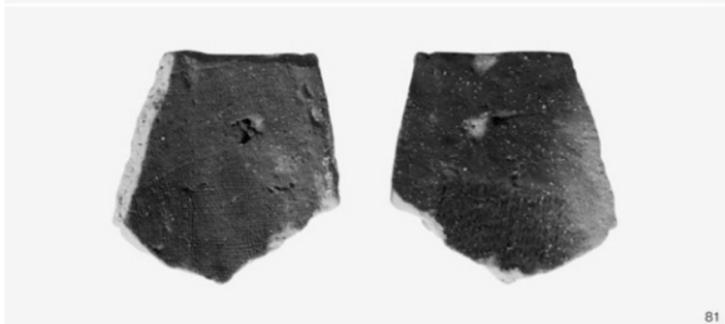
出土遺物 7 (土器 7)



出土遺物 8 (土器 8)



80

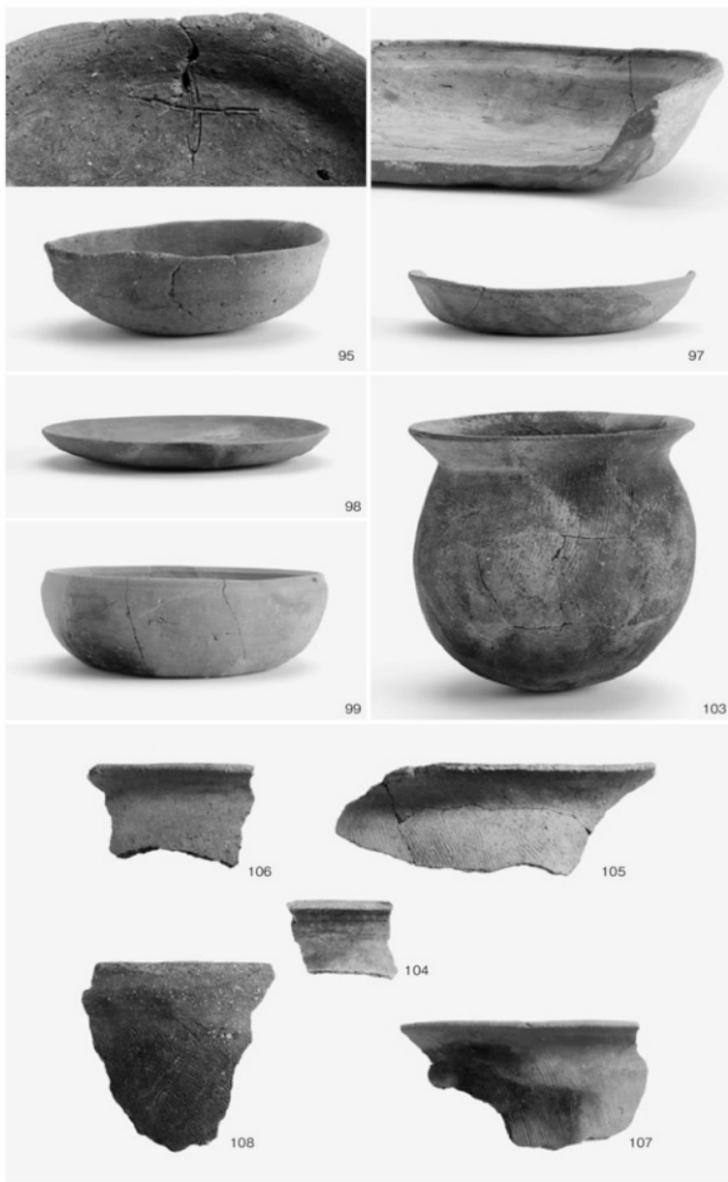


81



93

出土遺物9 (土器9・瓦)



出土遺物 10(土器 10)



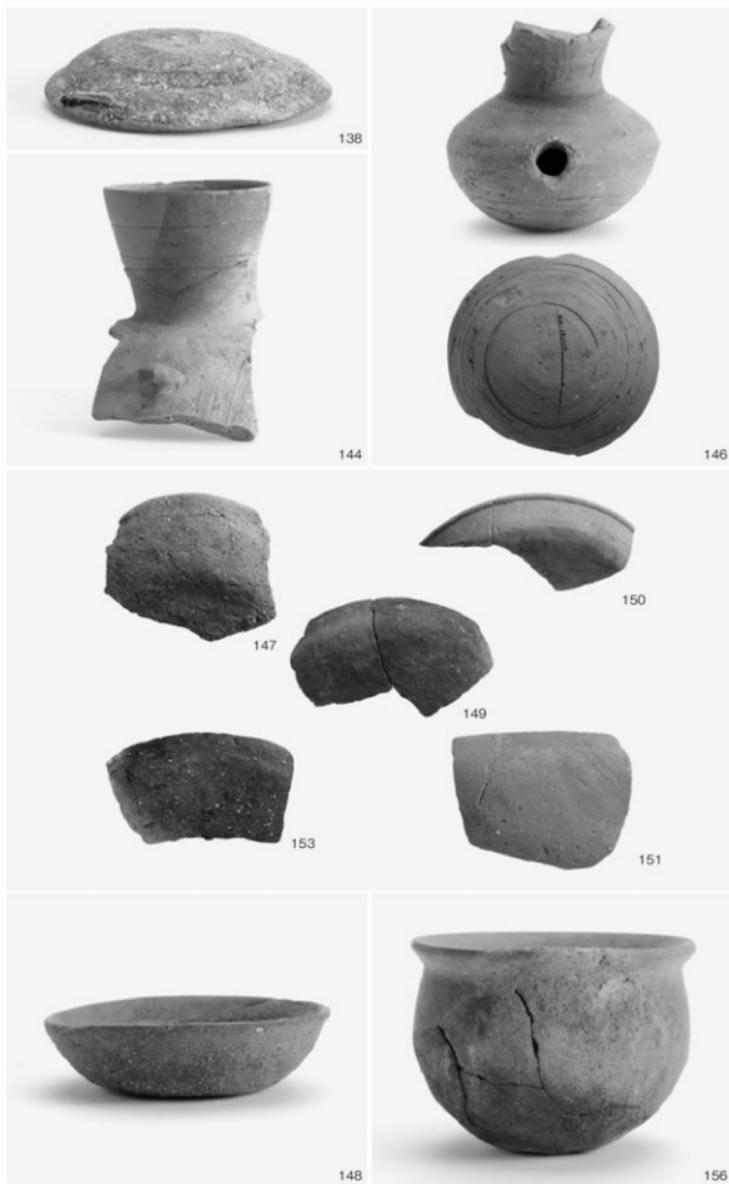
出土遺物 11(土器 11)



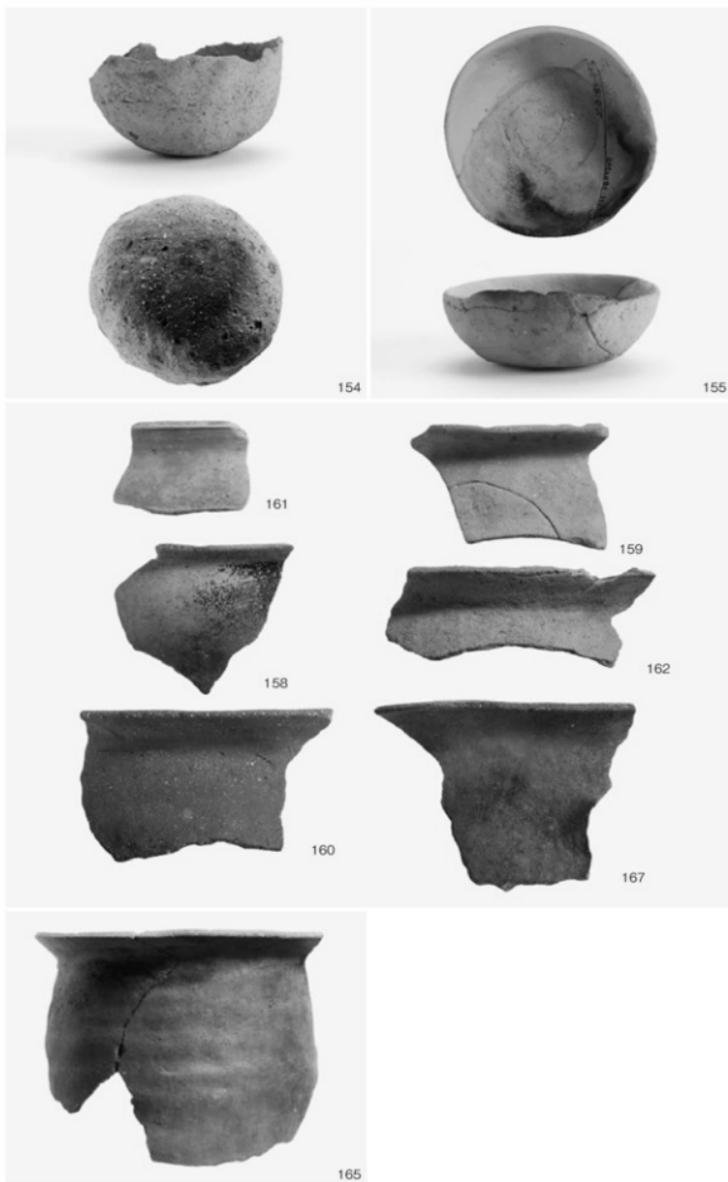
出土遺物 12(土器 12)



出土遺物 13(土器 13)



出土遺物 14(土器 14)



出土遺物 15(土器 15)



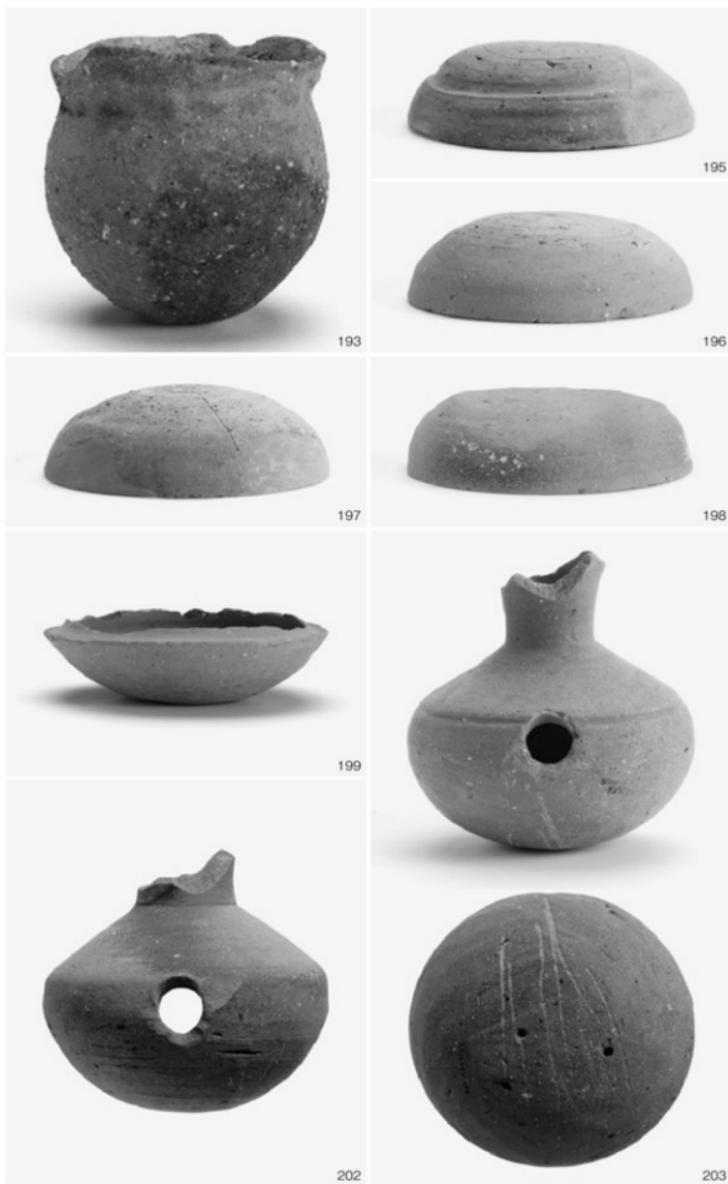
出土遺物 16(土器 16)



出土遺物 17(土器 17)



出土遺物 18(土器 18)



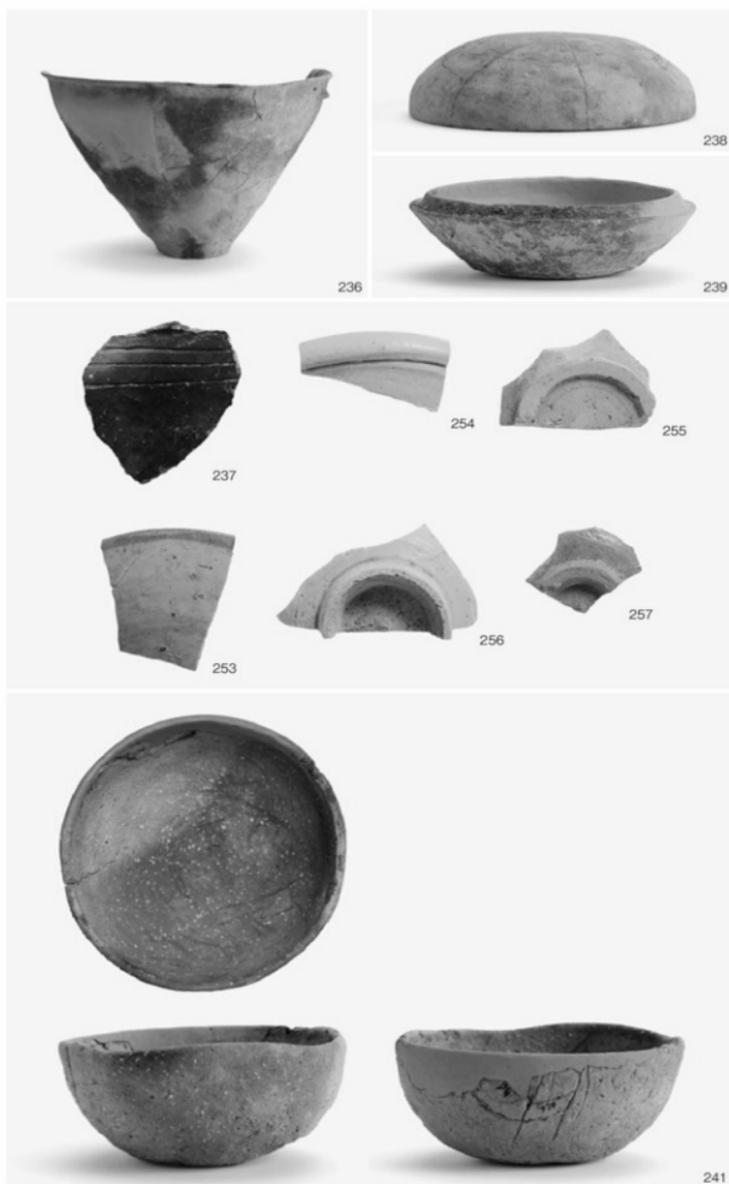
出土遺物 19(土器 19)



出土遺物 20(土器 20・瓦)



出土遺物 21 (土器 21・土製品)



出土遺物 22(土器 22)



出土遺物 23(土器 23・土製品)



S1



S2



S3



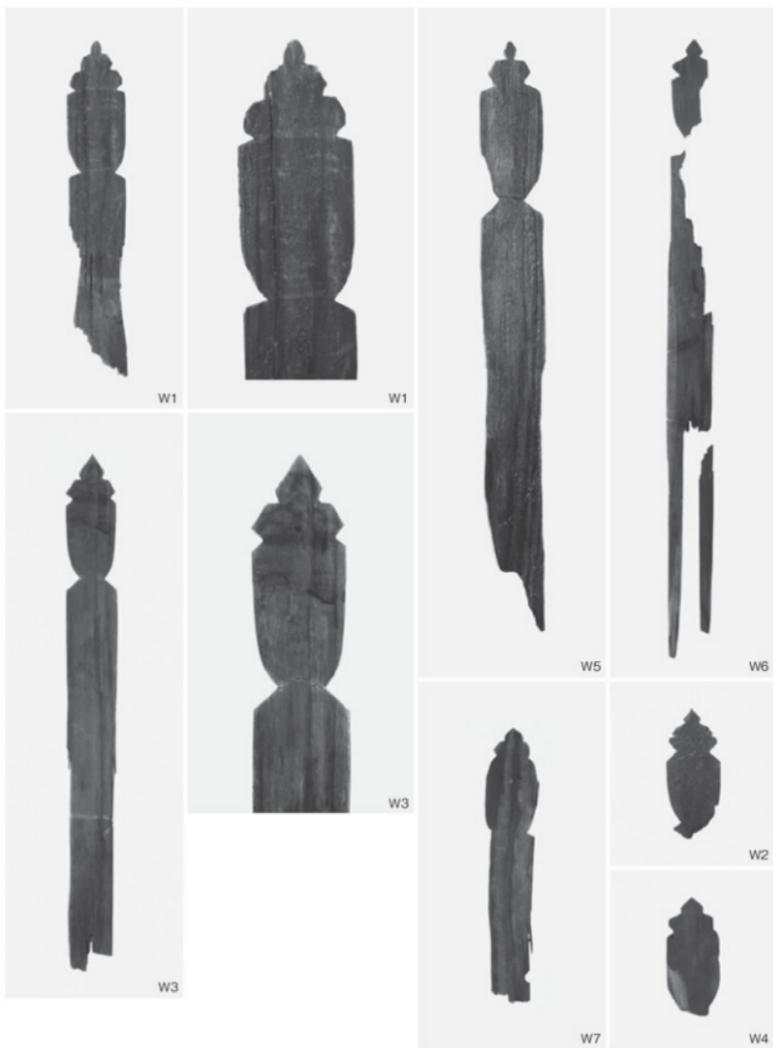
M1



M2

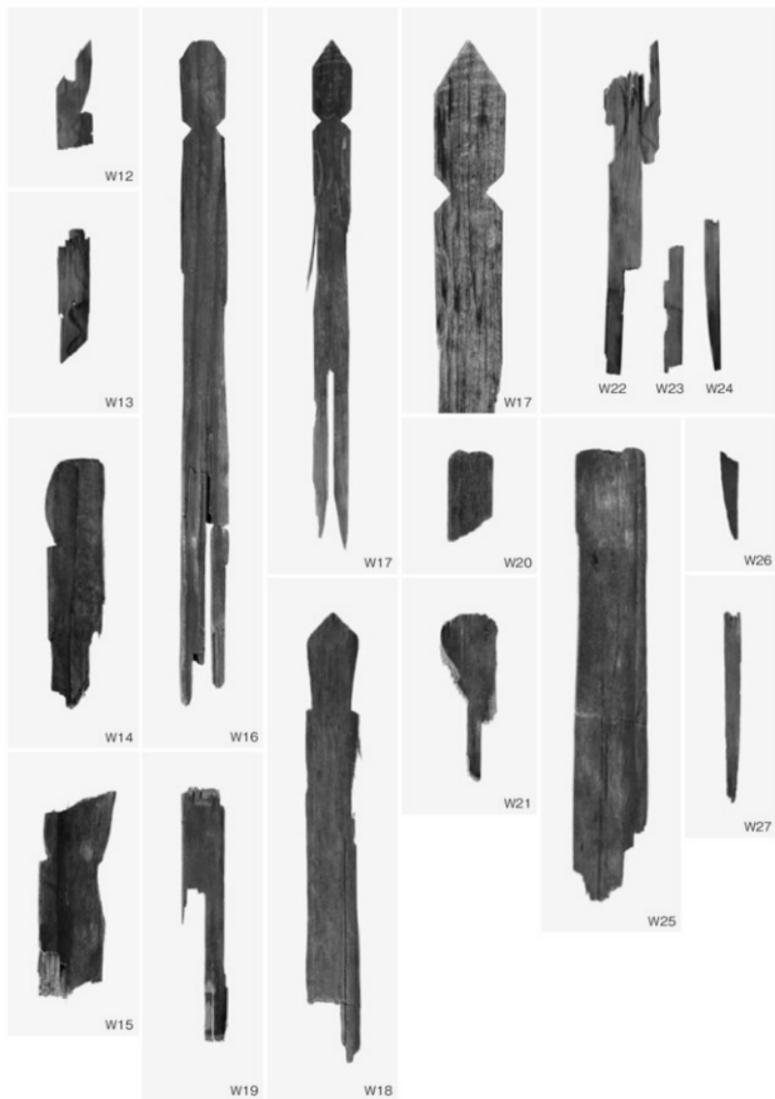


M3

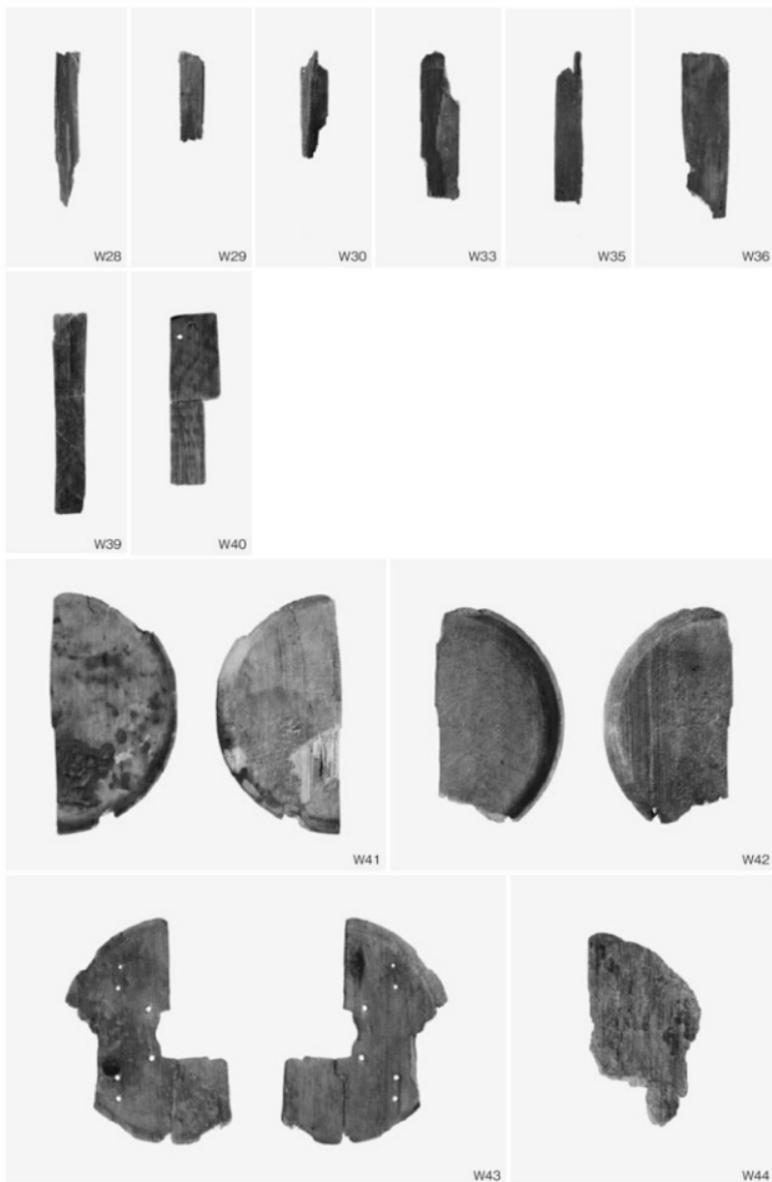


出土遺物 25(木製品 1)

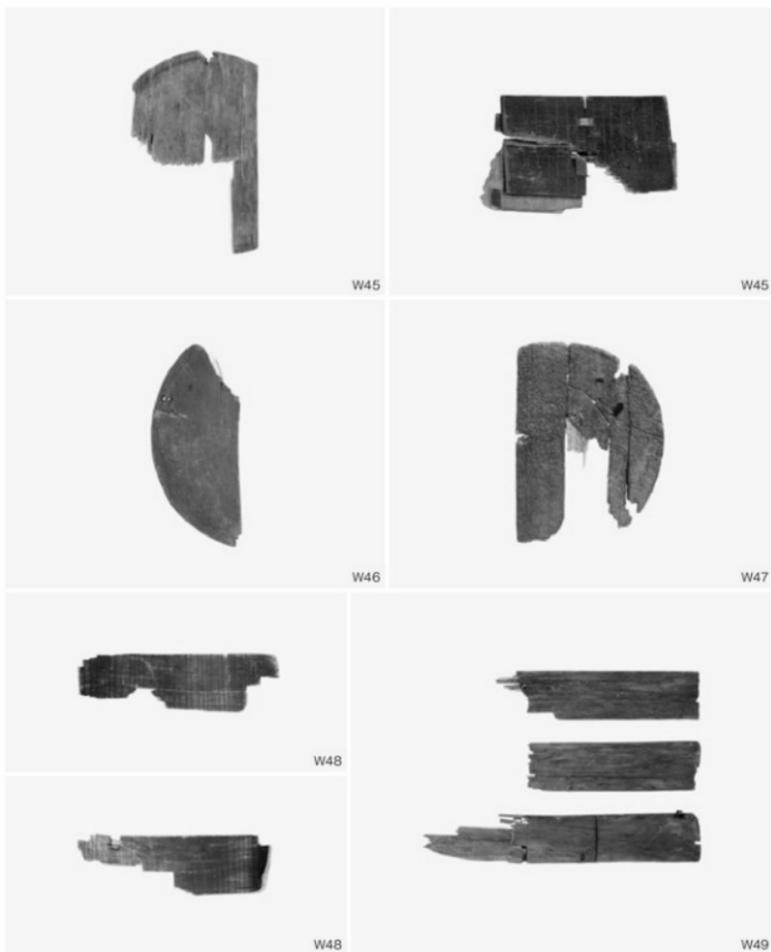




出土遺物 27(木製品 3)



出土遺物 28(木製品 4)

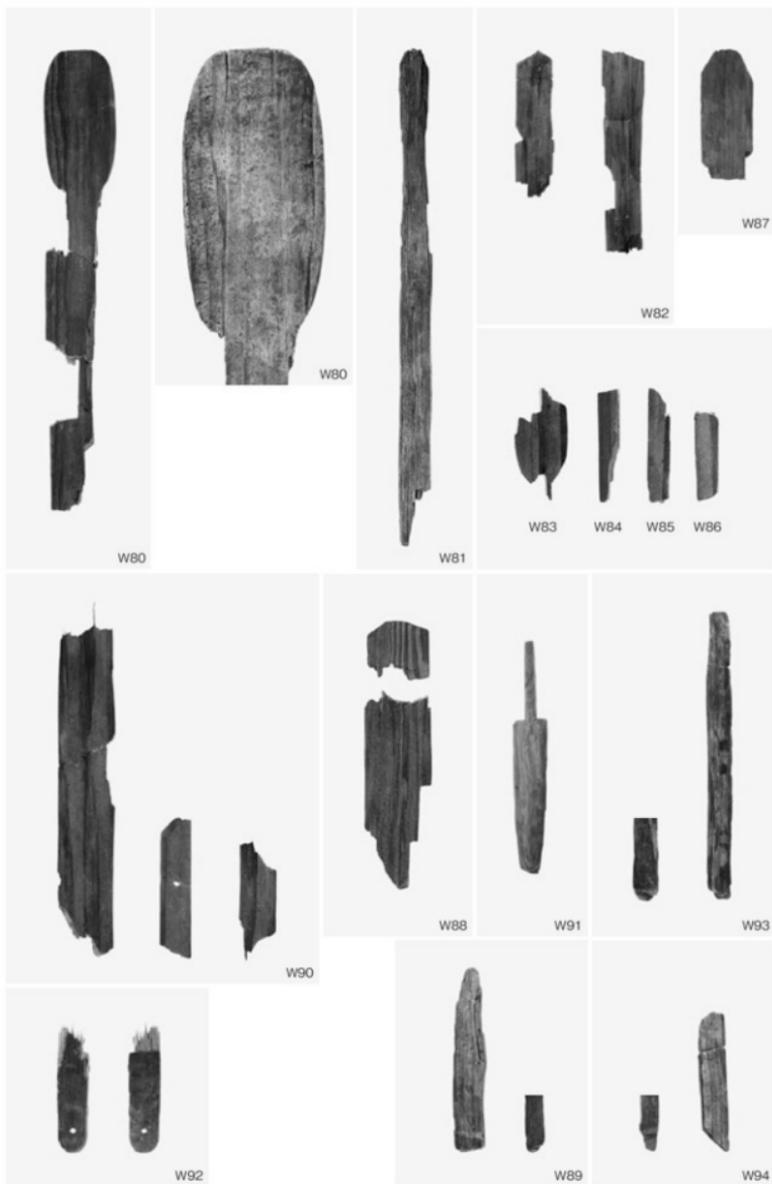




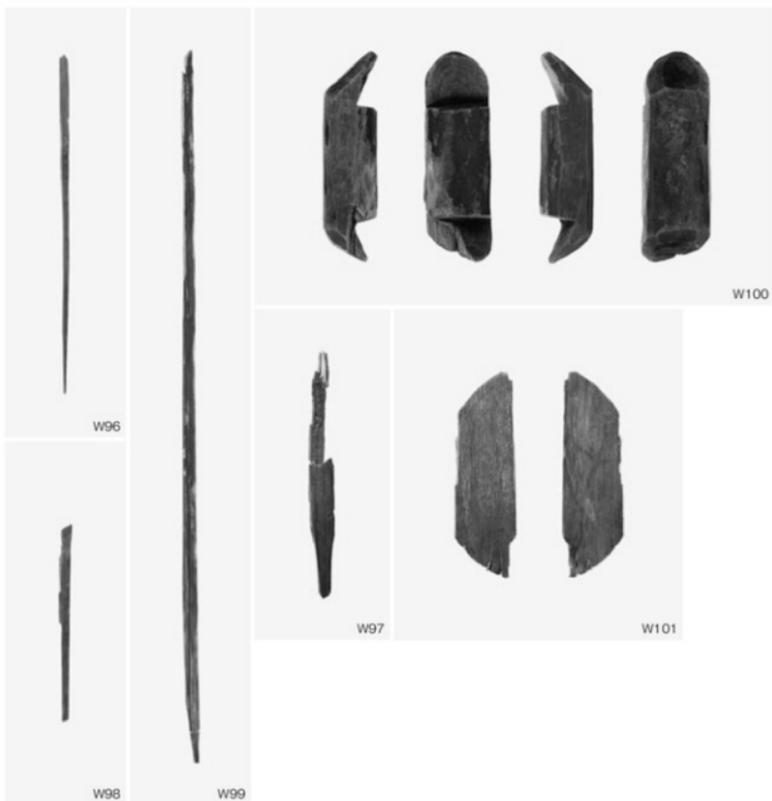
出土遺物 30(木製品 6)

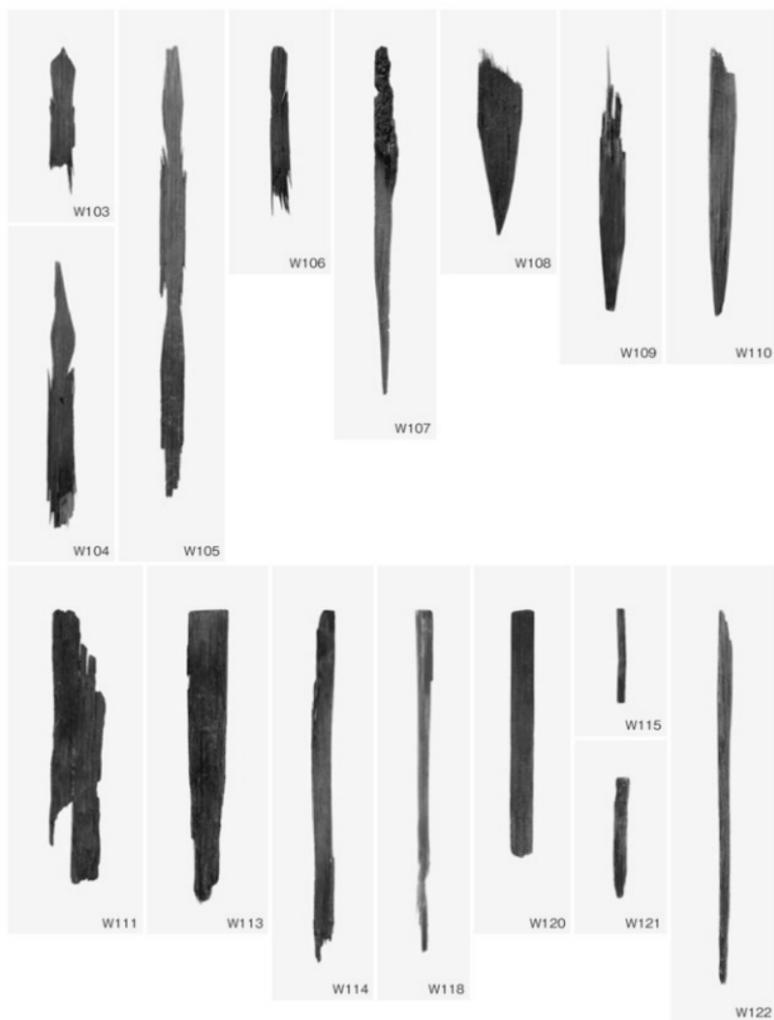


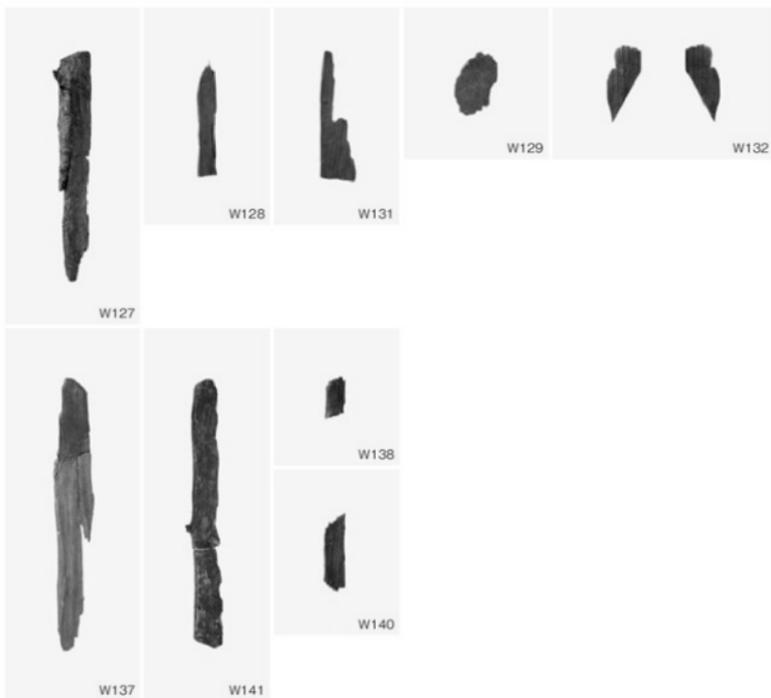
出土遺物 31 (木製品 7)

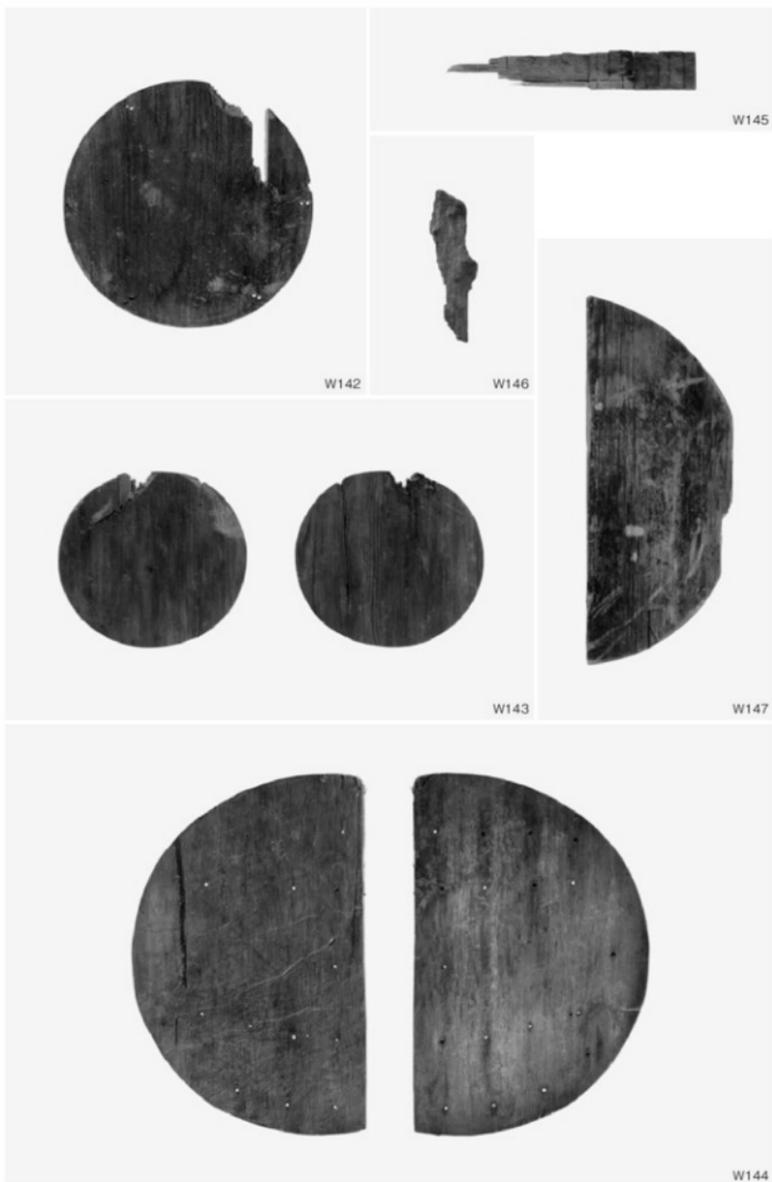


出土遺物 32(木製品 8)

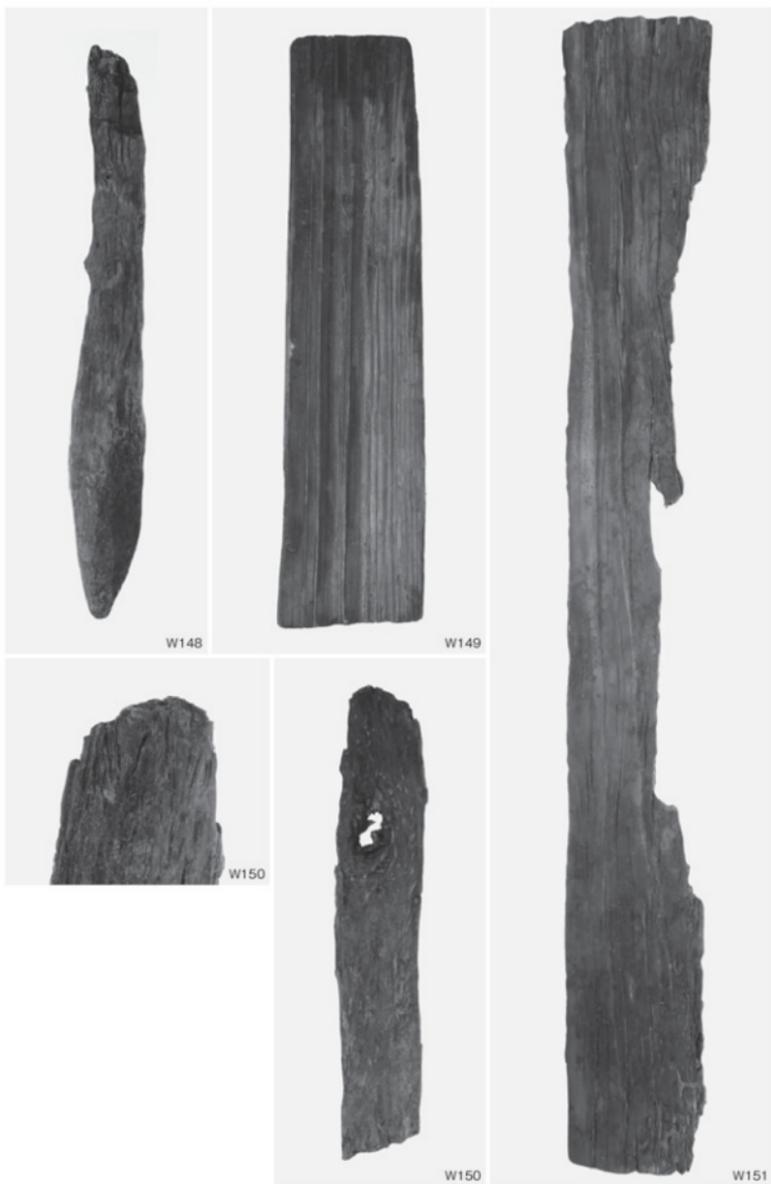








出土遺物 36(木製品 12)



出土遺物 37(木製品 13)

## 報告書抄録 (Outline of the Report)

ふりがな	たいえーいせき			About the Report	
書名	田井 A 遺跡			Excavation report of the Tai-A archaeological site	
副書名	(二) 志筑川床上浸水対策特別緊急事業に伴う発掘調査報告書			Report of the Archaeological Sites of Hyogo prefecture vol. 474	
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告			The Author/Editor: Hiroyuki Kubo Keisuke Nishiguchi Hideki Kurogane	
シリーズ番号	第 474 冊			Hyogo Construction Technology Center for Regional Development Archaeological Research Department Address: 1-1-1 Onaka, Harima-cho, Hyogo pref. Japan	
編著者名	久保弘幸・西口圭介・織 英記			Publication: March 23, 2015	
編集機関	公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター 埋蔵文化財調査部				
所在地	兵庫県加古郡播磨町大中 1-1-1 (兵庫県立考古博物館内) Tel. 079-437-5561				
発行年月日	平成 27 (2015) 年 3 月 23 日				
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経
田井 A 遺跡	淡路市志筑	市町村	遺跡番号	northern latitude	east longitude
		28226	880127	34° 26' 20"	134° 53' 41"
遺跡調査番号	調査の種類	調査期間		調査原因	
2009225 2011185 2012085	本発掘調査	* 2009/11/24 ~ 2010/2/26 * 2011/10/26 ~ 2012/3/19 * 2012/7/20 ~ 2012/11/16		(二) 志筑川床上浸水対策特別緊急事業	
遺跡の種類	集落遺跡 生産遺跡	主な遺構		掘立柱建物跡・鍛冶炉・旧河道・井堰・ 水田	
遺跡の時代	縄文時代晩期～ 弥生時代 前期・飛鳥時代 奈良時代・平安時代	主な遺物		須恵器・土師器(製塩土器を含む)・木製 品(木簡・人形・舟形・動形・竇串・曲物)	
要約	4段階の遺構が検出された。遺構面は上位から、平安時代中期・奈良時代・飛鳥時代・縄文時代晩期～弥生時代前期に属する。 平安時代：掘立柱建物跡群及び溝が検出された。掘立柱建物跡のうち1棟の床面には、鍛冶炉と鉄床石が設けられていた。 奈良時代：水田跡および旧河道が検出された。旧河道内には、少なくとも8か所以上の環が設けられており、河道内の堆積物中からは、大量の土器類とともに、木製祭具が出土した。 飛鳥時代：水田面が検出された。水田は大畦畔と小畦畔から成るが、大畦畔は90m以上も直線的のび、これに小畦畔が直角に取り付くという、条里型地割に類する規格性を見せる。 縄文時代晩期～弥生時代前期：飛鳥時代水田の下位にある粘土層より、少数の土器が出土した。				
Address of the site	Shiduki, Awaji, Hyogo pref. Japan	Date of the Excavation	* 2009/11/24 ~ 2010/2/26 * 2011/10/26 ~ 2012/3/19 * 2012/7/20 ~ 2012/11/16		
Category	Settlement, Paddy field,	Archaeological Features	* Asuka period Wet rice field * Nara period Wet rice field, Former river beds, Sluices, Pits, Ditches * Heian period Posthole-type buildings, smith hearth and anvil stone, Pits, Ditches		
Period	* Late Jomon/Early Yayoi period/Asuka period(7 <sup>th</sup> century). * Nara period(8 <sup>th</sup> century). * Late Heian/Kamakura period(12 <sup>th</sup> century)	Main Relics	Jomon pottery, Yoayoi pottery, Haji wares, Sue wares, Salt-making pottery, Wooden relics for religious service, Mokkan(narrow strips of wood on which an official message is written)		

---

兵庫県文化財調査報告 第 474 冊

淡路市

## 田 井 A 遺 跡

— (二)志願川床上浸水対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—  
平成 27 (2015) 年 3 月 23 日 発行

編 集：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部  
〒 675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中 1 丁目 1 番 1 号  
(兵庫県立考古博物館内)

発 行：兵庫県教育委員会  
〒 650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通 5 丁目 10 番 1 号

印 刷：交友印刷株式会社  
〒 650-0047 神戸市中央区港島南町 5 丁目 4 番 5 号

---

